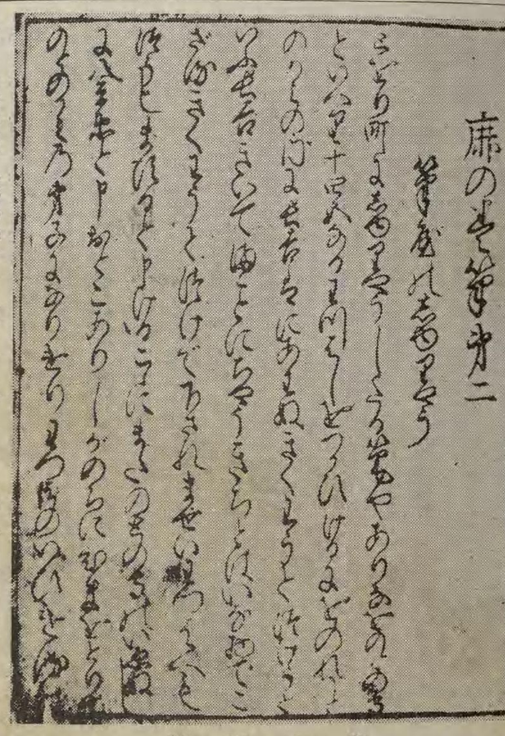
であつて挿畫七圖を收めてゐる。下篇は三十丁より四十一丁に及んで紙數十二枚であり、初半丁は目次、次は見通しの繪、そして十六章の話と五圖の挿畫、最後の半丁は跋文になつてゐる。故に十五丁より二十九丁までの紙數十五枚の中卷のあつたことが覗はれる。書物の形式より見れば、中川喜雲の「私可多咄」（別項）の大阪本と相似たるものがある。內容としては、座敷仕形話であるから、話の滑稽に動作の滑稽を併せ考へる時、如何にも紙上に躍動する現實の趣を添へるのである。彼の序文にもある通り、「或時は見しこと、聞きしこと、或は露跡形もなき事をも笑絶仕かたしてはなし」て、彼の見聞の事實も題材とされてゐるに氣付くのである。それと共に言語上の洒落・地口・狂歌によつて潤色してゐる。併し後世の駄洒落に終始するが如きはなく、如何にも上品な風格を具へて「鹿の卷筆」（別項）と共に、その名作であり、後世に遺した影響は、實演の上にも、噺本の上にも大なるものがある。

【小柴】

鹿の卷筆　しかのまきふで　噺本　五册　【作者】鹿野武左衞門【畫工】古山師重【名稱】鹿毛の卷筆の意、卷筆は色絲などで軸を卷き飾つた筆。作者の姓に因んだのである。【刊行】貞享三年【諸本】落語全集（續帝國文庫）・飜刻鹿の卷筆（宮武外骨編）・落語滑稽本集（近代日本文學全集）所收。【解說】二十九項の笑語を集めたもの。當時の江戸に於ける實在の人物を多く用ひてある。例へば市村竹之丞芝居に出る出來島吉之丞・松本尾上・中村善五郎・非人頭車善七等である。その他の人名、町名も實話の可笑味あるものを取つたのであらう。卷五「湯屋のあま」の後半は明かに謠曲「海士（あま）」のものが四十餘項集められてゐる。それに暗示を得たのであらう。本書の落語は、所謂小咄・一口咄と言ふよりも、寧ろ筋を長々と述べる多少脚色のあるもので、後世の長い落語に類似して居り、その可笑味は到底同時代の露五郎兵衞の輕妙に及ばぬ。實演上に於けるこの兩人の技倆の優劣は、今日では想像も及ばないが、文藻として見れば、明かに露五郎兵衞の方が勝れてゐる。本書の特徵としては彼が元は大阪人であつたに拘らず、關東辯、江戸の俗語が多量に入れられて居り、後世の長い江戸落語の基礎を暗示してゐる點である。なほ彼はこの書の馬の物言ふ話が原因となり流罪になつた（鹿野武左衞門參照）。

【山崎】

志賀山流　しがやまりう　舞踊の流派　【名稱】流祖の姓に據る。【解說】舞踊の流派として



江戸で最古の家柄であり、今日は夥多の流儀では、女子が家元を嗣ぐと、いつも勢以を名乘つて來た。元は劇場づきの振附師の家であつたが、この職は男子に限るといふ不文律が行はれたため、女子が家元を嗣ぐことが多かつたので、劇場との關係は次第に新しく勃興した他の流派に壓迫され、今日の不振を來した。

かの藤間流（別項）の祖藤間勘兵衞も、志賀山三代の家元に就いて學んだといふ。【史的地位】江戸時代初期の歌舞伎の舞踊は、この流儀の歷代の家元に依つて養はれた。そして名優初代中村仲藏は當時のこの流儀の家元であり、彼が演じた數々の舞踊が、舞踊劇史に大なる影響を及ぼした點より見て、志賀山流の歷史的價値が知られる。今日としては、近代の代々の家元が、凡て保守的で、ひたすら古風の維持に努めて來た結果、他の流派に見られない純江戸風を殘した所が、流派のためには不振を來した原因でもある。

【參考】月雪花寢物語　中村仲藏　○手前味噌三代

しがらみ草紙

日本村俗藏　○志賀山流　中村圖吉ハナンデー號目　七ノ三五）

【小寺】

しがらみ　歌集　【著者】中村憲吉【解說】第三歌集で、第一歌集「馬鈴薯の花」、第二歌集「林泉集」に次ぐものである。大正五年より同十一年に至る七年間の作五百五十九首を收錄してゐる。歌風の特色は、「林泉集」に見る艷と潤とは失せたが、內面の心のゆらぎが深くなつてゐる。特に峽村の漫吟は、よくその特色を出し、沈鬱靜寂であり、地味に緊らうとしてゐる。この山村人事の歌とは別途に、數十首の比叡山連作の如きもあり、これは、直接に大きい廣い生命に向つて自己の感動を開放して歌はうとしてゐる。【齋藤（茂）】

しがらみ草紙　しがらみさうし　雜誌　【刊行】明治二十二年十月創刊、每月一回發行。二十七年八月第五十九號を以て終刊とした。【解說】森鷗外の經營した最初の雜誌として、明治文學史上に重視せられる。惜しいかな鷗外の外遊のために、休刊の已むなきに至つた。主なる執筆者は、三木竹二・井上通泰・落合直文・幸田露伴・石橋忍月・山田美妙・尾崎紅葉・中西梅花・堺枯川・矢崎さがのや・大野洒竹・齋藤綠雨・與謝野鐵幹・野口寧齋・寺山星川・松岡

ねるが、うち六首のみが除くべき歌である。【日本歌學全書・國歌大觀・國歌大系所收。【内容】中古以來の歌にて勅撰集に洩れたもの、逍遙との論戰として著名な「山房論文」を初め、「エルテル」「浴泉記」「夢見の里」の如き飜譯の名品も頗る多い。又、幸田露伴が變名で書いた「艷魔傳」も、この雜誌に紹介されたものである。【備考】本誌は初め「文學評論 柵草紙」と題し、發行所を新聲社（鷗外宅）と稱してゐたが、四十四號（二十六年五月）より、寺山星川主幸の「城南評論」を合併して、新に「しがらみ草紙」と題し、城南評論社と新聲社とを合したる柵社より發行することとなつた。なほ新聲社時代は、略してSSSと云つた。これは鷗外の別號でもあつた。（森鷗外參照）

【齋藤（昌）】

詞花和歌集（しくわかしふ）

勅撰集　十卷一册【撰者】藤原顯輔【名稱】古今集眞名序に「託二其根於心地一發二其華於詞林一」とあるのに依るといふ。【略名】「詞花集」、また單に「詞華」といふ。【成立】天養元年六月二日崇德院の院宣を奉じて撰修し仁平年中（元年か）奏覽した。院は御一覽の後返し下し給うて、院の御製三首並に範綱・賴保・盛綱の歌一首を除くやう仰せられ、清輔が御使となつて父の許に持參した。清輔はこの時初めて窺ひ見て、既に奏覽を經てゐるけれども古歌が多い事を注意したので、顯輔はそれ等の歌を除いた。「袋草紙」に、參議教長の顯輔に對する宣下狀が載つてゐる。【諸本】刊本には八代集本（大本・小本各一册）があり、寫本も二三ある。諸本の主なる相違は、院の御製以下除かれた筥の六首の歌を少しづつ本文の中に存してゐる所にある。八代集本は二首、八代集抄は五首を含み、別に卷末に除くべき歌として、七首を揭げてゐ

の竟宴には精々盡力した。官級の低い家の門居として、契沖のために經濟的にも盡したのであらう。而して契沖の寂後、その草集し得た古典や契沖に關する資料を享保六年から同十一年頃に上賀茂神社文庫に寄贈し、一部は山口に寄贈した。それ以後も種々の古典の校合や書入を行つたことは、上賀茂文庫藏書によつて知られる。

【著書】萬葉緯二十卷（本書は、似閑が「萬葉集」の緯となる意味で、日本紀、古事記、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、大嘗會悠紀主基歌、神樂、催馬樂、風俗歌、新撰萬葉集、日本紀竟宴歌、眞名伊勢物語、和漢朗詠集、風土記、その他上代古典の殆どすべてに就いて、或は歌を纂めて註を施し、或は歌を輯め、或は語釋をなし、或は種々の事件に就いて摘出などしてゐる。さうして卷二十には、契沖當時の種々の歌を集めてある）〔似閑書入本・校合本〕和字正濫要略書入本一册（寶永四年、六年に一校書入す。京都上賀茂文庫藏）○奥義抄書入本（元祿十一年。同上藏）○萬葉代匠記初稿本書入（寶永元—四年。同上藏）○うつほ物語書入本十六册（寶永元年。同上藏）○袋草紙書入本四册（寶永二年。同上藏）○古事談寫本八册（寶永四年。同上藏）○竹取物語書入本（寶永四年。同上藏）○體源抄二十卷（寶永七年。同上藏）○さゝれ石寫本一册（正德三年。同上藏）

【人物】似閑は商家に生れ、殊に家運の衰へてゆくのを自ら恢復したといふ點から見ても、事務的な手腕のあつた人物と思はれる。溫厚な若冲、氣概のある忠肅と相對して世故に長けた似閑の契沖門にあつた事は、契沖としても賴もしく感じたであらう。それだけ學者としては若冲に比して一步を讓るであらうが、似閑があつたために契沖の藏書が上賀茂文庫に收められて散佚を免れたのである。【渠綠】

芝翫栗毛 しくわんくりげ　滑稽本　二册【作者】中村芝翫作・濱松歌國編【名稱】作者中村芝翫の名を取り、膝栗毛に類する所から取り合せた名。角書には加賀屋道中記とある。【成立】文化十一年。後叙に甲戌とあり、歌右衞門の江戸下りの事實よりかく推定する。【解說】中村歌右衞門が文化十一年五月に、江戸中村座の六月興行出勤のため大阪を發足し、道を北國善光寺街道に取つて下つた道中記を大阪の贔屓連に送つたもので、道中の難澁、富山の歡迎などを記し、書簡體に綴つてある。〔小柴〕

史記 しき　史書正史類　一百三十卷【著者】司馬遷【名義】史記とはもと史官の記錄を意味した普通名詞で、後世にもその用例は少くない（三國史記・五代史記・大越史記全書等）。本書は

「漢書」藝文志には太史公百三十篇とあり、その他兩漢時代には一般にこれを「太史公書」、若しくは「太史公記」と稱して「史記」とは云つてゐない。太史公の名義に關しては古來異說が多いが、この場合に於ける太史公が司馬遷を指すことは明かである。これを單に「史記」と稱するのは、「後漢書」「三國志」（魏志）等に始めて見え、恐らくは魏晉以後の事であらう。【成立】前漢初期【由來】司馬遷は左馮翊夏陽の人（今の陝西省韓城縣）、景帝の中元五年（皇紀五一六）の頃に生れた。彼の父談は、景帝の子武帝の代に太史令であつた。談は、はじめ古今を一貫する通史を編纂する志を懷いて居つたが、その素懷を遂げるに先だつて、元封元年（同五五一）病に斃れ、遷に遺命してその志を紹がしめた（自序）。同三年、遷は太史令の職を襲ぎ、その後四年、太初元年（同五五七）に本書の編纂に着手した。時に彼は約そ四十二歲の頃であつた。然るに天漢三年、李陵の事に坐して獄に下り、腐刑を受けた。痛憤歎み難く、殆ど死を決したが、著述完成のためにこれを抑制し、拮据晚年に至るまで努力した。武帝の末年、或は昭帝の初年の頃（六十歲前後）に世を去つたらしいが、本書も恐らく、その晚年まで補訂改削を加へたものらしい。卽ち前後二十年に亙る年月が本書の著作に費された。【傳來】早く兩漢三國の時代から學者の間に推奬せられて、ほぼ五經に亞ぐ尊崇を受け、東晉以後その音義註釋の世に出たものも少くない（宋高似孫「史略」）。唐代に至つては三史（本書及び兩漢書）を三傳・三禮に配して科擧の目に加へた。北宋の太宗の淳化五年（皇紀一六五四）始めてこれを刊行して以來、歷朝鏤梓するものが相繼いで出で、益々その流傳を弘めるに至つた。【日本に於ける傳來】聖武天皇の天平七年（一三九五）に吉備眞備が唐から歸朝する際に傳へたと云ひ、孝謙天皇の天平寶字元年には、勅して紀傳學生は主として三史を講習すべく定められたのを見れば（續日本紀卷二十）、少くとも已にこの頃から流傳して居つたことは明かである。大學の科目に紀傳・明經・明法・算學の四道があつたが、紀傳の學が次第に重要な地位を占め、中古の頃には「史記」と「文選」に通ずるのが漢學者第一の資格とせられた。江戸時代に入つては、その講習は益々盛んとなり、從つてその飜刻本も頗る多く、元刻に本づく朝鮮本を底本とした活字本、覆開元本等の外、通行の明の凌稚隆の評林本にも、八尾版・紅屋版・鶴卷版・修道館版等がある。【內容】上は黃帝から下は前漢の武帝に至るまで、約二千數百年間を包括する通史である。そのうち本紀は帝王の功業を、世家は諸侯の沿革を、列傳は主要なる個人の事蹟を述べ、十表は世系・歲月を詳かにし、八書は制度・文物を明かにしたものである。十二本紀（第一—十二卷）のうち、五帝本紀は黃帝・帝顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜を以て五帝とする。十表（第十三—二十二卷）のうち、三代世表は、五帝及び夏殷周三代の世系表で、西周の末年に終る。十二諸侯年表は、同年から東周の敬王の四十三年に至る約二百五十年間に亙り、周室の外に當時最も勢力を振つた魯・齊・晉・秦・楚・宋・衞・陳・蔡・曹・鄭・燕・吳の十三大諸侯の年表を列ねてゐる。そのうち、吳は中途から併記せられてゐるに過ぎないので、これを略して十二諸侯年表と云ふ。六國年表とは、東周の元王の元年から秦の滅亡の年に至る二百五十餘年を含む。實際は周室の外、戰國の七雄と稱せられ

る秦・魏・韓・趙・楚・燕・齊の興亡表で、寧ろ七國年表とも云ふべきものである。秦楚之際月表は、秦の二世皇帝の元年から、漢の高祖の天下を統一した年に至る八年間は、事變の錯雜する群雄割據時代であるから、詳細な月表を以て記述し、漢興以來諸侯年表は、漢の高祖の天下統一の年から、武帝の太初四年に至る間の異姓及び同姓の諸王國の年表で、寧ろ諸王若しくは諸侯王年表とも云ふべきものである。八書(第二十三―三十卷)のうち、禮書は主として禮に關する理論を述べ、樂書は音樂の理論と沿革とを記し、律書は主として六律六呂の事を述べ、兼ねて兵事にも及んでゐる。曆書は曆の沿革、殊に漢の太初曆のことを記し(新城新藏「東洋天文學史研究」)、天文書は天吉凶のことを述べ、封禪書は、封(天を祭ること)・禪(地を祭ること)、以下諸々の祭祀のことを記し、河渠書は天下の水利のことを述べ、平準書は天下の經濟のことを記してゐる。平準とは物價を調節して平等ならしめるを云ひ、漢書の「食貨志」はこれに當る。三十世家(第三十一―六十卷)は、秦の主要なる諸侯と、漢代の諸王及び主なる諸侯の沿革を載せてゐる。ただその中、無位の孔子を聖人としてこれを世家に升せ(卷四十七)、王號を稱すること僅かに半歲にして敗滅した陳涉を、世家に列し(卷四十八)たのを異數とする。七十列傳(第六十一―一百三十卷)は、主として政治家・軍人・學者・富豪・刺客・游俠等の一代に聞えた人々の傳記を述べたものである。その中、塞外の匈奴の沿革を記した匈奴傳(卷一百十)、南方支那の越人種の沿革を記した南越傳(卷一百十三)、東越傳(卷一百十四)、朝鮮のことを記した朝鮮傳(卷一百十五)、今の貴州四川雲南方面に棲んだ諸蠻族のことを記した西南夷傳(卷一百十六)、西域諸國の狀態を叙べた大宛傳(卷一百二十三)等は特色あるものである。

【價値】今を距る二千餘年の古代に於て、かくの如き整備した大史筆の現はれたことが已に世界の史學史上に特筆せらるべきことであるが、その後世の支那の史學界に及ぼした影響に至つては頗る大なるものがある。その第一は、最も進んだ歷史記述の方法たる紀傳體(別項)の創始である。紀傳體とは本紀列傳の名目を立てる書法即ち個人中心の歷史であつて、實に司馬遷の創始に係るものである。彼が一たびこの書法を以て「史記」を著して以來、歷代の正史の編纂法は何れも皆本書を標準として紀傳體を奉じ、又我が國の「大日本史」、朝鮮の「高麗史」等も亦この體に依り、山陽の史書も亦本書によつて啓發せられたところが少くないと云へば、その我が國前代の史學界に與へた影響も亦大なるものと言ひ得るであらう。その第二は統一ある歷史の觀念を確立したことである。從來の史書は、或は一時代に(「春秋」の如き)、或は一地方に(「國語」「戰國策」の如き)、或は一事件に(「尙書」の如き)限られたものであつたが、本書に至つて始めて、縱は有史以來當代に至るまで上下を貫き、橫は、中國のみならず四方の夷狄をも兼ねて、當時に於ける全世界を包含したことこれである。卽ち人類の文化的活動を全體として把握したもので、歷史的認識は彼に至つて始めて完成されたものと言ひ得る。その第三は、十表八書を創めたことである。表も書も共に殆ど彼の創意に出たもので、表によつて世系年月を記し、書によつて制度文物を傳へ、紀傳と相俟つて文化現象を縱橫に剖析叙述したものである。爾後歷代の正史は皆これに倣つて、概ね表と書(又は志)を設けてゐる。その他支那上代の佚聞を輯め、或は支那の周圍の塞外民族に關する最古の記錄を傳へてゐる等、本書の史學的價値は頗る大なるものがある。更に本書の文學的價値が古今の史書中に冠絶することは、何人も異論を容れざるところである。本書の世に愛讀せられるのは、その歷史としてよりは、寧ろ文學として多きに居るであらう。この點に於ては、當代の文豪と稱せられた「漢書」の著者班固も、遂に司馬遷に比べて遜色あるのを免れなかつた。明の王世貞が、司馬遷は文に聖なるものにして天工に近く、班固は文に賢にして人巧を極むるものと云つたのは蓋し適評である。司馬遷の文章の特色は、技巧的でなく精神的な點に存する。故にその文章は、時に規矩に中らないところがないではないが、讀者をして感憤せしめることが最も多い。彼の長所は、本紀・世家になくして寧ろ列傳に在り、殊に慷慨の士、不遇の人を傳するに當つて、彼の筆力は最も活躍するを見る(史記評林卷首讀史總評)。故に、韓愈・柳宗元・歐陽脩・蘇軾等を初め、唐宋以後の大家は何れも本書を推して文章の典型とし、又我が國に於ても賴山陽・齋藤拙堂・山本北山等は皆彼に私淑した。清の吳見思の「史記論文」、王拯の「歸有光」「方苞合評史記」、我が菊池武矩の「史記文訣」、皆川淇園の「史記助字法」等、本書の一部又はその全部に亙り、文學的評論を加へて作文の指南とすることを目的とする著作も亦尠くない。

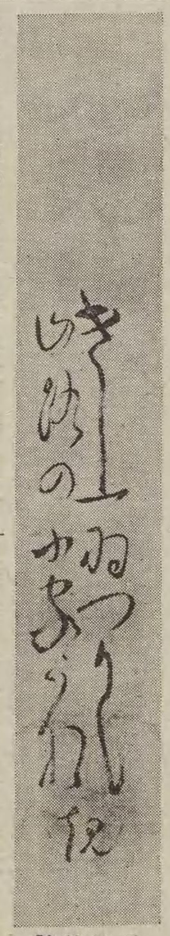
【註釋書】東晉末の徐廣の「史記音義」を最古とし、爾後唐代に及ぶまで幾多の註釋書が現はれたけれども、今日傳はるのは劉宋の裴駰の「史記集解」一百三十卷を以て最古のものとする。○史記索隱三十卷(唐司馬貞)○史記正義一百三十卷(唐張守節)○史記評林一百三十卷(明凌稚隆)○史記考五卷(陳仁錫)○史記補注一卷(清方苞)○史記考證七卷(杭世駿)○史記志疑三十六卷(梁玉繩)○史記正譌五卷(王元啓)○校刊史記札記五卷(張文虎)○史記雕題廿三卷(中井積德)○史記觿十卷(岡)○史記國字解柱五十郎等。〔宇野・本多〕

子規(しき)　俳人・歌人　【本名】正岡常規、諱は升(のぼる)、初名處之助(ところのすけ)　【別號】少年時代は香雲。後には獺祭書屋主人・竚兀先生・偸花兒・花風病夫等。作歌歌論には竹の里人。その他時に應じて種々の別號を用ひた。【生歿】慶應三年九月十七日、伊豫松山新玉町に生れ、明治三十五年九月十九日、東京下谷上根岸子規庵に歿す。享年三十六(「辭世」)「糸瓜咲いて痰のつまりし佛かな」「痰一斗糸瓜の水も間に合はず」「をとゝひの糸瓜の水も取らざりき」【墓所】東京市田端大龍寺、墓表は陸羯南の筆に成れる子規居士之墓の六字。故郷松山市末廣町正宗寺に埋髮塔がある。【閱歷】

正岡子規

父は隼太、母は八重。六歲の時父を失つた。父は稀な酒豪でその早世(四十歲)も酒禍によるといふ。母方の祖父大原觀山、當時藩中の儒者であつたので、幼にして漢文の素讀を受けた。明治七年(八歲)、松山市智環小學校に入り、後、勝山小學校に轉じた。十一二歲にして既に詩及び文を草し、同窓の友人等と共に廻覽雜誌を作つた。又この頃から畫の稽古を始めた。同十二年私立松山中學に入學。當時から甚だ旅行を好んだ。十六年六月、松山中學を退き上京。一時須田學舍に入り、後、共立學校に入つた。翌年大學豫備門(後、第一高等中學校と改稱)に入る。十八年夏、日光・伊香保に遊び、次いで歸鄉し、嚴島に遊ぶ。この年初めて俳句を作る。同二十年夏歸鄉、鄉里三津ケ濱の大原其戎に俳句を學ぶ。九月上京、高等學校寄宿舍に入り、野球の選手となる。十二月常盤會寄宿舍に入る。翌年夏向島長命寺に歸る。二十八年、日清戰役從軍記者として派遣されることに決し、三月三日東京を發し、途中鄉里に寄り、四月滿洲に上陸、居ること約一ヶ月、金州滯留中、講和條約成立し、遂に實戰に臨む機會を得なかつた。五月金州を發し、歸國の途に着いたが、船中喀血甚しく重態に陷り、上陸直ちに神戶病院に入院、七月、健康を回復して退院、須磨保養院に靜養した。翌月松山に歸り、當時松山中學に教鞭をとつてゐた夏目漱石の家に寄宿、これによつて俳句の上に多大の感化を受けた。翌年一月「ホトトギス」を東京に移す。この頃より翌年にかけて歌論・作歌、日を追うて盛んに、「萬葉集第十六」「曙覽の歌」(別項)「歌話」等を發表、五月には根岸庵に短歌會を創めた。三十三年、腰部の疼痛のため、稀れに外出する時も二人乘りの人力車を用ひた。九月、根岸庵に文章朗讀會山會を開き、寫生文の制作正しくゐた。陛下に參ずる者の性格特徵を察し、誘掖激勵能くその長所を發揮せしめた。明治俳句が僅々十年に滿たずして澎湃たる高潮を十月「ホトトギス」を東京に移す。この頃より翌年にかけて歌論・作歌、日を追うて盛んに、「萬葉集第十六」「曙覽の歌」(別項)「歌話」等を發表、五月には根岸庵に短歌會を創めた。三十三年、腰部の疼痛のため、稀れに外出する時も二人乘りの人力車を用ひた。九月、根岸庵に文章朗讀會山會を開き、寫生文の制作正しくゐた。陛下に參ずる者の性格特徵を察し、誘掖激勵能くその長所を發揮せしめた。明治俳句が僅々十年に滿たずして澎湃たる高潮を

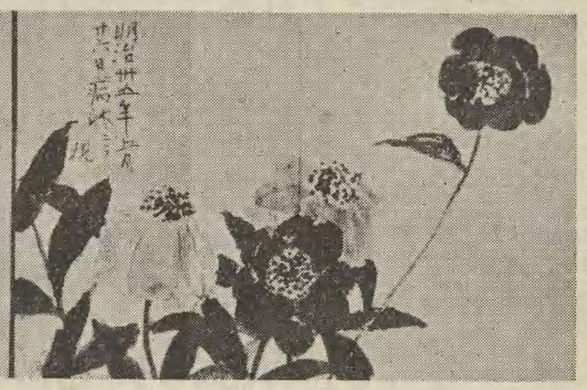
めた。同十二年私立松山中學に入學。當時から甚だ旅行を好んだ。十六年六月、松山中學を退き上京。一時須田學舍に入り、後、共立學校に入つた。翌年大學豫備門（後、第一高等中學校と改稱）に入る。十八年夏、日光・伊香保に遊び、次いで歸郷し、嚴島に遊ぶ。この年初めて俳句を作る。同二十年夏歸郷、郷里三津ケ濱の大原其戎に俳句を學ぶ。九月上京、高等學校寄宿舍に入り、野球の選手となる。十二月常盤會寄宿舍に入る。翌年夏向島長命寺内香月樓に移り、「無何有洲七草集」を草す。次いで再び常盤會寄宿舍に移る。翌二十二年五月九日夜突然喀血、これより子規と號す。九月「子規子」「啼血始末」を作つた。二十三年、一高卒業、帝國大學國文學科に入學した。この前後或は歸郷し或は諸方に旅行し、紀行類も少くない。二十四年三月四月に亙り、房總二州に遊び、「隱棲日記」が成つたが、この時の一蓑一笠が子規庵の遺物となつた。冬、本郷駒込追分町に移り、初めて一家を構へた。又この年、小説「月の都」に着手し、翌年脱稿した。同二十五年二月、下谷上根岸に移つた。この頃より漸く俳句に專心し、句作、古句研究に沒頭し、「俳句分類」「俳家全集」「一家二十句」「俳書年表」等の編著に着手した。十月、始めて松宇を訪ふ。又この年夏より、新聞「日本」に「獺祭書屋俳話」を連載、次いでその文苑欄に同人の俳句を掲げた。十一月より「芭蕉雜談」を執筆、十二月、「日本」の社員となる。二十六年一月大學を退學。二十七年二月、上根岸町八十二番地に移る（今の子規庵）。同月、「日本」の分身「小日本」が生れ、その編輯に當つた。初號より「月の都」を連載、三月、同じく小説「一日物語」を連載、六月「小日本」廢刊、再び「日本」に歸る。二十八年、日清戰役從軍記者として滿遽されることに決し、三月三日東京を發し、途中郷里に寄り、四月滿洲に上陸、居ること約一ヶ月、金州滯留中、講和條約成立し、遂に實戰に臨む機會を得なかつた。五月金州を發し、歸國の途に着いたが、船中喀血甚しく重態に陷り、上陸直ちに神戸病院に入院、七月、健康を回復して退院、須磨保養院に靜養した。翌月松山に歸り、當時松山中學に教鞭をとつてゐた夏目漱石の家に寄宿、これによつて俳風大に松山に興つた。十月、廣島・須磨・大阪・奈良を經て歸京。この旅行中、腰部に疼痛を感じ、後、次第に步行の自由を奪はれるに至つた。二十九年、俳句新風の興隆漸く天下に遍く、子規の名も重きを加へたが、健康は愈々すぐれず、屢々病褥に親しんだが、氣魄更に衰へず、「日本」紙上、その執筆を見ない日はなかつた。この年の夏頃より、月一回の根岸庵句會生る。三十年、病、日を追うて重る。一月、松山に雜誌「ホトトギス」（別項）創刊され、遙かにその編輯を督す。「俳人蕪村」（別項）「行脚俳人芭蕉」等を發表す。五月、一時重態に陷つた。十二月二十四日、始めて蕪村忌を修し、後、毎年の例とした。三十一年一月、句集「新俳句」（別項）成る。同人句集の最初である。同一月「蕪村句集輪講」を始む。二月、「歌よみに與ふる書」（別項）を發表して和歌革新の狼火を揚げ、歌壇に大なる衝動を與へた。又一月より三月にかけて、「日本」に「叙事文」なる論を掲げたが、これが寫生文提唱の最初であつた。



子規筆蹟

十月「ホトトギス」を東京に移す。この頃より翌年にかけて歌論・作歌、日を追うて盛んに、「萬葉集第十六」「曙覽の歌」（別項）「歌話」等を發表、五月には根岸庵に短歌會を創めた。三十三年、腰部の疼痛のため、稀れに外出する時も二人乘りの人力車を用ひた。九月、根岸庵に文章朗讀會山會を開き、寫生文の制作正に蔗境に入つた。三十四年、殆ど病床を出づる能はず、時折畫筆を執る。一月より「墨汁一滴」を執筆。三十五年、自選句集「獺祭書屋俳句帖抄」上卷成る。同人の第二句集「春夏秋冬」（別項）を選したが遂に完成に至らなかつた。五月四日より「病牀六尺」（別項）を執筆、歿前二日九月十七日に至る。後には自ら筆を執る能はず、口述して筆記せしめるに至る。八月二十六日より私記「仰臥漫錄」（別項）に筆を執つた。九月十九日歿す。【人物】少年時、既にその穎才を認められ、常に年長者と伍して相下らなかつた一種の誇りを、自らの回想記にも書いてゐる。理智の明晰につれて綿密な研究熱は年と共に加はつた。自然何事を考ふるにも、實行するにも、百年の計畫と言つた遠大さと窮極まで見究めようとする熱を持つてゐた。短い生涯のためでもあるか、下劣な娯樂や、退屈な社交に時間を空費するに堪へないらしく、一意專心その仕事に邁進する精進さを固持してゐた。人によつては局量が狹いと言ひ、餘りに冷やかな性格とも見てゐたほど、强く嚴肅で無駄がなかつた。が、臥床約五年、病勢の進むにつれて、寢返りさへも出來ない褥上釘づけの痛苦に堪へながら、神經過敏な感傷にも陷らず、死に至るまで寧ろ餘裕綽々としてその職責を果すに努めた心境の明朗透徹は、理智の明晰と生活の嚴肅に由來するのであつた。その常盤會寄宿舍にゐる時分、同宿の諸生を文學化するといふので反對された程、早く既に或る感化力を示してゐた。麾下に參ずる者の性格特徴を察し、誘掖激勵能くその長所を發揮せしめた。明治俳句が僅々十年に滿たずして澎湃たる高潮を呈したのも、その洞察力の透徹に竣つものが多かつた。常に文學の向上を企圖する至純無私の態度で、製作に批判に臨み一片の私情にも支配されなかつた公明な態度は、また以て一世の師表たるに足るのであつた。が、必ずしも詩人的高踏を標榜するのでなく、新聞雜誌の編輯に、同志の會合に、時と場合に處する臨機の考案をも自由に持つてゐた。仄かな記憶に存する俳句の先例を探す時、座右のあらゆる俳書をあさつて往々徒勞に歸する煩に堪へないといふ自己の經驗から、適當な俳句の辭書なきを歎じ、自ら考案したのが、その等身の遺著「俳句分類」であつた。總ての俳書を網羅する遠大な計畫であるのみならず、その分類排列の方法にも獨自の案を立てた。殊に紙の綴ぢ方、紙撚の用ひ方等の細事にも經驗を積んだ發明をした。もとかゝる學究的仕事は、俳句革新の餘技に過ぎなかつたが、その餘裕の或る時間を割いて、その無味な仕事に從事した。最早餘命幾何もないと想像されたにも拘らず、なほ倦まずして俳書の涉獵を怠らなかつた。この俳句分類の仕事が根幹となつて、他方に「俳家全集」「俳書年表」等の諸著をも生んだ。句集「寒山落木」、歌集「竹の里歌」（別項）は言ふまでもなく、少年時代の諸述作ま

で、生前順序よく整理してゐた綿密さは、いつ左様な時間を持つてゐたかを疑はしめる程であつた。殊にその回想記・紀行等により、自己事歴の年月等を細記してゐる周到な注意は、古今その比を見ずともいふべきである。一方句風の變遷によつて起る微妙な動向をも見逃さず、時々その意見を發表して同志に警告を與へ、又短歌の製作上に生ずる經驗の閃きを捉へて、その俳句化から萬葉化へ轉向するなど、詩的感受性の敏感さをも具有してゐた。死する約一年前、最早宿昔の志望に向つて、事務を進める自由を奪はれてから、僅かに書筆を執ることによつて病苦を慰めた。眞に病餘の閑事業であつたが、それすら自己身邊の草花・果物等、俳句から得た寫生の信條を曲げず、獨自の書境を成したと言はれてゐる。その他衣食住の細事に就いて、衣住に對しては何等の興味を持つてゐなかつたやうである。ただ食に關しては、平生美食論を唱へ、エネルギーの補充を理論づけてゐた。酒・煙草を嗜まず、眞に少量を用ひた。最も果物に傾倒し、就中、秋の柿を飽食した。婚期を失して生涯獨身であつたが、異性に對しては、當時の一般的道德觀を傳承してゐたらしく、齒牙にかけない態度で、その獨身生活にも殆ど無關心であつた。その文章・和歌・俳句等にも異性觀の甚だ稀薄であるのは、這間の消息を傳へるものと言つていゝであらう。



子規自畫賛（鳴雪句集）

【編著】子規全集十五卷（アルス）、普及版子規全集十八卷（改造社）がある。【句集】新俳句上原三川・直野碧玲瓏共編、子規閲（明治三十一年三月刊）○春夏秋冬（春之部）子規選（明治三十四年五月刊）（以上別項）○獺祭書屋俳句帖抄上卷子規選（明治三十五年四月刊）○子規句集瀬川疎山編（明治四十二年二月刊）（別項）○子規句集 虛子・碧梧桐共編（明治四十二年六月刊）○子規一代句集北條素園編（大正二年九月刊）○子規句集寒山落木より寒川鼠骨編（大正四年十二月刊）○新選子規句集千葉鬼村編（大正五年八月刊）。【歌集】竹の里歌伊藤左千夫編（明治三十七年十一月刊）（別項）○竹の里人選歌 伊藤左千夫編（明治三十七年五月刊）。【寫生文・小說】子規小品文集虛子編（明治三十九年九月刊）○寒玉集子規等（第一篇明治三十三年十二月刊、第二篇同三十四年四月刊）○寸紅集 子規等（明治三十三年十二月刊）（別項）○寫生文集 子規等（明治三十六年九月刊）。【俳論】獺祭書屋俳話（明治二十六年五月刊）（別項）○俳諧大要（明治三十二年一月刊）○俳人蕪村（明治三十二年十二月刊）（別項）○俳句問答（上卷明治三十四年十二月刊、下卷同三十五年二月刊）○俳句界四年間（明治三十五年四月刊）○行脚俳人芭蕉（明治三十九年六月刊）。【註釋】○蕪村句集講義子規等（大正三年四月合本刊）【隨筆其他】子規隨筆 小谷保太郎編（明治三十五年十月刊）○同續編 小谷保太郎編（明治三十五年十二月刊）○子規書簡集 虛子編（上卷明治四十年三月刊、下卷同四十年六月刊）○俳句全集十二卷（昭和三年三月—同四年九月刊）。

【業績】明治二十五年、新聞「日本」に俳句の革新を唱へてから、約六七年の間に全く天下を風靡し、鬱然明治俳句の盛觀を呈した。次いで雜誌「ホトトギス」を發刊するに及んで、更に俳運の隆盛を來した。その薫陶を受けた者實に多士濟々、全國に輩出した。明治俳句のかゝる隆昌を見たのも、俳句が日本文學として他の戯曲・小說・和歌・漢詩等に讓らざる一位置を占めるものであることを主張し、芭蕉・蕪村等先人の詩人的價値を闡明したその創見に基くものであると見ねばならぬ。單に明治俳句の始祖であるのみならず、俳句の詩的地位を宣揚し確保した先覺であつた。俳句に關聯して、寫生文の一體をも創始した。見聞を正確に記錄して、誇大なる架空の想像を排除した運動は、なほ江戸文學の餘弊を受け且つ自然派文學の擡頭しつゝあつた當時の文壇に一衝動を與へ、殆ど文壇の空氣を一新した觀をなした。明治三十一年「歌よみに與ふる書」（別項）の發表以來、和歌の革新に專心し「百中十首」の自己創作をも併せて世論に問ひ、遂に「萬葉集」復古の叫びとなり、その進歩の徑路に多少の曲折はあつたが、根岸短歌會（別項）を創設し、新聞「日本」にも募集歌を選して、これまた明治歌壇の一偉觀となつた。その薫陶を受けたる者も頗る多い。「萬葉集」を推稱し、次いで源實朝・橘曙覽・平賀元義等、萬葉以後の隱れたる歌人を紹介したのも、多年和歌の傳統の誤つた管見を正し、眞の文學的根據に立脚しようとしたもので、和歌にとつても有史以來の創見によるのであつた。如何せん和歌の革新に手を染めて以來、病弱日に加はり、更に歩武を進める英氣を缺いた。その他新體詩・民謠類にも、或る意見を包藏してゐたやうであるが、俳句・和歌に忙殺されてこれを實現する暇を得なかつた。若しなほ十年の歳月を許し得たならば、如何なる進轉と業績を遺したであらうか。

【參考】子規言行錄 小谷保太郎編 ○子規追悼集（ホトトギス 明治三五ノ一二）○老梅居雜著 内藤鳴雪 ○子規居士と余 高濱虛子 ○俳句の大道 虛子編 ○俳人子規 木下春雄 ○人及び藝術家としての正岡子規 西宮藤朝 ○子規之第一歩 河東碧梧桐 ○子規の回想 碧梧桐（碧大正一三ノ六—同一四ノ二）○正岡子規全傳 橘田東聲 ○日本及日本人（正岡子規號昭和三ノ九）○子規と節と左千夫 橘田東聲 ○正岡子規研究 碧梧桐（日本文學講座）○正岡子規 齋藤茂吉（岩波講座「日本文學」）○子規の俳論 大森桐明（俳句講座「俳論文篇」）○子規年譜（子規全集）【河東】

色音論（しきおんろん） 假名草子 二卷一册 【作者】未詳。「あづま物語」と同じく德永種久作といふ說には確證がない。【名稱】一名「あづまめぐり」、「色音論」の名は、中に當時江戸の流行ものを船頭に尋ねることがあつて、船頭の答に、流行ものゝうち「うづらをあつめかけならべ、つばきをあまたうへならべ、鳥のなく聲はなの色、こゑといろとのあそびに、こゝろをよせぬ人もなし」とあるに由る。【刊行】寛永二十年春【諸本】流布本が極めて稀で、寛永二十年京都二條烏丸板屋清兵衛刊行が一本あるのみ。從來寫本で行はれ、その主なるものとしては燕石十種本があり、明治以後には、我自刊我本「色音論」一册、國書刊行會の燕石十種本等がある。【解說】自序中に「此書にしるす所、予が私の意を以て新に作り出せるにはあらず。片家に傳へ來りし古書の要領をつみ擧て其大體をあらあら記しぬ。其委しく詳なるに至ては、十卷・十二卷にも書つくすべからず。」とある。「秋草」は三卷で、上卷に武家禮法之部七條、人品稱呼之部十四條、人體之部三條、姓名之部二十二條、中卷に役名之部十一條、官位之部七條、衣服之部四十條、下卷に刀劍之部八條、家作之部六條、酒食之部十六條、道具之部十條、進物之一々記して行くといふのではなく、通りすがりの町々所々の名を擧げて、道行風を眞似た七五調の紀行文であるが、決して名文とはいはれぬ。ただ他の紀行文は、多く風景勝地を記し、歌を詠むといふのが慣例になつてゐるが、「色音論」は江戸の町々を經巡り、風俗を寫した點が特色である。併し風俗と云つても、詳細な記實ではなく、勿論深い觀察もなく、眞の皮相の一刷毛に過ぎないものであるが、その片言隻句も、江戸研究の資料としては、もしかな」（十八年）、「青々と障子にうつるばせをかな」（二十一年）の如き早期の作から、「草花を書く日課や秋に入る」（三十五年）、「腹中に殘る暑さや二萬卷」（同上）の如き歿時直前の作までを選拔した子規一代の拔粹句集である。【附記】子規自身が生前に自選して、歿年の明治三十五年四月に刊行された「獺祭書屋俳句帖抄」上卷がある。明治二十五年から二十九年に至る五年間の編年體季別句集で、自選であるだけに子規の選句の標準を知るに恰好の

流行ものを網羅に漏れること寡あつて、輯頭の谷に、流行もののうち「うづらをあつめかけならべ、つばきをあまたうへならべ、鳥のなく聲はなの色、こゝろといろとのあそびに、こゝろをよせぬ人もなし」とあるに由る。【刊行】寛永二十年春【諸本】流布本が極めて稀で、寛永二十年京都二條烏丸板屋清兵衞刊行が一本あるのみ。從來寫本で行はれ、その主なるものとしては燕石十種本があり、明治以後には、我自刊我本「色音論」一册、國書刊行會の燕石十種本等がある。【解説】奥州信夫の里の邊に、心なく月日を送つてゐた人が、世渡りのために據所なく旅立して、江戸に來り、芝と品川の境に宿を求め、こゝに姑く滯留し、淋しい餘りに、宿を立ち出でて增上寺に參詣し、本堂の美々しきに目を驚かし、阿彌陀の由來を說き、芝神明に詣で、折ふし神樂を奏してゐたといふので、神樂の起原を述べ、愛宕山へ登つては、海上の眺望、芝・麻布・赤坂・饅ケ關・木挽町一眸の風景を賞し、更に中橋廣小路・通り町から日本橋に出づるまでを上卷に收め、下卷は江戸橋を渡つて舟町からねぎ町に出で、芝居町を瞥見して吉原に出で、風俗の一斑を叙してとび澤町・傳馬・本町・石町・すだ町等、江戸の繁華に目を驚かして升形御門を出て神田明神・湯島・上野東叡山・不忍池・谷中から車坂を降りて、淺草に足を向け、駒形堂・觀世音を伏し拜み、隅田川を渡つて梅若の古跡をたづね、やがて船に乘つて旅宿にたちかへる「ころは、くわんえい二十年初春なればするゑひさに、めでたかるべき君がよを……ねがひしまゝのおもひでに、はやあふしうのものなれば、こゝろにかなふぞうれしけれ」と結んでゐる。その書き方は名所舊跡を訪ねて、一々記して行くといふのではなく、通りすがりの町々所々の名を擧げて、道行風を眞似た七五調の紀行文であるが、決して名文とはいはれぬ。ただ他の紀行文は、多く風景勝地を記し、歌を詠むといふのが慣例になつてゐるが、「色音論」は江戸の町々を經巡り、風俗を寫した點が特色である。併し風俗と云つても、詳細な記實ではなく、勿論深い觀察もなく、眞の皮相の一刷毛に過ぎないものであるが、その片言隻句も、江戸研究の資料としては、見のがすことの出來ないものである。この書の作者は不明であるが、「あづま物語」（別項）とは、同作者に相違ない。江戸名所記の濫觴といふほどではないが、めづらしいものである。【水谷】

四季草（しきぐさ）　故實　七卷　【著者】伊勢貞丈【名稱】春草・夏草・秋草・冬草の四部を合はせた總稱として命名されたもので、一括して刊行するに當つて出來た名と見える。【刊行】天保八年【成立・由來】「春草」は安永五年正月、「夏草」は同七年四月、「秋草」は同六年九月。「冬草」は同七年十一月。「春草」「夏草」等の名は、執筆の時節によつて附けたものであり、「夏草」は友人中原常政の求めに應じて書いたもの、他は孫らに書き與へたと序文にある。但し最初から「四季草」を著はす目的で筆を執つたものではない。【解説】「春草」は二卷で、弓・矢・空穗・尻籠・箙・靫・ゆがけ・弦袋・的・笠懸・犬追物等に關した故實上下各五十箇條を記し、「夏草」は一卷で、歩射の三ツ物、大的・草鹿・圓物、騎射の三ツ物、流鏑馬・笠懸・犬追物に就いて、順序を立てて記したもので、歩射之部十一條、騎射之部十三條、追記一條、すべて二十五條から成つてゐる。その書き方は名所舊跡を訪ねて、自序中に「此書にしるす所、予が私の意を以て新に作り出せるにはあらず。代々家に傳へ來りし古書の要領をつみ擧て其大體をあらあら記しぬ。其委しく詳なるに至ては、十卷・十二卷にも書つくすべからず。」とある。「秋草」は三卷で、上卷に武家禮法之部七條、人品稱呼之部十四條、人體之部三條、姓名之部二十二條、中卷に役名之部十一條、官位之部七條、衣服之部四十條、下卷に刀劍之部八條、家作之部六條、酒食之部十六條、道具之部十條、進物之部八條、書札之部三條、祝儀之部九條、凶事之部四條、雜事之部六條、都合三卷十六部百七十四條に分けて記し、「冬草」は一卷で、空穗考・尻籠考・餝劍考・蝦夷鍬先考・甲冑名考・洗革鎧考・弓材考・辨慶七道具考・十張弓考・甲冑問答・母衣問答・武士學文問答の十二篇を收めてゐる。四部共に體裁を異にしてゐるのは、各自全く獨立した著作であるがためである。

子規句集（しきくしふ）　一册　【編者】【石村】河東碧梧桐（かはひがしへきごとう）・高濱虛子【名稱】精しくは「子規遺稿子規句集」【刊行】明治四十二年六月、俳書堂【解説】子規歿後、その遺稿を次々に出版するに當り、俳句集として子規が生前自ら分類淨書して置いた「寒山落木」（明治十八年より二十九年に至る俳句稿）、未だ淨書に及ばなかつた手記「俳句稿」（明治三十年より三十三年に至る）、及び「仰臥漫錄」の卷末その他に散錄されてゐる少數の俳句（明治三十四五兩年）、合計一萬數千句中より、碧梧桐・虛子兩人が千二百四十六句を選拔編輯した四季季題別の句集で、各句の下にはその制作の年が記されてゐる。卽ち本集は、子規が句作を始めてから歿する年までの作句を選輯したもので、「朝霧の中に九段のともしかな」（十八年）、「青々と障子にうつるばせをかな」（二十一年）の如き早期の作から、「草花を畫く日課や秋に入る」（三十五年）、「腹中に殘る暑さや二萬卷」（同上）の如き歿時直前の作までを選拔した子規一代の拔粹句集である。【附記】子規自身が生前に自選して、歿年の明治三十五年四月に刊行された「獺祭書屋俳句帖抄」上卷がある。明治二十五年から二十九年に至る五年間の編年體季別句集で、自選であるだけに子規の選句の標準を知るに恰好のものである。卷頭に「獺祭書屋俳句帖抄上卷を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ」と題する自己の俳歷と見解を述べた長篇の一文がある。又、寒川鼠骨が碧・虛兩人の據つた同じ材料によつて選拔編輯し、大正四年十二月刊行した「子規句集　寒山落木より」がある。碧・虛共編の句集と同じく四季季題別で、句下に制作の年を記し、前記の「朝霧の中に」の句以後三十五年の作までを取つた子規一代拔粹句集である。句數は、碧・虛共編のものに比べて遙かに多い。卷頭に「此書を編みて後」と題する長篇の自序があつて、材料の解説と眞實な句を中心として選んだ意見とが述べられてゐる。以上の子規句集どもは最も信憑するに足るものであるが、この他子規直接の人でなく從つて直接の材料に據らないものに、北條素園の「子規一代句集」（大正二年刊）・千葉鬼村「新撰子規俳句集」（大正十四年刊）などがある。又子規全集の一・二・三卷は、子規の遺句全部を輯錄した編年體の子規俳句全集である。【志田】

色彩感情（しきさいかんじやう）　美學【英】Colour-Feeling【解説】色彩感覺に伴ふ感情。感覺感情（別項）の一つ。例へば黃は輕快な感じを起し、鼓舞的であり、青は沈靜的な感じを起

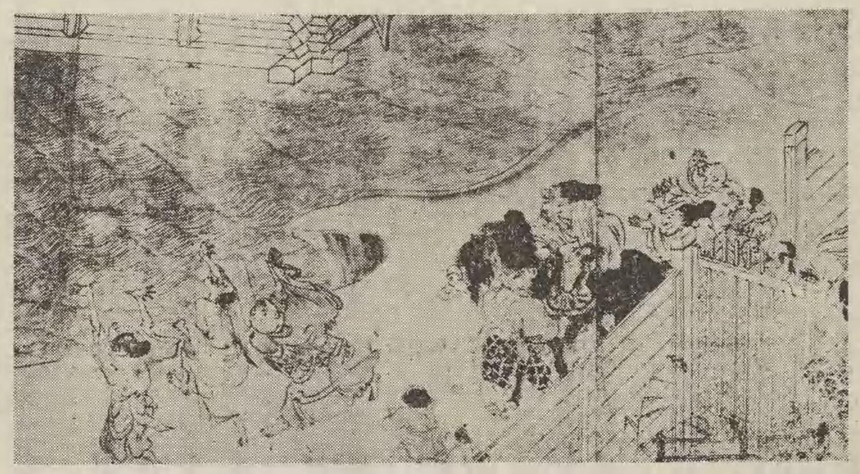
す。これ等の色彩感情が如何にして生ずるかといふ説明は、音の場合と同様に困難なことであるが、多くは聯想作用の仕方或は直接に感情移入（別項）によると言はれる。（一）は、光・闇・草・血液といふやうな自然の情況、物象の認識的經驗と、情緒との關係を聯想することによつて色彩感情が起る。（二）には主觀の經驗的事實、例へば危險とか苦痛とかいふ感情が、その感情を誘起させた原因となつてゐるものと關聯して聯想の結果、色に感情表出があると認める。併し、聯想作用による説明は完全でない。パーカーによれば、色の感情は寧ろ多く情趣的に現はれるが、これは色そのものの本原的な性質と、人間の性又は氣質或は風土の影響といふやうな多方面の研究が必要であると。從つて色が何故それ〴〵の感情的性質を有するかといふことを、原始民の本能的生活から説いたり、或は生理學的に個人的差別の原因を探るなどの試みが起る。而も色彩の情趣を媒として色に意味が與へられること（色彩象徴）、例へば綠が青春を、赤が革命を意味するといふ如きも聯想作用から説くのが多いが十分ではない。なほ單一の色彩感情に比して色彩複合による感情は、より多く情趣的に現はれる。

【村田】

信貴山緣起（しぎさんえんぎ）　繪卷物　三卷

【解説】大和信貴山朝護孫子寺藏。昔この山に毘沙門天を勸請した信濃國のひじり命蓮に關する物語を描いたもので、この物語は「宇治拾遺」にも出てゐる。命蓮は信貴山に籠つて里にも出ないが、その鉢が飛び歩いては食物を集めて來る。或る時山崎の長者の家でこの鉢を米倉の中にしまひ込んだので、鉢は待ち切れず遂に米倉を載せたまゝ信貴山へ飛びあがつてしまつた。長者は驚いてその後を追ひ、和尚に粗忽をわびて、またこの鉢の力で米を返して貰つたといふ。これが所謂飛倉の一卷である。その二は延喜加持卷といはれ、命蓮が劍の護法といふ靈驗著しき修法をして醍醐天皇の御病氣をなほしたといふ話。その三は尼公卷といはれ、命蓮の姉が弟の行方をたづねて信濃國からはる〴〵信貴山に來り、ともに毘沙門天に歸依するといふ話である。この物語は通常の繪卷の如く、詞と繪と交互に短かく段を切つて話の筋を辿る遣り方と違ひ、詞書は三卷を通じて僅かに四段ある丈けで、專ら長く連續する構圖や布局の力によつて、おのづから事件を次々と巧みに展開させてゐる。その人物や山水等の描寫も頗る巧みなもので、源氏物語繪卷に見る濃彩のつくり繪と違つて、流麗な描線を驅使してをり、色彩の如きは割合に濃厚でない。而して内容が既に源氏の如き貴族生活を題材とせず、漸く平民化して活動の舞臺も戸外や山水が主になつてゐるやうに、その描法も源氏に比べて甚だしく相違し、活動本位のもので、畫致生新、活潑な姿態表情を描いて面目の躍如たるものがある。總じてその描寫は藤原固有のつくり繪に對して、鎌倉に發展する線描主義の特色を發揮してゐるが、具さにこれを見れば、その山岳樹法等に藤原式の溫秀な描法もなほ顯著であり、まづは藤原末葉の製作として活動的な鎌倉繪卷の先驅をなすものと見るべく、而もその描寫の精秀な點に於て、新派の鎌倉繪卷を凌駕する傑作である。この繪卷は一般に鳥羽僧正覺猷の筆と傳へられてゐる。僧正は繪の名人で、嘗て地方から朝廷に奉る貢米が俵に充ちてゐないのを諷して、米俵の風に散る光景を畫いたといふ話もあり、この繪卷の飛倉の描寫と思ひ合すれば、その人の筆と言ひ傳へる所以も一應尤もらしいが、今日では白描圖像抄などに往々その名が見受けられる位で未だこの信貴山緣起のやうな繪卷をかいたと斷ずべき根據は見出されない。

【田中（一）】



信貴山緣起（朝護孫子寺藏）

式三番（しきさんば）「三番叟」を見よ。

式子内親王（しきしないしんわう）　歌人　【別稱】大炊殿・大炊御門齋院・萱齋院・高倉宮　【法號】如法　【生歿】建仁元年正月二十五日薨去、御歳未詳　【閲歴】御生年は御同腹の御長女殷富門院の御年齡から推して、第三皇女説によれば、まづ仁平頃か。御父君は後白河院、御母君は大納言藤原季成の女高倉三位局成子の方である。母系はすべて文雅の道に優れ、公實・實行・公教・實房の如き悉く勅撰集の有名な歌人である。久壽二年後白河院御即位、その翌々年保元の大亂が勃發したのであるが、保元三年御長兄二條院（時に十五歳）の御即位後も、後白河帝は上皇として、引續き院政を聽き給うた。御長姉亮子内親王は當時既に伊勢齋宮であり、式子内親王もその翌年（平治元年）賀茂齋院に任ぜられた。が、更にその年起つた平治の亂は、上皇が一時御幽閉の御運に遭遇され、一方公家文化沒落の一轉機をなした。内親王は十餘歳にて既に准三后の待遇をうけられ、嘉應元年七月病を以て齋院を辭し給うたが、源平爭亂による世相の推移、殊に御血緣の間に、崇徳院（叔父）・以仁王（兄）・圓惠法親王（兄）・安徳帝（甥）と云ふ如く、次々に時運に殉じ給ふ方々を見られなければならなかつた。その二三十歳に亙る御成年期の精神は、生々として、「千載集」或は御家集の中に寫象されてゐる。頼朝が愈々征夷大將軍として、鎌倉に覇府を開いた建久三年、後白河上皇崩御遊ばされた。内親王は遺領大炊御門院を受けて移居し給うたが、こゝは當時天才歌人として時めく良經の曾ての邸宅であつたので、「古里の春を忘れぬ八重櫻これやみし世にかはらざるらむ」（續後撰集）と懐舊の情を述べて居られる。御長姉殷富門院の御出家が、丁度その年に相當してゐる。建久八年には、内親王も藏人橘兼仲、僧觀心の陰謀事件に與るものの如き疑惑を受け給ひ、遂に御出家の身となり給うた。正治二年には御弟君高倉院の孫皇子にあたる後の順徳院（時に四歳）を猶子とし給うたが、その前年頃より御病が愈々重りて薨ぜられた。

定家とは永い御親交で、その御病狀の委曲は定家「明月記」（正治元年同二年）に盡くされてゐる。假に仁平元年を御生年にあてるなら、御享壽五十一歳である。正治二年には正治百首の詠あり、最後まで歌道に精進遊ばされた。

【作品】御歌は勅撰集では、千載・新古今・新勅撰・續後撰・續古今・續拾遺・新後撰・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今すべてに採られてあり、特に新古今集に四十九首まで選入されたことは特筆すべきである。これ等は、さうした自然觀照が生んだ歌例の二三である。なほ轉寢や夢の歌の多いのも、その特色をなしてゐる。

はかなしや枕定めぬうたゝねにほのかに迷ふ夢の通路（千載）

夢のうちも移らふ花に風ふけば靜心なき春のうたたね（續古今）

正徹は、「徹書記物語」に、内親王の歌風を幽玄と評してゐるが、他の幽玄歌の如く内親王に於ては漢詩的自然觀の影響の著しくない點

大型本・繪入本の別がある。この三書は、何れも掲載歌の内容を等しうして、岡西惟中の序文あるも同樣である。但し元祿六年の日附が繪入本の方は元祿十三年に改められてゐる。安永板本は、同八年十月の刻成のもの、文化板本は、同九年三月の上板に係はり、清水濱臣の序文がある。舊刻の板木が火事で燒失し、板本も稀になつたから、新たに書商の乞をうけて校合したとの旨が見える。その他明治以後の活字本は、續國歌大觀・國歌大系第五卷所

績が掲げてある。「病牀六尺」（別項）は歿前二日まで新聞「日本」に掲載された最後の病床雜記で、子規病歿直前の模樣を知るに最良の資料である。「墨汁一滴」は歿年の前年、明治三十四年の一月より七月までの病中漫錄で、同じく新聞「日本」に掲載されたもの、「春色秋光」は未だ病臥せざる前の起稿に係るものである。同年十二月「子規隨筆續篇」が同じ人によつて刊行され、後に「續子規隨筆」と題せられたが、これには明治二十六年から三十三年に至る諸

定家とは永い御親交で、その御病歌の委曲は定家「明月記」(天治元年目二年)に載くされてゐる。假に仁平元年を御生年にあてるなら、御享壽五十一歳である。正治二年には正治百首の詠あり、最後まで歌道に精進遊ばされた。

【作品】御歌は勅撰集では、千載・新古今・新勅撰・續後撰・續古今・續拾遺・新後撰・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今すべてに採られてあり、特に新古今集に四十九首まで選入されたことは特筆すべきことである。○式子内親王集(別項)○前齋院御集一巻(文化八年刊。内親王の御百首三種と、勅撰に載った御歌をすべて輯めたもの)。

【作風】後鳥羽院の御代は、宮廷には文雅の士が甚だ多かつたが、女流に於ては、式子内親王を超えた才媛は遂に出なかつたと云つてよい。題材の廣汎さ、詠み口の自由さ、或は女性らしい調べ(「後鳥羽院御口傳」に「もみ〳〵とある」と評されてゐる)、哀切な情緒の表現、その他何れの點より見るも、内親王は一代の女流歌人たるの資格が備はつてゐる。

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする(新古今)

この一首は、「小倉百人一首」に引かれたために、内親王の作中甚だ有名であるが、やゝ技巧の跡が鼻につく。下句に於て調子の低くなるのは、正治百首の内親王の詠などでよく分るやうに、その特色をなしてゐるが、自然の上に纖美な線を引いて、はかなく優婉な空氣を描き出してゐる處、他の追從を容さない。

人しれず物思ふ袖にくらべばや滿ちくる潮の波の下草(續後撰)

殘りゆく有明の月のもる影にほのぼの落つる葉隱れの花(家集)

これ等は、さうした自然觀照より生んだ歌例の二三である。なほ轉寢や夢の歌の多いのも、その特色をなしてゐる。

はかなしや枕定めぬうたゝねにほのかに迷ふ夢の通路(千載)

夢のうちも移らふ花に風ふけば靜心なき春のうたたね(續古今)

正徹は、「徹書記物語」に、内親王の歌風を幽玄と評してゐるが、他の幽玄歌の如く内親王に於ては漢詩的自然觀の影響の著しくない點は注目に値する。

【參考】簾中抄(上)○百人一首一夕話(八)○大日本史料(四ノ六)○式子内親王　松浦貞俊(國語と國文學七ノ二)　【齋藤(清)】

式子内親王家集　しきしないしんわうのかしふ

【作者】式子内親王【名稱】圖書寮本及神宮文庫本は式子内親王集とのみ題されてゐる。文化九年の板本は外題が式子内親王御集となつてゐるのみならず、内題に前齋院御集とついてゐる。前齋院は内親王の別稱であるが、從つてさうした別名も用ひられてゐたものと思ふ。【卷册】諸本多く一卷一册。神宮文庫藏板本に二卷一册のものがあるが、内容は同じく元祿六年惟中序ある小型板本のものと異らない。【成立】内親王の御自選集でなく、後人が三度の御百首と、勅撰集中の御歌をもとにして選歌し、一書に纏めたものらしい。【諸本】圖書寮・神宮文庫・帝國圖書館等に寫本を藏す。前二書は内容一致し、元祿板本系統のもの(神宮文庫本には、村井敬義による安永八年の朱筆校合あり)、帝國圖書館本は二十六家集第三編に收められてゐるもので、文化板本系統のもの。板本には、元祿板本・安永板本・文化板本等の諸本あり、特に元祿板本には、小型本・大型本・綸入本の別がある。この三書は、何れも揭載歌の内容を等しうして、岡西惟中の序文あるも同樣である。但し元祿六年の日附が綸入本の方は元祿十三年に改められてゐる。安永板本は、同八年十月の刻成のもの、文化板本は、同九年三月の上板に係はり、清水濱臣の序文がある。舊刻の板木が火事で燒失し、板本も稀になつたから、新たに書商の乞をうけて校合したとの旨が見える。その他明治以後の活字本は、續國歌大觀・國歌大系第五卷所收本は、共に文化刊本系統のもので、終りの「雖入勅撰不見家集歌」の部が省かれてゐる。【内容】三種の百首歌と、六十餘首の家集に無い勅撰歌の四部分より成る。但し文化板本と帝國圖書館本とは、第二番の百首中の戀雜歌と、第三番の百首の戀雜歌とが相互に入替になつてゐる。次に元祿板本と圖書寮本とは、共に百首中の七十首のものが「雖入勅撰不見家集歌」の部に混入してゐる。かの濱臣が校正の筆を加へた點は、主としてこれに係つてゐると云つてよい。全歌數は三百五十四首のものから三百六十九首のものまでの程度に於て、各本多少の出入あるのみ。卷頭歌は諸本同一で、「春もまづしるく見ゆるは音羽山峯の雪よりいづる日の色」とある。【影響】當時、輩出した多くの名歌人、所謂新古今調歌人の名に掩はれて、特にその名は目立たぬとしても、數次の板本が證する如く、その影響は脈々として近世まで及んでゐる。　【齋藤(清)】

子規隨筆　しきずゐひつ

【編者】小谷保太郎【刊行】明治三十五年十月、日本新聞社(日本叢書の一)【内容】子規晩年の病苦中の隨筆「墨汁一滴」「病牀六尺」の二篇に「春色秋光」一篇を加へたものである。卷頭には、肖像・筆蹟が揭げてある。「病牀六尺」(別項)は歿前二日まで新聞「日本」に揭載された最後の病床雜記で、子規病歿直前の模樣を知るに最良の資料である。「墨汁一滴」は歿年の前年、明治三十四年の一月より七月までの病中漫錄で、同じく新聞「日本」に揭載されたもの、「春色秋光」は未だ病臥せざる前の起稿に係るものである。同年十二月「子規隨筆續篇」が同じ人によつて刊行され、後に「續子規隨筆」と題せられたが、これには明治二十六年から三十三年に至る諸稿が輯錄され、「松蘿玉液」「養痾雜記」「棒三昧」「三十棒」「從軍記事」等の漫錄、「歌よみに與ふる書」「人々に答ふ」「歌話」「曙覽の歌」「短歌愚考」等の歌論、「文界八つあたり」「文界漫言」「戲曲類と四季」等の評論が見られる。中村不折が嘗て新聞「日本」に揭げた畫が書中所々に挿入されてゐる。これ等の隨筆は、初め吉川弘文館から發行され、後年、金尾文淵堂の手に移つて體裁を改めたが、内容には何等の變りがない。　【志田】

敷田年治　しきだとしはる

國學者【姓名】宮本氏、のち敷田と改む。幼時は主計之介、又は上總。後仲治と云ひ、更に年治と改む。【生歿】文化十四年七月二十日、豐前國宇佐郡敷田村に生れ、明治三十五年一月三十日大阪に歿す。享年八十六。【墓所】大阪市阿部野墓地【閲歴】年治の父は宮本包藏と云ひ、豐前宇佐郡敷田の二葉山神社の祠官であつたが、年治の五歳の時に歿し、爾後母の手で育てられた。年治は天保三年(十五歳)家を出で、同八年(二十歳)まで諸國を流浪したが、この間種々の人に從つて主として國學を學んだやうである。が、定まつた師は無かつた。天保十年、豐前四日市町の蛭兒神社の祠官吉松能登守の養子

式亭三馬（しきていさんば）→「三馬」を見よ。

色道大鏡（しきどうおおかがみ）→「寒山」を見よ。

色道懺悔男（しきどうざんげおとこ）浮世草子　六巻　【作者】善教寺猿賞著名　【角書】上本參山　【刊行】寶永四年板【諸本】近代日本文學大系所收【解說】青木千助なる三十男が津國茅川の邊、眞上の村の稻荷に眼病平癒を祈り、靈夢によりて曙の七郎兵衞といふ大阪の商人にして大峯の信仰者に遭遇し、七郎兵衞を先達として大峯詣りをする途々、色道の懺悔物語をするといふを一篇の筋立とし、六巻二十說話を含んでゐる。千助は近江の貧窮な浪人の二人息子、幼少の頃都のさる貴い方に小姓奉公中、姫君と契りを結ぶ。これがために暇を出され父親からも勘當されて醫者玄節の許に奉公し、その裏借家に住む後家の娘おぎんと情を通じたが、玄節もこの娘に氣があつたので、懸の贔屓となつた。次に飛子屋に奉公し、自人れんと客の眼をかすめて忍びあふ仲となり、三味線の弟子朋輩の折枝といふ舞子をだまして衣類を捲上げ、入質して作らせた銀四百六十匁をれんとの逢瀨に遣ひはたし、京にも居られず夜拔けする（巻二）。大和に知人あるを頼つて行き、醫女おりつと名乘り、女裝して諸家に出入りし、奥方の相手となつて暮してゐると、或る屋敷の奥方は祕事を知つた腰元を薙刀で斬殺すといふ騒ぎになつたので、千助も一命あつてこそとこの事をやめる。貫前の主人その外不首尾の方へは小判で扱ひ、烏丸通の呉服屋に奉公する。この家は煩はかりで男の子がないので、娘さへ手に入れゝばもし（巻三）などは、この代りに、朗らかな色彩と調べを以て掩はれてゐる。これは古代歌謠に於ける一特色であるが、この特色の萬葉に現はれた代表歌は、よくこれを皇子の作中に求めることができる。

色聽（しきちょう）美學（佛）Andition colorée（獨）Farbenhören【解說】一定の音、殊に母音を聽くときに一定の色彩感覺が伴つて來るといふ一種の共感覺の現象をいふ。反對に色が音の感覺を聯想させることをも意味する。既に見出されるが、一般的に相當にある現象である。佛蘭西の象徵派の詩人ラムボー及びボードレールの例を擧げる。

○ラムボー
A……黑
E……白
I……赤
U……青
O……黃（笛）
E……白（ヘーフ）
A……青（ラッパ）
O……黑（ヴォルガン）

○ボードレール

この共感が生得のものか後天的のものかは疑問であるが、その實驗上の結果からすれば、（一）遺傳的傾向があること、（二）幼年時に既にこの聯想が現はれてゐること、（三）個人的に聯想關係が異なること、（四）個人に於ては固定的であること等の特色が數へられる。而してその原因に就いては、心理學的說明が有力である。卽ち色及び音の感覺に伴ふところの感情、卽ち情調には共通な類似的性質が多いために、兩者の聯合が容易に行はれるのであると言はれる。

【參考】Argelander：*Das Farbenhören u. d. Synaesthetische Faktor d. Wahrnehmung.* 1927.　（井田）

色聽檢出年（しきちょうけんしゅつねん）【參考】飯田年治翁傳　高梨光司　（一）出

色道禁秘抄（しきどうきんぴしょう）一冊（明治十一年成る。）江戸から浪華へ來た時の旅日記）○喪明錄一冊（嘉永六年成る。愛兒の追悼錄）○學の手附二冊（明治十一年成る）○阿房我多理一冊（明治二十年成る。河內の風俗を記したもの。）○新續源氏物語一冊（帚木卷だけのものである）○古事記標註七冊（明治十一年四月刊。古事記傳に依つて、簡略に註解したもの）○日本紀標註六冊（明治二十六年四月刊）○標註搖籃風土記二冊（明治十年八月刊）○配詞辨蒙五冊（明治十八年刊。配詞の註釋）○國典字徵五十五冊（宋邦古辭書、國史・國文・本草等の語の訓義を考證した辭書で、江戸に居た頃に出來たもの、もと百餘冊あつたが）○百園語彙二十二冊（國典字徵と同種類のもの。）○國史・神祇史・制度に關するもの、字佐宮雜徵一冊（文久三年成る）○明々論一冊（慶應四年四月成る。我が國體の骨髓を記したもの）○班田考一冊（明治六年成る）○得度考一冊（明治七年成る）○禮儀考一冊（明治七年成る）○戶籍雜徵一冊（明治十一年成る）○神の伊吹二冊（明治十一年成る）○風土記考一冊○郡名私考一卷（未完成。山城大和の郡名の考證）○俠史四冊（古書七十餘種を引用して、國史の闕如を補ふ）○姓氏錄證注一冊（新撰姓氏錄の考證であるが、大部分散逸して、現存一冊）○姓築大社神名考證一冊○屠兒徵一冊（賤民の研究）○諸國々造考殘缺一冊○笹舟一冊（明治十二年刊。神祇官の起原・沿革・骨制等の研究）○古蹤徵一冊（明治三十七年刊）○中臣宮處氏本系帳考證二冊（明治二十八年刊）○職令明鑑二冊（藏原抄・令義解の索引）○皇族類纂一冊（皇胤紹運錄の索引）○續內志便覽二冊（續內志の索引）○紀外神名徵二冊○諸國雜纂六冊（地名に關する研究資料集）○國史姓名錄十五冊（人名の索引）○式抄地名便覽四冊（和名抄及び延喜式の地名索引）○氏族類纂一冊（諸氏族の系譜の姓氏索引）○大系圖略引一冊（尊卑分脈其他諸家系譜の姓氏索引）○類字庚覽二十二冊（辭華等の人名地名等の索引）○荒海日記二冊（嚴島と同種のもの）○西鑄雜纂四十一冊（二十一冊及び其他）○音韻啓蒙（別項）二冊（和蘭文典）○國字考一冊（神代に文字の存した事を論ず）○音韻啓蒙別項二冊（十二音について論述したもの）○國字考一冊（神代文字の存した事を論ず）○音韻啓蒙別項二冊（十二音について論述したもの）○假名遣の時代的變化を一くものいろはにほへと等九冊（假名遣の時代的變化を一くものいろはにほへと等九冊）○假名沿革一卷（文久元年成る。）○大正二年刊。

【著書】年治の學問は範圍が廣く、日本古代史・神祇史・法制史・國文・國語・支那學等に通じ、著書も甚だ多い。（國語國文に關するもの）

假名遣の時代的變化を一くものいろはにほへと等九冊（假名遣の時代的變化を一くものいろはにほへと等九冊）○假名沿革一卷（文久元年成る。）○大正二年刊。

十二音について論述したもの）○國字考一冊（神代文字の存した事を論ず）○音韻啓蒙別項二冊（和蘭文典）○音韻啓蒙別項二冊（和蘭文典）○大祓詞私考一冊（明治十五年五月刊）○大祓の詞を註釋したもの（未完成。大祓の起原沿革を記き、大祓の詞を註釋したもの）○新續源氏物語一冊（帚木卷だけのものである）○古事記標註七冊（明治十一年四月刊。古事記傳に依つて、簡略に註解したもの）○日本紀標註六冊（明治二十六年四月刊）○標註搖籃風土記二冊（明治十年八月刊）○配詞辨蒙五冊（明治十八年刊。配詞の註釋）○國典字徵五十五冊（宋邦古辭書、國史・國文・本草等の語の訓義を考證した辭書で、江戸に居た頃に出來たもの、もと百餘冊あつたが）○百園語彙二十二冊（國典字徵と同種類のもの。）○國史・神祇史・制度に關するもの、字佐宮雜徵一冊（文久三年成る）○明々論一冊（慶應四年四月成る。我が國體の骨髓を記したもの）○班田考一冊（明治六年成る）○得度考一冊（明治七年成る）○禮儀考一冊（明治七年成る）○戶籍雜徵一冊（明治十一年成る）○神の伊吹二冊（明治十一年成る）○風土記考一冊○郡名私考一卷（未完成。山城大和の郡名の考證）○俠史四冊（古書七十餘種を引用して、國史の闕如を補ふ）○姓氏錄證注一冊（新撰姓氏錄の考證であるが、大部分散逸して、現存一冊）○姓築大社神名考證一冊○屠兒徵一冊（賤民の研究）○諸國々造考殘缺一冊○笹舟一冊（明治十二年刊。神祇官の起原・沿革・骨制等の研究）○古蹤徵一冊（明治三十七年刊）○中臣宮處氏本系帳考證二冊（明治二十八年刊）○職令明鑑二冊（藏原抄・令義解の索引）○皇族類纂一冊（皇胤紹運錄の索引）○續內志便覽二冊（續內志の索引）○紀外神名徵二冊○諸國雜纂六冊（地名に關する研究資料集）○國史姓名錄十五冊（人名の索引）○式抄地名便覽四冊（和名抄及び延喜式の地名索引）○氏族類纂一冊（諸氏族の系譜の姓氏索引）○大系圖略引一冊（尊卑分脈其他諸家系譜の姓氏索引）○類字庚覽二十二冊（辭華等の人名地名等の索引）○荒海日記二冊（嚴島と同種のもの）○

茨田郡門眞四番村に隱遁し、十年間專ら讀書と著述とに日を送つた。「古事記標註」「言韻啓蒙」の著述もある。文久二年（四十六歲）遂に拔擢せられて和學講談所の敎官になり、國史國文の講義をした。本來彼は尊王攘夷論者であつたが、和學講談所へ入つて後は、一層勤王の志士と交つてゐた。が、身邊危くなつたので、慶應四年夏江戸を脫して大阪へ移つた。間もなく大阪國學講習所の講師になり、又佐土原藩から招聘されて、二年程同藩の學校で敎鞭を取つてゐた。明治五年（五十六歲）の春、河內國茨田郡門眞四番村に隱遁し、十年間專ら讀書と著述とに日を送つた。「古事記標註」「言韻啓蒙」の著述もある。文久二年（四十六歲）遂に拔擢せられて和學講談所の敎官になり、國史國文の講義をした。本來彼は尊王攘夷論者であつたが、和學講談所へ入つて後は、一層勤王の志士と交つてゐた。が、身邊危くなつたので、慶應四年夏江戸を脫して大阪へ移つた。間もなく大阪國學講習所の講師になり、又佐土原藩から招聘されて、二年程同藩の學校で敎鞭を取つてゐた。明治五年（五十六歲）の春、河內國茨田郡門眞四番村に隱遁し、十年間專ら讀書も國學の事は捨てなかつた。この時代に數種の著述もある。文久二年（四十六歲）遂に拔擢せられて和學講談所の敎官になり、國史國文の講義をした。本來彼は尊王攘夷論者であつたが、和學講談所へ入つて後は、一層勤王の志士と交つてゐた。が、身邊危くなつたので、慶應四年夏江戸を脫して大阪へ移つた。間もなく大阪國學講習所の講師になり、又佐土原藩から招聘されて、二年程同藩の學校で敎鞭を取つてゐた。明治五年（五十六歲）の春、河內國茨田郡門眞四番村に隱遁し、十年間專ら讀書と著述とに日を送つた。「古事記標註」「言韻啓蒙」の著述もある。文久二年（四十六歲）遂に拔擢せられて和學講談所の敎官になり、國史國文の講義をした。本來彼は尊王攘夷論者であつたが、和學講談所へ入つて後は、一層勤王の志士と交つてゐた。が、身邊危くなつたので、慶應四年夏江戸を脫して大阪へ移つた。間もなく大阪國學講習所の講師になり、又佐土原藩から招聘されて、二年程同藩の學校で敎鞭を取つてゐた。明治五年（五十六歲）の春、河內國茨田郡門眞四番村に隱遁し、十年間專ら讀書も國學の事は捨てなかつた。この時代に數種の著述もある。文久二年（四十六歲）遂に拔擢せられて和學講談所の敎官になり、國史國文の講義をした。本來彼は尊王攘夷論者であつたが、和學講談所へ入つて後は、一層勤王の志士と交つてゐた。が、身邊危くなつたので、慶應四年夏江戸を脫して大阪へ移つた。間もなく大阪國學講習所の講師になり、又佐土原藩から招聘されて、二年程同藩の學校で敎鞭を取つてゐた。明治五年（五十六歲）の春、河內國茨田郡門眞四番村に隱遁し、十年間專ら讀書と著述とに日を送つた。「古事記標註」「言韻啓蒙」の著述もある。文久二年（四十六歲）遂に拔擢せられて和學講談所の敎官になり、國史國文の講義をした。本來彼は尊王攘夷論者であつたが、和學講談所へ入つて後は、一層勤王の志士と交つてゐた。が、身邊危くなつたので、慶應四年夏江戸を脫して大阪へ移つた。間もなく大阪國學講習所の講師になり、又佐土原藩から招聘されて、二年程同藩の學校で敎鞭を取つてゐた。明治五年（五十六歲）の春、河內國茨田郡門眞四番村に隱遁し、十年間專ら讀書

となり神官になつた。この後豐後日出の漢學者帆足萬里の門に入つた。嘉永六年三十七歲志を立てて江戸に上つた。江戸では生計に窮し、族本の家來になつたりしてゐたが、而も國學の事は捨てなかつた。この時代に數種の著述もある。文久二年（四十六歲）遂に拔擢せられて和學講談所の敎官になり、國史國文の講義をした。本來彼は尊王攘夷論者であつたが、和學講談所へ入つて後は、一層勤王の志士と交つてゐた。が、身邊危くなつたので、慶應四年夏江戸を脫して大阪へ移つた。間もなく大阪國學講習所の講師になり、又佐土原藩から招聘されて、二年程同藩の學校で敎鞭を取つてゐた。明治五年（五十六歲）の春、河內國茨田郡門眞四番村に隱遁し、十年間專ら讀書

明治十四年聘せられて、伊勢の神宮皇學館の敎頭となり、同時に久邇宮朝彥王（後の賀陽宮）の侍講を兼ねた。明治十六年、病を以て職を辭し、河內で靜養してゐたが、同二十一年七十二歲、大阪西區北堀江御池橋に居を移し、私塾を開いて國學を敎授した。後、東區上本町五丁目に轉居し、此處で歿した。

しきどう

式道（しきどう）→「神道」を見よ。

しきなみ

敷浪（しきなみ）→「敷島」を見よ。

しきなみ

**敷波

に手に入れたお、二親これを夢にも知らず、内儀の甥を養ひ、娘と夫婦にする談合が定つたので、娘から心中を迫られ、雨夜の暗さに紛れて逃げ出した。再び大和の宿に頼み、播州姫路の家中脇坂十内といふ武士の許に草履取りに抱へられ、宿で知合つた女を十内の邸に奉公させた處、十内がこの女に手をつけたので、千助は辛い思ひを堪へながらその宿下りの日に嬲殺する。その後十内の有馬湯治の供をして或る湯女を横取りすることありて、遂に前の女と共に暇取つて世帯を持つ(巻二)。その後膏藥賣りとなつて上本町の資産家の若後家の許に呼ばれたり、北濱の相場に手を出して八百三十兩の金を儲けて尼ケ崎の酒造家の娘を貰ひ、五日歸りに荷を持たせて去らせたり、新町の和泉屋みよしの許に足繁く通つたりした(巻三)。次に堀江の質屋平野屋三郎介の娘の眩きばかりなる容色に思ひを寄せ、越後村上の浪人を手先に使ひ苦肉の策を弄して入婿となる(巻四)。かくて小篠の坊院に通夜して念佛に明かす所に、不思議や大地俄かに震動し、霧の中より數々の女の姿が現れる。これは皆千助にだまされた女の死靈である。その後故郷の父が世を去つた由聞きつたへ家に戻つて家督を嗣ぎ、かねて許婚の仲であつた堅田の名主の娘おすまと祝言した。然るに大阪に殘つてゐる女房の瞋恚のほむら募つて身は大阪に在りながらおすまの皮肉のうちにわけ入つて取り殺してしまふ(巻五)。洞籠が岩屋まで上つた時、千助は罪障のため洞内の水に流され、瀧の口に死骸となつて浮び出た。曙の七兵衛おどろきて介抱すると、千助は夢のさめたやうに生きかへる。そこでなほも罪障消滅のための話はすゝむ。さてその後堅田の女房おすまの死靈七日のうちに大阪の女房を取殺したので、つひにたまらず伏見に轉宅する。伏見は京に劣らぬ色里、一期の納めとみちとせといふ女郎を計略を以て見事に手に入れる。或る時浪人の娘が傾城に賣られるのを厭つて死なうとしてゐるのに行きあひ、娘を助けて三十兩の金を惠んでやる。その娘を引取つて世話してゐるうちに、いつともなしによい仲となつた。よつて伏見を引拂ひ、芥川の邊に家を求めて煙草作りとなつて今に至る。懺悔話は以上にて終り、「謹而立願せし眼病神明佛陀の御影故二度本復仕り諸願成就身にあまり有難くも八拜九拜百拜し奉つた」(巻六)。

【小泉】

志貴皇子（しきのみこ）　歌人　【別名】萬葉集には、巻二挽歌部の題詞に志貴親王と記す外は、皆志貴皇子と記すが、「日本書紀」及び「續日本紀」には、種々の字面で記してゐて一定しない。即ち施基・芝基・志紀・志貴等と記す。後に春日宮天皇、又田原天皇と諡した。「日本書紀通釋」や「日本文學者年表」には、天武紀・持統紀に見える磯城（しき）皇子（天武の御子）を萬葉の作家としてゐるが、別人である。【生歿】生年未詳。薨年に就いては、「續日本紀」元正帝の靈龜二年八月の條に、「二品志貴親王薨」とあるが、萬葉巻二の最後から第五首目に「靈龜六年歳次乙卯秋九月、志貴親王薨時作歌一首并短歌」と云ふ題詞（笠金村歌集所出の歌の題詞）があつて、「續日本紀」と合はない。後考を待つ。【御陵】大和國添ノ上郡【閲歴】天智天皇第七の皇子（續日本紀、靈元二年八月の條）。御經歴は詳かでないが、「日本書紀」（天武紀・持統紀）「續日本紀」などによつて多少知ることが出來る。即ち天武帝の朱鳥元年八月封二百戸を賜はり、持統帝の第三年六月、六人の臣下と共に「撰二帝紀一」になられた。又書紀の文武帝の大寶三年九月の記事によつて　天智天皇―志貴皇子―白壁王（光仁天皇）／湯原王／海上女王／榎井王　當時四品であつた事が分る。更に慶雲元年正月には一百戸を賜はり、和銅元年には三品、同七年二百戸を增賜され、靈龜元年二品に進み、翌年薨ぜられた（續日本紀）。「續日本紀」に六人部王（むとべのおう）、犬養筑紫が皇子の喪事を監護したとあるのは、普通の皇族の記事には記さない事で、皇子が重んぜられた證とすべきであらう。皇子が歌人として活躍されたのは、主として藤原京の十六年間であると考へられる。

【作品】すべて萬葉集に出づ。萬葉集巻一に二首、巻三雜歌部に一首、巻四に一首、巻八春雜歌部に一首、巻八夏雜歌部に一首、計六首皆短歌である。注意すべきは、巻四の一首を除いては皆雜歌であつて、當時の人に多い戀歌が一首しか無い事である。今日見る六首は皆すぐれた作で、中には萬葉の代表作を以て許されてゐるものもあるから、作られた歌數も必ず多かつた事と思はれる。【作風】萬葉初期の作家に共通な、おほまかな作風は、讀む者に朗らかな氣持を感じさせる。赤人の纖細な歌風や、憶良の突きつめた感傷などと違つて、おほらかな伸び〳〵した趣、明朗と云ふ語の最も適切な作家である。有名な「采女の袖吹きかへす明日香（あすか）風都を遠みいたづらに吹く」（巻一）、「石（いな）ばしる垂水（たるみ）の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも」（巻八）、「鼈鼠（むささび）は木末（こぬれ）求むと足引の山の獵夫（さつを）に逢ひにけるかも」（巻三）などは、この特徴の十分に現はれた作である。それは旅愁を歌つた「葦邊ゆく鴨の羽交（はがひ）に霜降りて寒き夕べは大和し思ほゆ」（巻一、難波行幸從駕の作）の如き作に於てすら消えないで、歌全體の色彩は、懷郷の悲しみの代りに、朗らかな色彩と調べを以て掩はれてゐる。これは古代歌謡に於ける一特色であるが、この特色の萬葉に現はれた代表歌は、よくこれを皇子の作中に求めることができるのである。

【森本】

式目（しきもく）　連歌・俳諧　【解説】式目は、もと法律の箇條書の義で、「貞永式目」（別項）などその著しい例であるが、連歌の規定の意にも用ひられるに至つた。その時代は多分鎌倉初期であらう。かくて連歌以來俳諧にも亙つて、懷紙式・巻式・附合・指合去嫌・賦物（ふしもの）・切字・和漢漢和（かんな）・會席・執筆（しふひつ）（各別項）等について一定の規定が定まるに至り、これ等の規定を總括して式目といふのである。【沿革】連歌は共同制作のもの故、自然相互の間に種々の約定をなす要がある。平安時代の歌學書中にも多少の事實が見られるが、やゝ纏まつたのは順徳院の「八雲御抄」（別項）である。建治の頃には既に式目の制があり（應安新式奥書）、文永・弘安の頃より本式・新式（各別項）を生じ、京都では二條爲世、一の式目を作り、鎌倉では冷泉爲相が「藤が谷の式目」を作つたと傳へられ（筑波問答）、民間の宗匠中にもこれを制定する者があり、中にも善阿法師の定めた式目などが世に行はれたやうである（連歌初學抄）。善阿の弟子救濟法師は二條良基を輔けて「應安新式」（連歌新式參照）を撰み、良基がこれに追加をしたが、これが後世の準據となつた。かくて應安から八十年を經て、一條兼良が高山宗砌（こうらいそうせい）と謀

つて、享德元年に「應安新式」に今案を加へ、別に「連歌初學抄」（別項）を著はして賦物の制や小部分の去嫌の改定を行つた。又、和漢及び漢和聯句は去嫌などを緩和するの要があるので、兼良は「和漢篇」（別項）を著はして式目を新に定めた。宗砌は又式目の記憶し難きを憂へて「式目掟歌」を作つた。後これに倣ふものが少くなかつた。一條冬良は三條西實隆や兼載の助力を得て「漢和法式」（別項）を著はし、牡丹花肖柏は兼良の「和漢篇」に商量を加へ、兼載は「明應元年連歌本式」（別項）を著はした。降つて木食上人應其は里村紹巴の教を受けて式目の改定を行ひ、「無言抄」（別項）を著はした。俳諧に於ては、貞門に於ける西武の「久留流」、重頼の「毛吹草」、德元の「誹諧初學抄」、立圃の「はなび草」、貞德の「御傘」（各別項）など相次いで出たが、これ等は連歌の式目を多少緩和したものに過ぎなかつた。かくてこの後の俳諧の式目は、大體貞門の俳諧の式目を準的とするものであつた。

【本式・新式】式目に京都式・鎌倉式、本式・新式さまゝ〳〵有つたことは「連理祕抄」にも見えてゐるが、その實體は今明かでない。建治式から系統を引いてゐると云はれる「應安新式」による百韻は、四枚懐紙に書かれ、一の面と名殘の裏とは八句であつたと考へられる。飯尾宗祇・猪苗代兼載當時に行はれた本式は、一の表が十句、名殘の裏六句となつてゐて、賦物句數・去嫌につき差異がある。紹巴は、清水寺に傳へた古式目に據つたといふ。明應制定の本式百韻は四枚懐紙であるが、三枚懐紙も行はれてゐて、一の表及び名殘の裏は各十句、その他の表及び裏は各二十句づつとなつてゐる（毛利元就の自筆百韻）。蓋し兼載等の本式百韻が表十句であるのは古い本式の痕を留めたものであらう。かくて俳諧の本式も、兼載以來の連歌の本式を多少緩和したものであつた。

【内容】式目の内容は、その種類によつて多少の差異があるが、準的となる「應安新式」に就いて述べると、

一、韻字事
一、遠輪廻事
一、雜物體用事
一、一座二句物
一、一座四句物
一、可レ嫌二打越一物
一、可レ隔二五句一物
一、可二分別一物
一、句數
一、輪廻事
一、本歌事
一、一座一句物
一、一座三句物
一、一座五句物
一、可レ隔二三句一物
一、可レ隔二七句一物
一、水邊體用事
一、體用事

の十八條を包含してゐる。中に句數とあるのは、表現してある句の性質により春・秋及び戀の句は一つづきに五句を限度とし、夏・冬・神祇・釋教・述懐・旅・山類・水邊・居所等は一つづきに三句を限度とし、それより他のものに轉移すべきことを規定したるもの。韻字と云ふのは、發句・脇・第三の如き特殊の句の句尾に同じ韻の語を並べてよい場合と否とを規定したもの、輪廻とは、それより第三句目に緣ある語を用ひる可不可の規定、一座何句物といふは、尤物の濫用を戒むる規定、その他は類似の表現を避ける規定や、さういふ去嫌をなすに當り心得べきことを規定したもので、事物及び表現の性質を區別することが嚴密で煩瑣である。併し條項やそれに擧げてゐる事物も前後多少の差異があり、句數の如きも、「連理祕抄」と「應安新式」とに差異があり、又「應安新式」中にても、天文寫本と永祿本とで少異がある。又宗匠によつて異論もあつた。

【景物】式目中に、自然の景物を重要視してゐることは云ふまでもないが、その景物は式目によつて同じでない。兼載の「連歌本式」には雪・月・花・郭公・寢覺を景物といふとあるが、これは本式に於ての事である。新式系統の方では、雪・月・花が重きをなし、俳諧に入つては初めはさうであつたが、後、花月に定まつた。これが百韻に四花八月の制であつたのが、後、四花七月となり、歌仙では二花三月となつた。

【體用】式目に於て注意すべきは、體用の思想である。體用相の差別は古く起信論などに例があり、佛敎から導かれた思想であらうが、式目では山類・水邊等一々差別を立て、去嫌を嚴密にしてある。併し體用として擧げてある事物には前後小差がある。

【參考】本文中に述べたものは省く。〔連歌式目〕連歌比況集○匠材集○連歌新式抄○連歌至要鈔○連歌提要 水間沾德 ○菟玖波之栞 渡邊章○連歌辨義 阪昌周○連歌茶談 無相○連歌の史的研究 福井久藏〔俳諧式目〕○誹諧小式 山岡元隣○增山之井 北村季吟○山中問答 立花北枝○をだまき 溝口竹亭 ○摺火打 齋藤如泉○俳諧新式大成 宵木鷺水○曉山集 龍万山○宇陀法師 森川許六○誹諧入船 高田幸佐○枝葉集 水間沾德○俳諧十論 各務支考○誹諧通俗志 兒島員九○十論爲辨抄 各務支考○俳諧古今抄 同上○誹諧其傘 相淵貞山○御傘難問 壽來○附合小鑑 大島蓼太○三册子 高桑閑夏○蕉門格外辨車蓋○諸家の風吳雪○俳諧獨稽古 谷口樫川○貞享式海印錄 原田曲齋○蕉風格外辨 蘇案久安○增補改正俳諧歲時記栞草 青藍 〔福井・萩原〕

式目掟歌 しきもくおきてうた 連歌・俳諧【解說】連歌・俳諧の式目を記憶し易からしめる爲に、これを短歌の形式で歌つたものである。連歌に於ては、次の宗砌の作以下數種のものがある。〔高山宗砌の式目掟歌〕連歌師阪昌成所藏本は歌數六十七首・又或る古寫本は六十三首、内閣文庫にある「砌公嫌物」と題する一本は四十七首で、七句去物を詠んだ「衣季や竹田の舟踏夢泪月と松とは七句去るべし」以下、五句・三句・二句去物及び水邊體用外を詠んだ「釣たるゝ魚網ひく（びくにカ）あかむすぶ筧も同じ體用の外」までを收めてある。〔三條西公條の式目掟歌〕公が連歌師周桂と謀り、文龜更定の新式を多くの短歌に賦して記憶の助けとしたものである。「連歌式目時代考」には、六百五十首と見えてゐるが、圖書寮本には五百八十二首と奥書に加へた五首とがある。韻字の部に始まつて追加今案の部に終つてゐる。〔里村紹巴の新式縮歌〕公條の式目歌は、餘りに數が多いので、紹巴がこれを縮めたものである。天正七年豐太閤に獻じ、同十七年補正して二百二十二首となした。門人珠長が同十三年に寫した一本には二百三十四首ある。同じく門人心前が紹巴の講說を聞書した「新式聞書」にも紹巴の式目歌を收めてある。〔猪苗代兼載の式目掟歌〕兼載は、四季、神祇・釋教の六部に分ち、式目歌を百二十首となしてゐる。この他、「宗祇作體用歌十五首」といふものもある。〔俳諧の式目掟歌〕俳諧に於ても、式目掟歌は繼承制作されてゐて、その最も早いものは、貞德が「油糟」（別項）に附した十首の式目歌である。これは門人澁谷以重の懇望によつて詠んだもので、「誹諧は式目ぞなき大方は和漢の如く去り嫌ふべし」から「連歌にはせぬ物の名や古事詞けやけき分は一座一句ぞ」に至る十首で、貞德制定の式目を要約したものである。これの追加として門人西武に俳席の作法を歌つた「十首狂詠」がある。樓川の「俳

諧獨稽古」（別項）には、八十八首の式目歌があり、「袖かゞみ」には古式三十五首、新製十三首の式目歌がある。その他なほあるであらうが、俳諧の方では連歌の方に比較的多いのに比して少い。

〔福井・志田〕

二休咄 じきうばなし 笑話本 五册 【作者】未詳【名稱】一休と角書がある。京の西に住み、言動共に一休和尚に似てゐたため、二休と呼ばれた僧の逸話を記したものでこの名稱がある。【刊行】貞享五年【諸本】近世文藝叢書が見える（この書を寛元本と云ふ）。菅原爲長は、寛元四年に薨じた人であるから、寛元の頃に出來たものと見て、大體誤り無いであらう。

【諸本】前記七卷の寛元本の外に、二十卷本がある。第一卷の奥に、「應永廿三年七月廿三日寫之」とあり、第十九卷の奥に、「應永廿四年六月廿八日寫之」とある（應永本と呼ぶ）。ともに寫本。【内容・組織】字形引の漢字典である。漢字を偏傍に依つて分類し、更に偏傍を字義に依つて次の如く分類してゐる。（一）天象部類抄」に仰いだものと思はれる。【價値】本書は字形引の字義と云ふ點に於て、平安朝に出來た「新撰字鏡」「類聚名義抄」（各別項）に次ぐ古いものである。而して本書に於て、はじめて偏傍をその意義に依つて分類したのは、檢索の便宜を圖つたもので、字書編纂史上注意すべきものである。又音及び訓の註に凡て假名を用ひてゐる事は、「類聚名義抄」等に比して一段と日本化したものである。【末書】「字鏡集類字抄出」、（別名、「字鏡集抄出」）一卷。

必ずしもさうとばかり限定する事はできぬ。

多田院雜掌性妙申、攝津國善源寺庄東方地頭職遵訪左衞門入道跡事、去三日御施行如此、案文遣之、早任被仰下之旨、沙汰付下地於雜掌、可被全所務之由候也、仍執達如件、

康曆二年六月廿三日　沙　彌（花押）
刑　部　丞（花押）

吉見彈正少弼殿

【打渡狀】渡狀とも云ひ、遵行狀或は施行狀を承けたる守護代など代官から下地（現地）を

表が十句、名殘の裏六句となつてゐて、賦物句數・去嫌につき差異がある。紹巴は、清水寺に傳へた古式目に據つたといふ。明應制定の本式百韻は四枚懐紙であるが、三枚懐紙も行はれてゐて、一の表及び名殘の裏は各十句、その他の表及び裏は各二十句づつとなつてゐる。又宗祇によつて異論もあつた。

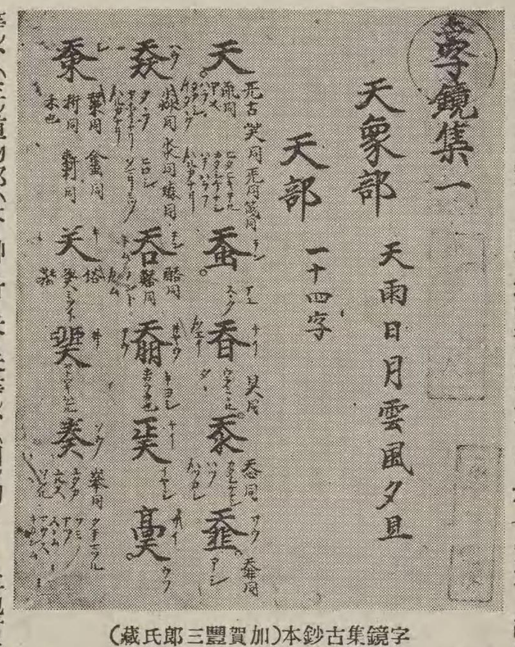
（編井・志田）

二休咄　じきうばなし　笑話本　五册　【作者】未詳　【名稱】一休跡目と角書がある。京の西に住み、言動共に一休和尚に似てゐたため、二休と呼ばれた僧の逸話を記したものでこの名稱がある。【刊行】貞享五年【諸本】近世文藝叢書第六（笑話本）所收【解説】「一休咄」（別項）に影響せられての著作であることは、二休といふ名稱や、蜷川新右衞門親當の子孫である蜷川又右衞門親春を出してゐる點や、二休が狂歌による輕口に於て認められる。けれども構想に於ては「一休咄」や「一休關東咄」（各別項）と可なり隔りがある。これ等は飽くまで一休和尚の逸話と、小咄式の輕口であるが、本書は一休ほどの洒脱滑稽もなく、而も浮世草子や八文字屋本の色彩が濃厚に見えてゐる。二休は西鶴の如き諢知りの僧の如くにも取扱はれてゐるのである。又文中に「好色屋の西鶴」とか、或は女の品定めとか、「たきつけ草」などと記してゐるのも、その間の消息を知ることが出來る。むしろ浮世草子などとして取扱はるべきだと思ふ。連續的な物語式であつて、滑稽的な色彩は甚だ稀薄である。文章も甚だ拙劣であり、狂歌もこじつけである。（小柴）

詩經　「毛詩」を見よ。

紫曉　「几董」を見よ。

字鏡集　じきやうしふ　語學書　七卷或は二十卷　【著者】菅原爲長と傳ふ。【成立】年代未詳。但し七卷本は、奥書に「寛元三年四月二日小川法印云々」「寛元三年五月十日尚成云々」の語が見える（この書を寛元本と云ふ）。菅原爲長は、寛元四年に薨じた人であるから、寛元の頃に出來たものと見て、大體誤り無いであらう。【諸本】前記七卷の寛元本の外に、二十卷本がある。第一卷の奥に、「應永廿三年七月廿三日寫之」とあり、第十九卷の奥に、「應永廿四年六月廿八日寫之」とある（應永本と呼ぶ）。ともに寫本。【内容・組織】字形引の漢字典である。漢字を偏傍に依つて分類し、更に偏傍を字義に依つて次の如く分類してゐる。（一）天象部（天・雨・日・月等）、（二）地儀部（山・石・田・水等）、（三）植物部（木・艸・竹・禾・米等）、（四）動物部、（五）人倫部、（六）人體部、（七）人事部、（八）飲食部付雜物、（九）光彩部、（一〇）方角部、（一一）員數部、（一二）辭字部、（一三）雜字部。（以上寛元本による。應永本は人倫・光彩・方角・員數の四部を獨立せしめず、適當の部へ編入し、雜物を一項として獨立させてゐる）。この偏傍の部類に從つて漢字を擧げ、音丼に訓を片假名で註してゐる。この分類の名稱及び順序は「伊呂波字類抄」（別項）と殆ど一致するものであつて、恐らく本書は、範を「伊呂波字類抄」に仰いだものと思はれる。【價値】本書は字形引の字義と云ふ點に於て、平安朝に出來た「新撰字鏡」「類聚名義抄」（各別項）に次ぐ古いものである。而して本書に於て、はじめて偏傍をその意義に依つて分類したのは、檢索の便宜を圖つたもので、字書編纂史上注意すべきものである。又音及び訓の註に凡て假名を用ひてゐる事は、「類聚名義抄」等に比して一段と日本化したものである。【末書】「字鏡集類字抄出」、（別名、「字鏡集抄出」）一卷。寫本。綠川眞澄著。文政七年正月の伴信友の跋がある。「字鏡集」の訓を抄出して、五十音順に排列した索引である。（龜田）



字鏡集古鈔本（加賀豐三郎氏藏）

施行狀　しぎやうじやう　古文書　【解説】將軍の御教書・下文（別項）などを承けて下知する文書。鎌倉時代では執權より六波羅探題及び守護等へ、或は六波羅より守護等へ下し、室町時代では管領より守護等へ付する狀と云はれてゐるが、當事者は必ずしもさうとばかりは限らぬ。樣式は御教書であるが、それが多く土地財産の訴訟に對する命令で、遵行・打渡と順次奉行されてゆくものである。

多田院雜掌性妙申、攝津國善源寺庄東方地頭職事、
三郎左衞門入道跡事、解狀副具如此、子細見狀、近隣輩押妨云云、所詮爲當寺領之條、御寄進狀等公驗分明之上者、退彼等妨、沙汰付下地雜掌、任先例、全所務、可被注申之狀、依仰執達如件、

康曆二年六月三日　左衞門佐（花押）○斯波義將

澁河長壽王殿

【遵行狀】右の施行狀を承けて守護等より守護代など代官へ付する狀。これも當事者は必ずしもさうとばかり限定する事はできぬ。

多田院雜掌性妙申、攝津國善源寺庄東方地頭職三郎左衞門入道跡事、去三日御施行如此、嫌文遣之、早任被仰下之旨、沙汰付下地於雜掌、可被全所務之由候也、仍執達如件、

康曆二年六月廿三日　沙彌（花押）

刑部丞（花押）

吉見彈正少弼殿

【打渡狀】渡狀とも云ひ、遵行狀或は施行狀を承けたる守護代など代官から下地（現地）を訴訟人等に引渡す時の狀である。而して請取者からは請取狀を出す例である。（伊木）

攝津國善源寺庄東方地頭職、諏訪三郎左衞門入道跡事、去廿三日任御奉書之旨、多田院雜掌性妙打渡申所也、仍渡狀如件、

康曆二年六月廿七日　沙彌（花押）

地形堂堅丸　ぢぎやうだうかたまる　狂歌師　【姓名】山崎春方。通稱又次郎　【書號】栗園　【生歿】生年未詳、文政六年四月六日大阪に於て客死す。【法名】高專院得翁雲外居士　【墓所】小石川水道端日輪寺　【閲歷】幕府の大番小普請方で、牛込どんど橋際に住し、狂歌を唐衣橘洲（別項）に學んで醉竹側の判者となつた。傍ら書を善くし、寛政年間に出版した「狂歌三十六歌仙」は、堅丸の自書自選で、その他二三の狂歌集を遺してゐる。その弟山崎平三郎は櫻齋と號し、狂歌も詠んでゐたが、別に拇戰の妙手として名高かつた。（野崎）

紙魚室雜記　しぎよしつざつき　隨筆　二卷三册　【著者】城戸千楯　【成立】天保年中の編述か　【諸本】日本隨筆大成卷一所收　【解説】博く國典を讀んで思ひ得た事、その他居常見聞の雅俗事物についての感想等を記したもので、神道・古史・古歌等に關する事が多く、古語を

解釋した項もある。序跋は無い。　【和田】

紫禁和歌草（しきんわかさう）「順德院御集」を見よ。

地口（ぢぐち）　雜俳　【解說】語呂（ごろ）（別項）と共に口合（くちあひ）の一種で、享保頃に始まり、俚諺・俗語等世にありふれた成句に、聲音の似寄つた別句を寄せて、原句と違つた意義の別句を作る一種の洒落（しやれ）、その作法は語呂よりも簡單で、原句と造句と聲音が似通ひさへすればよい。

南無大師遍照金剛（原句）
飲む大酒三升五ン合（造句）
林間に酒を暖めて紅葉を焚く（原句）
玄關に席を改めて口上を聞く（造句）

神社・佛閣などの祭禮に、紙又は布などで張つた掛行燈に畫を描き、それにふさはしい地口を書いたものを軒頭に揭げて地口行燈と稱した。（語呂參照）　【西原】

時雨庵主人（しぐれあんしゆじん）　洒落本作者　【姓名】吉田桃樹。通稱、忠藏又は源藏。字は甲夫【別號】鰲岐・雨岡・時雨園【生歿】元文二年生れ、享和二年（一八〇二）十一月九日歿。享年六十六。【墓所】東京日暮里南泉寺【閱歷】江戸町與力、代々幕臣で、井上金峨に學び、加藤千蔭・村田春海等と親交がある、後、時雨が岡（根岸御行松）に住む。洒落本「百安楚飛」（安永八年）、「風流仙婦傳」（同九年）の著がある。【備考】洒落本作者としての時雨庵主人は果して何人であるか的確には未詳である。時雨庵繪師空言を名乘る一世繪馬屋額輔（別項）は、天明元年生れで、安永年間にはゐない。「風流仙婦傳」の作者の落款に、雞田・文祇とあるが、雞田が姓で文祇が號か不明である。俳人に文祇はあるが山中氏である。依つて玆では最も時代と號との符合した吉田桃樹をそれと推定し、（以下缺）

しぐれの緣（しぐれのえん）「雨やどり」を見よ。

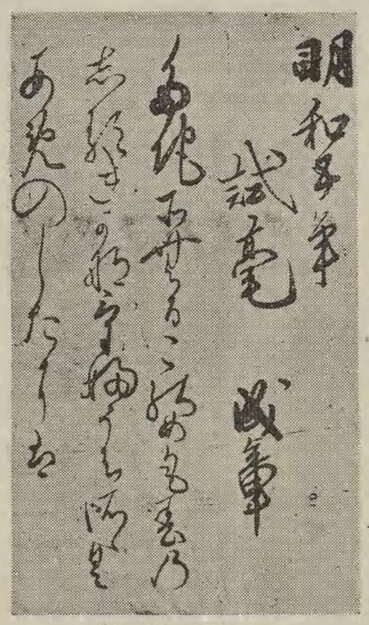
舳艫訓（ぢくろくん）　隨筆　五卷　寫　【著者】伊勢貞丈【名稱】本書開卷第一に「舳艫訓」の一條を置いたので、總題號としたのである。【解說】有職故實、古言の解等凡て考古的の記述を主とする。殊に武家故實、兵具甲冑に係る事が多い。序跋は無い。　【和田】

成章（しげあや）　國學者・歌人　【姓名】富士谷氏。通稱、專右衞門。字仲達【號】層城・北邊【生歿】元文三年京都に生れ、安永八年（一七七九）十月二日歿す。享年四十二【墓所】京都蓮臺寺【閱歷】東福門院の御殿醫皆川春洞の第二子であつて、皆川淇園はその兄に當る。幼にして神童を以て稱せられた。十九歳にして富士谷家の養子となり、その姓を冒した。國史・歌學を修め、最も言語・音韻の說に精しかつた。詠作の和歌は、萬を以て數へられ、諸體具備すといはれる。人と爲り風流溫藉、諸藝に通じ、天文曆學より、雅技吹彈に至るまで能くせざるはなかつた。その子御杖（別項）もまた國學者として名がある。【著作】かざし抄　○あゆひ抄（各別項）　○非成留別志　○大海のはら（百家說林正編下に收む。公卿の逸話集）　○北邊成章家集（別項）　○北邊集　○北邊七體七百首。　【以上森】

【歌風】歌は有栖川職仁親王に師事し、正しく二條派の流れを汲む。舊派であるが、和漢の學に通じてゐて、漢詩をもよくしたと言ふだけに、相應見るべきものもある。

還近の里のタベ　もかはらずよたつる煙の心細さは
風吹けどささぬ板戸は夏の夜の月の寫ともなりにけるかな

（以下缺）



成章筆蹟

とは云へないが、かくの如く時代を分つて研究する事は、また彼に始まつたものである。（二）裝の研究。謂はゆる「裝」とは、動詞・形容詞に當るものであるが、動詞（事（こと）といふ）と形容詞（狀（さま）と云ふ）に分けて、その活用を八段に分けた。この研究は朕及び義門の活用研究に重大な影響を與へたもので、活用研究上特筆大書しなければならぬものである。（四）插頭及び脚結の研究。「插頭」「脚結」と云ふ分類法は、爾後の學界では用ひられなかつたが、一々の插頭・脚結の研究には、今後の學界にも貢獻すべきものが少くない。（五）彼は愚當な材料を以て無理に分析的研究を進めたため、その誤れてその歌風は陳腐軟弱で、智的興味を主としたものが多く、直情を詠むといふ率直さが少なかつた。（北邊成章家集參照）　【以上羅田】

【國語學上の業績】彼は國語學者として劃期的の業績を遺した。（一）品詞の分類。彼は語を「名」「裝」「插頭」「脚結」の四つに分類した。語を品詞に分けて研究することは、實に成章に始まつたのである。この分類法が鈴木朖（あきら）、東條義門（各別項）等に影響した。（二）國語の時代的區分。彼は國語を上代・中世・近古と分け、更に細別して上代から彼の時代までを六期に分けてゐる。この時代區分は、直に妥當た識見と科學的研究法とは、その後の學界に大きな影響を與へてゐる。彼は宣長と同時代の人であるが、門下が發展しなかつたために、名聲は宣長よりも遙かに劣つてゐるが、國語學上の業績は、決して宣長に劣るものではない。

【參考】學界の偉人　西村天囚　【以上羅田】

茂雄（しげを）　歌人　【姓名】竹村爲本。後、茂雄と改む。幼名仙太郎、通稱平右衞門【號】穗向屋【生歿】明和六年二月に生れ、弘化元年（一八〇四）十二月十三日歿す。享年七十六。【閱歷】茂雄は伊豆國君澤郡熊坂村（今、田方郡修善寺村）の豪農であるが、年二十七の時（寬政七年）、本居宣長の門に入り、伊勢に赴いて歌文を學んだ。後、江戸へ出て村田春海にも學んだ。清水濱臣・狩谷棭齋・高田與清（各別項）・三井高蔭等は、友として親交があつた。【著書】歌文に關するもの十餘種ある。○穗向家集四卷（弘化二年刊。茂雄の歌文集　一二卷は近體の歌、三卷は古體の歌及び長歌、四卷は文章。殿村安村の序がある）　○園圃の拔萃二卷（弘化二年刊。井口嘗直の跋がある。「詞の園圃」の拔萃である）　○詞の園圃百二十卷（雅言を俗言で解いた辭書で、大體五十音順に語を排列してある）　○ちまたのぬきほ一卷（詠歌の參考書としての辭書であるが、假名遣・手爾波等の事をも記してゐる）　○萬歌類題三卷（寫本、以下同じ）　○職田ぬきほ二卷　○石上陳石三卷　○鷹三百首解二卷　○賤の敏鎌一卷　○宮柱日記一卷　○學校賢傳辨一卷　○王代略誦一卷等。　【羅田】

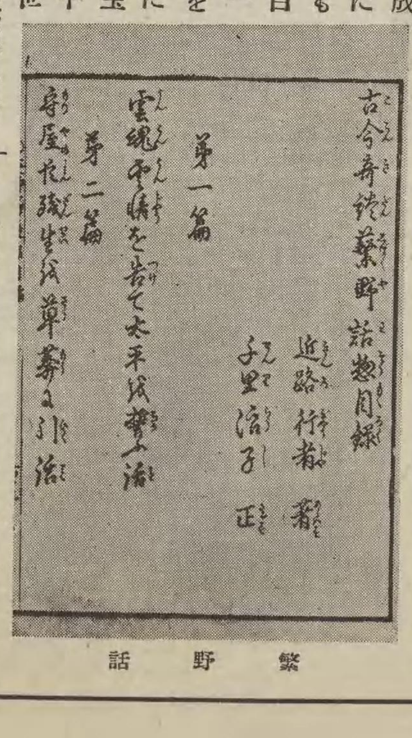
茂岳（しげを）　國學者　【姓】植松。本姓、小林氏。【通稱】幼名秋作・政・住右衞門【號】四

不知【生没】寛政六年名古屋に生れ、明治九年三月二十日歿。享年八十三【墓地】尾張國愛知郡高田村【閲歴】尾張藩士小林和六の二男に生れて、植松有信の養子となつた。本居大平に學んだが、長じて藩校明倫堂の教授となり、命を受けて「尾張志」の編纂、「古事記」「六國史」等の校合に從事し、時に藩主慶勝に進講し、後、世子義宜の侍講に擧げられた。安政五年慶勝の幕譴に坐して減祿謹愼を命ぜられ、五年を經て文久二年に許された。明治維新の後、なほ藩校に教へ、明治三年致仕、同七年には宮内省の召によつて上京し、御題を詠進した。同三十六年從五位を追贈さる。子に有經がある。【人物】尊王愛國の念が深く、國事に盡瘁するところ多かつた。その進講の際にも、面を擧げ、藩主を直視して道を說いたと記されてゐる。【著書】天說辨一册（平田篤胤の三大考辨々の說を駁す）○上京日記一册○松蔭集。【參考】日本教育史資料五文部省總務局編○名古屋市史學藝篇名古屋市役所編○贈位諸賢傳

〔森〕

繁千話（しげしげわ） 洒落本 一册 【作者】山東京傳【畫工】自畫【名稱】洞房妓談と角書がある。讀本「繁野話」（別項）のもぢり。千話はいろいろの話と痴話とをかけたのである。【刊行】寛政二年【諸本】洒落本代表作集（近代日本文學大系）所收【題材】本書には、支那の俗語が多く用ひてある。姝妓・雛妓・丫鬟・老杉板・情頭・梳櫳・小解の類である。蓋し作者は前年「通俗大聖傳」を發表して孔子傳を綴つた位であるから、當時支那小說の研究に凝つてゐたためであらう。又當時一流の通人藝人の名をあげてゐる。例へば向島の權三、中田屋文藏、觀世方の囃し、文魚、蘭阿、住太夫等である。この手法は後世の人情本に及ぼしてゐるものである。【梗概】茶屋の息子正助を捉へて、番頭新造菊咲、辯舌滔々として梶の葉の客五節が、他の遊女あやめと諍あるに由つて、二階を留めねばならぬ（登樓を斷る意）と論ずる。後は笑ひになつてしまふ。中三女郎で一二を爭ふ全盛の空琴、新造買ひの客と諍があり、下座敷に入れ置き密に逢ふ。今夜座敷に客のある外、茶屋の義理で初會の客をとる事が知れ、その情人大に腹立ちつき倒し打つ。空琴泣き聲で辯解するが聞かぬ。情人はもとの色客と逢ふのであらうと云ふ。結局そんなに疑ふなら隣の部屋にその初會客を入れるからよく樣子を見てくれと云ふ事で妥協が出來た。かくとも知らぬ半可通の馬骨、この家の空琴が手のある遊女と聞き傳へ、我こそ迷はせてやらうと云ふ意氣込みで來た。馬骨が座敷の仕打、胸の惡い事許り故、空琴は始終無言でツン〳〵して出て行つた。やがて空琴の賴み通り、馬骨は彼の情人の隣室に入り皆々歸る。彼一人床の上に待つてゐる。折柄空琴が來る。隣室からは情人と新造が覗いてゐる。馬骨は得意になつて當時有名な人の名を列べ、さも心安いやうに話す。空琴「もしえ、池の端の錦丹さんなんぞは定めしお近付だらうね」と聞く、馬骨定めてこれも通人の名と心得、「心安いのサ」と答へる。空琴の尋ねる人を馬骨は皆知つてゐると返事をする。最後に、「魚街さんはえ」「あれは又兄弟同然サ」と聞くと空琴は、ものも言はず立つて出て行く。番頭入れ換つて來り、魚街は空琴の久しい客なれば、知人には出難しと斷つて出て行く。今更實は知らぬ人だとも言はれず、後歸して夜が明けるを待つ。【構想】數多く洒落本を出した後なので、趣色に變化を與へようと苦心をした痕がよく見える。人物はすべて洒落本の類型的人物を出でないが、筋には大に採るべき所がある。殊に警喩に至つては、口の惡い都會人の作者だけに、實に警句に富んでゐる。

繁野話（しげしげわ） 讀本 五卷六册 【作者】近路行者（ちかみちのゆきもの）【名稱】古今奇談英草紙後編（ふるいまのめずらしきはなぐさ）と角書がある。作者が前に出した「英草紙」（別項）を繼ぐの意で、序に「華房の枝葉しげ〳〵なる野話なれば」とある。【刊行】明和三年。序文には明和乙酉（二年）の冬とある。【諸本】有朋堂文庫・怪談名作集（日本名著全集）等所收【題材】作者自ら序の中に、「紀の關守が靈弓（たつかのみやのたましひ）」旦白鳥に化する話」は、「千束弓の故事に任氏の傳奇を繫ぎ」とて唐代の小說、沈既濟の「任氏傳」に據り、「今昔物語」の「人妻化成弓後成鳥飛失話」、一に「たつか弓」の名によつて知られ、「詞林采葉抄」にも見える話を參照してゐる。また「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」は、「白菊の卷は白猿梅嶺の舊趣を假り」、また唐代の小說「白猿傳」に據り、「江口の遊女薄情を恨て珠玉を沈る話」は、「江口の始終は杜十娘を飜し」、且つ明代の小說「警世通言」、また「今古奇觀」の「杜娘怒沈百寶箱」に據る事を明かにしてゐる。多く支那小說の飜案で、併せて我が古傳說・古典籍を參酌してゐる。



繁野話

【梗概】〔一編〕難波の天王寺に泊つた或る僧、一夜有名な雲水塔に登り、秋涼の月朧に世を距つた心地し、興を催して眠ると、塔の頂に古の御代になつて、厩戸皇子は嗣位の太子として政を攝る。佛教は時を得て興り、疫病もなく五穀も豐かに、太子の仁政は國を化し、惠は死骨にまでも及んでゐると傳へられ、守屋は歡喜して國の事は忘れ、百歳までも生存した。死後その遺託により神に祀られたと傳へてゐる。〔三編〕昔紀州雄の山の關守山口庄

司次郎は、代々射て中らぬことのないたつか弓と稱するものを寶藏し、狩獵を好んだが、一族の妻女小蝶に迷ひ、殺生を止まることを誓はせられる。小蝶實は狐で、その後庄司が誓を忘れ再び弓を取らうとするので、日頃殺生を戒めて他人にも說諭してゐる和泉の舊族登美夏人にその寶弓を與へる。夏人は夢に永く連添うた妻が別れを告げ、記念として弓を得た。或る時その弓が白鳥となつて飛び行くので、あとを追うて紀の境に到り、もとの弓となつて手に歸つたが、雄の山の關の侍に笞められる。その弓こそたつか弓で、靈あつてか他家に止まらず、自ら飛んで庄司に返つた。かの雄の山の關を白鳥の關とも呼ばれるのはこの謂れによるといふ。〔四編〕貞治應安の頃、勢州多度の鄕に櫻崎左兵衞とて、楠判官が湊川を逃れて變名してゐるものだと噂されてゐる士があつた。或る日、もと官軍の士宇田次郎といふ者が、この世上の取沙汰疑ひなしと、南朝回復の事を計るが、靜平の世、兵を用ふれば大人は德を害ひ、小人は必ず凶なりと說諭される。併し既に大事を口外した宇田は、山伏姿となり、中津川に舊友赤松則祐入道を訪ひ、義兵を擧げることを薦めるが應ぜられず、匹夫の志とさへ言はれ、却つて入道に殺される。赤松はその志を憐み塚を築かしめた。時の人これを山伏塚と呼んだといふ。〔五編〕清和天皇の時、三須守廉といふ者が信濃掾となり、妻女白菊を具して木曾の深坂にかゝると、變化極りなき怪物が白菊を奪ひ去り、懷けようと思慮を廻らし、言葉巧みに說き誘ふが白菊は身を汚さない。守廉は妻を飛騨信濃の山中に探すこと三年、或る日經覺の床に三伏老人といふ翁に封を開く。道人また彼のために法力を施すと、忽ち雷鳴起り遂に變化を擊殺し、白菊は逃れて守廉と再會の喜びを得た。守廉はなほ山深く入つて岩窟で異形の獸の首を切り、本國備中に持ち歸つた。白菊の方は魔難を恥ぢ、その首を館の後に懸けて日々これを射て三年の間恨みをもらしたといふ。〔六編〕明人素卿、妻子を棄てて日本に亡命し、文筆を以て富貴を得、足利義植より唐への使の案內役となり、二兒を携へて行く。一日故鄕に歸り、嘗てのこした二人の男子に對面した所、共に日本に渡らうとするのを、和國の兩子と共にやう〳〵留め置き、哀しき別れをなした。素卿は機智を以て龍遇舊に優つたが、その後再び信使に添へられ、市舶の大監に賄した爲めに亂が起つたので、私通の罪を以て死刑に行はれ、機智あつて愼なき者の誡となつた。さりながらその親子別離の情は、諸曲「唐船」を見る者の今に心を傷ましむる所である。〔七編〕醍醐帝の御宇、若狹國高懸山に妖賊棲み、これを攻むるも賊主眉鱗王妖法を修し、百千の兵も刃向ふことが出來なかつた。然るに朝廷の軍勢の中に、望月太郎・同次郎・同三郎の兄弟があつた。季の三郎兼舍は、計を以て眉鱗王を生捕るので、太郎・次郎はその功を妬み、龍窟に誘ひ不意に突落したが、不思議にも龍窟の主に助けられて都に上り、舊領に歸され、又二人の兄は自ら恥ぢて身を隱したので、その有をも併せて家を相續した。〔八編〕昔、江口の遊女白妙は名妓の聞え高く、小太郎といふ者と深く契つた。岸の惣官成雙に請うて身請して貰つたが、小太郎は親許に歸る便りもなく、周防の室積で旅費に窮し、海賊に謀られ、家の重寶と女とを換へる。白妙は密かに調へし金銀珠玉を海に投じ、その薄情を憤つて水中に躍り入る。その後成雙の前に白妙現はれ、嘗て小太郎との仲を計らつてくれた恩返しに寶貨を以て酬いる。成雙は供養して幽魂を慰めた。〔九編〕南朝尹良親王の御子良王は、尾州津島大橋某の迎を受けて、途上尹良親王に討たれた飯田・駒場の一族に襲はれるが、宇佐美・宇津宮の軍配により計略を以て凱陣し津島に參る。然るに程近き佐屋といふ所に臺尻大竹といふ者があつて、多年津島を手に入れようと思つてゐたが、遂に駒場・飯田の助けを得て、彼の島の祭禮に諸士の船遊びに出たのを窺ひ、不意に城を襲うたが、船にあるはずの宇佐美・宇津宮が現はれて大竹を討死せしめ、臺尻の船を取りかこんで悉く海に斬り沈め、この機に乘じてその城をも衝き、南朝の餘威を示した。

【構想】「英草紙」と軌を一にする手法と態度とを以て飜案したものが多い。奇構を主として敎訓的に取扱ひ、半ば支那を離れながら半ば支那を殘し、人物・事件をすべて我が史實に取つて脚色したのに變りはないが、史上の疑問を主題として獨自の見を寄せ、英雄の末路等に對して一種の臆說等を以て民衆心理に迎合しようとし、又古傳說を以て改作するに、怪婚說話・動物說話を用ひて脚色し、蠱惑の情調を綯ひまぜようとしてゐる。【史的地位】「英草紙」刊行後、怪異小說は決して少くなかつたが、凡そ「百物語」の系統を追ふもので、讀本としての要素と色調が認められる「英草紙」の新味は見當らない。後、十七年を距てて本篇が出た。初め支那の色調が累をなし、後、支那流行の時世となつて、漢意を帶ぶるがために迎へられたのではなからうか。作者が殊更に序にその據る所を明かにしてゐるのも、支那にゆかりをつけようとしたもののやうである。この作以後の怪異小說は、正しく一縷の脈を引いて後代に流れ、「雨月物語」が現はれて遠く「英草紙」と相呼應した。「繁野話」が「英草紙」と並稱されるのも後代に影響することの多いためである。【價値】作品としての價値は一に構想の上にある。讀本としての要素及び色調は、「英草紙」に比してやゝ多きを加へると同時に、史上の疑問をかりて獨自の見を寄せる事がなほ多くなり、また人と狐との契を敍し、或は通力を得た猿の橫暴等の怪婚說話・動物說話等を以て脚色し、怪奇の情調が全篇を蔽つてゐる。その文章は「英草紙」に比して漢文脈が少く、讀本の文章の一新體の完成に一層近づいてゐる。併しこれも讀本の源流として史的に重きをなすもので、凡そ「百物語」の系統を追ふ作物中にあつて、同じく怪異小說に屬しながら讀本の一體をなし、「英草紙」と共に「雨月物語」等を誘發し、後の江戸の讀本を生み出す動因ともなつた。〔笹野〕

【參考】讀本の發生 山口剛（文學思想研究第四）

重胤（しげたね） 國學者【姓名】鈴木氏、初名雄三郎、通稱勝左衞門【號】橿廼家【生歿】文化九年、淡路國津名郡仁井村に生れ、文久三年（一二五二三）八月十五日江戸に歿す。享年五十二【墓所】市ヶ谷長延寺【閱歷】鈴木勝左衞門重威の次男、父の庭訓により皇典の講究に志し、本居宣長の學說に傾倒し、天保二年平田篤胤の門に入り、更に大國隆正に就いてその說を聽いた。天保十五年以後は、江戸に住し、講學の傍ら、著述に從事した。その間にも諸國を周遊し、九州にも四度到り、京都にも上り、各所に道を說いた。然るに幕府のために廢帝の事實を調べたといふ寃罪の下に、晩從に襲はれて非業の死を遂げた。しかし廢帝調査の事は事實無根であつた（樹下快淳氏研究に據る）。大正八年、正五位を追贈せられた。【著作】日本書紀傳百四十四卷〇祝詞講義二十三冊〇中臣壽詞講義六冊〇世繼草一冊〇經緯歌一冊〇詞の捷徑五冊〇和歌初學八冊〇近世名家歌集七冊。その他その稿本の存するもの七八十種、こゝにはただ刊本のみを擧げた。〔以上森〕

【批評】重胤の神道說は、皇道を以て大道となし、儒佛の如きは私道私敎で何人も眞に實行

【名稱】流祖豐美繁太夫の名に據る。【沿革】流祖繁太夫は、豐後節の祖初代宮古路豐後掾（別項）に入門して宮古路繁太夫といひ、元文・寬保頃一流をなし、大阪島の內を中心として行はれた。寬保の末に姓を豐美と改め、當時歌舞伎に出勤して、「葛の葉道行」「井筒業平道行」「薄雪姬道行」などを語つて好評を博し、その門下には、豐美藤太夫・同繁七等があり、三絃方は主に民尾（富澤とも）正助が勤めた。尤も座敷淨瑠璃が主であつたらしいが、兎も角一時は相應に流行した。

川連堤燈のサワリ）、「三勝」（三勝玉子酒と同じ）、「三吉子別れ」（戀女房染分手綱の一節）、「時雨の松」「妹背の秋草」「竹の雪」「沖中川」等。【地唄との關係】斯流が地唄の中に移植されたのは寶曆の初め頃で、上方唄を能くした鶴山勾當が自ら好んで語り、又自らも作曲して大に努力したのによる。勾當は寶曆の末頃、江戸吉原へも下つて宣傳に努め、同十二年に彼が上方唄の歌曲集として上梓した「泉曲集」（淺草小松屋吉十郎刊）の中に、繁太夫物は「梅の

てある。

梓月（しげつ） 俳人【姓名】粗山仁三郎【別號】江戸庵【閱歷】明治十一年東京に生る。慶應義塾に學んだ。日本派の俳人で、子規の生前早く句作に入り、又俳書堂を開いて俳書の刊行飜刻に努め、俳諧雜誌を發行した。現今は時事新報社員として傍ら句作をなしてゐる。その作は明快で美しい。「遲日」「伊香保日記」「鎌倉日記」「連句入門」の著がある。〔水原〕

重遠（しげとお） 神道家【姓名】谷氏。本姓

に、墓後に營はれて非業の死を遂げた。しかし歴史調査の事は事實無根であつた（樹下快淳氏研究に據る）。大正八年、正五位を追贈せられた。【著作】日本書紀傳百四十四卷○祝詞講義二十三册○中臣壽詞講義六册○世繼草一册○經緯歌一册○詞の捷徑五册○和歌初學八册○近世名家歌集七册。その他その稿本の存するもの七、八十種、こゝにはただ刊本のみを擧げた。【以上森】

【批評】重胤の神道説は、皇道を以て大道となし、儒佛の如きは私道私教で何人も眞に實行する能はざる道であるが、この大道は如何なるものも能く行ひ得、又行はざるべからざる道であるとし、孝德天皇御紀に「惟神者謂ㇾ隨ニ神道一亦自有ㇾ神道ㇾ也」とある如く、「皇祖天神の御規則卽天下公正の大道にして、隨神道とは此に因准するを云ふなり」（同上）とした。かくて彼は、頗る包括的な神道を説いたのである。蓋し彼は儒教そのもの、佛教そのものとしては、これを排斥したが、而も普天の下悉く皇御孫命の皇土にあらぬはなく、萬國の聖哲悉く皇御孫命の王臣にあらぬは無ければ、萬國に行はるゝ道卽ち我が大道なれば、惡しきを棄捐てその善を採用むに何でふ事かあらむと云ふ主義に立つて、世界の總ての道に就き長を取り短を補ひ、以て神道を説かんとしたのである。而して彼の説は、或は高天原を以て太陽と解し、又は天極紫微宮と解し、その他動説を古傳とせるが如き深く篤胤の説に私淑し、篤胤の説を取り、更に大に取長補短の主義を以て極めて雄大なる學説を構成せんと努めたものであつた。【以上田中（義）】

【參考】鈴木重胤の眞人物　樹下快淳

繁太夫節（しげたいふぶし）　淨瑠璃の一流派

【名稱】流祖繁太夫の名に據る。【沿革】流祖繁太夫は、豐後節の祖初代宮古路豐後掾（別項）に入門して宮古路繁太夫といひ、元文・寛保頃一流をなし、大阪島の内を中心として行はれた。寛保の末に姓を豐美と改め、當時歌舞伎に出勤して、「葛の葉道行」「井筒業平道行」「薄雪姫道行」などを語つて好評を博し、その門下には、豐美藤太夫・同繁七等があり、三絃方は主に民尾（富澤とも）正助が勤めた。尤も座敷淨瑠璃が主であつたらしいが、兎も角一時は相應に流行したものと見える。然るに繁太夫の歿後（生歿年未詳）、優秀な門下を得られなかつたのと、保守的な語り口が時代の好尚から離れ、京都から進出した宮薗・正傳（薗八節參照）等の一派に壓倒されて、流派としては一代で滅亡した。爾來數寄者と一部の愛好者とにより、辛うじて地唄の手によつて今日まで傳承せられたのである。【曲節】豐美の繁太夫節は既に寶曆末頃には廢滅してゐると見られるので、その純粹の曲節を知ることは不可能であるが、同じ流れの薗八や大和路等と樂曲の組成に於ては大差がない。現今の地唄化された繁太夫節は、薗八節（別項）などよりも淨瑠璃味が稀薄であつて、その聲調、その音色等、すべて聲者化されてゐるが、而もなほ地唄の中に繁太夫物として、その流儀を偲ぶべきものがある。【傳存曲】豐美繁太夫からの語物の傳はつてゐるのは僅か數曲に過ぎないが、地唄の繁太夫物として現存する主なるものは、「名殘の橋盡し」（天の網島道行）、「梅の由兵衞道行」（茜染淨名色揚）、「薄雪姫道行」（新薄雪物語）、「お房德兵衞」、「小さん金五郎」（宮古路豐後掾の語物と同文）、「河庄」（紙治茶屋場）、「小春髮梳」、「千鳥」（平家女護島の一節）、「帶屋」（桂

【以上田中（義）】

【參考】鈴木重胤の眞人物　樹下快淳

繁太夫節（しげたいふぶし）　淨瑠璃の一流派

【名稱】流祖繁太夫の名に據る。【沿革】流祖繁太夫は、豐後節の祖初代宮古路豐後掾（別項）に入門して宮古路繁太夫といひ、元文・寛保頃一流をなし、大阪島の内を中心として行はれた。寛保の末に姓を豐美と改め、當時歌舞伎に出勤して、「葛の葉道行」「井筒業平道行」「薄雪姫道行」などを語つて好評を博し、その門下には、豐美藤太夫・同繁七等があり、三絃方は主に民尾（富澤とも）正助が勤めた。尤も座敷淨瑠璃が主であつたらしいが、兎も角一時は相應に流行したものと見える。然るに繁太夫の歿後（生歿年未詳）、優秀な門下を得られなかつたのと、保守的な語り口が時代の好尚から離れ、京都から進出した宮薗・正傳（薗八節參照）等の一派に壓倒されて、流派としては一代で滅亡した。爾來數寄者と一部の愛好者とにより、辛うじて地唄の手によつて今日まで傳承せられたのである。【曲節】豐美の繁太夫節は既に寶曆末頃には廢滅してゐると見られるので、その純粹の曲節を知ることは不可能であるが、同じ流れの薗八や大和路等と樂曲の組成に於ては大差がない。現今の地唄化された繁太夫節は、薗八節（別項）などよりも淨瑠璃味が稀薄であつて、その聲調、その音色等、すべて聲者化されてゐるが、而もなほ地唄の中に繁太夫物として、その流儀を偲ぶべきものがある。【傳存曲】豐美繁太夫からの語物の傳はつてゐるのは僅か數曲に過ぎないが、地唄の繁太夫物として現存する主なるものは、「名殘の橋盡し」（天の網島道行）、「梅の由兵衞道行」（茜染淨名色揚）、「薄雪姫道行」（新薄雪物語）、「お房德兵衞」、「小さん金五郎」（宮古路豐後掾の語物と同文）、「河庄」（紙治茶屋場）、「小春髮梳」、「千鳥」（平家女護島の一節）、「帶屋」（桂

【以上田中（義）】

【參考】江戸時代音樂通解　町田博三○豐美繁太夫と繁太夫節に就いて　秋葉芳美（上方一七）　【秋葉】

詩訣（しけつ）　漢詩　一卷　【著者】祇園南海　【刊行】天明七年　【解説】漢詩について初學者のために論述したもの。詩法雅俗辨、古風近體同異等の目につき、古詩を引いて評論してある。

梓月（しげつ）　俳人　【姓名】鈴山仁三郎　【生歿】【號】江戸庵　【閲歴】明治十一年東京に生る。慶應義塾に學んだ。日本派の俳人で、子規の生前早く句作に入り、又俳書堂を開いて俳書の刊行繙刻に努め、俳諧雜誌を發行した。現今は時事新報社員として傍ら句作をなしてゐる。その作は明快で美しい。「遲日」「伊香保日記」「鎌倉日記」「連句入門」の著がある。【水原】

重遠（しげとほ）　神道家　【姓名】谷氏。本姓大神（おほみわ）。通稱丹三郎　【號】秦山　【生歿】寛文三年三月十一日土佐に生れ、享保三年（一七一八）六月歿す。享年五十六　【墓所】高知縣長岡郡山田村　【閲歴】祖は大和三輪の谷より出づ。故に大神姓で、谷を氏とした。父は重正といふ。重遠は生來强記絶倫、夙に高知に出て儒學を學んだが、延寶七年京師に上り、闇齋の門に入る。闇齋はその才を奇として厚くこれを導いた。歸國後も益々學を勵んだ。元祿十五年藩主に招かれたが、仕官幾ばくもなく、上書して再遊を許された。當時闇齋は既に歿してゐたので、淺見安正・齋藤直方等に就いて朱子學を學び、更に澁川春海に接して、神道の祕奥を極めた。歸藩の後重用されたが、藩主の歿後寃罪を蒙り、歿するまで遂に門を出でず、學業に努めた。【著書】神代卷鹽土傳○保建大記打聞○中臣祓鹽土傳○秦山集等　【批評】秦山は垂加流の神道を奉じたが、その説は大に進歩的である。闇齋の垂加の號は、蓋し吉川惟足の神道五部書（別項）によつて選んだものであつて、從つてその一派はこれを甚だ重んじた。然るに秦山はこの五部書に就いて、「垂加門人皆五部書を重ず。內宮これを取らず。和姬世紀、天下和順の語、淨土經の文

也。その他佛語を用ふること甚だ多し。蓋し習合の書也」（槎山集）と言つてゐる。以て一斑を知るべきである。〔田中（義）〕

重年（しげとし）　歌學者　【姓名】小國秀穗、通稱鈴木豐前　【生歿】明和三年四月十二日遠江國周智郡宮代村に生れ、文政二年（一四七九）一月七日歿す。享年五十四。　【家系】重年の家は、宮代村小國神社の社司である。父を貞實といふ。重年は日坂宿八幡の神主、朝比奈家をついだ。　【閲歴】十五六歳の頃（天明の初頃）同郷の内山眞龍に就いて、古學・漢學及び佛書の數を受けた。寛政元年二十四歳の時、松坂に出でて宣長の門に入つた。そこで五年の歳月を勉學にすごし、寛政五年郷里に歸つて家を繼いだ。重年には子なく、歿後、三河國六所神社の神主大竹家より男子重則を迎へて嗣とした。重則の子重友には「長歌百人一首」の著書がある。【著書】長歌詞之珠衣（別項）〇學草千々の故よし。　【業績】「長歌詞之珠衣」の成つたのは、享和元年、重年三十六歳の時である。眞淵によつて、古風にならつて長歌を作ることが始められてから、長歌を作るものがやうやく多くなつて來た。その時にあたつて、萬葉・記紀の長歌の歌格を分明にし、創作に便ならしめようとしたのが、この書である。歌格の研究は眞淵に端を發し、宣長がこれを繼承した。そしてこの「詞之珠衣」は、その系統上にあるものであるが、歌格特に對句を對象において、精細に組織的に研究したのは、重年に始まつてゐる。重年は對句の立場から「萬葉」の主なる作家の批評もしてゐる。〔羅田〕

【參考】日本歌學史　佐佐木信綱

戊申（しげのぶ）　國語學者　【姓名】鶴峯氏。通稱和左治・右京・彦一郎。字は世靈・孝尼　【號】皐舍・海西　【生歿】天明八年豐後國臼杵に生れ、安政六年（一八五九）八月二十四日江戸本郷駒込水戸藩邸にて病歿。享年七十二。　【墓所】小石川傳通院内緣授院　【學統】年少の頃鄉里に於て武藤吉得に從つて和漢の學を修む。十七歳、京都に出でて綾小路俊資に和歌を學び、又陰陽頭安倍氏の家塾にも通つた。十八歳の時には有職故實に精しかつた山田以文の門に入つた。この他、師は明かでないが、蘭學・悉曇・韻學等をも學んでゐる。　【閲歴】父宜綱は臼杵の鄉社八坂神社の神主である。戊申は十七歳（文化元年）から二十九歳まで京都にゐて諸種の學を修め、同年冬大阪に移り、門戸を開いて子弟に教授した。又奈良郡山・伊丹・西宮・紀州粉川等に於て講義をなし、和歌山に本居大平を訪ねた事もある。天保三年（四十五歳）正月三河で講義をなし、八月江戸へ出で、爾後江戸を中心に桐生・足利・館林・富田・忍等で講義をしてゐたが、天保九年（五十一歳）水戸烈公に謁見し、爾後その知遇を得、安政三年十二月遂に水戸の藩士となり、金一枚三人扶持を受ける事となつた。時に六十九歳である。　【著書】〔國語學關係のもの〕語學窮理九品九格總括圖式一鋪（文化十三年刊）〇語學新書（別項）二卷二册（刊）〇鍥木文字考一卷（一名「神代文字點畫考」）（天保九年成。刊）〇嘉永刪定神代文字考一卷（嘉永元年成。刊。「鍥木文字考」を刪定したもので神代文字の研究）〇詞遣十卷（一名「詞遣眞檜抄」「詞の小車」）（用言に關する研究）。この外、詞餘一卷、助字用格一卷、助字頌一卷、增正誤かな遣一卷、皇朝學語考、戊申雜稿、等がある。〔羅田〕

通一卷、九弄口授記一卷等がある。　【國史に關するもの】異稱風土記二卷〇天御柱一卷〇天御柱考證一卷〇和漢軍談紀略大成一卷〇古義神代考一卷〇下總國輿地全圖一卷〇安房國全圖一卷〇古傳說遺事集成十卷等。　【詩歌に關するもの】平仄便覽二卷〇雜字便覽二卷〇詩文類語一卷〇武家三十六人一首一卷〇中橋雜詠〇燼餘詠草〇燼餘草稿等。　【雜】中大將碁絹篩一卷〇徵古新說二卷〇徵古新說窮理頌二卷〇新式算法〇籌式便覽等。　【業績】戊申は博學多才で、生涯の大半は講說をしてゐるが、その講說は聽衆に依つて、或は日本古典文學、或は和歌手爾波、或は漢詩文、或は天文曆數、或は音韻、或は蘭學、或は西洋窮理の學、或は日本古代史等を講じてゐる。卽ち戊申は、一面から言へば頗る博學多通であるが、一面から言へば雜學で、これといふ專門も無かつた人である。が、學術上の業績は、國語學上のそれが最も大である。　【國語學者として】戊申は、手爾乎波語格にも通じ、又蘭學にも通じてゐたが、遂に和蘭文法の組織に則つて國文法の書を著はした。「語學窮理九品九格總括圖式」一鋪（「語學新書」參照）及び「語學新書」（別項）二卷がこれである。これ等の書は當時の蘭學者、殊に「和蘭語法解」から直接大きな影響を受けたものと認められるが、從來の國語學者の手に成つた手爾乎波語格の書とは、全然組織を異にしたものである。併し戊申自身は專門の國語學者でなかつたからでもあり、又始めての試みであつたからでもあるが、その法則は國語の性質に合はないものが多く、又その分類は煩雜で矛盾が多い。本書の說は新奇に過ぎたからでもあらうが、當時餘り行はれなかつたやうである。

併し明治以後の國文典は、殆どすべて西洋文典の組織に則つたものであるが、本書はその先驅をなしたもので、その點に於て戊申の卓見を認めねばならない。なほ戊申は文法の敎授に於て、假名遣・語格等に故意に誤つたものを提示してこれを訂正せしめ、また類似の語を擧げて彼此對照して敎へる等、進歩した方法を用ひてゐた。　〔羅田〕

【參考】鶴峯戊申吉丸一昌（言語學雜誌一ノ六）

地下派（ぢげは）　和歌　【解說】堂上派（別項）に對立する名稱であつて、近世初頭細川幽齋から古今傳授を受けた松永貞德を始祖とし、一般庶民の間に傳承された歌道の一流派である。卽ちその奉ずる歌學說は傳統的な二條家（別項）の歌學であり、自由研究、傳統打破を基調として元祿頃より勃興して來た近世新派の運動に對しては、等しく幽齋の流れを汲む堂上派と共に舊派の位置に立つものである。併しながらその詠風に於て連歌から影響されて幾分の俳諧味があり、堂上派に比して比較的自由清新の氣の認められることは否まれない。同時に從來貴族を中心とする上層階級の專有物であつた和歌を一般民衆の間に弘め、元祿以降、近世新派の活躍すべき素地を作つた功は沒することは出來ない。今貞德を祖とする地下派の系統及び主要人物を擧ぐれば、先づ歌人としては宮川松堅・望月長孝・元政等があり、長孝の門より平間長雅、長雅の弟子に有賀長伯、長伯の門に辻經長・加藤景範・川井立牧等出で、又長伯の血を引いて長因・長敬などが聞えてゐる。次に歌學者或は註釋者として加藤盤齋・北村季吟の二人が現はれ、秀吟の子湖春、孫湖元、湖元の曾孫季文等が名を聞えてゐる。又堂上歌人飛鳥井雅章に學んだ

香川宣阿も近世中期に於ける地下派の歌人として知られて居り、その曾孫景柄は桂園派の祖香川景樹の養父であつた。

【參考】日本歌學史　佐佐木信綱〇近世和歌史同上〇大日本歌學史　福井久藏　〔中島〕

重盛諫言（しげもりかんげん）　「牡丹草平家譚」を見よ。

重之（しげゆき）　歌人（三十六歌仙の一）　【姓】源　【生歿】生年未詳、長保年中陸奥に歿す。或

【參考】歌仙傳〇尊卑分脈　〔西下〕

重之集（しげゆきしふ）　歌集　二卷又は一卷　【傳本】（イ）群書類從卷二五一所載本、（ロ）歌仙歌集本、（ハ）圖書寮所藏本重之集、（ニ）同寮所藏本源重之集等がある。　【解說】歌の數は（イ）二一七首、（ロ）二七九首、（ハ）二一五首、（ニ）凡そ一六二首である。（ロ）は（イ）と比較して

あとをつぎて異なる歌よみなり」とある。

順序がやゝ異り、卷末には百首がある。（ニ）は「清少納言集」と合册となつてゐるが兩集に錯簡がある。順序は（イ）と比較して大に異り卷頭に百首があり、次に（イ）の上卷の終、下卷の終、上卷の始がある。奥に正應五年十一月八日書了藤資經とあり、「清少納言集」の奥に永仁元年八月廿一日書了藤資經とある。以上四本は歌の數に相違がありながら大部分が共

は許さない。貞德も亦入選を勸めたけれど、重賴聽かず、餘りに我意を立てたので、貞德も氣色を損じ、今後出入は無用であると云つて破門したといふ說を傳へてゐるが、「犬子集」に「螢火は河の瀨中の炎かな」の句があつて、而も作者は孝時（伊勢山田の人）であるから、この說は信じ難い。ただ「犬子集」撰集に當つて重賴と立圃と不和となり、貞德を遠ざかるに

香川宣阿も近世中期に於ける地下派の歌人として知られて居り、その曾孫景柄は桂園派の祖香川景樹の養父であつた。

【參考】日本歌學史　佐佐木信綱〇近世和歌史同上〇大日本歌學史　福井久藏　〔中島〕

重盛諫言　「牡丹草平家譚」を見よ。

重之　歌人（三十六歌仙の一）【姓源】【生歿】生年未詳、長保年中陸奥に歿す。或は長保二年（一六六〇）といふ。【家系】兼信の子、兼忠の嗣となる。ためきよ・むねちか（又はむねきよ）の二子があり、歌人の女もある。【閲歴】初め帯刀先生であつたが、康保四年冷泉天皇御即位によつて左近將監に轉じ、從五位下に叙し次いで相模權介、天延三年左馬助、貞元元年相模權守に任じた。嘗て駿河守在任中の兼盛と歌を贈答してゐる。正暦二年から長徳元年まで大貳在任中の佐理の許に下り、佐理が高貴の仰せによつて書いた手本の歌を詠んでをる。又「實方の君の許にみちの國に下る」（家集）とあるのは、實方が陸奥守に任じた長徳元年以後であらう。陸奥にて子を失つたとあるから家族をも率ゐて下つたやうであるが、何の目的で下つたのか明瞭でない。家集には實方以外の陸奥守の名が見えてゐる。帯刀先生の時東宮の仰せによつて百首の歌を奉り、左馬助の時、播磨に行き好忠と共に但馬に行つたことがある。又濟時に名附を奉つた（家集）。【作品】家集「重之集」。勅撰集に入る歌は拾遺十三、後拾遺十四、詞花集以下凡そ三十九首、合計凡そ六十六首。なほ玄々集に五首見える。【作風】情感が表現の隅々まで豊かにゆきわたつてゐる。餘裕のある氣持で、すべてのものを美しく且つ穩かにながめてゐる點が特色である。「八雲御抄」に、「昔のあとをつぎて異なる歌よみなり」とある。〔西下〕

【參考】歌仙傳〇續古今分脈

重之集　歌集　二巻又は一巻【傳本】（イ）群書類從巻二五一所載本、（ロ）歌仙歌集本、（ハ）圖書寮所藏本重之集、（ニ）同寮所藏本源重之集等がある。【解説】歌の數は（イ）二一七首、（ロ）二七九首、（ハ）二一五首、（ニ）凡そ一六二首である。（ロ）は（イ）と比較して順序がやゝ異り、巻末には百首がある。（ニ）は「清少納言集」と合冊となつてゐるが兩集に錯簡がある。順序は（イ）と比較して大に異り巻頭に百首があり、次に（イ）の上巻の終、下巻の終、上巻の始がある。奥に正應五年十一月八日書了藤資經とあり、「清少納言集」の奥に永仁元年八月廿一日書了藤資經とある。以上四本は歌の數に相違がありながら大部分が共通するのは段々に增補されたものであらう。詞書は一人稱で書かれ、自稱に「おきな」とあり、重之自らが書き集めたといふ痕跡もあるから、重之自らが二種以上の本を作つたとも考へられる。「袋草紙」四に「燒かずとも草はもえなん」の歌は、「忠相集」にあつて「重之集」には無いのに、十五番歌合には重之の歌としてゐるのは如何とある。この歌は四本の内（イ）（ニ）にはあるから清輔の見たのは（イ）（ニ）以外の系統のものであらう。（重之參照）〔西下〕

重　之　集　（本願寺藏三十六人集の内）

重頼　俳人【姓名】松江氏。通稱大文字屋治右衞門【號】乳父子、晩年薙髪して維舟と改め、又江翁と稱す。【生歿】慶長十二年生れ、延寶八年（一三四〇）六月二十九日歿。享年七十四（「辭世」）林檎もや菩提樹のだつまくむ清水【師傳】松永貞徳に俳諧を、後、里村昌琢の門に入りて連歌を學び、一派を成した。【閲歴】七俳仙（別項）の一人で、貞徳の高弟である。「滑稽太平記」に、寛文八年、「犬子集」（別項）撰集の時、野々口立圃より句を贈られた中に、「螢火は川の瀬中の灸かな」といふ句があつた。重頼は貞徳に、「螢火は野中の蟲の灸かな」といふ句があつて、等類であるから入れられないと言ふと、立圃が貞徳ほどの名師が長點をかけた句であるから等類は遁れてゐる、是非入れてくれと懇願したけれど、重頼は許さない。貞徳も亦入選を勸めたけれど、重頼聽かず、餘りに我意を立てたので、貞徳も氣色を損じ、今後出入は無用であると云つて破門したといふ説を傳へてゐるが、「犬子集」に「螢火は河の瀬中の灸かな」の句があつて、而も作者は孝晴（伊勢山田の人）であるから、この説は信じ難い。ただ「犬子集」撰集に當つて重頼と立圃と不和となり、貞徳を遠ざかるに至つたのは事實である。又重頼は、安原貞室・池田正式とも不和であつた。「貞徳永代記」によると、貞室が母の追善百韻に自註したのを惡んで、批言の書を著したり、貞室が鼻が低かつたので、貞室の發句、「繼留てけにぞ名木の花の春」とあつたのを、「繼留でけにぞ面目の鼻ひしやげ」と直して、貞室へ點取りにやつたりした。或る時は又、「朝がほの日まけをしてや鼻ひしやげ」と書いて、貞室へ點取りにやつたので、貞室も負けてはゐず、重頼の屋號が大文字屋といふ所から、「送り火や其身をこがす大文字」として、重頼方へ點取りにやつた。殊に重頼の「毛吹草」（別項）に對する貞室の論難は有名である。初め重頼は池田正式と親しく、「毛吹草」撰の時も、正式の「庭訓は春のはじめの試筆かな」といふ句を巻頭に出すことを約したのであるが、俄に違變して門人春可の「鶯も歌機嫌なり今日の春」といふ句を巻頭に置いたので、正式が大に怒り、「毛吹草」の難書「郡山」（正保三年刊）を著してこれを難じ、正式と策謀してあつた貞室も「氷室守」（正保三年刊）を著してこれを難じたのである。これ等は「滑稽太平記」の記す所であるが、以上の難書の内容によつて確かめ得る。

【著作】犬子集〇毛吹草〇同追加〇懐子〇同伽（各別項）〇獨吟千句（慶安三年刊）〇乳母七巻

（萬治三年刊）○佐夜中山集　五册（寛文四年刊、四季の發句二千九百餘、付句八百七十餘、誹學之大概、作者句數等を收めてゐる）○時世粧（はやうすがた）六册（寛文十二年刊）○藤枝集（自選句集）（延寶二年刊）○武藏野二册（延寶四年刊）○江戸水道（延寶五年刊）○溜池河御座一册（延寶六年刊）○名取川四册（延寶七年刊）○梅千世○菊千世○大井河○浮世長刀○維舟隨筆。

【作風・業績】資性剛愎で儕輩に下らず、屢々爭ひを釀し不和を生じたが、頭腦がよく且つ進歩的でもあつたので、俳論に於ては古風（別項）中、最も進歩した説を出してゐる。宗因は重頼に教を乞うたので、宗因の談林風も重頼に負ふ所が多いと思はれる。なほ重頼は精力家であつたと見えて、俳諧の作も著書も多く、

重頼筆蹟

誹諧家譜早川文石○はいかい袋大伴大江丸○誹家大系圖生川春明○俳家奇人談　竹内玄々一○俳諧論戰史　窪原退藏（國語國文の研究、昭和四ノ九）○維舟と立圃の確執　窪原退藏（國文教育昭和二ノ一〇）

【萩原・志田】

蔚（しげる）　音韻學者　【姓名】泰山蔚。字は文敏　【號】霧隱　【閲歷】生歿の年月未詳。その著「音韻斷」（別項）は寛政十一年三月の刊で、自序は同年同月に成つてゐる。「韻鏡藤氏傳」の批評は寛政八年に成つたやうである。又その前に「百錬韻鏡」を著はしてゐるから、寛政の頃には相當の年齡になつてゐたと思ふ。京都の人であつたやうである。「音韻斷」の總論に、蔚の「音韻ノ學、師承スル所ナシ」とあり、又音韻は蔚の專門とする所ではないと記してゐる。【著書】音韻斷（別項）○百錬韻鏡五册。重修發音錄一册○解經祕藏駁二册。

【業績】その著「音韻斷」は「磨光韻鏡」（別項）及び「韻鏡藤氏傳」（釋盛典著）について、詳かに是非を論じ、不備・誤謬を訂正增補したものであるが、頗る卓見に富み、蔚が文雄・太田全齋（各別項）等と比肩し得る音韻學者であつた事が知られる。惜しむらくは、蔚は學界に知られず、その所説も學界に大きな影響を與ふるには至らなかつた。

【龜田】

自謙（じけん）　心學者　【姓名】植松德恭。通稱自謙、初め出雲屋和助　【生歿】生年未詳。文化七年（一八一〇）五月四日京都明倫舍に歿す。享年未詳　【墓所】鄉里京都妙蓮寺、同鳥邊山、東京深川妙壽寺、群馬縣伊勢崎。以上すべて特に尨大な著書が少くない。俳諧の各方面を網羅したその「毛吹草」の如きは、彼の技倆を綜合的に見得るが、俳人に頗る珍重されて數版を重ねるに至つた。作に於ては趣向を求め變化を試みるに巧みで、特に宗因と交り、その談林風が進むに連れて清新の調を帶びて行つてゐる。「貞德永代記」は「はいかいの風は、句作りに伊達あまりて威勢たらず」と評してゐるが、大體にしか當つてゐない。かゝる人物であつたから、門人にも鬼貫・言水（各別項）の如き進歩的な作家を出し、大原千之・大原千春・高野幽山の如き談林傾向を取つた作者や、その他優れた作者を出してゐる。

【參考】貞德永代記　中島隨流○滑稽太平記　北藤浮生○歷代滑稽傳　森川許六○綾錦　菊岡沾涼○

植松自謙（道話記聞所載）

五箇所、遺骸を葬つたのは鳥邊山である。【法名】達道自謙居士　【閲歷】父は德右衞門といつて名主を勤めた。二十六歳にして父の職を嗣いだが、家は弟に讓つて江戸に出で、出雲屋某方に奉公して商業に從事した。ついで獨立して赤坂田町邊に書肆（一に貸本屋ともいふ）を開き、出雲屋和助といつたが、本來學問に志深く、聖堂に聽講し、學者を訪うて疑を質した。時に中澤道二の下谷の參前舍に心學を說くを聽いて痛く動かされ、遂にその門に入り、心學教のために一生を捧ぐるに至つた。自謙人と爲り純良、參前舍にあつては、茶の番、煙草盆の世話など一人で勤め、道二を初め社中の人々は、呼ぶに赤坂菩薩、出雲屋菩薩、和助菩薩などの異名を以てした。享和三年、道二の歿するや、門人等の議によつて、大島有隣と三年交替に參前舍主を勤め、傍ら各地に道を講じ、德化の及ぶものが尠くなかつた。文化六年、上野・信濃・甲斐諸國を巡講し、その翌七年、上京して講説に從つたが、たまゝ〳〵病を獲て同地に歿した。

【參考】石門心學の研究　白石正邦○植松自謙事跡　山崎美成（海錄卷一八）

【森】

支考（しこう）　俳人　【姓】各務（かがみ）氏　【法號】靈鎭。略して鎭藏主といふ。【號】東華坊・西華坊・十一庵・瑟々庵・獅子庵・野盤子・見龍・是佛房・桃花仙・橘佐渡入道・華表人・蠶乙子等　【變名】蓮二房・白狂・渡邊狂・卉名連（くさなのむらじ）　【諡】梅花佛　【生歿】寛文五年に生れ、享保十六年（一三九一）二月七日歿す。享年六十七　【墓所】美濃國山縣郡三輪山之西北黃雲山大智寺塔頭梅泉庵西岡（梅花佛鑑塔といふ）　【家系】父は各務吉三郎、母は渡邊氏、支考はその二男で、兄を各務吉右衞門と云つた。寛文十年父吉三郎が歿したので、母は子供を連れて同村の村瀨忠右衞門に再嫁した。　【師傳】芭蕉門　【閲歷】支考は美濃山縣郡山縣村大字北野字西山に生れ、幼にして大智寺の小僧となり、鎭藏主と言つた。延寶三年十一歳の時、寺庭の紅葉を見て、「色は葉に出でて散りぬる紅葉かな」と詠じて衆を驚かしたとも傳へられる。後、播磨の盤桂禪師の會下に參じ、「吹毛劍也春三月、斷腸牡丹花下風」

各務支考

といふ偈を作り、又東都某寺の大會に參じ、碧巖の講主に八ケ條の難問を發し、法眷よりその才を妬まれて寺を去つたと云はれるが疑問である。兎に角寺を去り、籍を親族各務甚平の家に移して各務姓を名乘つた。「蓮の葉に小便すればお舍利かな」といふ句は還俗の時の吟といふが、これにも疑問がある。

この後雲水生活をしたものと思はれるが、兄が名古屋にゐたので、主にこの邊にゐたらしく、同地の越人（別項）の紹介で元祿四年近江の無名庵に到つて始めて芭蕉に對顏した。かくて十月芭蕉に供して江戸に下り、翌元祿五年江戸を出發して松島・象潟の旅に向つた。芭蕉はその東行を餞して、「此こゝろ推せよ花に五器一具」の句を與へた。元祿七年秋、伊勢山田に草庵を構へて引移つたが、九月芭蕉最

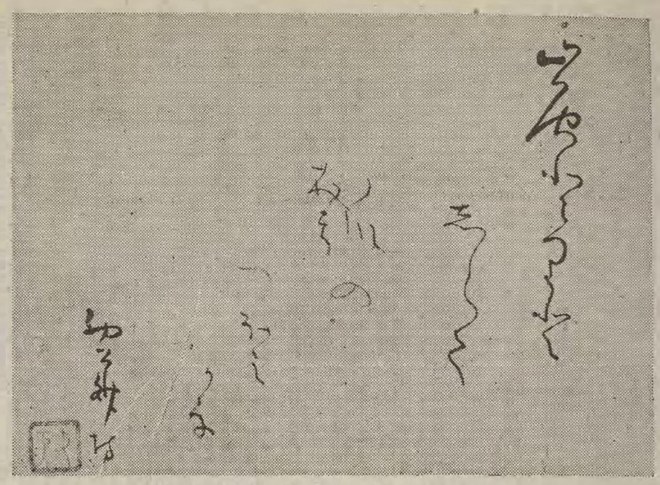
支考は俳生活に入つてから常に東西に廣く行脚して宣傳に努め、その間に多くの著作をなした。かくて俳死から二十一年目の享保十六年二月、六十七歳で歿した。足掛三年疝痛に惱んで、遂に起たなかつたのである。

【人物】名聞ぐるしい俗僧で、一言にして云へば野心家である。目的のためには手段を擇ばない傾きがあつて、道義上から云へば頗る議すべき人物である。芭蕉の説と假託して僞書

○三正猿（涼莵共撰）一册（同年刊）○寸濃宇（座神共撰）一册（寶永二年刊）○六華集二册（同年刊）○三日歌仙一册（同年刊）○家見舞一册（寶永三年刊）○東山萬句二册（同年刊）○南無俳諧一册（寶永四年刊）○夏衣一册（寶永五年刊）○白扇集二册（寶永六年刊）○越の名殘（同年刊）○東山墨なをし一册（正德元年刊）○阿誰話（たそのわ）一册（同年刊）○つれ〴〵の讃四册（同年刊）○碑銘祕註一册（正德三年刊）○發願文一册（正德五年刊）

土から四千餘章の追悼吟が集まつてゐる。美濃派の正統は獅子庵と號し、四世五竹坊に至つて分裂し、再和派と以哉派とに分れたが、連綿として今日にまで至つてゐる。支考は野心家であつたのと、獨創の才もないではなかつたのとで、種々な「新製」を試みた。文章の形式にもこれを試み、連句にも長歌行・短歌行の式を設け、和詩（假名詩）をも創めた。又俳論に

この發病水生活をしたものと思はれるが、兄が名古屋にゐたので、主にこの邊にゐたらしく、同地の越人（別項）の紹介で元祿四年近江の無名庵に到つて始めて芭蕉に對顏した。かくて十月芭蕉に供して江戸に下り、翌元祿五年江戸を出發して松島・象潟の旅に向つた。芭蕉はその東行を餞して、「此こゝろ推せよ花に五器一具」の句を與へた。元祿七年秋、伊勢山田に草庵を構へて引移つたが、九月芭蕉最後の旅に供し、奈良・難波を經て、十月芭蕉が大阪に病歿するまで能く仕へた。芭蕉歿後、彼は師の足跡を廻つて、終焉記を兼ねた「笈日記」を著してゐる。正德元年八月、故參の同門の自己に對する感情や世評を見んがために、自ら終焉記を作つて、美濃北野の獅子庵に隱れ、十月その終焉記を加へた追悼集「阿誰話（たのわ）」を出し、爾後自己の門人と見せかけた蓮二房・白狂等の變名を用ひることにしたのである。



支考筆蹟（各務虎雄氏藏）

支考は俳生活に入つてから常に東西に廣く行脚して宣傳に努め、その間に多くの著作をなした。かくて俳死から二十一年目の享保十六年二月、六十七歲で歿した。足掛三年病痛に惱んで、遂に起たなかつたのである。

【人物】名聞ぐるしい俗僧で、一言にして云へば野心家である。目的のためには手段を擇ばない傾きがあつて、道義上から云へば頗る議すべき人物である。芭蕉の說と假託して僞書を作り、世を欺き人を誤らせた罪は許し難く、自ら俳死して自作の書を門人の名で書き、自己を先師と云はせてゐるなども唾棄すべき態度と云へよう。許六の解釋によると、芭蕉の「五器一具」の餞別句は彼の佞なる生得を見屆けての戒と云ふことになるが、それは兎に角として、芭蕉大病の折、集出版の話を持ち出して、去來に叱られたといふ傳說などは、正に彼の性格を物語るものである。併し物を組織だてる頭腦と獨創の才があつて、その態度の如何は別として俳論家としては蕉門の第一人者である。「牛になる合點ぢや朝寢夕涼」と云つたやうな豪放さ、西國行脚の際、長崎で俳人が唐音・華語を唱へる事を嘲り、そこのチヤ、ウチンを下さいと云つて人々を笑はせたと傳へる場當り、これ等が彼の處世の祕訣であつたとも云へよう。

【著作】葛の松原（別項）一册（元祿五年刊）○笈日記（別項）三册（元祿八年刊）○梟日記（別項）一册（元祿十二年刊）○續五論一册（同年刊）○西華集二册（元祿十三年刊）○東華集（別項）三册（同年刊）○歸華三册（元祿十四年刊）○そこの花（蒿子共撰）二册（同年刊）○東西夜話（別項）三册（元祿十五年刊）○草枕一册（元祿十六年刊）○霜の光二册（寶永元年刊）○白陀羅尼一册（同年刊）○三定鎖（別項）一册（同年刊）○寸濃宇（庵歸共撰）一册（寶永二年刊）○六華集二册（同年刊）○三日歌仙一册（同年刊）○家見舞一册（寶永三年刊）○東山萬句二册（同年刊）○南無俳諧一册（寶永四年刊）○夏衣一册（寶永五年刊）○白扇集二册（寶永六年刊）○越の名殘（同年刊）○東山墨なをし一册（正德元年刊）○阿誰話（たのわ）一册（同年刊）○つれ〴〵の讃四册（同年刊）○碑銘祕註一册（正德三年刊）○發願文一册（正德五年刊）○本朝文鑑（別項）五册（享保三年刊）○俳諧十論二册（享保四年刊）○新撰大和詞二册（享保五年刊）○口狀（露川責）一册（享保八年稿）○三千化二册（享保十年刊）○十論爲辨抄三册（同年刊）○和漢文藻（別項）五册（享保十二年刊）○和漢百花賦一册（享保十二年刊？）○削かけの返事一册（享保十三年稿）○三日月日記一册（享保十五年刊）○俳諧古今抄五册（同年刊）○先後抄（享保十六年）○二十五箇條一册（享和二十一年刊）○二十五箇條解（白馬與儀解）一册（享和二年刊）○蓮の葉風一册（享保二十年刊）○蓮二吟集（掏一浮）二册（寶曆五年刊）○支考文集（俳諧文庫蕉門十哲集）永機・柳嵎（明治三十一年刊）○蕉門名家句集第十六輯（安井小洒（昭和六年刊）。

【業績】支考は、芭蕉の生前は兎に角師風を守つてゐたが、芭蕉の歿後は異端の傾向を取つて、平俗な美濃風（別項）なる一派を拓いたのである。西に行く時は西華坊、東に行く時は東華坊と云つてゐるやうに、常に東西に行脚して蕉風の宣揚に努めたが、併しそれは同時に蕉風としては醇正でない自風の宣傳と勢力擴張であつたので、その功罪いづれにあるかは大きな問題である。著書にあつても同樣である。併しその勢力は全國に行きわたり、彼の追悼集なる「文星觀」を見ても、殆ど日本全土から四千餘章の追悼吟が集まつてゐる。美濃派の正統は獅子庵と號し、四世五竹坊に至つて分裂し、再和派と以哉派とに分れたが、連綿として今日にまで至つてゐる。支考は野心家であつたのと獨創の才もないではなかつたので、種々な「新製」を試みた。文章の形式にもこれを試み、連句にも長歌行・短歌行の式を設け、和詩（假名詩）をも創めた。又俳論に於ても種々な新見を出して聽くべきものもあり、珍らしく體系だつた俳論を持つてゐる。唯これに衒學的な牽強と作爲僞託とがあるために、所論が晦澁になり信の置き難いものになるのである。許六なども「口より奧まで趣意が通らず」と云つてゐる。それ故、細心の注意を以て檢討して、始めて彼の新見を定め得るのである。

【作風】卑俗で含蓄に乏しい。許六の評に、「實うすく、今めかしき事折々見ゆ」とある。これは彼の性格と俗談平語主義との自然の結果である。後まで支考の美濃派と麥林（乙由）の伊勢派とが支麥の徒と云つて指彈されたのはこの故である。この二派は頗る相似たものである。彼は才氣もあり、學問も和漢儒佛に亙つてゐたが、その作は全く平俗に墮したのである。達文家であつたその文章も、嘯山は「其弊也膠柱鼓瑟……十篇以上不レ耐二多讀一」と評し、益戸巴釣は「斧削の痕あざやかにして濕厭の致に乏しく、筆屆かぬ所に至りて牽合彌縫を免れず。一二篇は觀るべくして數篇に至りては厭はしきに堪へず」と言つてゐるが、實に彼の文章は衒學的で、無闇に無意義な接續詞を多用し、一種の拍子に乘る厭味な癖があつて、嘯山や巴釣の評は正鵠を得てゐる。發句よりは寧ろ連句の方が勝つてゐよう。

【參考】俳諧問答森川許六○相楔滯露川○不猫蛇越智越人○猪の早太 同門人○十論代斷志舞曲部所收。節附本は全曲ではないが越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五近古篇に載せてある。【題材】判官物(義經傳說)。怨靈譚。武勇傳說。前半は舟辨慶傳說で、謠曲「舟辨慶」と同材。「義經記」卷四にも未完成の形では語られ、舞曲「笈さがし」(別項)、謠曲「沼捜」にも類話がある。後半蘆屋の合戰は、謠曲「蘆屋辨慶」と同材。敵將の名は異なるが「義經記」にも見え、史實は「吾妻鏡」卷五に載せてある。

【梗概】伊豫の河野を賴らうと都を落ちた義經は、大物浦で平家の惡靈に襲はれたが、武藏坊辨慶の祈によつて難を免れ、蘆屋浦に着くと、同地の住人蘆屋三郎光重が主從を生捕つて鎌倉殿に獻じようと押寄せたのを、また辨慶奮戰して却つて光重を討取つた。〔島津〕

地獄草紙（じごくざうし）

繪卷物 【解說】現存するもの原富太郎氏及び岡山安住院所藏各一卷、益田男爵所藏二卷、その他に米國ボストン博物館に一斷片を藏する。原家及び安住院本は地獄の別所を主題としたもので、前者は屎糞所・函量所・鐵礎所・鷄地獄・黑雲沙等の別所、後者は髮火流・火末蟲・雲火霧所・雨炎火石の諸別所を描いてをり、益田家本の一卷は鐵圍山の間にある火象・咩聲・飛火・剝肉・沸屎・解身・鐵山の諸地獄を描いてをり、他卷は天形星・乾闥婆・神蟲・鍾馗、毘沙門等を描いたもので、これは地獄草紙とも呼び難いが、併し須彌諸界の神々として惡鬼を克服するものであるから、蓋し地獄などと聯關して六道世界の諸相を示すものであらう。これ等は凡て詞書(連筆、騎士佐光長筆と傳へられてゐるが[illegible])

容から見ても筆致から見ても繪佛師一派の製作で、各卷の間に多少畫風の相異も見られ一筆に歸し難いが、等しく藤原末葉か遲くとも鎌倉の最初頭を下らぬ頃の作である。どす黑い生血や奇怪な鬼達の面構へや逃げ迷ふ亡者の姿など、凄慘目も當てられぬ光景を取扱ひ、或は皮肉に或は無邪氣にこれを描破し、一見無造作に醜惡の藝術化を達成してゐる。この點は「餓鬼草紙」「病草紙」(各別項)などにも窺はれるもので、藤原末葉から鎌倉初めにかけての大和繪描寫の特質を理解する上にも興味ある點である。思ふに當代は世の亂離に伴うて淨土を欣求するの念切なると共に、一面には穢土の觀念が著しく擡頭して來る。現實暴露の悲哀の裡に佛敎固有の因果思想を發展せしめ、まざ〳〵と六道輪廻の光景をも想像せねばならなくなつた。かくして地獄・餓鬼・畜生等の醜く淺ましい光景が、藝術の中に畫因として取扱はるゝに至つた。「地獄草紙」の如きは、かくの如き時代の所產として、その最も顯著なものの一である。〔田中(一)〕

地獄の花（じごくのはな）

小說 【作者】永井荷風【刊行】明治三十五年六月金港堂。後、荷風全集第一卷・現代日本文學全集(永井荷風集)所收。

【梗概】黑淵長義の一家は、巨萬の富を擁しながら二十年來社會の擯斥を蒙つてゐた。それは藝者上りの洋妾だつた夫人縞子が、通辯だつた黑淵と姦通し、共謀して西洋人の旦那の財產を橫領したのだといふ噂を盛んに新聞が書き立てたからだつた。娘の富子も不義不德な家の子として學校時代を侮蔑と迫害との裡に過ごしたが、生來の豚氣から傲然と反抗の精神を持つて[illegible]

氣隨氣儘な無賴の日を送つてゐた。長義は幼い息子秀男にこの轍を踏ませまいと家庭敎師を雇つて敎育を託して來た。その任を受けた女學校敎師の園子は、この家に來て、始めて主人の善良で恭順なことや、社會の制裁の餘りに苛酷なことを知つた。また自分と同年輩の富子と親しみ、これまで嚴格な養母の許で若い血を抑へながら、小さい野心に欺かれて獨身をつゞけて來たことが悔いられた。そこへかねて知合の文學者笹村に言ひ寄られて接吻を受けてからは、すつかり戀に陷り、暑中休暇を小田原の黑淵家の別莊で暮らしてゐても、園子は私かに隱れて會つてゐた。それが知れて縞子夫人のひどい不興を買つたが、同時に笹村と夫人とが不倫な關係にあつた事實を知つた。そこへまた勤務先の女學校の校長が小田原に來て、執拗に後妻になつてくれと迫られた揚句、暴風雨の夜の海岸で暴力に依つて遂に處女の誇りを奪はれた。丁度その頃東京の黑淵家では、夫人の不義を罰し、且つは自分の悔悟を明かにするために、長義は縞子を殺した上自殺した。遺產は三分して、富子と秀男と敎導してくれる園子とに讓る旨の遺書を殘してあつた。この悲慘極まる破局に對して、世間はなほも黑淵一家を地獄と呼び魔窟と罵つた。園子は汚れた肉身を抱いて惡評の渦の中に在つて、はじめて放たれた自分を見出した。世間の毀譽を慮る必要もなく、何等の束縛もない自由自治の樂園に立つ思ひで、これからの生涯を送らうと決心すると、健全な力と猛然たる勇氣とが身うちに湧き起つた。女學校へは斷然辭表を出し、孤兒秀男の一生を身に負つて引き受けることに決した。

【概評】作者がゾラの自然主義を信奉せる時代の作品とて、環境や遺傳を重視して想を構へ、世俗的道徳の無視無價値を示し、動物の如く自由に本能的に生きることの力強き勝利を描いてゐる。かゝる傾向的な思想を説くことやゝ急な憾みはあるが、文藻豐かな若々しい筆致で園子の心情の轉移を寫すあたり、社會批評家たる作者の颯爽たる意氣を偲ばしむるものがある。當時の文壇を通じて、その點だけでも確かに異色ある作品であつた。また作者の出世作でもある。〔水木〕

地獄變（じごくへん）　小說【作者】芥川龍之介【發表】大正七年五月、東京日日・大阪毎日新聞連載【刊行】同十二年六月、短篇集「傀儡師」（新潮社）。現代小說全集・現代日本文學全集（芥川龍之介集）・芥川龍之介全集等所收。

【梗概】豪宕不羈で念を天下と倶にした堀川の大殿は、萬民の尊信を受け數々の逸話を殘したが、中でも地獄變の屛風の由來ほど恐しい話はなかつた。その頃堀川の大殿の贔屓になつてゐた良秀は、一風變つた老繪師で、着眼警拔、筆をとつては當代隨一と云はれてゐたにも拘らず、鼻つ張りの強いまゝに迷信慣習を無視し、好んで醜惡の美を描く異樣の畫風に屢々妖異の風聞さへ傳はりもした。その容貌から猿秀と諢名されたが、一見卑屈で而も慳貪な人柄で、大殿に對してさへも傲慢な位であつたから、評判は甚だ惡かつた。彼は強い自信の下に世間の噂は耳にもかけないらしかつた。唯、さすがの彼にも唯一つの人間味として、やはり大殿の邸に小女房に上つてゐる一人娘だけは人一倍可愛がつた。良秀は彼女を手許へ置きたがつたが、これは又悧巧な可憐な少女で誰からも可愛がられてゐたばかりか、大殿に目をかけられるやうにもなつてゐたので、頑固な片親の側へやるのを憐れに思つてか、大殿は良秀の願を許さなかつた。そんなことが度重なるに伴れ良秀は次第に大殿の不興を蒙るやうになつて來た頃のこと、大殿はその傲慢非道を矯め懲してやらうといふ心から突然良秀に地獄變相の屛風繪を描けと難題を云ひ付けた。以前から畫の事となると氣違のやうにひた向きになる良秀は、命を受けて以來全力を擧げて製作に從つた。それは屛風一面に渦巻く大紅蓮の猛火の間に千樣の苛責に呻吟する罪人の萬態を轉々累々と隱顯させ、それに樹の頂をかすめて中空から墜落して來る一輛の牛車の中で、黑髮を炎に亂しながら悶えてゐる一人のあでやかな上﨟を配して畫面の統一をとるといつた天才的な構圖によるものであつた。暫くの間、何事によらず見たものでなければ描けないといふ程凝り性の良秀は、陰森な一間に籠つたきりで、或は惡夢に魘されつゝ工夫を凝らし、又は弟子を雛形に醉使して鐵鎖に縛された裸形を描き、又化鳥に虐まれる美少年を寫し取り、苦心慘澹、その怪行に弟子達が脅かされてゐる中に、漸く下畫も八分通り出來上つたが、其處ではたと行き詰つてしまつたのは、牛車に乘つたまゝ焚き殺されてゆく上﨟、その姿を如實に表はすべき手本が得られないことで良秀は思ひ惱んだ。畫の事となると慘虐をもしかねない彼も、娘を犧牲にはなし得なかつた。娘も亦父を案じてか、大殿が意に從はせようとしてゐるからだといふやうな噂まで立てられた程一人愁に沈む日が多くなつた。一方良秀は懊惱の日が續くに伴れ妙に涙脆くさへなつていつたが、娘をどうする事も出來ないと思つたか、遂に意を決して大殿に、眼の前で女人の乘つた牛車に火をかけて見せてくれぬかと願ひ出た。初めの期待に反して屛風繪が既に出來上りかけてゐると聞いた大殿は少しく氣を落したが、次いで良秀の懸命な願出を聞くと、深く苦痛を隱した態で、勢ひよく受合つた。それは洛外の荒廢した山莊雪解の御所の夜陰に、大殿も同席で行はれた。すべてを覺悟した如く悄然と控へてゐた良秀は、車中に縛められてゐる女房が生みの娘と知ると、一度はあつと立ち竦んで萬感迫る苦悶の態であつたが、やがて凄じい火焰に車が燃え上つてゆくと、眼前の烈しく美しい情景に恍惚と見入つてしまつた。しかもその態度には、さすが大度量の大殿さへまざ〳〵と行はれる焚殺を前に、辛うじて堪へてゐた樣子に引き換へ、良秀の藝術家としての嚴然たる風姿が窺はれた。かくして屛風の繪は大殿の意中を裏切つて、山莊事件に對する諸說紛々の中に出來上つた。それは實に壯烈凄慘にして森嚴、その一帖の天地に吹き荒んでゐる火の嵐の恐しさに驚嘆しない者もないほどの入神の出來榮えであつた。が、良秀は必死の大苦患によつて生み出された傑作を完成した次の夜、自ら縊死してしまつた。

【構想】王朝の盛時を背景に、異常の名匠を主人公として、彼の製作に關する慄然たる物語に取材し、凄慘の氣の中に、人と藝術家との相剋を描き出してゐる。その主人公に配するに豪宕な大貴族、可憐な少女等を以てし、この貴族の侍者の口述體に擬して名家に傳はる重寶の由來を叙し、漸層的に展開される怪異の情景の中に主人公の苦悶を語り、藝術至上の主題を表出してゐる。【批評】着想の警拔、表現の巧緻、人物の對照、情景の布置共に妙を得、寸分の隙もなく仕組まれてゐる。多少思はせぶりの氣味はあるが、概して條理整然、物語進行の緩急もよく、次第にクライマックスに至り、最後の劇的な場面を通して地獄變相の屛風繪の效果が全篇に放射され、其處にこの作者の持する藝術至上の思想の强い反映が認められる。しかも口述者による俗人風の觀察の背後に、藝術の世界の消息を暗示しようとする手法に成功してゐるあたり、妙手の作である。作者獨自の稱ある王朝物の代表的作品であり、短篇作家である作者の唯一の大作である。〔湯地〕

錣引（しころびき）　脚本　一幕　時代物【作者】二代瀨川如皐【別名】錣引のだんまり【興行】天保四年七月二十九日初日、江戸中村座「一谷嫩軍記」。發端「摩耶山の場」【題材】景清と美保谷十郎の錣引の傳說を劇化したもの【沿革】古くから行はれてゐるが、殊に正德元年正月、江戸森田座「傾城逆澤瀉」に早川傳五郎の景清と坂東又九郎の三保谷とで演じたのが大當りで以來流行し、種々の趣向に脚色された。【解說】攝津摩耶山の觀音堂へ忠光妹伏屋（中村駒次郎）が姬の病氣平癒祈願の代參に蛭巻の長刀と名鏡を持つて行くのを番場忠太（中村駒十郎）が奪はんと爭ふうち、名鏡を谷間に落す。谷間には非人に姿を變へた惡七兵衞景清（市川海老藏）と、虛無僧に身をやつした三保谷四郎國俊（二代中村芝翫）とが圖らず落ち合つて焚火を圍んでの物語、そこへ名鏡が落ちて來るので、兩人が奪ひ爭ふ。やがて景清が三保谷の手に渡るといふ筋。現存のものは文久元年に默阿彌の添削したもの。

【参考】役者産毛抜 ○劇代集 ○花江都歌舞伎年代記 ○續々歌舞伎年代記 ○源平錣曳競の正本 西澤一鳳（新群書類從第二）〔秋葉〕

思齋漫錄（しさいまんろく） 隨筆 二卷 【著者】中村弘毅。本書、扉の書名に肩書して「新齋中村先生著」とあるのは、「思齋」とすべきを誤つたのか、將又思齋、新齋同一人の號か。古來の疑案で今に未詳である。【刊行】天保三年【解說】近代、有名無名を問はず、佳言善行のあつた人々の逸話を集めて幼學の資としようとしたもので、一般の隨筆とは趣を異にする。文政十三年（天保元年）の著者自序、同年著者の孫健の跋がある。〔和田〕

自讃歌（じさんか） 歌集 一卷 【作者】未詳【名義】「自讃」とは、自ら他にほこるといふ意で、大僧正慈圓の「拾玉集」などにも既に見える語である。これは各作者の自讃の歌に擬して、何人かが撰集して名づけたものであらう。【諸本】應永の頃、勾當內侍寫の卷子本一卷、「後集十七家選」と題し、京都帝國大學所藏。刊本には註解及び挿畫を加へてゐる。日本歌學全書第七所收。【內容】「新古今集」時代の作家の尤なるもの、後鳥羽院・式子內親王・良經・慈圓・通光・通具・俊成卿・俊成卿女・宮內卿・有家・定家・家隆・具親・雅經・寂蓮・藤原秀能・西行の十七人の歌、各十首を撰したもの。ほぼ新古今調の歌を撰し、同一傾向の歌のみを收めたところから見れば、或る一人によつて成されたものと思はれる。

【研究書】自讃歌抄 一卷（寫）東常緣（「正德四壬子孟春於長安書之」の奥書がある。自讃歌の註、○自讃歌註三卷（刊）宗祇（文明十六年閏月中旬の奥書がある。又「自讃歌註鈔」とも呼ばれる）○宗祇繪抄（右の本に淺川師宣筆の繪を加へたもの。寬文十三年中野道也上木のものがある）○自讃歌註 一卷（寫）素識虛幻（著者が猪苗代兼載の說を肖書したもの。圖書寮藏）○自讃歌飛鳥井抄 一卷（寫）（初に宗祇の說を揭げ、次に自說をのべたるもの。著者不明。飛鳥井雅章かと云ふ）○ねなしかづら 一卷（寫）進藤知政（河瀨菅雄・宗祇註等により自說を加へたるもの）○自讃歌管註 一卷（寫）惠南（空華庵惠南の註。寬文二年の自序がある）以上の內、宗祇の註が最も行はれてゐる。〔松浦〕

四山藁（しざんかう） 俳文集 二册 【編者】豐島久藏・米津包德・齋藤包昌・夏目包壽【刊行】文政四年 【諸本】俳家成美全集・俳文學大系俳文篇所收【內容】成美の序跋その他の文章約七十篇を集めたもので、當時の俳壇に於ける成美の地位をも窺ひ得る。その中の「湧出臺記」「贅亭記」の二文は、成美の日常生活を見るべく、俳諧小言の一章は、その俳諧觀を知るべき好資料である。さまでの生彩はないが、品位ある暢達の俳文である。【附記】俳家成美全集（巻窓無角編）には、編者の編に成る「四山藁追加」がある。〔贊川〕

指事（しじ） 「漢字」を見よ。

紫芝園漫筆（ししえんまんぴつ） 隨筆 八卷 寫【著者】太宰純（春臺）【解說】儒家の漢文隨筆で、經史子類について自家の所見を述べ、又和漢の雜事を筆錄したもの。〔和田〕

獅子巖和歌集類題（ししがんわかしふるゐだい） 歌集 一卷 【著者】獅子巖涌蓮【成立】遺稿をその寂後四十三年目に、吉田元長が類題撰定したものである【刊行】文化十三年【諸本】近代諸家集（國歌大系）所收。【內容】歌數一千一百餘首、四季・戀・雜の部立によつて類題されてゐる。【歌風】章尹や慈延などと同門關係であり、歌調はほぼ堂上風（別項）と言つてよいが、自然の凝視の上に清新な味の感ぜられる一面も存する。戀歌にしても題詠的の臭味を脫却し得てゐる。しかし彼の特質を求めるなら、その生活感情から出た次のやうな主觀的の歌であらう。

もらさじの誓は人を擇ばぬをわが方よりや遠ざかるらむ

拂はむと思ふ心も塵なるぞただそのまゝに御名を唱へよ

【著者小傳】涌蓮は伊勢の人、江戶に出て澄泉寺の住持となつた。「高僧傳」に感奮し、寺を捨てて無一物の境界に入つた。多く洛西後嵯峨の獅子巖の下に隱栖。修業の傍ら詠歌を娛み、京に出て冷泉爲村に師事した。しかし座右に一册の歌集をも藏しなかつたから、その歌は必ずしも冷泉流の規範に泥んでゐない。安永三年恰も師の爲村の歿した年、彼も寂した。遺詠には本集の外、釋敎歌のみを集めた「法の江」と云ふのが存してゐる。〔齋藤（清）〕

支竺桑名山諸寺記錄（しぢくさうめいさんしよじきろく） 禪史籍 一卷 寫【著者】未詳【解說】印度の竹林精舍等を擧げ、次に支那の五山十刹等の禪寺の境致等を擧げ、次に扶桑卽ち日本の五山十刹の境致、諸堂、諸山の位次等を擧ぐ。末尾に于時正保二乙酉歲暮春中旬於筑之前書寫とあり、筑前崇福寺所傳本である。同種の本に「和漢禪刹次第」「和漢禪刹及門派」等がある。〔鷲尾〕

時事小說（じじせうせつ） 【解說】時事問題を取扱つた小說の意で、明治十年代に現れたその種の一群の小說に與へられた名稱である。內容及び特色は、政治小說（別項）と共通なものがあるが、これは必ずしも政治問題に限らない。卽ち時事的な事實に潤色を加へ、更に作者の批判、意見を述べたものなどもある。作品の主なるものは、武田交來の「冠松眞土夜暴動」（明治十三年）、彩霞園柳香の「蓆旗群馬嘶」（同十四年）は、ともに土地問題及び百姓一揆を取扱つたものである。久保田彥作の「鳥追阿松海上新話」（別項）（同十一年）、岡本勘造の「夜嵐於衣花廼仇夢」（別項）（同十一年）、假名垣魯文の「高橋於傳夜叉譚」（別項）（同十二年）等の謂はゆる毒婦物・毒婦小說も亦、時事小說といふことが出來よう。政治的のものとしては、岡本起泉の「島田一郎梅雨日記」（別項）（同十二年）、雜賀柳香の「冬楓月夕榮」（同十四年）、中島市平の「板垣君近世紀聞」（同十五年）、末廣鐵腸の「落葉之掃寄」（同二十年）等をはじめ、可なり多い。〔宮島〕

資治通鑑（しぢつがん） 史書編年類 二百九十四卷【編者】司馬光【名義】「資治通鑑」の名は、宋の神宗から賜はつたもので、治世に資益する所があり、歷代を通じて爲政者の鑑とするに足るの意。【異名】「溫公通鑑」、或は「涑水通鑑」等とも。【成立】宋代中期、神宗の元豐七年（皇紀一七四四）【刊行・諸本】通鑑が上梓せられたのは、元祐元年旨を奉じて杭州に刊刻したのを初めとする。次いで紹興二年復た紹興府に於て刻した。民間には海陵本及び龍爪本があつた。元の至元の末、興文署を置いて諸經子史を刻した時、胡三省の音注本を刊行し、その板は明末成化の頃まで印行せられたと云ふ。嘉靖中杭州に於て復たこの書を刻し、天啓五年、陳仁錫が又胡三省音注本を刊行し、これに「釋例」「目錄」「外紀」等を附した。通常これを「七編通鑑」と謂ふ。清の嘉慶二十一年、鄱陽の胡克家が元本を飜刻し、同治中、江蘇書局が胡刻本を重刊した（所謂

国期本と、我が国では、嘉永二年、津の藩主藤堂氏が、陳仁錫本を校訂して翻刻し、陳氏の評點を除いて補外に勘語を加へ、今日に至るまで盛んに行はれてゐる。また明治年間には、鳳文館本・修道館本・東京印刷會社本等が現はれた。【由來】司馬光は襄に前史の機要を撮擧して編年の通志を作り、人主の閲覽に便せんとして、先づ戰國から秦に至るまでの史實を以て、通志八卷を作つて上つたところ、英宗は甚だ喜んでその書の大成を命じたので、治平三年四月、編纂の事に當つた。本書二百九十四卷、目錄三十卷、攷異三十卷、都合三百五十四卷を朝に上つた。彼は通鑑の外に、「通鑑目錄」及び「通鑑考異」を編纂した。目錄は年を逐うて重要事項を列擧し、その下に卷數を標出した。年表と目錄とを兼ね、考異は異聞を考證したもので、目錄は叢目を、考異は長編の中の考證を整理して得た產物である。【傳來】通鑑の注は、宋代に凡そ四種あつた。司馬光の門人劉安世の「音義」十卷、南宋初の史炤の「釋文」三十卷、海陵郡齋刊行の「通鑑」に附錄した光の子公休の撰と稱する「釋文」及び蜀の廣都の費氏修進堂刊行の「通鑑」(所謂龍爪本)の注がこれである。而して史炤の釋文の外は、概ね亡んで傳はらぬ。降つて元の初に至つて胡三省の音注が出た。三省には別に、「資治通鑑釋文辨誤」の著があり、史炤の書の誤謬を指摘考證したものである。三省の書は考證該博を極め、今日に至るまでなほ弘く行はれてゐる。

【內容】筆を周の威烈王二十三年に起し、五代後周の世宗の顯德六年に至る一百十三主、前後一千三百六十二年に亙り、王朝一代を以て一紀とする。周紀五卷、秦紀三卷、漢紀六十卷、魏紀十卷、晉紀四十卷、宋紀十六卷、齊紀十卷、梁紀二十二卷、陳紀十卷、隋紀八卷、唐紀八十一卷、後梁紀六卷、後唐紀八卷、後晉紀六卷、後漢紀四卷、後周紀五卷。その春秋以前を除いたのは、その事蹟が既に備敎の根本經典とする「尙書」「春秋」に見えてゐるからであり、又その春秋の後を承けて、筆を魯の哀公十七年、即ち周の敬王四十二年に起さなかつたのは、經に續ぐことを避けんがためである。又威烈王二十三年に始まるのは、この年に三晉即ち趙・魏・韓の三家に命じて諸侯と爲すの事があつたので、これに藉つて大義名分を明かにして、開卷の初めに全篇の宗旨を揭揚發揮せんとする意圖に本づき、最後に筆を顯德六年、即ち後周の世宗の崩じた年に止めたのは、その明年は宋の太祖の建隆元年に當るので、それ以後當代の事を避けんがためである。その叙述の體裁は所謂編年體で、月日を逐ひ年を逐つて、軍國の大事と君臣の言行とを記述し、間々「臣光曰」の三字を冠して論贊を挿み、治亂興廢の迹を尋ねて、その由來する所を明かにせんとした。本書編纂に當つて參考とした資料は、史・漢以下歷代の正史を主としたことは勿論であるが、その傍ら稗史野乘、或は百家の譜錄・文集・墓誌・碑碣の類に至るまで、遍く參考跋涉して考據とし、その數は二百二十有餘種に及んだと云ふ(高似孫「史略」)。司馬光の編史の目的は、進表に明かである如く、正名に由つて倫常を維持するに在つた。且つ又開卷の劈頭、周紀の首に揭げられた大義名分を高唱する一文に於て、彼の精神と理想とは明かに看得される。立稿の旨意が既にかくの如くであるから、その編次も亦暗に左傳を繼承する意のある事は、宋の林之奇の「論通鑑與左氏通捷」(「拙齋文集」卷十二)、王魯齋の「資治通鑑托始論」(「魯齋集」卷三)及び「跋通鑑紀事本末」(同別集卷十)等に既にこれを評論してゐる。本書卷頭の三晉の記事は、主家の權を奪つた必誅の逆臣を周王が誅伐せず、却つてこれに迎合したのを誹つたもの。この外首惡姦佞を誅戮することは、殆ど老吏の獄を斷ずるが如きものがあつた。彼は陽に春秋を承繼することを避けてゐるが、陰にその理想を嗣ぎ、その筆意を襲つたもので、玆に通鑑の旨趣の存する所を見るべきである。

【影響】本書はその所期の目的に背かず、能く正名の實效を當時に收めることが出來たのみならず、彼の後に彼の事業と精神とを繼ぐものが相次いで輩出した。宋の劉恕の「通鑑外紀」十卷、李燾の「續資治通鑑長編」一百六十八卷、劉時擧の「續宋編年資治通鑑」十五卷、金履祥の「通鑑前編」十八卷、「舉要」三卷、元の陳桱の「通鑑續編」二十四卷、明の薛應旂の「宋元資治通鑑」一百五十七卷、王宗沐の「宋元資治通鑑」六十四卷、嚴衍・談允厚の「資治通鑑補」二百四十九卷、淸の乾隆勅撰の「御批通鑑輯覽」一百二十卷、徐乾學の「資治通鑑後編」一百八十四卷、畢沅の「續資治通鑑」二百二十卷等は、本書を繼ぎ、又はその闕を補はんとするものであり、又范祖禹の「唐鑑」十二卷、朱繪の「歷代帝王年運詮要」十卷、黃公邁の「歷代紀年」十卷、熊克の「九朝通鑑」一百六十八卷、「中興小紀」十卷、李心傳の「建炎以來繫年要錄」二百卷、呂祖謙の「大事紀」十二卷、陳均の「皇朝編年擧要」三十卷「備要」三十卷、「中興編年擧要」十四卷「備要」十四卷等は、宋人の編年史、又は光の風を望むものであり、朱熹の「通鑑綱目」五十九卷、袁樞の「通鑑紀事」本末四十二卷等は、我の意を汲んで更に史の新體を開いたものである。先には歐陽修の「新五代史」「新唐書」の著があり、宋朝一代の學者が、擧つて修史の事業を以て正名の實を擧げんとしたことは、他方に於ける春秋學の勃興と共に、當時の思想界の風潮を顯はすものである。而もその精神はやがて我が國に傳へられて、「神皇正統記」「大日本史」等を爲らしめ、明治維新の運動に哲學的一根柢を與へ、永く後世に光を放つてゐる。

【註釋書】資治通鑑音注二百九十四卷元胡三省○通鑑釋文辨誤十二卷同上○通鑑地理通釋十四卷宋王應麟○通鑑答問五卷同上○通鑑胡注擧正一卷(又は十卷)淸陳景雲○通鑑注辨正二卷淸錢大昕○通鑑通商十八卷淸趙紹祖○通鑑地理今釋十六卷淸吳熙載

事實文篇 じじつぶんぺん

漢文隨筆 百十七卷

【著者】五弓久文【成立・刊行】著者十九歲(天保十二年)江戸游學の年に着手、歿年前五年の五十八歲(明治十四年)に至る四十年間の蒐集編纂にかゝる書である。序によれば、着手後四年(弘化二年)には既に二十卷を成し、更に三年後(嘉永元年)には六十卷、その翌年には七十卷を成し、水戸德川齊昭外六侯に呈した。後更に十卷を增輯して正編となし、次編二十二卷、雜編十二卷、後編三卷、合せて百十七卷を成した。國書刊行會發行のものは、五弓家所藏、編者晚年の校訂本に據つたもので、正編・次編を選んで五册となし、雜編・後編は未だ整理が十分でないために省略されてゐる。

【內容】序によれば最初編者の企圖した所は、天文から明治に至る三百餘年間の事を、三百餘人の筆で記したものを編まうといふにあつた。後、明の焦竑の「獻徵錄」を見て、その

ほぼ新古今調の歌を撰し、同一傾向の歌のみを收めたところから見れば、或る一人によつて成されたものと思はれる。

【研究書】自讚歌抄一卷(寫)東常縁(「正德四壬子三春於長安書之」の奥書がある。自讚歌の註)○自讚歌註三卷(寫)宗祇(文明十六年閏月中旬の奥書がある。)○(宗祇)

猪子巖和歌集類題 しふるわかしふるいだい

【著者】獅子巖涌蓮【成立】遺稿をその寂後四十三年目に、吉田元長が類題撰定したものである【刊行】文化十三年【諸本】近代諸家集(國歌大系)所收。【內容】歌數一千一百餘首、四季・戀・雜の部立によつて類題

時事小說 じじせつ うせつ

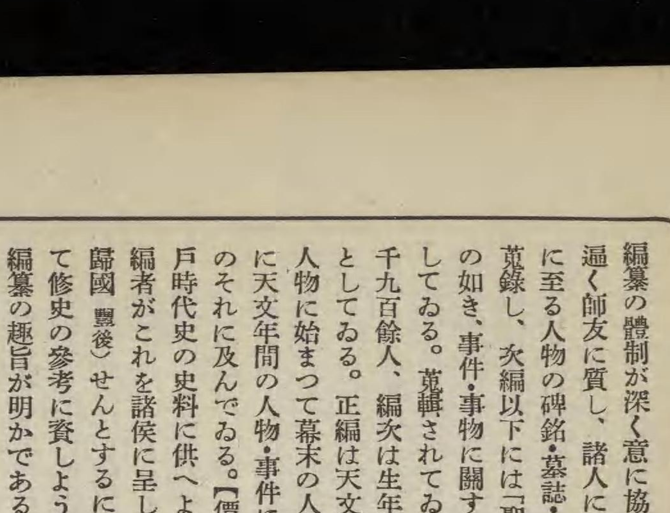
【解說】時事問題を取扱つた小說の意で、明治十年代に現れたその種の一群の小說に與へられた名稱である。內容及び特色は、政治小說(別項)と共通なものがあるが、これは必ずしも政治問題に限らない。

【鷲尾】

編纂の體制が深く意に協ひ、以後講讀の餘暇、遍く師友に質し、諸人に請うて天文以降明治に至る人物の碑銘・墓誌・傳記・行狀記の類を蒐錄し、次編以下には「聖堂再造記」「鐵炮記」の如き、事件・事物に關する篇章をも加へ採錄してゐる。蒐輯されてゐる人物は、すべて一千九百餘人、編次は生年月によるを以て方針としてゐる。正編は天文年間に生存した主要人物に始まつて幕末の人物に及び、次編は更に天文年間の人物・事件に始まつて、明治初年のそれに及んでゐる。【價値】編者の意圖は江戸時代史の史料に供へようといふにあつた。編者がこれを諸侯に呈し、又修史局を辭して歸國（豐後）せんとするに當り、この書を留めて修史の參考に資しようとした上にも、本書編纂の趣旨が明かである。その史料としての價値は近世の人名辭書たる點に存する。但し輯錄されたものは漢文の篇章に限られ、國文のそれは一も採られてゐない。遺漏なきを期する上からいへば憾みなきを得ない。〔西尾〕

獅子舞（ししまひ）　舞踊【別名】太神樂・代神樂・伊勢神樂・神樂獅子【解說】獅子舞、或は獅子踊は、日本各地に行はれ、獅子・龍・鹿・猪等の首を作つて冠つて踊り、凡て等しく「しし舞」と稱してゐる。原始的宗教的意味多く、田樂と結び、五穀豐熟の祈禱又は雨乞ひ、厄除等に頗る多く用ひられ、殊に諸國に流布されること夥しい。起原に就いては伎樂（別項）の獅子舞が日本に渡來したのを以て始めとする解釋が廣く行はれてゐるが、鹿の頭を冠るシシとは、伎樂と關係はないやうである。

【參考】獅子舞考（柳田國男〈修正研究三ノ一〇〇〉近代・舞踊史論（小寺融吉著）〇越後の獅子舞（民俗藝術一ノ七）

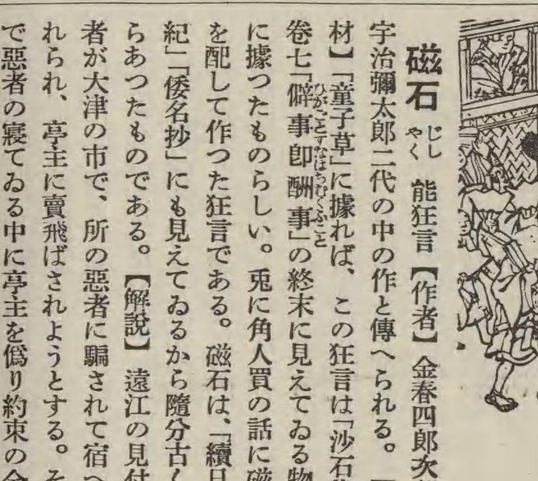


獅子舞（年中行事繪卷）

磁石（じしゃく）　能狂言【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代の中の作と傳へられる。【題材】「童子草」に據れば、この狂言は「沙石集」卷七「僻事卽酬事（ひがごとすなはちむくふこと）」の終末に見えてゐる物語に據つたものらしい。兎に角人買の話に磁石を配して作つた狂言である。磁石は、「續日本紀」「倭名抄」にも見えてゐるから隨分古くからあつたものである。【解說】遠江の見付の者が大津の市で、所の惡者に騙されて宿へ連れられ、亭主に賣飛ばされようとする。そこで惡者の寢てゐる中に亭主を僞り約束の金を貰つて逃げるが、惡者は眼が覺めて追掛け、太刀を抜いて切りかけると、相手は「あゝ〳〵」と言つてゐる。不審に思つて訊ねると、唐と大和との間のちくらが沖にある磁石山の磁石の綉で、金を見るとせい〳〵すると言ふ。そこで太刀を納にをさめると倒れてしまふ。惡者は所詮の玉を取らせてはといふので、枕元に太刀を置いて生き返らせようとする隙に、起き上つて斬りかけ追拂ふといふ筋。寬正の糺河原勸進能番組にも、「ちしやく」と見えてゐる古い狂言である。磁石を取り込んだところが山であるが、磁力の利用は後の歌舞伎十八番の「毛抜」（別項）にも見える。〔龍田〕

慈周（じしう）　詩僧【俗姓】苗村【號】六如・白樓・葛原・無着庵【生歿】元文二年（享保十九年說）近江八幡に生れ、享和元年（一二四六一）三月十日寂す。享年六十五（六十七歳說）【墓所】京都嵯峨長床坊里坊境內、眞如堂境內、大佛養源院境內にも石塔がある。【閱歷】十一歳前大僧慈門に就いて佛學を、彥根の野村東皐に就いて詩文を學んだ。初め比叡山北谷善光院を主り、明和四年一度僧籍を削られたが、安永元年召還され、正覺院に入つた。東叡山公遵法親王に召されて東叡山に留まる。江戸に於ては宮瀨龍門に就いて修辭を學んだ。後、京都眞葛原の惠恩院に閑居し、又愛宕山白雲教寺に住して諸名流と詩社を結び、專ら陸放翁を學び、遂に詩風革新の先驅者となつた。【著作】葛原詩話四卷（別項）〇同後編四卷〇六如庵詩鈔六卷。

【批評】菅茶山が「木（木下順庵）讓（荻生徂徠）二社の詩一時に輝映す。然れども率ね虛飾多くして實際に乏し。子琴（葛飾蠖庵、名は張、字は子琴、浪華の人）・六如、始めて能く之を振ふ。而も孤唱して和するもの寡し。寬齋先生出づるに及び其の徒相踵いで起り、諸州翕然として風靡す」と言つたのは、專ら新詩風を開いた功績を認めた言であつて、菊池五山が「詩に生字（珍奇生硬な語）を用ふるは六如の癖なり。其の人德輝（淸過愛嫁なきにあらずと雖も、然れども本古人のなき所なるを以て、勝つ



二洲筆蹟（黑木安雄氏藏）

字を以て勝らず。六如は則ち字を挾んで勝を鬪はす。僅に以て中人を悅ばすべきも、以て上智を牢籠すべからず。蓋し渠一生詩を讀む。燈市を閱して奇物を覓むるが如し。故に其の著す所の詩話は、只一部の骨董簿を算するのみ。殊に詩話の體を失へり」と言つたのは、專らその弊を指摘した言である。〔佐久〕

二洲（じしう）　儒者【氏名】尾藤孝肇。字は志尹。通稱良佐。【別號】約山・靜寄軒・流水齋【生歿】延享二年伊豫川江邑に生れ、文化十年（二四七三）十二月四日歿す。享年六十九【閱歷】大阪に往き、片山北海に就いて復古學を受け、後、程朱の學に歸し、賴春水・中井竹山・同履軒と親交があつた。寬政中、召されて昌平黌教官となり、柴野栗山・古賀精里（各別項）と併稱して世に寬政の三博士といふ。特に經學・文章に長じた。殊にその文章は、氣韻の高潔を以て知られてゐる。大正四年十一月從四位を贈られた。

【著作】靜寄軒詩文集〇靜寄軒文集〇靜寄軒詩集〇靜寄軒詩文集十

由豆流も相續してゐる（四十二の物語考證）。明治は本書が構想・歌詞等「源氏物語」の各巻の影響を受けてゐると論じてゐる。春秋の爭は、「萬葉」「拾遺集」「源氏」「更級日記」「風雅集」等に見えて物爭の好題目、その競爭意識は早く「古事記」の秋山・春山兄弟の神話にも見出される。影響としては「十番の物爭」、「七十二物諍」（北村季吟の俳諧）などがある。

【註釋書】四十二の物諍考證一巻。山本明清著。文政元年十二月編、翌春刊。「四十二の物爭」の本文を大石千引本（寫）を以て底本とし、他の九本によつて校合し、異本に照して補遺を添へ、頭註に語句を釋し、且つ本書の成立年代・構想・諸本等に就いて考證したもの。同門伊場至清の序、兩人の師岸本由豆流の跋がある。

【參考】近古小説解題　○松屋筆記巻七十八○　世事百談巻四　〔島津〕

四十八癖　しじふはちくせ　滑稽本　四編　【作者】式亭三馬【名稱】性癖を四十八擧げてゐるのではなく、單に無くて七癖有つて四十八癖といふ俚諺に基き、先に「無而七癖酩酊氣質」（別項）を刊行したのに關聯して附けた名稱である。角書に「癖所謂癖物語」とある。【刊行】初編文化九年、二編同十年、三編同十四年、四編同十五年【諸本】滑稽文學全集・三馬傑作集（帝國文庫）・式亭三馬集（近代日本文學大系）所收。

【梗概】初編は、女房をこはがる亭主の癖、亭主を尻にしく女房の癖、萬事を氣にかくる人の癖、通物になりたがる人の癖、何事も苦勞にする人の癖、詞數の多き人の癖、人の非を數ふる人の癖の七種。二編は、幇間めかす素人の癖、大言を吐いて諸道を訓る人の癖並に克く應答をする人の癖、陰で舌を出す人の癖、金を惜む人の癖、金を無くす人の癖、不實者の癖の八種。三編は、他の病氣を頭痛に病む人の癖、他に遊ばれさうなる人の癖、世話を爲過て惡く言るゝ人の癖、面白くない話をする唯の老爺の癖、物に譬て惡言を銜く人の癖、話の度毎に惡地口をいふ人の癖、亭主に負ぬ下卑女房の癖の八種。四編は角書に「癖所謂癖物語」とあつて、拙將棋の癖並に勝たる人の癖、負たる人の癖、我面白の他姦しと言はるゝ人の癖、言語に可咲を含て教諭する人の癖、極樂蜻蛉と呼ばるゝ人の癖の四種。通計二十七種の性癖に關する說話で、會話に依つて類型的描寫をなしたものである。一例を「女房をこはがる亭主の癖」に取つて見る。二人の男が朝歸りしてゐる。一人が頻りに女房の機嫌をこはがる。友は高飛車に出て、こはがらせるに限ると教へて別れる。男はさうする勇氣もないので、輕く我が家の戸を叩く、中で女房は平氣でゐる。そこへ隣の女房が起きて來て、豫て女房同士打合せて置いたので、昨日おかみさんが癪を起して、長家中大騷ぎだつたと騙す。男は驚いて隣の女房に戸を明けて貰ひ、內に入つて女房に詫びる。女房から散々に叱言をくはされる。後で女房達は笑ひこける。すべてかういふ類の描寫である。

【構想】「酩酊氣質」「七癖上戸」に、醉人の性癖のいろ〳〵を寫した作者は、こゝに眼界を擴げて、一般人の中に就いて著しい類型的な性癖を選び、並列的に描寫したのである。これ等の性癖は天性と境遇とから、漸次に凝固して性格らしくなつたもので、これを凝視すれば滑稽に見えることが多い。その甚しく偏したものに至ると、普通人の生活から可なりに隔つて、顚倒を滑稽を感じさせるものもある。作者の着眼はこれ等を捉へて滑稽化するに在る。作者はこれ等の描寫をなすに、二編までは會話に依り、三編以下は獨白を以てしてゐる。會話に依る描寫は、類型的性格を最も印象强くするものであるに相違ないが、作者はそれをも煩冗と感じて、獨白に依る描寫に改めたものであらう。　〔藤村・小柴〕

私聚百因緣集　ししゆうひやくいんねんしふ　說話　九巻　【著者】住信【成立】正嘉元年七月【諸本】承應二年版大日本佛教全書所收。【解說】巻一より巻四までが天竺篇、巻五より巻六までが唐土篇、巻七より巻九までが和朝篇の三部に分けて、百四十七の說話を收錄してゐる。主として全篇を通じて佛教の因果律の說話や本迹の說話である。天竺之部には、天地創造の說話を佛法・王法の由來に關係せしめて說き起し、唱名念佛、往生極樂、因果應報、三寶の靈驗、動物、長者、生贄の說話を載せ、十王の本迹說話で結んでゐる。唐土之部では、三皇五帝の天地創造から、佛法・王法の由來を說き始めて、惠遠・善導・天台智者等の高僧の傳を述べ、動物說話や、風木の嘆、童永、原谷、子安等の故事を列ねてゐる。和朝之部も國土成生より欽明帝の時、佛法渡來の由來を述べ、聖德太子・行基・役行者・傳敎・惠心・法然等の高僧に關係する法力、發心、往生等の說話に及んでゐる。なほ本書の說話は「法華經」「毘婆沙論」「賢愚經」「譬喩經」等の佛典、「孝經」「蒙求」「纂靈記」等の漢籍、「日本靈異記」「往生傳」「扶桑略記」「今昔物語」「寶物集」「發心集」等の說話物に據つてゐる。　〔高島〕

【參考】鎌倉時代文學論新　野村八良　○國文學通史　坂井衡平　○攻證今昔物語集　芳賀矢一

四書（ししょ）　儒教【名義】大學・論語・孟子・中庸（各別項）の四を四書といふ。又一に四子書ともいふ。卽ち「大學」は曾子、「論語」は孔子、「孟子」は孟子、「中庸」は子思の書の意である。又單に學庸論孟、或は學庸語孟ともいふ。【解說】その名稱は朱子が「大學章句」「論語集註」「孟子集註」「中庸章句」を著し、一部の書として公にしたことに始まる。「論語」「孟子」は古來各々別に單行したが、「大學」「中庸」はいづれも「禮記」中の篇として存在し、「大學」は宋以前に別行したものは無く、「中庸」は宋以前に於ては二三別行の本が有つたに過ぎない。「大學」を「禮記」から拔き出して單行せしめたのは、司馬光の「大學廣義」を以て嚆矢とする。「論語」は古來經に列し、「大學」「中庸」は、「禮記」が經に列してゐたために、從つて自ら經に位したが、「孟子」に至つては、北宋の神宗の熙寧年間に、王安石の議を用ひて科擧の法を改正した時に始めて經に列するに至る迄は、諸子の部、儒家の類に列してゐたのである。「中庸」が經に功の有ることは、漢以來の學者も往々これを認めてゐたが、「大學」「中庸」の二編を共に經に功あるものとしてこれを表章したのは司馬光に始まり、二程子に至つて特にこれを詳論し、朱子に至つて遂に舊來の說に從はず、自ら章句を爲つて「論語」「孟子」と合せて別行せしめ、明の永樂年間「禮記大全」を撰した時は、遂に「禮記」中から「大學」「中庸」の二篇を削るに至つた。「孟子」は、程朱がこれを表章し、その人を尊崇したのは別に特殊の理由に本づく。卽ち程朱は佛家が傳燈を言ひ、道家が傳統を尊ぶに對して、堯舜相傳の道は、前聖から後聖に傳へて、道統が儼然として存在することを言はんとして、唐の韓愈が「原道」に於て、堯舜から禹・湯・文・武・周公を經て孔子に傳へ、孔子から子思に傳へ、子思から孟子に傳へ、孟子が歿してからその傳が絕えたと言つた語を取り來つて、これを道統授受の傳系とし、遙に宋代に至つて程明道が現れて、千載不傳の道統を繼ぎ、聖人の道を再び世に明かにせるものとした。卽ち程明道が千有餘年の昔に溯つて、直に孟子の傳を受けたものとしたがために、自ら孟子を尊崇表章しなければならなくなつたので、王安石が經として科目に列したのと、程朱が孟子を表章したのとは、その出發點を異にするけれども、共に相俟つて孟子の地位を高めるに至つた。而して孟子の道が子思から出で、子思の學が曾子から傳へられたので、道統の上から又子思・曾子を尊崇し、その書「中庸」及び「大學」を表章しなければならなくなつた。朱子が「大學」「中庸」「孟子」を論語に配して四書とし、その章句或は集註を作つたのは、道統授受の本源を明かにせんがためであつた。而してその中、「大學」「中庸」の二書は、章の分合を舊本に據らず、專ら己の意を以てしたので、これを章句といひ、「論語」「孟子」の二書は、章句は各々舊本に據り、註解は古人の說を參取し、なほ意を以て補つたので、これを集註と名づけた（論語の章句に、舊本に從はないものが二三あるけれども、大體は舊本に據つた）。訓詁・名物等に關しては、古說を取つた所が少くないけれども、何晏の「論語集解」等の例に從はず、古人の氏名は皆これを沒して著はさず、その義理に至つては、一に程朱一流の理學思想を以てこれを說いた。漢唐の「古註」に對して朱子の註解を新註といふ。朱子は「章句集註」の外に、「四書或問」三十九卷、「論孟精義」三十四卷を著はした。「或問」は「章句集註」を作るに當つて、古人の說の取捨に關する見解を問答體に論述したもので、就中「大學或問」は、朱子の最も力を用ひた得意の作であり、「中庸或問」は、やゝ意に滿たない所があつたが改むるに及ばなかつたものである。この二書は各々章句の末に附けて公にしたけれども、「論語」と「孟子」との「或問」は、朱子が自ら公にしたものでないばかりでなく、その世に出たのを悅ばなかつたやうである。この四者を合せて「四書或問」としたのは後人の作爲である。

【傳來】程朱がこれを表章して、孔門の敎學に於て、文經に先だつて讀むべきものとし、淳熙中朱子が「章句集註」を作つて以來、大に世に行はれた。元の仁宗の皇慶二年、官吏登庸試驗に四書の解義を第一とし、註は朱子を表式とするに至り、次いで明の成祖の永樂十三年、胡廣等に命じて、朱註に關係のある宋儒の說を輯錄して「四書大全」を撰ばしめ、官吏の登庸には必ずこれを循奉せしめた。玆に至つて天下の學者は殆ど悉く四書を以て金科玉條として、これが解義を爲る者も愈々多く、從つて他の經書は多くは顧みられず、經學は却つて萎微不振の境に陷るに至り、淸の顧炎武をして、「經學の廢すること、實に此より始まる」（日知錄卷十八）と歎ぜしめた。淸朝に入つてもその講究はなほ盛んであつた。その我が國に渡來したのは、恐らくは元の僧道隆・祖元・一寧等の來朝の際であらう。僧玄惠が後醍醐天皇に進講するに及んで漸く世に行はれ、僧方秀は和訓を施し、一條兼良は「四書童子訓」を著した。これが我が國に於ける四書註解の初である。僧玄樹は岐陽の誤點を正して大學の慶長四年、勅命に依つて初めて全部を鏤刻した。但し學庸は「新註」を用ひ、論孟は「古註」を用ひた。元和四年、林道春の點本が刊行されて、初めて四書の「章句集註」が完全に鏤刻せられ、次いで寬永二年には文之點が刊行せられ、更に山崎闇齋の校點本が出で、且つ諸藩の敎科書に用ひられて以來、遍く天下に普及し、後、後藤芝山の校點本が出づるに及んで、多くこの書が用ひられ、從來の諸點は殆ど廢して行はれなくなつた。

【註釋書】四書集註十九卷（宋朱熹）○四書或問三十九卷同○四書纂疏二十六卷（宋趙順孫）○讀四書叢說八卷（元許謙）○四書通二十六卷（元胡炳文）○四書大全三十六卷（明胡廣等）○四書蒙引十五卷附一卷（明蔡淸）○四書存疑十二卷（明林希元）○四書淺說十三卷（明陳琛）○四書知新日錄三十二卷（明鄒維岳）○日講四書解義二十六卷（淸庫勒納等）○四書朱子異同條辨四十卷（淸李沛霖）○四書講義困勉錄三十七卷續六卷（淸陸隴其）○四書松陽講義十二卷同○天蓋樓四書語錄四十六卷（淸周在延）○四書釋地一卷續一卷又續一卷三續一卷（淸閻若璩）○四書反身錄八卷（淸李顒）○四書考異七十二卷（淸翟灝）○四書本義匯參四十五卷（淸王步青）○四書摭餘說七卷（淸曹之升）○四書示蒙句解二十六卷（甲村之欽）○四書俚諺鈔十卷（毛利瑚珀）○四書句讀大全六卷（山鹿素行）○四書國字辨四十卷（宇野成之）○四書標記五卷（猪飼彥博）○四書訓蒙輯疏二十九卷（安部井璽）

〔宇野・本多〕

自著（じし）　「花押」を見よ。

字書（じしょ）　「辭書」を見よ。

辭書（じしょ）　言語學【異稱】字書・辭典・字典。〔英〕dictionary, lexicon〔獨〕das Wörterbuch〔佛〕le dictionnire【解說】單語を集め記したもの。通例、未知の語の文字・讀み方・意義等を檢索する實用に供する。併し科學的に考へれば、或る言語團體に用ひられる總ての言語材料を網羅して、これを或る組織の下に記載したものをいふべきである。その組織は色々に立てることが出來る。言語材料（語句）は音聲・文字・意義の三要素（文字の行はれない民族にあつては、音聲と意義との二要素）の連合したもの。科學的に完全なものは、二箇國語以上の言語學的比較辭書であるが未だ出來てゐない。或る一部の書又は一人の著者の全作品中、あらゆる單語を集めたものを特に索引（Concordance）と名づける。Bible Concordance, Shakespeare Concordance. 我が國の「四書索引」「萬葉集總索引」（單語篇）の如きはこれである。これよりも簡單で一篇の

（別項）が新たに出た。「類聚名義抄」に似てゐるが、漢文の註殆どなく、音訓共に假名で示したもので一層日本化してゐる。見出しの偏傍を意義で分類して檢索を容易にした點に新味がある。「倭玉篇」は玉篇式の辭書で、音訓共に假名のみを用ひた最も通俗的のもので室町以後大に行はれた。又漢字の平仄を知らしめるための辭書としては、鎌倉時代に「平地字類抄」（別項）が出でたに過ぎない。科學的以外に出でない。

顧野王）等、文字の意義によつて類別した「爾雅」「釋名」（後漢、劉熙）、「小爾雅」（後漢、孔鮒か）、「廣雅」（魏、張揖）、文字の音によつて類別した「切韻」（隋、陸法言）、「千祿字書」など各種のものがあるが、平安朝の初、我が國でも辭書が作られるやうになつた。卽ち空海の「篆隸萬象名義」（別項）で、字毎に篆書と隸書を出し、且つ反切と意味とを註したもので、說文・玉篇の如

を集め記したもの。通例、末尾の語の文字・讀み方・意義等を檢索する實用に供する。併し科學的に考へれば、或る言語團體に用ひられる總ての言語材料を網羅して、これを或る組織の下に記載したものをいふべきである。その組織は色々に立てることが出來る。言語材料(語句)は音聲・文字・意義の三要素(文字の行はれない民族にあつては、音聲と意義との二要素)の連合したものであるから、音聲・文字・意義をそれ〳〵中心として集める事の三方法がある。從來行はれたのは多く文字を中心とするもので、西洋諸國のABC順、我が國の五十音圖順、又はいろは順の如き、文字の順序に從つて排列する。而して多くは單語の首位に在る文字を標準にするが、又單語の末尾の文字を標準として排列したWalker's Rhyming Dictionary の如きものもある(我が國には、單語の末尾の文字を標準として五十音圖順に排列したものは未だ無い)。字書・字典といふ名稱は、本來こゝに當る筈である。音聲を基にしたものには英語に Michaelis and Jones, Phonetic Dictionary. 佛語に Michaelis and Passy : Dictionnaire phonétique de la langue française がある(我が國には斯の如きものが未だ無い)。意義を基にしたものには、有名な Roget's Thesaurus of English Words and Phrases がある。この外、單語を品詞によつて分類した品詞辭書、語源によつて集めた語源辭書、(例、英語 Skeat : Etymological Dictionary)、一國語内の方言を集めた方言辭書(例、英國の Wright : Dialect Dictionary)等も有り得る。又二箇以上の國語の單語を集めたものは、從來謂ふ所の對譯辭書(例へば、英和辭書・和英辭書等)であるが、多くは實用的以外に出でない。科學的に完全なものは、二箇國語以上の言語學的比較辭書であるが未だ出來てゐない。或る一部の書又は一人の著者の全作品中、あらゆる單語を集めたものを特に索引(Concordance)と名づける。Bible Concordance, Shakespeare Concordance. 我が國の「四書索引」「萬葉集總索引」(單語篇)の如きはこれである。これよりも簡單で一篇の作品等に就き重要な單語を抜き出し註釋を加へたものを glossary と名づける。〔以上神保〕

【日本の辭書】種類としては漢字の辭書と國語の辭書とがあり、その體裁組織から觀れば、漢字の辭書は、漢字を手がかりとして漢字の形(偏傍、字畫など)から引くもの、漢字の意義によつて分類したもの、漢字の音(多くは韻)から引くもの、假名を手がかりとして漢字をその音訓から引くものがあり、國語の辭書は、假名によつて引くもの(その中、假名による正式の書き方から引くものと、發音通りの假名書きとして引くものとある)と、語の意義によつて分類したものとある。漢字の辭書は支那の辭書を用ひたのに始まり、支那で出來た各種類の辭書が傳はり、又日本でもこれに倣つて作られたが、これは各時代を通じて支那の辭書の影響を受ける事が多かつた。國語の辭書は古語の研究が起つてから作られたもので、古代語に偏した嫌があつたが、西洋の辭書に接するに及び、これに倣つて假名引が本體となり、現代の語を多く收め、その體制も組織的になり、又索引などを作つて漢字辭書の用をも兼ねるにいたつた。

【日本辭書の沿革】〔平安朝以前〕平安朝初期迄に傳はつた支那の辭書は、文字の偏傍によつて類別した「說文解字」(漢、許愼)、「玉篇」(梁、顧野王)等、文字の意義によつて類別した「爾雅」「釋名」(後漢、劉熙)、「小爾雅」(後漢、孔鮒か)、「廣雅」(魏、張揖)、文字の音によつて類別した「切韻」(隋、陸法言)、「千祿字書」など各種のものがあるが、平安朝の初、我が國でも辭書が作られるやうになつた。即ち空海の「篆隸萬象名義」(別項)で、字毎に篆書と隸書を出し、且つ反切と意味とを註したもので、說文・玉篇の如く字形で類別してゐる。昌泰年間(一五五八—六一)に出來た「新撰字鏡」(僧昌住)(別項)も亦、字形で分類したものであるが、所々和訓を萬葉假名でつけてあるのは異色がある。承平年間(一五九一—八)に出來た源順の「和名類聚抄」(別項)は、分類體で各部門の下に事物の漢名を出し、これに註と和訓を加へたもので、和語を知るに便利な辭書として永く後世まで行はれた。又菅原是善作の「東宮切韻」と云ふ韻で引く辭書も出來たが、今は傳はつてゐない。院政時代以後になると、「類聚名義抄」(別項)が出て、玉篇式の體裁であるが、意味は片假名で訓をつけて示し、且つ二字以上の熟語をも多く收めて一層日本化し、また實用的になつた。「色葉字類抄」(橘忠兼)(別項)が出て、はじめて漢字を訓(時には音)から引く假名引漢字辭書が出來たが、これは伊呂波四十七部に分つた上に、各部を更に天象・地儀等の諸門に分つて、音引であると同時に分類體を兼ねた新しい形態をとつたものである。又この時代に歌學が盛んになり、古歌の詞が考究されるに及んで、藤原仲實の「綺語抄」、藤原範兼の「和歌童蒙抄」(各別項)のやうに歌語を集めて分類し、これに解釋を加へた國語辭書とも見るべきものが現はれた。

〔鎌倉室町時代〕漢字辭書としては、「字鏡集」(前項)が新たに加つた。「類聚名義抄」に似てゐるが、漢文の註釋どなく、音訓共に假名で示したもので一層日本化してゐる。見出しの偏傍を意義で分類して檢索を容易にした點に新味がある。「倭玉篇」は玉篇式の辭書で、音訓共に假名のみを用ひた最も通俗的のものゝて室町以後大に行はれた。又漢字の平仄を知らしめるための辭書としては、鎌倉時代に「平他字類抄」、室町時代に「新韻集」がある。前者は分類體で各門を平他に分つて漢字をいろは順に列し、後者は先づいろは列として平他を分つた。韻によつて漢字を分類した韻書としては、支那では宋以來、「廣韻」「禮部韻略」「古今韻會舉要」(宋 黃公紹)、「洪武正韻」「韻府群玉」(元 陰時夫)等が出來て、漸次我が國に渡來したが、我が國でも虎關師錬の「聚分韻略」(別項)、「海藏略韻」が現れた。前者は韻によつて文字を分つと共に、同韻の字を更に意味によつて分類したので、檢索に甚だ便利となつて世に行はれ、室町時代に入つては、文明年中に始めて平上去の三韻の同音異聲の字を、上中下三段に重ねて相對照せしめたものが出來、以後三重韻として益々行はれた。「海藏韻略」も「聚分韻略」と大體同體裁であるが、諸書から實例を多く擧げてゐる。室町時代に入つて分類體の漢字辭書としては、「下學集」(文安元年成)、「撮壤集」(飯尾永祥、享德三年成)、「類集文字抄」(各別項)等が出た。共に主として日用の語を漢字で示したもので、「下學集」が最も行はれたらしく、後世にも大きな影響を與へてゐる。同時代に出來たこれと同種の漢字辭書で、假名引の體裁をとつたものに「節用集」(文明以前成)(別項)がある。これは伊呂波引とし、更に各門に分つたものであるが、

その講究はなほ盛んであつた。その我が國に渡來したのは、恐らくは元の僧道隆、祖元・一寧等の來朝の際であらう。僧玄惠が後醍醐天皇に進講するに及んで漸く世に行はれ、僧方秀は和訓を施し、一條兼良は「四書童子訓」を著した。これが我が國に於ける四書註釋の初である。これ以後、我が國に於ける四書註釋の

之〇四書標記五卷 猪飼彦博〇四書訓蒙輯疏二十九卷 安部井襄 〔宇野・本多〕

自署 じし 「花押」を見よ。

字書 じしょ 「辭書」を見よ。

辭書 じしょ 言語學 【異稱】字書・辭典・字典。【英】dictionary, lexicon 【佛】dictionnaire 【獨】Wörterbuch 【羅】lexicon 【希】λεξικόν

著・文明十六年成）はまづ五十音引とし、更に分類したものである（五十音引の辭書として最も古い）。「運歩色葉集」（天文十七年成）、「いろは字」（日我、永祿二年成）は單に伊呂波分にしただけである。これ等は通俗辭書として世に行はれたが、その中でも「節用集」は檢索に便利なため最も盛んに行はれ、室町の末に既に幾つかの異本が出來、また刊行された。國語の語彙集としては、僧上覺の「和歌色葉集」、順德院の「八雲御抄」に、歌に用ひる語を分類體に集めたものがある。これは歌を作るためのものである。長慶院の「仙源抄」（弘和元年成）（別項）は、「源氏物語」の言葉を伊呂波順に並べ簡單な註釋をつけたもので、假名引國語辭書としては、現存最古のものの一つであらう。室町時代の「藻鹽草」の詞の部は、歌語の辭書といふべきであり、「匠材集」（別項）は、連歌詞の辭書で附合に關する事項を擧げたものであるが、これ等はすべていろは引である。

〔江戸時代〕　漢字辭書としては「倭玉篇」がこの期に入つても行はれ、度々改版されたが、また宋時代に改修された「大廣益玉篇」がそのまゝで、又は音訓を加へて覆刻された。明時代になつて始めて出來た書引字書、即ち偏傍の畫數の多少によつて排列した辭書である字彙（梅膺祚）が間もなく我が國にも傳はり、寛文十二年には頭書を施し、假名で音を加へて覆刻された。爾來この體裁に倣つて、「倭玉篇」の類を書引に改めたものが多く出來た。その後清の康熙帝の勅撰に成る「康熙字典」が渡來し、權威ある漢字辭書として我が國でも飜刻され、音訓を附して印行された。誤を求めるものとしては、「聚分韻略」が前代から引續いて行はれ重版された。「洪武正韻」を「聚分韻略」の體裁に改めた「洪武聚分韻」など云ふものも出來、又韻字を求めるに訓の伊呂波引にした「伊呂波韻」の如きものも作られた。漢語を集めて分類し解釋を加へたものに、林道春の「多識篇」（寛永七年刊）、貝原好古の「倭爾雅」（元祿七年刊）、伊藤東涯の「名物六帖」（享保十一年刊）等がある。「下學集」も亦行はれ、「眞草下學集」（寛文六年刊）、「增補下學集」（山脇道圓、寛文九年刊）等も出た。いろは引の漢字辭書には節用集が專ら行はれ、慶長二年の刊行以來、屢々版を重ねたが、「二體節用集」（寛永三年刊）、「眞草二行節用集」（寛文二年刊）は、舊來の節用集に多少の變更を加へたものである。「新刊節用集大全」（僧憲空、延寶八年刊）、「合類節用集」（延寶八年刊）に至つては、從來のいろは引を改めて分類體とし、各門の中を伊呂波別とし、從來の節用集の體裁を根本的に改めた。この種の本では、「增補合類大節用集」（別項）が最も完備したもので後世まで行はれた。しかし舊來の伊呂波引のも廣く行はれ、一方次第に檢索法に工夫を凝し、いろは等の各部を更に假名の數によつて求めるやうにした「長半假名引節用集」（田宮仲宣、文化元年刊）、「いろは節用集大成」（蕙洲、文化十三年成）、「早引永代節用集」（山崎美成、天保十四年刊）等が出來、又和蘭辭書の體裁に倣つて語の最初の假名のみならず第二の假名まで伊呂波順に列ね、その下に門を立て、又本文中に挿畫を加へた「蘭例節用集」（廣川解編、文化十二年刊）の如きも出來た。假名引の國語辭書としては、「歌林樸樕」（松永貞德）、「吳竹集」（寛文十三年刊）、「和歌八重垣」（有賀長伯、元祿十三年刊）等、和歌或は連歌に用ひる言葉・故事等を集めて伊呂波順とし、註解を加へたものが出來た。「鸚鵡抄」（荒木田盛員、貞享二年成）は、語數二萬二千餘に上る浩瀚なもので、同じく伊呂波順ではあるが、語の第二の假名まで伊呂波順に並べた最古の一に屬するものである。然るに、上古・中古の文學の研究が盛んになるにつれ、古語の闡明に努める者多く、これ等の言葉を集めた辭書が出づるに至つた。海北若沖の「和訓類林」（寛永二年成）は、「日本書紀」より「詩經」「文選」に至る類の訓を集めて伊呂波順としたもの、楫取魚彥の「楫の嬬手」（嘉永四年刊）は、「古事記」より「續詞花集」頃までの言葉（主として萬葉集）を五十音順に集めて解釋を下したものであるが、「源語梯」（五井純禎、天明四年刊）の如き源氏物語辭書、「萬葉集見安補正」（池永秦良補正、寛政八年成）の如き萬葉集辭書も出た。谷川士清は言語に對して一見識を有し、單に歌語、或は上代・中古語に限らず俗語方言等をも採錄して「和訓栞」（別項）を著はした。五十音順に語を並べ解釋を加へたもので、辭書としての體例を備へた最初のものと云ふ事が出來る。「語林類葉」（清水濱臣）は、中古語を五十音に集めてゐるが、註解は附されてゐない。石川雅望の「雅言集覽」（別項）は歌文を作る際に所謂雅言を誤りなく使ふやうに、中古文學に於ける用語例を豐富に示したもので、解釋は甚だ簡單である。「俚言集覽」（別項）は、當時の江戸を中心とした方言・俗語を集めて註解を加へたものである。而もその語の排列法は他と異り、五十音の段の順にしたものである。これより以前、寛政四年に刊行された「詞葉新雅」（富士谷御杖）は、俗語から雅言を引く事の出來る辭書で、主として歌を作る人の參考に資せられたものであるが、その後、古語或は雅言に當時の俗語で譯をつけて古書の讀解に便したものが多く作られた。鈴木朖の「雅語譯解」（文政四年刊）、河崎淸厚の「雅言童喩」（天保十五年刊）、鹿持雅澄の「古言譯通」（天保八年成）等はその主なものであり、「言葉の數波」（足代弘訓、天保十二年成）は、これ等の俗語對譯の雅言辭書の類を集大成しようとしたものらしい。その後にも「古言譯解」（萩原廣道、嘉永元年成）等が出てゐる。これ等の雅俗語對譯辭書は實用的なもので、多くは伊呂波順を採用してゐる。複並隆璉の「雅言通載」は、「古事記」「日本書紀」等を初として、「遊仙窟」「新撰字鏡」「眞名伊勢物語」「東鑑」等に至る漢字で書かれたものに見える訓を集めたものであるが、排列には挿頭・裝・脚結と品詞によつて大別し（この品詞別は、富士谷成章の說に從つたもの）、各部を五十音順に並べたもので頗る特色がある。「雅言通載抄」（城戸千楯、文久元年刊）はこの書の抄錄である。以上は一般辭書であるが、特殊的なものとして、この期の初めに當つて語源辭書が作られた。松永貞德の「和句解」（寛文二年刊）、貝原篤信の「日本釋名」（元祿十三年刊）、新井白石の「東雅」（別項）等である。又假名遣を知るための辭書としては、所謂定家假名遣を辭書體に編纂した「類字假名遣」（荒木田盛徵、寛文六年刊）、「倭字古今通例全書」（橘成員、元祿九年刊）等があり、又契沖が新しい歷史的假名遣を提唱してからは、楫取魚彥の「古言梯」（別項）を初めとして、その假名遣辭書が多く作られた。その他唯一の方言辭書として越谷吾山の「物類稱呼」（別項）が安永四年に刊行された。又支那に於ける類書の影響を受けて百科辭書とも云ふべきものが出た。寺島良安の「倭漢三才圖會」（正德二年成）、淺井奉政の「事彙」、山岡俊明の「類聚名物考」、高橋宗直の「寶石類書」、僧大典の「皇朝事苑」、喜多

村信節の「嬉遊笑覽」等があり、幕命で屋代弘賢等が編纂した「古今要覽稿」は未完成であつたが、頗る大部なものである。

〔明治以後〕　漢字辭書としては、初めは舊來の玉篇式の字書や「康熙字典」などが用ひられたが、後には主として「康熙字典」等に基き、これに國字を增し、音訓や意義を註し、且つ熟語を列擧したものが多く出た。「漢和大辭典」（三省堂編輯部、明治三十六年刊）、「註解漢和大字典」（諸橋轍次、大正十年刊）、「新字典」（金澤庄三郎、大正十年刊）、「漢和大字典」（服部宇之吉、大正十一年刊）、「漢和大辭典」（簡野道明、大正十一年刊）、「漢和大字典」（藤堂明保、昭和十年刊）、「漢和大辭典」（諸橋轍次、昭和十年刊）等がある。「漢和大辭典」は收錄語數約五萬語、「漢和大字典」は約三萬九千餘語を收錄してゐる。「言海」が印行される前、既に二三の辭書が現れてゐる。近藤眞琴の「詞の園」は明治十八年に刊行されたが、主として平家物語頃までの言葉を集めたもので、全文假名書である。物集高見博士は、曩に「日本小辭典」を著はし、主として用言を集めたが、同二十一年に「詞のはやし」を刊行した。主として古書の解讀に便したものであつた。これに反して、外に外來語を加へて約三萬九千餘語を收錄してゐる。「言海」が印行される前、既に二三の辭書が現れてゐる。近藤眞琴の「詞の園」は明治十八年に刊行されたが、主として平家物語頃までの言葉を集めたもので、全文假名書である。物集高見博士は、曩に「日本小辭典」を著はし、主として用言を集めたが、同二十一年に「詞のはやし」を刊行した。主として古書の解讀に便したものであつた。これに反して、體例・語數等に於て、從來のものよりは遙に優れたものである。大正十年から昭和四年にかけて、芳賀矢一博士改修の「日本大辭典言泉」が刊行されたが、この書は「言泉」の最初の態度を踏襲したもので、收錄した語は各方面に亙り、語數も亦最も多いが、學術的と云ふ點では寧ろ「大日本國語辭典」の方が優れてゐる。金澤庄三郎博士は「辭林」を增補して「辭苑」とある。【諸本】群書類從卷二一

る。又佛教・國史等の各科の辭典や人名・地名等の辭書も幾つか刊行された。【以上橋本】

自笑（じせう）　「八文字屋自笑」を見よ。

次將裝束抄（じしやうしやうぞくせう）　有職　一卷

【著者】藤原定家　【異稱】定家裝束抄、夜鶴裝束抄　【成立・由來】文應元年五月十五日左權少將の奥書の中に、「此鈔者定家卿書ニ出之ヲ、授ケ子息ニ畢ンヌ」とある。【諸本】群書類從卷二一

特別節の二篇追加增補に等がある。幕命で幕府儒官が編纂した「古今通俗書籍目」は未完成であつたが、頗る大部なものである。

〔明治以後〕漢字辭書としては、初めは舊來の玉篇式の字書や「康熙字典」などが用ひられたが、後には主として「康熙字典」等に基き、これに國字を增し、音訓や意義を註し、且つ熟語を列擧したものが多く出た。「漢和大辭典」(三省堂編輯部、明治三十六年刊)、「註解漢和大字典」(服部宇之吉・小柳司氣太、大正五年刊)、「大字典」(上田萬年・岡田正之・島崎忠夫・榊田猛猪・飯田傳一、大正六年刊)、「字源」(簡野道明、大正十二年刊)等はその主なもので、何れも書引であるが、中には檢索法に新工夫を凝らしたものも現はれた。「五段排列漢字典」(露人、オ・ロゼンベルグ、大正五年刊)は、漢字を運筆の方向によつて五段に大別し、一々の文字の右下線によつて排列し、「線音雙引漢和大辭典」(後藤朝太郎・上野三郎、明治四十四年刊)は、字音によつて漢字を五十音順に排列し、索引として漢字の形を作つてゐる線の數によるものを附した。なほ節用集式のいろは引漢字辭書も作られた。國語辭書としては、維新後間もなく、文部省は木村正辭及び横山由清の兩人總裁の下に岡本保孝・小中村清矩・榊原芳野・黒川眞頼・間宮永好・塙忠韶の六人をして「語彙」を編纂せしめ、明治四年に阿之部を、同十四年に伊之部・宇之部を刊行したが、以後中絶した。文部省では更に大槻文彦(別項)に命じて一の國語辭書を編纂せしめた。同十九年稿成つて「言海」(別項)と名付けられ、同二十四年に印行された。この書は英語辭書に做つて作つたもので、語毎に發音、品詞別、解釋、引例、語源を擧げ、近代的な辭書としての體例を備へた最初のものであり、普通の和漢語の外に外來語を加へて約三萬九千餘語を收錄してゐる。「言海」が印行される前、既に二三の辭書が現れてゐる。近藤眞琴の「詞の園」は明治十八年に刊行されたが、主として平家物語頃までの言葉を集めたもので、全文假名書である。物集高見博士は、曩に「日本小辭典」を著はし、主として用言を集めたが、同二十一年に「詞のはやし」を刊行した。主として古書の解讀に便したものであつた。これに反して、高橋五郎の「和漢雅俗いろは辭典」(明治二十二年刊)は、通俗語・漢語を主として擧げてゐる。同二十五年には、山田武太郎の「日本大辭書」が出た。編者は辭書として備へるべき條項として音調が缺くべからざるものであることを主張し、當時の東京語のアクセントによつて一々音調を記入した。同二十七年には物集高見博士の「日本大辭林」(「ことばの林」を增補したもの)が出た。同三十一年に刊行された落合直文の「ことばのいづみ」になると、固有名詞や日清戰爭當時の新語をも收めてその語數が多くなつてゐる。後、明治四十一年にその增補版が出た。同四十四年には金澤庄三郎博士の「辭林」が出て、普通語を多く含む簡便な辭書として世に行はれた。大正元年に至つて芳賀矢一博士の「新式辭典」が出た。假名引であるが、漢字の音訓を知らなくとも檢出し得るやうに、漢字書引索引を附したのが新しい點である。同四年には「ローマ字で引く國語辭典」(上田萬年博士)、「ローマ字索引國漢辭典」(榊田猛猪・近藤久吉)の如くABC順に排列したものが刊行され、同六年にも「ABCびき日本辭典」(井上哲次郎博士等)が出た。大正四年から八年にかけて(索引一册は昭和四年刊行)、上田萬年博士・松井簡治博士共著の「大日本國語辭典」(別項)が刊行された。體例・語數等に於て、從來のものよりは遙に優れたものである。大正十年から昭和四年にかけて、芳賀矢一博士改修の「日本大辭典言泉」が刊行されたが、この書は「言泉」の最初の態度を踏襲したもので、收錄した語は各方面に亙り、語數も亦最も多いが、學術的と云ふ點では寧ろ「大日本國語辭典」の方が優れてゐる。金澤庄三郎博士は「辭林」を增補して「廣辭林」を大正十四年に刊行した。特殊的な辭書としては、外來語を集めた「日本外來語辭典」(上田萬年・高楠順次郎・白鳥庫吉・村上直次郎・金澤庄三郎、大正四年刊)等があり、隱語を集めた「日本隱語集」(稻山小長男、明治二十五年刊)、難讀の語を彙集した「難訓辭典」(井上頴閲、明治四十年刊)、類義語を集めた「日本類語大辭典」(志田義秀・佐伯常麿、明治四十二年刊)、諺を集めた「諺語大辭典」(藤井乙男、明治四十三年刊)、漢語の故事熟語辭典である「故事熟語大辭典」(簡野道明、明治四十年刊)、「故事熟語大辭典」(池田四郎次郎、大正二年刊)等がある。また或る古典又は或る時代に現はれた單語を集めた辭書も現はれた。「萬葉集辭典」(折口信夫、大正八年刊)、「元祿文學辭典」(佐藤鶴吉、昭和三年刊)、「近松語彙」(樋口慶千代、昭和五年刊)、「日本古語大辭典」(松岡靜雄、昭和四年刊)等である。百科辭典式のものとしては、舊來の體例に倣つたものでは、明治十二年に編輯に着手し、大正三年に完成した「古事類苑」(別項)、物集高見の「廣文庫」(別項)がある。又西洋の百科辭典の體例に從つたものとしては、「日本社會辭彙」(經濟雜誌社、明治二十三―四年刊)、「家庭百科辭彙」(芳賀矢一・下田次郎、明治四十一年刊)、「日本百科大辭典」(三省堂、自明治四十一年至大正八年刊)、「國民百科辭典」(富山房、明治四十一年刊)等がある。又佛教・國史等の各科の辭典や人名・地名等の辭書も幾つか刊行された。〔以上藤本〕

自笑(じせう)**「八文字屋自笑」**を見よ。

次將裝束抄(じしやうしやうぞくせう)　有職　一卷

【著者】藤原定家　【異稱】定家裝束抄、夜鶴裝束抄　【成立・由來】文應元年五月十五日左權少將の奥書の中に、「此鈔者定家卿書ニ出之ヲ、授ケ二子息一ニ畢ンヌ」とある。【諸本】群書類從卷一一七裝束部六所收　【解說】近衞次將の裝束を記したもので、節會、行幸、元三三日、御齋會佛名等の出居、射禮、賭射、弓場始、春日祭使參內幷社頭裝束、臨時祭使、賀茂祭使、五節、追儺等、又非常警固事等の項目に分けてある。

自笑樂日記(じせうたのしみにつき)　浮世草子　五卷

【作者】八文字屋自笑・同其笑の署名がある。　【刊行】延享四年正月、八文字屋八左衞門板。　【諸本】其蹟自笑傑作集下卷(帝國文庫)所收。　【解說】自笑署名の最後の書である。本書の序のうちに、「僕(やつがれ)わかゝりしより狂言綺語を草紙にあやなせる事數十部、九十歲にちかき長壽、筆とることもいたづき、多くは其笑に物ずきして書せしに、今是を書納めと思ひ、云々」とあれば、自笑の發案、其笑の執筆に成るものであらうか。また本書の末尾に、自笑の肖像畫と跋を附し、子其笑、孫瑞笑を紹介し、以後の作物はその筆になるべきことを記してゐる。本書の內容は御家騷動風のものである。攝津の長者山蔭實高は妾腹の娘の行方を知るために、その搜索を忠臣揚羽蝶三郎と惡臣九曜星右衞門に命ずる。兩人は離れ離れに諸國の遊里をめぐつて尋ねる。然るに蝶三郎が泉州堺の遊里でなじんだ遊女唐花が主君の息女なることが判り、連れ歸つて夫婦となり、惡

臣を滅して、山蔭の家は長者の息子數松に繼がせ萬々歳となるといふのである。その内容は從來の通りで、異色もないが、序跋の文や、各巻の小題に舊作物の題名をよみ込んであるところなどに、自笑老後の思出を籠めたものと見られるのである。

【參考】八文字屋物研究　水谷不倒（日本文學講座）

○帝國文庫解題　【吉田】

しじら物語　「蛤の草子」を見よ。

地震加藤　「增補桃山譚」を見よ。

柿晋問答　俳論　一册　【著者】向井去來【名義】落柿舍去來と晋子其角との問答の謂である。【成立】史邦の小文庫（元祿九年三月刊）を引いてゐるから同書以後の成稿であらう。刊年不明。【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）・蕉門俳話文集（俳書大系）所收。【由來】自序によると其角が上洛（元祿七八年か）して暫く著者の寓居に滯留した折の、兩者の對談を筆錄して後日の心覺えとしたのが本書であるといふことになつてゐる。が、もと同じ著者に「花實集」と題し乾坤二巻から成る俳論書がある。乾巻は「柿晋問答」と同じ内容であり、坤巻は其角・去來の兩吟及び秋色女等の發句である。「花實集」は、風窓湖十の序によると、其角門の晋岑の家に傳はり、晋岑の孫歡雷の代に野菊庵秋色女と共編して安永四年に上梓したものである。前述の自序は、この「花實集」に附せられたもので、即ち「柿晋問答」は、「花實集」乾巻に著者の序を併せ、「花實集」の板木を利用して（序の柱に「花上序」とあるのは、「花實集」の板木の柱が削り殘されたものである）、單獨に刊行したものである。なほ本書には武陵隱士なる人の序を附けたものもある。その序は傳來の次第には一切觸れず、ただ本書は不思議に傳へられて今日に至つたのを、これが序を記して始めて梓行するのだといふことが書かれてゐる。が、これは「花實集」の巻頭の序にそのまゝ當てはめたものに外ならない。

自笑日記

【内容】本文は、著者と其角とが俳諧上の諸問題に關する師芭蕉の教を慕うて、これが解説をなし、また芭蕉を初め蕉門俳士の發句等に關する見聞を記したもので、大體に於て著者と其角との對談のまゝを問答體で記した形式になつてゐる。但し所々に著者とその弟魯町との問答、或は其角とその門下の尺草との問答を記してもゐる。而して玆に取扱はれた問題は、不易流行論・新古論の如きを主要なものとし、蕉風と他流との相異點、發句の案じ方、發句の善惡、無季の句、發句と附句との境、附句の附方、一巻の法式の諸問題その他亙細に亙つてゐる。これ等の内容は、同じ著者の「去來抄」（別項）と非常に密接な關係がある。即ち本書にあるのと殆ど同一の文章を以て、同一の事象の「去來抄」に説かれてゐるものが多い。隨つて本書を基礎として「去來抄」が成つたのでないかと推する人もある。兎に角本書に其角曰とあるもので、「去來抄」に去來曰としたものもあるから、兩書ともこの事を注意して讀まなければならない。本書の體裁は、單に巻頭に著者の仲冬下浣の序があつて本文に入つてゐるが、別に武陵隱士の序を有するものは、著者の序の前にこれを掲げてゐる。

【價値】蕉門の高弟たる著者と其角とが、師より承けた教を畏み、互に見聞した所を書き附けたものであるから、蕉風俳論の研究には十分信用の置ける書物である。同時にこれには其角及び著者の解釋が加はつてゐるから、この點を取り出していへば、又兩者の信念・理想を窺ふべきもので、而もその方面の研究資料としても主要なものである。　【各務】

靜歌　歌謡　【名稱】靜かに歌ふ歌の意。「靜」の語義については、靜御前・靜歌ハシテ・靜ノ舞等の諸説があるが、神樂歌に早韓神閑韓神あり、神樂歌裏書に、「宮人・木綿志天・前張此三首各志川歌」とあるのによれば、靜歌の意となすべきである。【出典】「古事記」仁德の條に、「志都歌之歌返（返歌とも記す）」七首。「古事記」雄略の條に、「志都歌」五首。「琴歌譜」に「伎都歌」一首出づ（古事記に出た歌と同じ）。【解説】雅樂寮で教習した大歌の一で、雄略の條にある五首の靜歌の中、四首は短歌形式である。この四首は、天皇と引田部赤猪子との贈答に係り、他の一首はをと姫の天皇に奉つた歌で、宇岐歌に對する歌となつてゐる。その歌は

安見しし　わが大君の朝戸には　いより立たし
夕戸には　いより立たす　脇づきが　下の　板にも
がも　あせを

と云ふ十句形式であるが、「夕戸には　いより立たす」と云ふ對句の部分は省略する事が可能で、記紀の歌謡中にはその例を散見するから、この對句的反復詞の部分を暫く勘定の中に入れなければ、この歌は短歌形式の結尾の部分が變化した形で、天田振（別項）にも全く同じ形の歌があるから、これは何れも短歌形式と認めてよい。次に「靜歌の歌返」の方は、

山代に　いしけ鳥山　いしけ〳〵　あが愛し妻に
いしき會はむかも

の如く短歌形式の歌もあるが、

三諸の、その高城なる　大ねこが原　大猪子が
腹にある　肝向ふ　心をだにか　相思はずあらむ

の如く、片歌形式と短歌形式の結合せる宇岐歌と同じ形式の歌もある。その他種々の形式が交雜してゐるが、この形式の種々異れるところが、歌返と云はれる歌の特徴であらう。而して大體に於て靜歌の歌返は、短歌形式に

四條大納言　「公任」を見よ。

四條派　「月溪」を見よ。

自照文學　「文學の分類」を見よ。

詩訟蒲鞭　漢文　一巻　【著者】雨森宗眞（牛南）【刊行】天明五年四月　【解説】山本北山は、荻生徂徠一派の徒が李王の古文辭を唱へたのに反對して、袁中郎の清新を唱へ、「作詩志彀」を著はした。時に佐久間熊水といふ者が、「討作詩志彀」を著はしてその誤を指摘したので、牛南（別項）は、更にこの書を著はして反駁した。每項先づ北山の「志彀」の文を揚げ、次に熊水の文を摘錄して反駁を加へたもので、一々古書を引いてこれを證し

賤のをだ巻　隨筆　一巻　【著者】森山某【諸本】活東子の「燕石十種」に入れられて寫本で行はれてゐたが、明治四十年國書刊行會の同書巻一に收められた。【解説】元文頃から安永頃までの約四十年間に著者の見聞した江戸市井の風俗を記述したもので、

装飾的の部分が附加して、形式が増大したものと思はれるから、短歌形式のところは靜歌で、裝飾的の部分が卽ち歌返と云ふ名稱の付せられた所以の箇所と思はれる。又、

枯野を　鹽に燒き　しが餘り　琴に造り　搔き彈くや　由良の門の　門中の　いくりに　觸れ立つ　なづの木の　さや〳〵

だけは複雜した形式であるが、四言五言の句が多い。これと似た形式の歌は、「古事記」應神の條にある吉野の國巢の歌つた歌、

品太の　日の皇子　大雀　大雀　佩かせる太刀　本劍　末ふゆ　冬木のす　からが下樹の　さや〳〵

で、矢張り四言五言の句が多く、「さや〳〵」と云ふ結尾句を持つてゐる。この國巢歌とも云ふべき風俗歌の一種は、また靜歌の歌返で歌はれたものかも知れない。〔藤田〕

靜　しづか　幸若舞曲（番外）一卷　【作者】未詳　【別稱】靜物語　【成立】室町期　【諸本】古板本は明曆四年板（山田市良兵衞開板）。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五近古篇に載せてある。繪卷としては飛鳥井榮雅入道女一位局書畫一筆と傳へるものがある（考古畫譜）。【題材】判官物（義經傳說）。靜の鎌倉下り、出生の男子を殺さるゝ事及び鶴ケ岡の舞樂の史實（何れも吾妻鏡卷五所載）を本として潤色したもの。「義經記」卷六と同材。舞樂の事は謠曲「鶴ケ岡」「安達靜」にも作らる。本曲で靜が「源氏物語」を說き、「伊勢」の奧義を講ずるは興味ある時代色。

【梗概】梶原景時が上洛して靜の行方を索めた時、恩賞に目の昏んだ阿古屋（靜の母磯禪師の召使）は、その隱れ家深草の淨土寺に討手を導き、賞を請うて却つて主を賣る罪に問はれ、洛中を引廻された末鏡川に沈められた。繼へられた靜は近く住む聖僧を迎へ戒を受けて寺を出で、鎌倉に送られ賴朝の面前に据ゑられたが、源氏六十帖を引いて我が身を卑ち、賴朝をいつまで草に比してその怒を買つた。時に靜は身重なので、景時は胎內探りをして義經の後を絕たうとするのを、磯禪師から賴朝の御臺所に乞うて赦され、土肥次郎實平に預けられて男子を生んだが、子供は賴朝の下知により、景時の子景季が由井ケ濱の波に投じてしまつた。靜は御臺所に「伊勢物語」の奧義を講じ、若宮八幡の御前に舞つて賴朝から駿河國蒲原八十餘町を賜つたが、鎌倉中の社寺に寄進して上洛した。

【影響】特に靜の「胎內探り」の傳說は、民間習俗の一反映でもあるが、金平本「義經記」を經て、近松の「嫗山姥」「靜胎內捃」（別項）に於て完全な形を見ると共に身替說話を派生せしめた。松貫四の「吉野靜人目千本」も亦その改作で、靜に代へるに卿の君を以てしてゐる。召使阿古屋の名は「景淸」（別項）の阿古王と合體して、「壇浦兜軍記」の阿古屋となつたのであらう。〔島津〕

【參考】訂正增補考古畫譜卷六

靜物語　「靜」を見よ。

靜物の謠曲　【曲目】世阿彌が「能作書」に、女體能の代表的な例に擧げてゐる靜御前を主人公とした現行曲に、「吉野靜」「二人靜」があり、前ジテを靜としたものに判官物（別項）の「船辨慶」がある。【諸本】現行諸流謠本・校註謠曲叢書（芳賀・佐佐木校訂）・日本文學大系・國民文庫・謠曲三百五十番集（日本名著全集）・謠曲大觀所收。

【吉野靜】三番目　【作者】世阿彌（能本作者註文）とも觀阿彌（二百十番謠目錄）ともいふ。〔內容〕佐藤忠信（ツレ）と靜御前（シテ）とは、義經一行を吉野山から無事逃れさせるために、豫め打合せて置いて、まづ忠信は都道者を裝うて、衆徒（狂言）に賴朝と義經とは仲が直るらしいといつて油斷させ、又義經主從は僅か十二人だが非常に强いからと恐れしめる。一方靜は舞裝束をして待つてゐて、やがてこの都道者に勸められた態で、美しい舞を舞つて、衆徒に時を過させ、かくて巧みに目的を達したといふ曲。〔題材〕靜の舞は「義經記」卷五「靜吉野山に捨てらるる事」に據つたのであるが、忠信との計略は謠曲作者の創作である。

一段劇能。觀世・寶生・金春・金剛現行。

【二人靜】三番目　【作者】世阿彌（能本作者註文、二百十番謠目錄）　【內容】吉野勝手の神職（ワキ）に命ぜられて、女（ツレ）が菜摘川で正月七日御神事の菜を摘んでゐると、一人の女（前ジテ）が來て、社家の人々に一日經を書いて、私の跡を弔ふやうにいつてくれ、もし疑ふ人があれば、その時そなたにのり移つて、わが名を名のらうといつて立ち去る。菜摘女が歸つて神職にこの事を話し、本當らしくも思はれませんがといふや否や、狂亂に陷つたので、神職は驚いて色々尋ねると靜の靈がのり移つてゐるのであつた。それで神職が、この女に靜の舞を所望すると、靜の亡靈（後ジテ）自身も現れて、こゝに二人靜が出來上り、二人が相共に昔語りをして舞を相舞ふといふ曲。大體謠曲作者の創作したもの。劇的夢幻能。五流現行。

【構想】二曲とも、作者の工夫した所の多い類型を離れたものであるが、「二人靜」のやうに、亡靈の憑いた現實の人間と、亡靈の實體とが相舞を演ずるといふ構想は、全く他に例のない面白い工夫である。

【參考】謠曲評釋（大和田建樹）　謠曲大觀（佐成謙太郎）

賤のをだ卷　しづのをだまき　隨筆　一卷　【著者】森山某　【諸本】活東子の「燕石十種」に入れられて寫本で行はれてゐたが、明治四十年國書刊行會の同書卷一に收められた。【解說】元文頃から安永頃までの約四十年間に著者の見聞した江戶市井の風俗を記述したもので、聲曲、服裝、婦人の頭飾、喫烟具、游藝人、俳優等に係る事が多い。たぶさしの項より武術の話の項までの五十六項を收め、所々に圖畫を挿む。享和二年の自序がある。〔和田〕

靜の舍歌集　しづのやかしふ　歌集　一卷　【著者】加藤宇萬伎　【成立】門人上田秋成が、寬政元年師の十三回忌にあたり、短歌八十首、長歌二首を選出し編輯した。【諸本】古刊本を見ず。續日本歌學全書第二編・近代諸家集第一（國歌大系）所收。【歌風】作者は、千蔭・春海・魚彥と共に、縣門四天王に推賞されてゐる。八十餘首を載せた本集以外に、歌集の傳へられぬのは遺憾である。次の數首は遒勁の格調に富む秀歌として世に推されてゐるが、一般の作風は、寧ろ「萬葉」と「古今」の中間調と見做すべきであらう。

春がすみ立たるを見れば　ぐぐもりし神代の昔思ほゆるかも

いぶき山いぶく朝風吹きたえてあふみは霧の海となりぬる

わづかに二首だけ本集中に採られてゐる長歌も、さすがに優秀であると云ふべきである。詠道と云ふ方は、特に彼の面目を發揮してゐる。（宇萬伎參照）〔齋藤（淸）〕

賤機　しづはた　小說　【作者】川上眉山　【發表】明治二十六年五月より讀賣新聞に連載。

【刊行】明治四十二年、眉山全集(春陽堂)所收。

【梗概】利根川を溯つた幽靜の境に、東京松浦家の別莊の番人として二十一歳の與作は、ただ一人淋しく暮してゐた。そこへ靜養のために來た美人があつて、魚釣に餘念なき與作に話しかけたのが緣になり、次第に親しくなつて、或る時は松浦の別莊を見たり、附近の名勝を與作に案內させたりした。その美人は後に花房子爵夫人綾子と分つたが、一本氣の與作はいつの間にか彼女を戀し、親切に世話してくれる緣談を拒んで上京した。途上綾子の輕快な馬上姿を見て胸の悶えを告げると、綾子は驚いてその不心得を諭し、旅費をやつて歸さうとしたが承知せず、せめて身近く置いて貰ひたいと請うてやまぬので、下僕として雇入れることになつた。或る日、與作は綾子の肖像畫を見出し、思ひ餘つてそれを持つて立去らうとするところを綾子に見付けられ、心から詫び入つた。が、綾子はそれを咎めず、貴族生活の虛僞を語ると共に、與作の至情に心を動かしたことを述べ、爾後、弟として交際したいが、それには懸命に勉强して出世せよと資金を與へた。それから五年の後、綾子をモデルに「美人舟遊の圖」を畫いて展覽會で大評判を取つた無名の畫家がある。それは與作であつた。綾子はその畫家からその繪を贈られたが、肝腎の與作は來なかつた。綾子の心は淋しかつた。

【批評】身分の違ひを顧みないで、一圖に綾子を戀する與作と、世間の思惑を少しも考慮しないで與作に接近する綾子とを對照して、暗に貴族社會の因襲的弊害を諷したところに、この作の興味がある。が、餘りに空想にすぎて現實味に乏しく、(後略)

賤機帶(しづはたおび)

【高須】

【梗概】利根川を溯つた幽靜の境に、東京松浦家の別莊の番人として二十一歳の與作は、ただ一人淋しく暮してゐた。そこへ靜養のために來た美人があつて、魚釣に餘念なき與作に話しかけたのが緣になり、次第に親しくなつて、或る時は松浦の別莊を見たり、附近の名勝を與作に案內させたりした。その美人は後に花房子爵夫人綾子と分つたが、一本氣の與作はいつの間にか彼女を戀し、親切に世話してくれる緣談を拒んで上京した。途上綾子の輕快な馬上姿を見て胸の悶えを告げると、綾子は驚いてその不心得を諭し、旅費をやつて歸さうとしたが承知せず、せめて身近く置いて貰ひたいと請うてやまぬので、下僕として雇入れることになつた。或る日、與作は綾子の肖像畫を見出し、思ひ餘つてそれを持つて立去らうとするところを綾子に見付けられ、心から詫び入つた。が、綾子はそれを咎めず、貴族生活の虛僞を語ると共に、與作の至情に心を動かしたことを述べ、爾後、弟として交際したいが、それには懸命に勉强して出世せよと資金を與へた。それから五年の後、綾子をモデルに「美人舟遊の圖」を畫いて展覽會で大評判を取つた無名の畫家がある。それは與作であつた。綾子はその畫家からその繪を贈られたが、肝腎の與作は來なかつた。綾子の心は淋しかつた。

【批評】身分の違ひを顧みないで、一圖に綾子を戀する與作と、世間の思惑を少しも考慮しないで與作に接近する綾子とを對照して、暗に貴族社會の因襲的弊害を諷したところに、この作の興味がある。が、餘りに空想にすぎて現實味に乏しく、(後略)

角田川（長唄正本）

【解說】所作事　狂亂物

書卸しの一中節では、五月雨雲の晴間ない季節になつてゐる所から、雲の帶を利かせて、駿河の賤機山に通じた名題であつたものが、長唄に書き替へられてからは、季節も春になつて名題は內容と全く無意味になつた。【沿革】梅若丸の傳說による隅田川の狂言は、古くから各種の樣式に於て屢々脚色されて來たが、後世の歌舞伎の所作事に影響した古い作は、享保七年江戸市村座上演、河東節・一中節掛合の「隅田川舟の中」に次いでは、一中節「尾上の雲賤機帶」(後出)であらう。後の隅田川物の原據ともいふべきものである。次に主要曲目について述べて見よう。

【尾上の雲賤機帶】【通稱】賤機　【初演】寬延四年四月、江戸森田座「祐經扇系圖」第三番目。作詞、麥越二三次。曲節、一中節。太夫、都秀太夫千中。作曲、宮崎忠五郎。振附、村上常五郎【傳來】曲のみ傳存【題材】謠曲の「隅田川」に「櫻川」を加へ、作曲風にくだいた物。「角田川」と「梅花王劇場番組」の相違は、後者は、

我が子が人商人に誘拐されて、隅田川のほとりを狂ひ廻るのを、里の子三太郎(松島茂平次)が、初めは囃したてたが、終には哀れを催して祈禱のために念佛踊を踊つて、その子の行方を尋ね歩く。

【八重霞賤機帶】【通稱】賤機　【初演】文政十一年六月、江戸山王祭禮の踊屋臺用として作られたもの。明治二十五年七月、東京鳥越座で、增補して中幕「賤機帶班女物狂」として上演。班女(市川新藏)、舟人(市川壽之助)。曲節、長唄。作曲、四代杵屋三郎助【傳來】曲・振共現存【題材】一中節の「賤機」と河東節の「常陸帶花柵」とを基礎とした。【內容】隅田川の渡場へ、愛兒を人商人に浚はれた狂女が現はれる。船人が持つてゐる掬ひ網で、散り浮く花をすくひ集めたら、その子の行方を敎へようといふので、狂女は一心に花を掬ひ、果ては船人の慰みのまゝに羯鼓の踊ををどりながら狂うて行くといふ筋である。

【梅花王戲場番組】【通稱】角田川　【初演】明治四年二月三日初日、東京市村座「奴同淸永櫻」第二番目大切。作詞、河竹新七(默阿彌)。曲節、長唄。立唄、三代芳村孝次郎。作曲、三代杵屋正次郎。振附、花柳壽輔【傳來】曲・振とも傳存。【題材】長唄の「賤機」へ「班女」を加味し、更に文政元年九月、江戸都座上場「花三升菊壽」の富本節「賤機」をも取入れて淨瑠璃風に作つた。これを常磐津節に直して

志津摩流(しづまりう)

書道　【解說】京都の書家佐々木志津摩の書流。志津摩、名は春、七兵衞と稱し、松竹堂・靜庵・專念居士等の號がある。賀茂流の始祖藤木敎直に師事し、同門荒木素白とその名を齊しうした。延寶・天和の頃、別に志津摩流を創めて一世に行はれた。元祿八年正月、七十七歲を以て歿した。その書は、重厚にして輕妙の風に乏しかつたが、特に大字に巧であつた。唐樣の書家細井廣澤の如きは、志津摩等が古法を誤つたものとして、「臨池復古篇」を著してゐる。門人に赤井得水等がある。

【伊木】

四聲(しせい)

漢語學・國語學　【名稱】「ししやう」とも。又單に聲ともいつた。【解說】漢字音に於ける一種の音調。支那語には同音の語でも、音調の差によつて意義が異り、一の語は必ず一定の音調をもつてゐる。從つて漢字の音には字毎に必ず一定の音調があり、同じ漢字でも意味の相違に應じて二つ三つのちがつた音調をもつてゐるものもある。その音調は、普通の字音(隋唐時代の切韻に基づくものに於ては、平聲・上聲・去聲・入聲の四種に分つ。これを古四聲といふ。これを現聲

と他の三聲とに大別して、平聲と仄聲とし、併せて平仄といふ事がある(古く我が國では、これを平聲・他聲とし、併せて平他といつた)。漢詩を作るには、この二つの區別が大切である(平仄參照)。四聲は、漢字音では韻(別項)に屬する事である。韻の部分が同音でも四聲が違つてゐれば別の韻とする。漢字を字音によつて分類する場合には、まづ四聲によつて分ち、次に韻の異同によつて分つのが普通である。

以上五種の別がある。

【支那に於ける四聲の沿革】先秦時代に平上去入の四聲の區別があつたかどうかは學者の說が一定しない。しかし、少くとも平聲と入聲との區別があつた事は認められてゐる。漢魏の際には、既に四聲を具備してゐたと考へられ、四聲の名も晉代からあつた。永明の頃、沈約が四聲譜を作つて、(後略)

江南は七聲の河上と過去の區別が失はれた。西南は五聲(陰平・陽平・上・去・入)である。廣東以外の入聲は、語尾の子音を失つたので、音の形の上からは平上去と區別がなく、音調のみの違ひとなつた。

【日本漢字音の四聲】日本に傳はつた漢字音は、吳音でも漢音でも平上去入の四聲を傳へて、漢文や佛典を讀誦する時には四聲を正しく

漢音の四聲であつて、吳音の四聲は「法華經音義」の如き佛典の辭書、又は聲點を附した佛經などにあるのみである。

我が國には、平上去入の四聲の外に、これに輕重を區別して、平重・平輕・去・入重・入輕の六聲ありとする說、平上去入に各輕重を分つ八聲など古く傳はつてゐて、これを圖の如き點によつて表示した。

と他の三聲とに大別して、平聲と仄聲とし、併せて平仄といふ事がある(古く我が國では、これを平聲・他聲とし、併せて平他といつた)。漢詩を作るには、この二つの區別が大切である(平仄參照)。四聲は、漢字音では韻(別項)に屬する事である。韻の部分が同音でも四聲が違つてゐれば別の韻とする。漢字を字音によつて分類する場合には、まづ四聲によつて分ち、次に韻の異同によつて分つのが普通である。これが韻書、及び韻によつて引く字書・索引の類は普通の體裁である。然るに平聲に屬する韻及び漢字の數が多い故、韻書では平聲を上下二卷に分ち、上去入の三聲を各々一卷として、全部五卷に分つことが多いので、平聲の韻を上平・下平の二つに分ける事がある(これは、今の支那語に存する上平・下平とは全然別のものである)。

【四聲の本質】 四聲はアクセントの一種と見ることが出來るが(西洋人はtoneと譯してゐる)、單純な音の高低又は强弱の關係に基づくものではなく、高低(調子)と長短との複合したものである。現代支那語の發音(これは、平聲が陰陽二種にわかれてゐる)によると、

陰平　音やゝ高く、初から終まであまり高さが變らない。「陰」「高」など。

陽平　最初は低いが、やがて高くなつて持續する。音の長さは、陰平よりも長い。「陽」「揚」など。

上聲　最初低く續き、後、次第に高くなり、最も高くなつて止む。音の長さはほぼ陽平と同じである。「賞」「起」など。

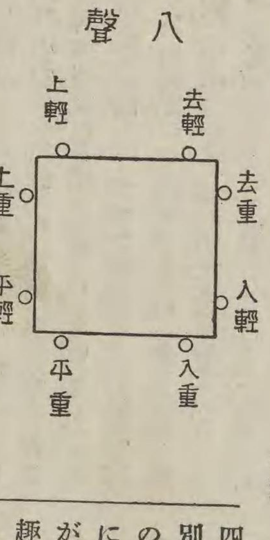
去聲　最初高く後低くなる。音の長さは、陽平や上聲よりも短い。「去」「降」など。

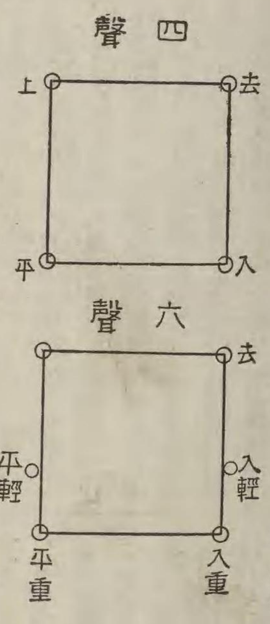
入聲　陰平とほぼ同じ高さで、甚だ短く急である。「入」「促」など。

以上五種の別がある。

【支那に於ける四聲の沿革】 先秦時代に平上去入の四聲の區別があつたかどうかは學者の說が一定しない。しかし、少くとも平聲と入聲との區別があつた事は認められてゐる。漢魏の際には、既に四聲を具備してゐたと考へられ、四聲の名も晉代からあつた。永明の頃、沈約が四聲譜を作つて、文辭の聲律を論じてから、四聲が世人の注意を喚起し、韻文にも四聲を亂るものなきに至り、隋の陸法言の切韻以下、唐宋の韻書も亦平上去入を分つのが常になつた。さうして唐時代から漢字の四聲を示すために、その四隅に點又は圈を加へる事が起つた。平聲は左下、上聲は左上、去聲は右上、入聲は左下ときまつた。唐代以後、支那の音聲が漸く變化し、その北方音に於ては、濁音が變じて淸音となつたが、平聲に於ては、元來の淸音と、濁音から淸音になつたものとの間に音調の差異を生じた。元時代には前者を陰平、後者を陽平と名づけて區別した。又入聲はその語尾の子音を失つて、平上去と異なる所なきに至つた。卽ち今日の北京官話に於ける如く、陰平(上平)・陽平(下平)・上聲・去聲の四聲となつたのである。然るに南方音に於ては、濁音及び入聲の語尾の子音が消失しないものがあり、且つ語頭の子音の淸濁によつて、平上去入に幾分の相違を生じたので、四種以上の種類が出來たが、その數は方言によつて必ずしも同一でない。卽ち現代の廣東には、九聲(淸平・淸上・淸去・濁平・濁上・濁去・淸入・中入・濁入で、淸入は入淸平、中入は入淸去、濁入は入濁去である)、浙江には八聲(淸平・淸上・淸去・淸入・濁平・濁上・濁去・濁入)、江蘇は七聲(淸上と淸去の區別が失はれた)、西南は五聲(陰平・陽平・上・去・入)である。廣東以外の入聲は、語尾の子音を失つたので、音の形の上からは平上去と區別がなく、音調のみの違ひとなつた。

【日本漢字音の四聲】 日本に傳はつた漢字音は、吳音でも漢音でも平上去入の四聲を傳へて、漢文や佛典を讀誦する時には四聲を正しくしたので、古寫本や古刊本には、四聲を區別する符號卽ち聲點を附したものがある。しかし後世には次第に發音上に四聲を區別する事は絶えたが、佛家に於ては、特殊のものの朗讀法として、今なほこれを傳へてゐる。





吳音・漢音共に四聲を具へてゐるが、同じ漢字でも吳音と漢音によつて四聲を異にする場合が多く、漢音のは廣韻の如き切韻系統の韻書に一致するが、吳音のはこれと大に異なり、大體に於て吳音で平聲の文字は漢音では上聲去聲となり、吳音の上聲去聲の文字は漢音では平聲となる。普通の漢字辭書の類にあるのは

四聲を分つのが常であつて、時に六聲まで區別したものは見受けるが、八聲まで別つたものはまだ見當らない。これは上聲の重は去聲に涉り、去聲の重は上聲に涉つて、その區別が早く亡びたのであらう(「作文大體」にその趣が見える)。今までも眞言宗で傳へてゐるところでは、やはり平入だけ輕重を區別した六聲であつて、その發音は、平聲の重は平かで低く、平聲の輕は、初高く後低く、上聲は高く平かで、去聲は初低く後高く、入聲の重は平聲の重に、入聲の輕は平聲の輕に同じである。但し、入聲は漢吳音に於ては、語尾にフ・ツ・ク・チ・キの音がある故、平聲と區別せられる。入聲の中、「法師」の「法」の如く、入聲でありながら、發音上入聲の特徵を具へぬものを「フ入聲」と唱へて、文字の下邊中央に聲點をつけてこれを示す。又、文字の上邊中

心は淋しかつた。

【批評】 身分の違ひを顧みないで、一圖に綾子を戀する與作と、世間の思惑を少しも考慮しないで與作に接近する綾子とを對照して、暗に貴族社會の因襲的弊害を諷したところに、この作の興味がある。お、絲里に空想にすぎ

【尾上の雲錢機帶】【通稱】錢機【初演】寬延四年四月、江戸森田座「祐經扇系圖」第三番目。作詞、豪越二三次。曲節、一中節。太夫、都秀太夫千中。作曲、宮崎忠五郎。振附、村上常五郎【傳來】曲のみ傳存【題材】謠曲の「隅田川」に「機川」を加へ、俗曲風にくだいた作。「內容」大體の梗概八段、澤井小僧又は、

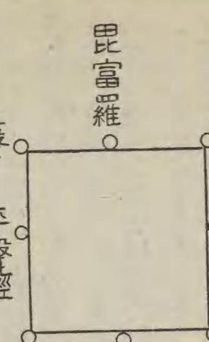
代竹屋正次郎。振附、花柳壽輔【傳來】曲・振とも傳存。【題材】長唄の「錢機」へ「班女」を加味し、更に文政元年九月、江戸都座上場「花三升菊壽」の富本節「錢機」をも取入れて淨瑠璃風に作つた。これを常磐津節に直して

【尾上の雲錢機帶】【通稱】錢機【初演】寬延四年四月、江戸森田座「祐經扇系圖」第三番目。作詞、豪越二三次。曲節、一中節。太夫、都秀太夫千中。作曲、宮崎忠五郎。振附、村上常五郎【傳來】曲のみ傳存【題材】謠曲の「隅田川」に「機川」を加へ、俗曲風にくだいた作。「內容」大體の梗概八段、澤井小僧又は、

代竹屋正次郎。振附、花柳壽輔【傳來】曲・振とも傳存。【題材】長唄の「錢機」へ「班女」を加味し、更に文政元年九月、江戸都座上場「花三升菊壽」の富本節「錢機」をも取入れて淨瑠璃風に作つた。これを常磐津節に直して

は必ず一定の音調をもつてゐる。從つて漢字の音には字毎に必ず一定の音調があり、同じ漢字でも意味の相違に應じて二つ三つのちがつた音調をもつてゐるものもある。その音調は、普通の字音(隋唐時代の切韻に基づくものに於ては、平聲・上聲・去聲・入聲の四種に分つ。これ故これを四聲といふ。これを平聲

央に點を附けたものは、毘富羅聲といひ、上聲と同じく高く唱へるが、これは眞言宗では用ひず、天台法相にのみあると傳へられてゐる。多分上聲の重の名殘であらう。かやうにして實際は六聲であるが、圖には八聲を區別してゐる。



以上の輕重の別は、古代支那語に於ける發音の區別に基づいたものと考へられるのであつて、現代支那諸方言に於ける九聲・八聲・五聲等の區別と根本に於て相通ずるものがあるやうである。江戸時代に行はれた支那語學（唐音といつた）に於ては、支那南方の近世音を傳へて、その四聲の發音を學んだが、これは古く傳はつた漢字音の四聲とは違つた所があつたやうである。

【國語の四聲】支那の四聲を學んでから、追々これを標準として國語のアクセントを考へ、平上去等の文字、又は四聲の符號（聲點）を附して國語のアクセントを標するやうになり、又國語には平上去の三聲のみあつて入聲がないことや、同語のアクセントが種々の場合に應じて變化することなどをも觀察するに至つた（アクセント參照）。（國・國學・字音參照）

【參考】中國聲調學說英譯並評（○國語發音學注音字母第二式講義之一附錄○本朝四聲考）金澤庄三郎（東洋學研究創刊號）○法華經音義○補忘記觀應（開合名目鈔）＝B. Karlgren: *Etudes sur la phonologie chinoise.* Upsala, 1915—1924.

刺青（しせい）　小說　【作者】谷崎潤一郎【發表】明治四十二年十一月「新思潮」【刊行】同四十四年二月、短篇集「刺青」に收錄、籾山書店。谷崎潤一郎全集第七卷。現代日本文學全集（谷崎潤一郎集）所收。

【梗概】若い刺青師の清吉は、奇警な構圖と妖艷な筆の趣とで名を知られてゐる腕きゝであつた。彼は異常な感覺に醉ふと共に、藝に熱心で、見事なる美女の肌を得て、それに己の魂を刺り込む事を年來の宿願としてゐたが、その好みに適つた女は容易に求められなかつた。或る夏の夕、ふと出遇つた駕籠の簾の陰から覗いてゐる女の美しい足に理想の女性を見出し、憧憬戀慕の情に驅られて後をつけたが、忽ち影を見失つて了つた。ところが、その後、清吉の家に使に來た十六七の小娘を見ると、不思議にも長い月日を色里に暮して幾十人の男の魂を弄んだ年增のやうに、物凄く整つた顏をしてゐた。以前に見かけた駕籠の女はこれだなと直感した清吉は、彼女を二階に上げ、その未來を暗示するやうな妖婦の繪を見せて、心の奥に眠つてゐる彼女の本性を搖り動かした後、その妙なる背の肌一面に蟠る大きな女郎蜘蛛を刺りつけた。戀と藝を情熱の坩堝に投じた清吉は、彼の全生命を打ち込んだ仕事を終ると、生血を吸はれたやうに"つたりして了つた。それに引き換へ、刺り

我に返つた女は、既に以前の小娘ではなかつた。清吉の精根と女郎蜘蛛の妖氣を承けた彼女は、傳法な態度に變り、脫殼になつた清吉に驕慢な眼差しを送つた。

【批評】泰西の耽美主義文學の影響を受けて、强烈な色彩の下に濃厚な官能美を描き出さうとした結果、異常な作意に特殊な興味はあつても、一面からすれば着想も文章も技巧に走り過ぎ、仔細に見れば誇張と作爲の跡が眼につくが、人生の藝術化的傾向や病的耽美の傾向を明確に具現してゐる。加之、變態的な色彩、官能的な筆致、頽廢的な氣分等、この作家の持つてゐる種々の特色をも合せ含んだ異色ある作品と言ふことが出來る。【附記】同名の短篇集には「刺青」を初め、「象」「信西」「麒麟」「少年」「祕密」等の小說・戲曲が收められ、作者最初の集として初期の作風をよく窺ふことが出來る。　【湯地】

市井雜談集（しせいざふだんしふ）　隨筆　三卷　【著者】林自見（名は正森。三河の人。傳未詳）【刊行】寶曆十四年【解說】天變地妖、日本各地方の傳說、怪談奇聞等を見聞に隨つて書き集めたもので、中に源平時代以後、戰國期前後の軍陣談や武將等の逸話もある。畢竟俗流間に談話資料を供給するを目的としたものであらう。寶曆十三年著者の自序がある。本書後編の豫告が卷末にあるが、公刊に至らなかつたらしい。　【和田】

詩聖堂詩話（しせいだうしわ）　一卷　【著者】大窪詩佛　【成立】卷首に寬政十一年己未、山本北山の序がある。【諸本】日本詩話叢書卷三所收　【解說】著者は北山に從つて學び、市河寬齋の江湖社に列し、柏木如亭・菊池五山等と交つたが、本書は江湖社同人或は知友の作品、風調絶佳なものを錄して、宋詩を鼓吹する資料としたものである。　【佐久】

史籍雜纂（しせきざつさん）　叢書　五册　【校訂者】難波常雄・田口重男・文傳正興・伊藤千可良・山田安榮　【刊行】第一・二・三卷まで明治四十四年。第四・五卷は同四十五年、國書刊行會　【解說】史學上有益な家乘私記の類で、東京帝國大學文科大學史料編纂掛及び諸家の祕藏中、最も珍奇にして而も有益なるもの三十九種百四卷を選擇して收載したものである。初め三册の豫定で刊行されたが、後、第四・五卷を追加し、折柄、近世史研究の機運が生じたので、幕末の史料を入れたものである。編者が緖言にて自負してゐる如く、稀籍に屬するものが多く、就中、第一卷に收められた西大寺の僧叡尊の「關東往還記」、和宮御手記の「靜寬院宮日誌」等は、その價値極めて大であつて、史學界に貴重なる資料を提供したものと云ふべきである。　【土井】

史籍集覽（しせきしふらん）　叢書　【解說】舊版と改定版との二種がある。舊版は小形の和裝本で、正編四百六十八册續編七十册より成り、正編は明治十四年より十八年の間に、續編は同じく二十六年より三十一年の間に刊行された。共に近藤瓶城編。改定版は四六版の洋裝本で、嗣子近藤圭造編。同三十三年より三十六年に亙つて刊行された。收載書目は舊版にあつては約四百二十種、改定版はこれに適當な取捨を施し、更に百餘種を追加して合せて四百六十餘種、何れも史書・年代記・日記・記錄・覺書・法令書・古文書・物語・隨筆及び研究論說の類に亙つて國史に關係あるあらゆる方面の書物を集めてゐる。故に書目の選擇は多少雜駁の感ひを免れないし、校訂又體裁と共

稀し難いが、原本もしくは寫本の容易に見られない今日にあつては、國史大系・群書類從（各別項）に次いで、國史の研究に要用の書物とせられてゐる。【坂本】

自然麻呂（しぜまろ）　舞樂家　【姓】多氏【生歿】生年未詳。仁和二年（一五四六）歿す。【閲歴】清和天皇の貞觀の頃神樂の作曲並に組立に努力し、今日まで宮中に傳はる所の神樂の基を開いたと稱せられる。「雒曲相承次第」に「神樂は諸神の製作として世に傳はると雖も、舞人多自然麿（おほのの）を以て根元となし、その後次第に上下之を亂ふ云々」とある。これによつて、今日に至るまで多家を以て神樂人長の家となしてゐる。又「三代實錄」貞觀元年九月の條には、「右京人散位外從五位下多臣自然麿に姓を宿禰と賜ふ。これ神八井耳命の苗裔也」と記してある。これを以て見ると、その先は、神武天皇の皇子神八井耳命に出でてゐる。この命は大和國多村に移り住まれ、子孫代々多を以て姓としたのであつて、「古事記」の著者なる太安麻呂と同祖である。なほ又「三代實錄」貞觀元年十一月の條には、「右近衞將監多臣自然麻呂に外從五位を授く」とある。これに依つて見ると、自然麻呂は當時右近衞將監といふ役名にあつた事が分る。なほ多氏系傳に據れば「外從五位下右近衞將監兼甲斐守。一者（いちのもの）三十九年。仁和二年卒す」とある。こゝに一者といふのは卽ち第一人者の事で、當時三十九年間も舞樂界に於ける第一人者の位置を保つてゐたことから見ると、演奏並に作曲等に於て非常なる天才であつたことが知られる。これによつて當時勅命を蒙つて神樂の作曲並に組立に盡力したことは當然であつた。なほ多氏系傳には、この人を以て歌舞兩道の鼻祖としてある。こゝに謂ふ所の舞道とは、我が國風の舞曲のみならず、外國傳入の舞樂をも指すのであつて、自然麻呂は內外兩樂舞に精通してゐたに相違ない。【著書】我が國神樂歌譜の最古のものである「貞觀神樂歌譜」は多分自然麻呂が勅を奉じて撰したものであらうと謂はれてゐる。【史的地位】神樂は太古神代の樂舞の遺風の如くに稱されてゐるが、實際太古神代のものは全くなく、平安朝に至つて新しくその形式が整へられ、恐らくその作曲も全然新しいものらしく考へられる。卽ち貞觀年間に多自然麻呂が新形式の神樂を創め、その後一條天皇を經て、鎌倉時代・足利時代等に數回の整理が行はれ、以て今日に至つてゐるのである。それで自然麻呂よりも以前の神樂は、今日全く知られてゐない。この意味に於て、自然麻呂は實に我が國神樂の基を開いた祖であると稱すべきである。【田邊】

【參考】三代實錄○雒曲相承次第○體源抄○樂家錄○多氏系傳○日本音樂史考○東儀季治

死線を越えて（しせんをこえて）　小說　【作者】賀川豐彥【成立】この作の前半、卽ち德島時代（一同上二十二回まで）は、作者が十九歲の時明治學院在學時代に書き、當時島崎藤村の閲を請うた。その後作者は神戸神學校に轉じ、貧民窟に入り傳道に從事、卒業後渡米、歸朝後再び貧民窟に入り、宗教的精神運動を基礎とした勞働運動にまで手を伸した。かくて大正七年十月四日、作者が川崎造船所爭議の煽動者として檢束拘留せられる迄の、彼が貧民窟に於ける體驗の一部を小說化して書き加へたものが後半の神戸時代（二十三回以後）である。前半と後半とが全然筆致を異にするのは、このためである。【發表】大正九年五月、「改造」（前半のみ）【刊行】同年十月、改造社。後二百八十九版を重ねた。普及版（四十八版）もある。【梗概】日露戰爭後日本の思想界は混亂した。新見榮一もその混亂に捲き込まれ明治學院を去つて德島に歸つたが、父と義母と父の妾と彼とは事毎に衝突した。彼の思想が虛無主義に傾き死をさへ願ふに至つた時、町の救會を助けてゐる鶴子に出會つた。鶴子は彼の幼馴染である。二人の間にはいつしか肉を離れた戀が成立つ。そして彼は死を思ひ止つたが、程なく鶴子は廣島の學校に去つた。慰め手を失つた榮一は狂氣の如く煩悶した。山に入つて斷食したり木賃宿に泊つて漂泊者と交つたりするので、父は彼を腦病院に送らうとした。彼が家を出て神戸で沖仲仕をしてゐるうちに父は病死した。で、家政を整理して神戸に運輸會社を創めた。金廻りのいゝまゝに頽廢氣分が彼を享樂に導き、藝妓小秀と相知るやうになつた。けれども深入りしないうちに、彼の心は宗教に傾き非常なる決心を以て貧民窟に入つた。そして强請脅迫毆打あらゆる苦痛を忍んで貧民の友となつた。或る日救恤品を荷車に積んで引いて歸る途中、偶然鶴子に會つた。二人は立話をした。鶴子は彼とこの事業を共にするだけの信仰がないと告白して別れた。けれども二人は泣いた。その後小秀は時々彼を訪問した。併し小秀にもこの難事に當る勇氣はなかつた。そこへ一人の女性が現はれた。印刷女工の樋口喜惠子である。喜惠子は彼の事業を助け彼を尊敬した。これより先、彼の同窓音無が紀州から彼を訪問した。音無が要視察人であつたため彼も遂に注意人物となつた。そこへ彼を信賴する職工勝之助が燐寸會社でストライキを起した。當局は榮一を煽動者と認んだ。そして彼を檢擧した。その時彼は喜惠子と兩人きりで誰一人會葬者のない葬式を營んでゐた。彼はその場から後事を喜惠子に賴んで置いて曳かれて行つた。喜惠子は眼に一杯淚を溜めて見送つた。

【解說】明治大正の時期に於て最も多くの部數を賣り、讀者に社會問題としての刺戟をかくも多く付與した小說は、他にその比を見ない。世界大戰後日本を動かした二つの思想、その一つは獻身的社會奉仕といふ道德觀念、他の一つは勞資協調の政策であつた。後者はその溫情主義から理論鬪爭、勞働爭議にまで發展の傾向を見せたが、前者にあつては、先づその實踐躬行の模範人物を要求した。世人は本篇の作者をその模範人たりと見做すと同時に、新見榮一によつてその標本を提示された。これが世界大戰後の日本に於て、この傾向小說が愛讀された理由である。且つ本書は神戸クロニクル社から“Across the Deathline”と題して英譯出版され、ニューヨーク及びロンドンのドラン書店から、“Before the Dawn”と題して出版された。その他、“Aufgehnung und Opfer”と題するドイツ譯、“Avant L'Aube”と題するフランス譯、“Ga nit in de Straten”と題するオランダ譯がある。この書が外國に讀まれる理由はこの小說が日本に於ける社會改良家の苦心を語るものとして、或は彼等が日本に植ゑつけたる基督教が如何なる程度まで日本人の魂に働きかけてゐるかを知らんがためである。この作が非常に世評が高かつたといふのも、藝術的作品としてよりも、かゝる意味に於ける思想的產物としてであつた。【沖野】

私撰集（しせんしふ）　「私撰和歌集」を見よ。

たらしい。

詩聖堂詩話（しせいだうしわ）　一卷　【著者】大窪詩佛【成立】卷首に寛政十一年己未、山本北山の序がある。【諸本】日本詩話叢書卷三所收【解說】著者は北山に從つて學び、市河寬齋の江湖社に列し、柏木如亭・菊池五山等と交つたが、本書は江湖社同人及び門友の作品あつては約四百二十種、改定版はこれに適當な取捨を施し、更に百餘種を追加して合せて四百六十餘種、何れも史書・年代記・日記・記錄・覺書・法令書・古文書・物語・隨筆及び研究論說の類に亙つて國史に關係あるあらゆる方面の書物を集めてゐる。故に書目の選擇は多少雜駁の感ひを免れないし、殊に日文關係の

自然主義（しぜんしゅぎ）　文學論　【佛】Le Naturalisme　【解說】自然主義とは、文學へ科學の研究法を採用して、單に人間の生活を觀察するばかりでなく、それに實驗をも加へて、恰も化學者が試驗管中で種々の藥品の反應を研究する如く、人間生活へ我から進んで、單に經驗を重ぬるばかりでなく、實驗的研究を加へようとする學說である。そしてその取扱ふ所は、人間生活を生理學者或は醫者の如き立場から診斷を下して考究する事と、一方は社會學者と同じく社會機構及びその組織を研究し、その缺陷を指摘しようとするのである。それ故、自然主義文學には一面生理學・病理學的方面と、他面社會學的方面とが有るのである。この自然主義文學の主唱者は佛蘭西のエミル・ゾラ(Emile Zola, 1849—1902)である。彼は一方に生理學的に遺傳性の恐ろしさを研究し、他方に於てはこれ等の人間の生存する社會的環境を研究し、それ等の研究をする場合には、實驗的方法を用ひて精細なる記錄をとり、それを集めてやがて集成したる組織を立てようとするのである。その方法によつて彼が書いた作品は有名な「ルゴン・マカル」("Les Rougon Macquart")二十卷の長篇である(ゾライズム參照)。自然主義文藝は從つて人間の本能を醫者の見る目で取扱ふが故に、從來の文藝に於けるよりは一層大膽に性的現象をも取扱ふのである。有ゆる官能をも、例へば觸感であるとか、嗅覺であるとか、味覺であるとか、從來の文藝があまり取扱ひ得なかつたものまで、十分に表出するのである。人間を動物としての方面から生理的に觀ることにもなるのである。ゾラのこの方面を描寫しつゝある人はモオパッサン(Guy de Maupassant, 1850—1893)である。モオパッサンの文藝は人間を自然の中へ放つて見た姿を描き出すものと言つてよろしい。そして自然の環境と同時に、その人間生活を一掬ひに掬ひ上げて渾然として表出する。實驗的研究法と的確な印象描寫とが同時になされてゐるのである。またゴンクウル兄弟(Edmond Goncourt, 1822—1896. Jules Goncourt 1830—1870)は、普通選擧に於て政權が普遍化する如く、文藝に於ても何人でもが表現をなすべき事を主張する。そして彼は隱れたる人間生活、下層階級人の生活、見捨てられたる人々の生活に表現を與へんことを求める。この二人の文藝は點畫的と言はるゝほどに、一點一畫でもゆるがせにせず、細かなこみ入つた描寫をしてゐるのである。

【日本に於ける自然主義】日本に於けるそれは、或はゾラに、或はモオパッサンに、或はゴンクウルに教へられて發達し、或はフロエベルの手法を學んで、田山花袋の如く平面描寫(別項)を主張したものもある。けれど日本に於ける自然主義文藝は、生理的性的人間現象を取扱ふ事の方が多く、未だ社會機構の研究といふ方面までは組織立てらるゝに至らなかつた。併し、田山花袋・島崎藤村・國木田獨歩・岩野泡鳴等の作品によつて、舊來傳統の道德觀、人生觀には少からぬ影響動搖を與へた事は事實である。その意味では多少とも社會的な效果を持つ文藝であつた。　〔吉江〕

自然主義（しぜんしゅぎ）　評論集　【著者】長谷川天溪　【刊行】明治四十一年七月、博文館。　【內容】上編十五章、下編九章から成る。この各章は組織立つた論者として書かれたのでなく、自然主義文論運動の始興當時の著者の評論を一括したもので、「幻滅時代の藝術」(明治三十九年)、「現實暴露の悲哀」(同四十一年)、「自然派に對する誤解」(同年)等の外に、歐洲近代思潮の紹介的研究の評論「表象主義の文學」(同三十八年)、「メーテルリンクの神祕道德論」(同三十九年)、「近世の獨逸戲曲」(同三十八年)等をも收めてゐるが、この評論集の價値は、前者のやうな自然主義文藝運動の歷史的文獻としてのそれに在る。「現實暴露の悲哀」の一篇は、最もその傾向を代表するものである。その要旨は吾等現代人は幻像を失つて歸趨するに所なく、宗教も哲學も權威を失ひ果てた。「吾等の深刻に感ずるものは幻滅の悲哀なり、現實暴露の苦痛なり、而してこの痛苦を最も好く代表するものが自然派の文學なり」と云ふのである。而して自然派の文學は、「其背景は沈痛なる幻滅並びに無解決の悲哀に非ずや」と斷じ、ニイチエ、モーパッサン等の最期は、「現實暴露の悲哀は竟に彼等を狂死せしめたるなり。彼等自然主義の一派は、醜陋、瑣末、非理想的、非藝術的、反道德的、肉的、性慾的を面白がりて描寫するにあらず。其處に僞なき現實を認めたればこそ此を描け、而も背景は深刻なる悲哀の苦海なり」と結んでゐる。この一篇の評論が當時の文藝社會に投じた波紋の如何に大きかつたかは、明治後期の文藝史を研究する者が擧つて言ふ所である。　〔武藤〕

自然と人生（しぜんとじんせい）　文集　【作者】德富蘆花　【刊行】明治三十三年八月、昭和三年五月、民友社(三百七十三版)。　【內容】短篇小說二篇、評傳一篇、自然描寫、感想文八十六篇を集めたるもの。短篇小說は「灰燼」「雨後の月」、評傳は「風景畫家コロオ」、他は「自然に對して」、「湖上通信」以後、ペンを用ひ始め、死するまでペンのみを用ひ、萬年筆を用ひなかつた。「風景畫家コロオ」は、同三十年九月の家庭雜誌のために執筆せるもの。本書は多く中等教科書にとられ、廣く愛誦され、明治時代の文章に影響を與へたことは尠くない。　〔沖野〕

自然の扉（しぜんのとびら）　句集　一册　【著者】荻原井泉水　【刊行】大正三年八月東京堂　【內容】處女地に踏み込んでゐる。本書は最初第一句集で、この後、第七句集までなほ六個續刊されてゐる。(層雲參照)　〔志田〕

自然美（しぜんび）　美學　〔獨〕Das Naturschöne　【解說】人工的加工なくして自然のまゝにこれを對象として享受さるゝ美。それが藝術美と異なる特質としては、自然美に於ては第一に材料上、低級感覺の如きものとも聯結するが故に、自然神話は屢々これ等の靈格の物語となる。自然神話の主體となるものには、發生的に見て三個の階層がある。自然物素、若しくは自然現象そのものがその一であり、這般の物素、若しくは現象に內存する精靈がその二であり、這般の物素、若しくは現象を支配する神格がその三である。而して第一が最も素樸な觀念であり、第二は少しく進んだ生氣說(Animism)の產物であり、第三は更に進んだ神人同態說(Anthropomorphism)の產物である。自然神話發生の心理に就いては、二樣の解釋がある。即ち(1)低い文化階層の民族が、自然界の現象及び物素そのものから强い印象・經驗を受け、これを神話的思考を通して解釋し、若しくは叙述するところに、自然神話の發生があるとなす說。主として人類學派の學徒の說くところである。(2)低い文化階層の民族にとつては、自然界の現象及び物素は、それ自身では何等の意味をも有せず、それ等がおのれ等の組織してゐる社會集團及びその生活と連帶共享の神祕的交涉を持つと感得せられることによつて、始めて民族の注意圈內に入り、這般の連帶感を基調として自然を解釋するところに、自然神話の發生があるとなす說。社會學派、殊にソルボンヌ大學教授レヴィ・ブリュール氏の說くところである。【分類】自然神話に關しては、さま〴〵の分類が行はれてゐるが、就中、最も普通なものは、個々の自然物素及び自然現象を基礎とする分類である。即ち太陽神話・太陰神話・星辰神話・雷霆神話・山嶽神話・動物神話・植物神話等の如き分類がこれである。　〔松村〕

〔參考〕Tylor, Primitive Culture.

自然と人生（しぜんとじんせい）　文集　【作者】徳富蘆花　【刊行】明治三十三年八月、昭和三年五月、民友社（三百七十三版）。【内容】短篇小説二篇、評傳一篇、自然描寫、感想文八十六篇を集めたるもの。短篇小説は「灰燼」「雨後の月」、評傳は「風景畫家コロオ」、他は「自然に對する五分時」その他二十九篇、「寫生帖」十篇、「湘南雜筆」四十七篇。【解説】巻頭の小説「灰燼」は、熊本市外沼山津村に、明治十年の西南役に賊軍に與（くみ）して逃げ歸つた一青年が、父兄より切腹を迫られた時、母に縋つたが母の意志弱く、遂に愛子を救ひ得なかつた事實を題材としたもので、明治三十三年三月三日から十三日までの國民新聞に掲載したのである。發表後二十六年、西紀一九二五年五月から同年八月までの、ドイツに於て發行された雜誌Jung Wacht に"Der Brand."と題して譯載された。譯者はP. Hoffman であつた。「自然に對する五分時」は、明治二十三年より同三十三年六月に至る手錄。「寫生帖」十篇中の「海邊橋」と「國家と個人」の二章は、著者が社會主義者なりと公言せる基源の文。「湘南雜筆」は本書の核心であり且つ著者をして自然詩人の稱を得せしめた傑作である。著者一日角田浩々歌客、雨谷一菜庵の二人と汽車に同乘したる時、國木田獨歩が著者の書ける「此頃の富士の曙」を讀みて感激したる事を聞き、獨歩が深く自己を解するを喜び、同三十二年の一月元旦から十二月三十一日に至るまで、一日も缺かさず自然を描き自然を歌つたノートから抜萃した四十六章が、この「湘南雜筆」である。これまで、著者は毛筆を用ひて原稿を書いてゐたが、「湘南雜筆」以後、ペンを用ひ始め、死するまでペンのみを用ひ、萬年筆を用ひなかつた。「風景畫家コロオ」は、同三十年九月の家庭雜誌のために執筆せるもの。本書は多く中等教科書にとられ、廣く愛誦され、明治時代の文章に影響を與へたことは尠くない。〔沖野〕

自然の扉（しぜんのとびら）　句集　一册　【著者】荻原井泉水　【刊行】大正三年八月東京堂　【内容】頭尾に俳論の附された句集で、「俳話」「選句」「習作」「集末に」の四篇から成つてゐる。「俳話」は「一つの鍵」と題し、俳句は自然の實相を詠ずるものであるが、その自然の内奥を開くべき扉に合ふ鍵は何處にあるかといふ意味から、在來の季題趣味と十七字定型表現とは、この鍵としては不適當で、俳句の詩的本質は印象的象徴的な觀照と表現とを生命とするものであるから、その手法即ち新しい鍵を自由に用ひて、自然の堂奥に參入すべき事を論じたものである。「選句」は、如上の所信に依る「層雲」誌上に發表された句の選句を輯めたもの、「習作」は著者自身の試作した俳句を發表したものである。「集末に」は元祿・天明・明治を通じて俳句の史的展開の跡を觀察し、史觀の方面から當今の俳句が十七字の舊型を擺脱して新しき自由形式に據らねばならぬ事を論證したものである。本書は所謂新傾向から一轉化しようとする時期の著者の言説と、それに依る作品とを發表したもので、その主張の基本たるべきものは、俳句の詩的本質と史觀とにあるのであるから、この兩者に於ける他派の主張と併せ見て啓發さるべきものであらう。選句の方には在來の季題の藪染がまだ大分殘つてゐるが、著者の習作は甚だしく自由になつてゐて、著者の所謂新しき俳句への處女地に踏み込んでゐる。本書は層雲第一句集で、この後、第七句集までなほ六集續刊されてゐる。〔層雲參照〕　〔志田〕

自然美（しぜんび）　美學　〔獨〕Das Naturschöne　【解説】人工的加工なくして自然のまゝにこれを對象として享受さるゝ美。それが藝術美と異なる特質としては、自然美に於ては第一に材料上、低級感覺の如きものとも聯結するので、感官的要素が豐富なること、第二に内包上、直接自然の生活を材料とするので、濺刺性をもつこと、第三に形式上、統一形式が明かにされないだけ視覺的側面、聽覺的側面といふ如き一面性をもたぬこと、隨つて全體として自然であること等が擧げられる。又自然美は寫眞にしてもなほその全體が作品となり難いので、その美は自由で、不定的・主觀的である特質をもつ。〔藝術美・藝術學參照〕　〔渡邊〕

自然描寫（しぜんべうしや）　文學論　【解説】自然といふ語は、普通二樣の意味を持つてゐる。(1)は、人間の本性といふ意味である。「一歩たりとも自然を離れてはいけぬ」といふ意味は、人間の本性に從つて觀察し、それを描出せよといふ意味である。(2)は自然は天然といふと同意義である。「自然描寫」といふ場合は、第二の意味で自然といふ語を扱つてゐるのである。この自然描寫は、歷史的には日本の文學の方が、近代歐羅巴文學よりは遙かに早くから示されてゐるのである。けれど天然現象に人間の情緒を吹き込んで、山川草木が盡く人間と同じ呼吸をし、同じ感動を現はしてゐるものだと觀ずることは、歐羅巴の浪漫派文藝が大膽に清新に示してゐることであり、それ以後の文藝には、この自然描寫は樣々な流派によつて、或は情緒的に、或は神經的に、或は神話的に、或はグロテスクに、また纖細になさるゝのである。近代の自然詩人といはるゝのは英國のワアヅワアス（Wordsworth, 1770—1850）であり、これは自然に對する情緒を詩化し哲學化してゐるのである。ロシヤの物語作家ツルゲエネフ（Tourguenev, 1814—1883）の細緻な綿密な自然の描寫、しかもワアヅワアスとツルゲエネフとの間には、自然の觀方に時代的相異が現はれて、一方が自然を慈母の如く觀じ、或は殿堂の如く禮拜するのに對し、他は自然は繼母の如く無情で、また工場の如く勞苦を强ふるものと觀るのである。日本の明治・大正の文學で、この清新な自然描寫の途を開いた人は、一人は國木田獨歩であり、今一人は德富蘆花である。獨歩の「武藏野」（別項）と、蘆花の「自然と人生」（別項）とは、現代日本文學へ自然描寫の範を垂れたものであると言へる。そしてこの二人ともにワアヅワアス及びツルゲエネフの自然觀及び自然描寫から鼓吹せられ、感動を與へられた人々である。それ以後の人々は、その流派、性格、取扱ふ主材に從つて、描寫樣式をそれぞれ異にしてゐる。　〔吉江〕

自然文學（しぜんぶんがく）　文學論　【解説】天然自然の現象は、我々の日常生活を圍繞し、それに對して種々の形に於て深い交涉を持つてゐる。我々は空氣の深い積層の底に住む動物である。日光風雨、草木山川と關係なき人間生活は考へられぬ。それでゐながら我々はその天然自然の現象を美と感じ、それを文藝の主材たらしむることには相當の時期が要せられた。しかし日本には歐羅巴諸國に比較すると、早くから既に天然現象をうたふ詩歌は發達した。「萬葉集」に現はるゝ天然の光景の如

性的現象をも取扱ふのである。有ゆる官能をも、例へば觸感であるとか、嗅覺であるとか、味覺であるとか、從來の文藝があまり取扱ひ得なかつたものまで、十分に表出するのである。人間を動物としての方面から生理的に觀ることにもなるのである。ゾラのこの方面を事は事實である。その意味では多少とも社會的な效果を持つ文藝であつた。　〔吉江〕

自然主義（しぜんしゅぎ）　評論集　【著者】長谷川天渓　【刊行】明治四十一年七月、博文館。【内容】上編十五章、下編九章から成る。この各章は組織立つた論者として書かれたのでなく、自然主義文藝運動の指導的の著者の評

自然神話（しぜんしんわ）　〔英〕Nature-myths　〔獨〕Naturmythen　【解説】自然現象及び自然物素の成立起原・狀態・活動・特性等を自然民族に特有な神話的思考を通して解釋し、若しくは叙述した物語である。而して這般の現象・物素の背後には、或る靈物が想定せられ、その靈物の靈力活動によつて、自然界の事象が行はれてゐるが、就中、最も普通なものは、個々の自然物素及び自然現象を基礎とする分類である。即ち太陽神話・太陰神話・星辰神話・雷霆神話・山嶽神話・動物神話・植物神話等の如き分類がこれである。　〔松村〕

【參考】　Tylor, Primitive Culture.

き雄大でもあり、豪壮でもあり、また自在でもある文藝表現は、歐羅巴の同時代の詩歌に於ては認められぬ。日本には鎌倉期の西行の如く、徳川期の芭蕉の如く、放浪漂泊の自然詩人が早く既にその特色を發揮してゐるのであるが、歐羅巴に於ては自然美を感得し、それを專ら抒情詩に歌ひ出すやうになつたのは、十八世紀の末から謂はゆる浪漫派（Romantic）の詩人等が現はるゝに至つて初めてなされた現象である。これは概説すれば、日本人は大方、天然現象に身を準じての生活を本位としてゐるのであるが、歐羅巴人は、天然を征服したる人間本位の生活をしてゐるがためである。日本人が俳句その他を通じて表現してゐる「寂び」といふ味ひは、天然が人間を壓倒して行くその足跡を、人間がぢつと忍んで見つめて身を委かせてゐるところから生ずるのであるが、歐羅巴人にはそれは解されぬ。彼等は天然と戰ひ、それを征服し支配しなければゐられぬ。それ故、歐洲文藝に現はるゝ自然現象は、官能的肉感的情熱的即ち人間的な自然であり、日本文藝に現はるゝ自然は、微妙な不思議な人間の胸の中にまで入り込んで生きてゐる自然である。近代歐羅巴に於ける自然文學の始祖はジャン・ジャック・ルウソオである。ルウソオ以後、自然環境が俄に文藝家等の前にその美を輝かし始めたと言つてよろしい。自然詩人として英國のワアヅワアスの如き、海洋文學者として佛蘭西のピエル・ロティの如き、また英國のジョゼフ・コンラッドの如き、山岳物語の作家、ノルウェーのビョルンソンの如き、またロシヤの平野を文藝に生かしたゴオゴリイ、或はツルゲニネフ、更にゴルキイの如き、いづれも十九世紀に至つて始め

て現はれた文藝家である。歐羅巴の上代に於ては自然は神話的であり、中世紀には牧歌の背景となり、近代の初頭では庭園的な取扱ひをなされ、十八世紀末から十九世紀初頭へかけて、自然は初めてそのものとしての存在美を發揮することが出來たのである。〔吉江〕

四千兩小判梅葉（しせんりやうこばんのうめのは）　脚本　六幕　世話物　【作者】河竹默阿彌　【名稱】通稱「四千兩」。時として「四千兩銀杏合紋（しせんりやうぎんいちやうあはせもん）」の名に據つても上場せられた。【諸本】默阿彌全集第十八卷所收　【初演】明治十八年十一月、東京千歳座。配役、野州無宿の富藏（五代尾上菊五郎）、藤岡藤十郎（市川九藏）等。【題材】幕末安政の御金藏破り一件を、田村成義の許にあつた書類を基礎とし、當時繪入朝野新聞に連載された「千代田城噂白浪」などを參酌して構案されたもの。

【梗概】〔序幕〕藤岡藤十郎は新宿の遊女屋辰巳屋の抱へお辰が、伊丹屋の息子德太郎と深い仲なのを知つて、意地づくで張合つた結果、金の算段に行詰り、德太郎の歸路を擁して百兩を奪はうとする。そしてお堀端へ先廻りした處を、以前中間だつた野州無宿の入墨富藏が堅氣のおでん屋になつてゐるのに呼び留められ、結局二人で御金藏へ忍び込まうと相談が纏まる。そこへ髪結の千治が百兩を奪つて德太郎に追はれて來て、おでんの荷物へ突當るので、暗がりを幸ひ富藏は千治から更にその金を奪ひ取る。〔二幕〕藤十郎と富藏は、百兩を元手に御金藏を破つて四千兩を盜み出し、ほとぼりの冷めるまで緣の下に埋めて置く。一方德太郎は義弟へ家督を讓らうとするが、後妻のおつぎは先妻への義理立てから、德太郎を勘當させまいと色々畫策する。〔三幕〕藤十郎は大地震の際、材木で儲けたと僞はり、盜んだ金で貸附所を開いてゐる。そしてお辰を無理にも身請けしようと五十兩の手附を打つ。富藏は分け前を藤十郎へ預けた儘少しづつ使つてゐたが、惡事の露顯するのは分り切つたことと見切りをつけ、藤十郎の許から三百兩を貰つて加賀の母親へ逢ひに出掛ける。お辰は藤十郎に身請けの手金を打たれたので、德太郎と駈落するが、德太郎に金の算段の出來ない處から、二人共に死なうと決心する。そこへ旅立ちした富藏が來合せて、以前の金を返す積りで百兩を德太郎に貸してやる。清元淨瑠璃「巢鴨里比翼道行（すがものさとひよくのみちゆき）」は、この道行の場に用ひられた。〔四幕〕熊谷宿で富藏の女房おさよは娘を抱へて、父親の六兵衞と饂飩屋を開いてゐるが、そこへ富藏が立寄つて思ひがけなく女房子供に逢ふ。そして豫てからおさよに言ひ寄る博徒生馬の眼八が、六兵衞へ貸した五兩の證文を五十兩と書き替へて難題を持ち掛けるのを見て、富藏は亭主だと名乘つて出て五十兩を返してやる。六兵衞は富藏へ去狀を戻して、元通り娘と夫婦になつて呉れといふが、富藏は後で難儀の掛からないやうに去狀を六兵衞の方へ預けて、自分は母親の方へ旅立つ。〔五幕〕身邊の危いのを悟つた藤十郎が、妻のおみさを離別した處へ役人が來て、富藏が加賀で御用辨になつたことから、殘らず露顯した旨を傳へるので、藤十郎は觀念して潔く繩を受ける。老母を人質にされて據なく白狀した富藏は、軍鷄籠で送られる途中、熊谷土手で六兵衞・おさよ・お民に逢ひ、役人の情で水盃を交はして別れる。〔六幕〕傳馬町牢内で二番役を勤める富藏は、江戸へ流れて來て、盜みで挙げられた關八に逢ひ遺恨を晴らす。德太郎は富藏から貰つた百兩のために捕へられたが、富藏の言上で同類の疑ひ解け、繼母おつぎの計ひでお辰を身請けして夫婦になることとなる。富藏と藤十郎とは引廻しの上、淺草で磔刑を言渡され、未練なく引立てられて行く。

【解說】特に御牢内の場は、寫實的要素に富んでゐたし、珍奇でもあつた處から非常な好評を博した。作者晩年の世話物中傑出したものの一つである。〔河竹〕

【參考】河竹默阿彌○續々歌舞伎年代記

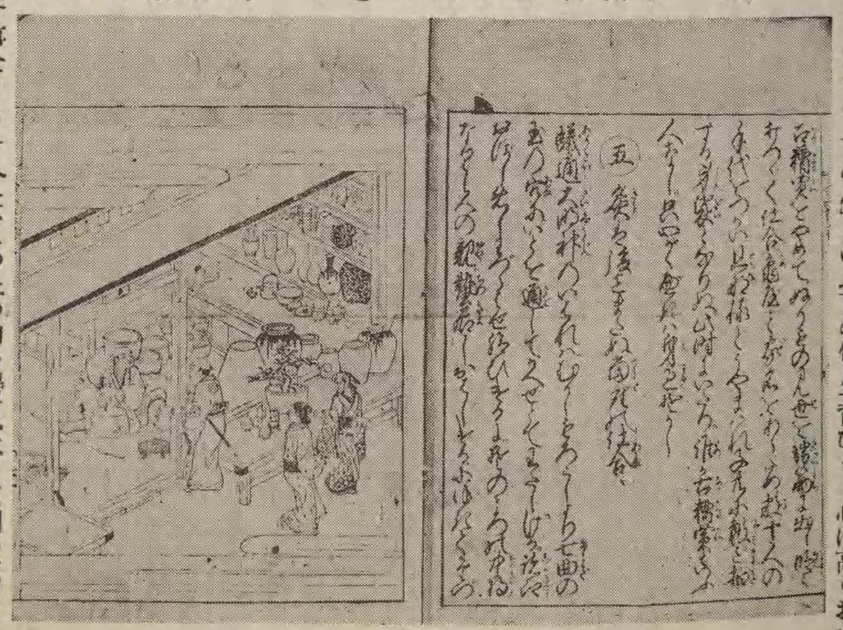
私撰和歌集（しせんわかしふ）　和歌　【名義】勅撰和歌集（別項）に對して、私に撰定した歌集をいふ。【性質】私撰和歌集は、勅撰和歌集と分類の方法は大體等しい。「萬葉和歌集」の雜歌・相聞・挽歌の分類は、「古今和歌集」の分類に影響したが、「古今和歌集」の成つた後は、その分類法はそれ以後の私撰和歌集の踏襲する所となつた。ただ私撰和歌集は歌を撰する範圍は一定せず、「萬葉集」の如き弘く歌をとつた集もあるが、「門葉集」の如き僧侶の歌のみを集めたもの、「林葉累塵集」の如き位なき武士・農夫・商人・僧侶等の歌に限つて撰したものもある。又「風葉和歌集」の如き、物語中の歌を集めた特殊な撰集もある。それだけ雜多であり、和歌の集としては、勅撰和歌集の行はれた時代はこれに壓倒され、勅撰和歌集の行はれなくなつた後は、私家集が重きをなしたので、私撰和歌集が重きをなしたのは、萬葉集時代に限られたと見ることが出來る。【沿革】起原は勅撰集よりも古く、「萬葉集」は第一・二卷を勅撰集とする說もあるが、大部分は私撰和歌集とすべきである。撰者の撰したといふ「

きであらうか。平安時代に入つて勅撰和歌集としての「古今集」が確定されるに前後して、「新撰萬葉集」「古今六帖」（各別項）等の私撰和歌集が成つた。貫之の「新撰和歌集」、公任の「金玉集」（各別項）の如きは、勅撰集中のすぐれた歌を選したものであるが、私撰和歌集といふべきである。また清輔の「續詞花集」の如きは、奏覽を經ないで私撰和歌集となつてゐる。「後葉集」「月詣集」「萬代集」「今撰集」（各別項）等も私撰集である。又、鎌倉室町時代では「夫木和歌集」（別項）の如き、三十六卷より成る私撰和歌集中の大きな量を有する集であり、物語中の歌を集めた「風葉和歌集」（別項）の如きも注目される。勅撰和歌集の行はれなくなつた後も私撰和歌集は引きつゞき行はれ、近世に於ては、戸田茂睡の「和歌鳥の跡」、下河邊長流の「材林和歌集」「林葉累塵集」の如き、清水宗川の「正木のかづら」、清原雄風の「類題怜野集」、本居宣長の「古今撰」、清水濱臣の「菅根集」（別項）の如きも、注意すべき私撰和歌集である。明治以後にも、佐佐木弘綱の「千代田歌集」（別項）をはじめ、多くの私撰和歌集を有する。しかし近世以後は、私家集の方が重んぜられたために、私撰和歌集は必ずしも尊重されなかつた。（勅撰和歌集參照）　〔久松〕

地藏緣起繪卷（ぢざうえんぎえまき）　繪卷物　【解說】藤原末葉以來地獄の觀念の深化せらるゝに從つて、地獄濟度の地藏菩薩の信仰は次第に榮え、鎌倉以降足利期に至つてその普及最も著しく、かゝる趨勢の裡から地藏靈驗の物語繪卷が幾種類も製作されるやうになつた。それ等の中では、支那の地藏靈驗譚を集めたものと、諸寺の地藏堂本尊の緣起とが最も顯著である。帝室博物館及びボストン博物館所藏の「地藏緣起」や「地藏傳地藏緣起」（原本所在未詳、寫本あり）の如きは、前者の適例であり、後者の例としては、「矢田地藏緣起」「壬生寺緣起」「星光寺緣起」などが顯著である。これ等はその製作早くも鎌倉末葉を上らず、その多くは足利期に入つてのものであつて、畫致に於て整美の趣を得たものは多くないが、その頃の地藏信仰の所產としても興味ある資料である。　〔田中（一）〕

地藏緣起繪卷（矢田寺藏）

子孫大黑柱（しそんだいこくばしら）　浮世草子　六册　【作者】月尋堂　【名稱】近代出世分限の商人の經歷を叙して、子孫繁昌の礎としたい意。　【刊行】寶永六年　【諸本】德川文藝類聚第二藤十郎は觀念して潔く縄を受ける。老母を人質にされて據なく白狀した富藏は、軍鷄籠で送られる途中、熊谷土手で六兵衞・おさよ・お民に逸ひ、役人の情で水盃を交はして別れる。【六幕】傳馬町牢内で二番役を勤める富藏は、江戸へ流れて來て、惡みで縛げられた罰人に



子孫大黑柱

所收。【解說】馬產の婦人等が物欲をのみ圖つて、家業に出精せぬのを訓誡する趣旨で、近代分限者致富の苦心談を扱つた教訓小說である。各卷五章宛に分れて全部三十章、小見出を附してゐるが、主題は殆ど同一であつて例話の差異のみによる分類であり、例話の數も必ずしも一章一話となつてゐない。篇中の話は何れも商人の心得たるべきもので、純粹な職人氣質には及んでゐない。例を擧ぐれば、商人の藏と謂はれた大阪鴻池屋の主人が、出入の按摩久兵衞の手提灯を消す樣子の不調法なのを見て、身代はたいた者であらうと察して訊した處、果して彼は德島の櫻屋といふ老舖の伜で、勘當受けた者であつた。仍つて主人は銀百匁を資本に貸し、久兵衞はそれで古切を買つたり、桐油を買ひ占めたり、丁字を見越買などして次第に儲け、その後潰れた家を再興したといふ話。○但馬出石の里の貧者、遠州無間寺の鐘を撞いて金持にならうと思ひ、京まで來た時江戸よりの早飛脚の走る樣を見て、大抵の働きでは金は儲け難い。無間の鐘といふも畢竟人々の胸の內につく早鐘で晝夜油斷なく氣を配つて目を見出す事なりと悟り、それより京に留まつて百方工夫の末、遂に長者になつたといふ話。○攝州猪無郡伊丹は、今狹い江戸と言はれる繁昌の地で、大酒造家が軒を並べ人は華奢風流である。こゝの油屋に雛屋立圍を招いて俳諧百韻の興行があつた時に、三の折になつて宗匠は亭主に花の句を請し、一座も所望した。折紙表に酒を賣ひに來た者がある。亭主は座に着つて店に立ち、十三文の酒を靜かに計り賣り、後、安座して見事花の句を附けた。かやうに商ひに油斷なく正直に稼いだので、次第に分限となつた。或る元日の夢に、「猪無地の里に宿りもとめん」といふ下の句と「背ひくゝ心は高くおもへたゞ」の上の句を得て、二日嘉例の花開きに見ると大黑天の姿があるので、社を作つてこれを安置し、益々繁昌したといふ話等である。なほ翁咲十郎・田中屋治右衞門・瀨戸物屋三右衞門・龍野屋六郎右衞門・玉寺屋吉兵衞等の話には、相當興味深いものがある。凡そ江戸時代初期の教訓小說と目されるものは、多く武

家を中心としたそれであつたが、元祿・寶永頃になつて商家町人を中心とした町人物に變つた。蓋し時代の影響であらう。但し千篇一律の内容趣向であつたので、やがて世に飽かれて衰頽した。これは作者の用意の足らなかつたためでもあらうが、又利慾・金錢が文藝の題材としては、單純であるためであらう。

【參考】德川文藝類聚解說　〔笹野〕

信田（しだ）　幸若舞曲（三十六番の一）二卷

【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寬永十二年板（十行本）、萬治二年板（松會開板）、寬文九年板（山本九左衞門）。上田萬年博士校訂「舞の本」、同再刻名著文庫本「舞の本」（富山房）、新群書類從第八舞曲部等所收。【題材】武勇傳說。御家騷動物。相馬の遺兒姉弟の艱苦と忠臣烈士の義死を叙し、遂に惡滅び善榮えることを作る。調伏・人買・遍歷等の事もあり、御伽草子「まんじゆのまへ」（別項）等と類種の作で、古淨瑠璃に近接した曲。「新謠曲百番」に同名の曲が收めてあるが、千原大夫の忠誠の一節を主題としてゐる。

【梗概】平將門の子、相馬殿の遺子信田の小太郎は未だ幼く、御臺所は姉せんじゆの姫の嫁した小山太郎行重が力めて外舅の菩提を弔ふのを喜んで、老臣浮島大夫の諫を却け、所領常陸信田莊を二分して與へ、信田の館に迎へたので、河內に遁れ去つた浮島大夫の外は相馬譜代の臣僕が爭つて出で仕へ繁榮を極めた。所が、行重は信田の所領を悉く橫領し、御臺所と小太郎を放逐した。母子は甲斐に遁れ上洛して愁訴しようとしたのを、行重は鹿島神宮の神託を曲し御臺所を死に至らしめたので、小太郎は人に助けられて都に上つたが、幼少の頃の事故も知らず、路傍を見せて行商を刺さうと思ひ立つて引返したが、その意を悟られて追拂はれた。途で小太郎は浮島大夫に逢ひ、河內に伴はれ遂に兵を擧げたが、大夫夫妻親子六人は奮戰の甲斐無く討死し、小太郎は捕へられた。行重はこれを千原（ちはら）大夫に命じて海に沈めようとすると、大夫は相馬譜代の家臣とて小太郎を失ふに忍びず、助けて己れは行重のために責殺された。小太郎は京に向つたが人買に誘拐され、四國西國北陸までも賣り回されて樣々の難儀に遭つた末、奥州率土ヶ濱の鹽商人に買取られると、その土地の領主しほ地の莊司がその人柄の良いのを見て養子とし元服させた。偶々この土地に下つて來た奥州の國司は、小太郎の素性を知つて三年間その職を讓つた。一方せんじゆの姫は弟の事により小山の許を逐はれ、尼となつて小太郎の行方を尋ね、四國西國を經て奥州に到り、遂に姉弟の再會となつた。やがて小太郎は三千餘騎を相馬へ差向けると、逸早く遁れ出た行重は、途で前の奥州の國司に捕へられて小太郎に渡され、武藏の妻戀の野で斬られた。上洛して小太郎は關白殿下に謁見し、坂東八ヶ國を賜り、信田の河內に御所を造り、繁昌した。

【影響】本作に據つたものに、竹本筑後掾正本「信田小太郎」がある。　〔島津〕

時代物（じだいもの）　歌舞伎・淨瑠璃　【名稱】正しくは時代狂言、即ち時代狂言ものの意。

【異稱】時代劇・上演排列上から一番目狂言、或は一番目物といひ、又大時代及び大時代風な竹本劇を俗に金光物（きんぴかもの）ともいふ。【種別】廣義には江戸時代以前のものの總稱であるが、狹義にはこれを更に二分して、「大時代」と「時代」とに分類する。大時代は源平時代以前、即ち王代物（別項）で、時代はそれ以後のものを指す。中には時代と世話とを綯ひ交ぜにしたものを時代世話と稱してゐるが、嚴密にいへば、これ等三者の區別は明かにし難い場合が尠くない。またお家物（別項）の如きは、世界から見れば殆ど時代物に屬するが、題材や內容から見れば世話物に屬するといふやうな、特殊な一類をなしてゐるので、普通これを別に取扱ふ慣例になつてゐる。その他時代物の進化發達とも見るべき活歷（別項）や現行の史劇の如きは、自らその形式或は內容等を異にするので、これ等も各々別に取扱つて時代物に含ませない。【性質】狂言の素地をなす世界より分類した一類で、世話物（別項）に對する。即ち題材又は背景を大まかな時代意識と社會制度とによつて二分したもので、過去と現代、貴族と町人といふやうな極く概念的な標準の下に分けたものである。時代物は史劇に相當するが、現行の如き純史劇ではない。江戸時代には德川家及び當時の武將に關する事は勿論、實在の人物を脚色するのを嚴禁されてゐたために、專ら德川以前の史實に取材し、稀に德川家などの事を密かに脚色する場合はこれを憚つて北條或は足利等の時代に假託して脚色するのが通例であつた。併し時代物といつてもその實は史上の人物を假りて來るに過ぎず、概ねそれ等の假面を被つた當世人で、例へば曾我兄弟は廓通の遊冶郎、義經は大盡、辨慶は幇間、御臺・姫君は太夫・傾城等の如く、史實の時代精神なり性格を描寫することは、全然無視して扱ふ風習があり、史上の英雄豪傑、又は公卿・武士等は單に作者の傀儡として脚色された。寧ろ史實に拘泥するのは、作者に技倆の乏しい證として嘲笑される傾向がある。つまり、名作者といはるゝ程、努めて自由に大膽にその空想を擅にしたのである。而も內容は殆ど江戸時代に於ける武士を中心とした時代相、又は當時の時世粧を飜案したにしか過ぎなかつた。故に今日から見れば荒唐無稽、乃至遊戲三昧といふ誹りは甘んじて受けねばならぬ。又その內容の骨子は概ね謀叛か陰謀である。その目的に多少の差違はあつても、要するに惡人の陰謀に對する忠臣の苦心苦衷、又は辛苦艱難、これに伴ふ人殺しや身替り、又は寶物の紛失や詮議、さては怨靈や妖術等、これ等が因を作り果をなして、種々に展開してゆくのであるから、所詮は千篇一律である事を免かれなかつたのである。而も江戸末期までは時代物は世話物よりも重んじられた傾向があり、殊にそれは近松門左衞門の淨瑠璃に於て甚だしい。然るに現今では世話物の方がより多く價値を認められるやうになり、歌舞伎の時代物の如き、その大部分が湮滅し、世話物のみ多く傳存する結果ともなつた。【沿革】歌舞伎では元祿期まではその大部分を占め、寶曆期末に世話物がやゝ擡頭したが、その數に於ては遙に凌駕し、化政期末から世話物に押されて漸次減少し、明治に及んで活歷の生るゝや、殆どその作も稀れとなり、次いで現今の史劇と代るに至つた。淨瑠璃では元祿に近松の「曾根崎心中」（別項）が現はれるまでは殆ど時代物であり、その後次第に世話物も現はれたが、なほ及ぶべくもなかつた。しかし、化政期以降に及んでは新作も殆ど稀れになつた。作品は各時代に亙つてゐること勿論であるが、その數の上から見ると、大時代は奈良朝・平安朝が多く、時代は源平・鎌倉が多い。これを登場人物から見ると、大時

他では、伊勢物語の世界（行平・業平等）、御伽草子の世界（小町・蘆屋等）、前太平記の世界（義丸・源門等）等が多く、時代では、曾我・義經記・平家物語・東山等の世界が多い。

【參考】歌舞伎概論　飯塚友一郎　○歌舞伎圖說（解說篇）守隨憲治・秋葉芳美共編　○近世戲曲史論　守隨憲治（日本文學岩波講座）　〔秋葉〕

下からの美學（したからのびがく）　〔獨〕Aesthetik von Unten　【名義】美を究むるに、何等かの意味で假定せる一の最上概念から、即ち「上から」演繹して美を說明するのでなく、先づ美的事實とされてゐるものを觀察し、即ち「下から」この美的事實のもつ通有性を歸納して後、始めて美の一般的性質を定むる如き方法をとる美學。經濟科學的美學と同義。上からの美學（別項）の對語。【學說】フェヒネルに據れば、凡そ人間の認識を建設し、發展させるには、二つの道がある。美學上にも「上からの美學」（Aesthetik von Oben）と「下からの美學」の二つの道がある。前者は、一般的理念や概念から出發して個々の物に下る方法をとる。後者は、個々のものより一般に至る方法をとる。前者は、美的經驗領域を構成的理念的な計畫による最高の見地に據つて秩序づけられるが、後者は、美學を美的事實や法則の根據に基いて下から建設しようとする。前者は、美や藝術や樣式の理念を一般的概念中の地位、殊に眞や善に對する關係を問題にする。かくして、これは絕對とか神的とか神的理念とか、神的創造活動に亙り、更に時間空間の美の個々の範圍に及ぶ。即ちこれは一般から個々のものを規定しようとする。これに反して、後者は、何が好適し、何が不好適するかといふ經驗から出發する。この經驗の上で、美學上の概念や法則を建てる。又そこから好適の當爲の一般法則をもとめ、漸次にこれを一般化し、かくして、できるだけ一般的概念と法則の體系に達しようとする。前者は哲學的方法であり、後者は經驗的な方法である。この兩者は、各々その方法を正しく保つ限り、矛盾するものではない。けれども上から個々の好適を明かに定めることは困難である。これを確實に明かにするには、その出發點が完全でなければならない。これに對して、下からの方法は、好適の概念のみならず、その個々の根據を明かにする。けれども又、この方法は、一般的見地や理想に達することが困難で、一面的に陷り易いけれども、「上から」の方法は、始めから高い要求をもち、「下から」の方法は、低い要求で滿足することができる。むしろ「下からの美學」は、「上からの美學」を建設する前條件となることができるのみならず、「上からの美學」は、それが何故に好適し、又は好適しないかを明かにしない。これに對して、「下からの美學」が先づ概念を規定するのは、單に用語を定めて置くにすぎないので、その研究の結果を、その概念規定中に始めから規定して置くのではない。それは「上からの美學」と異なつて、本質問題を概念から概念に求めるのでなく、事實に求めるのである。

【參考】Fechner, G. F.: *Zur experimentalen Aesthetik*. 1873. ‖ Fechner G. F.: *Vorschule der Aesthetik*. 1876. 〔渡邊〕

舌切雀（したきりすずめ）　童話　【梗概】糊を舐めた爲めに、意地惡で慾深の老婆に、鋏で舌を切られた小雀を憐んで、深切な老爺がその竹藪の棲處を探して訪ねて行くと、雀等は歡待して雀語を見せ、土產に輕重二個の葛籠を與へると、寡慾な老爺は輕きを負うて歸り、中を開けば夥しい寶物が現はれ出た。これを羨んだ老婆は、同じく雀の宿を訪ひ、重い葛籠を貰つて歸ると、中からは蛇・百足を初め、怪物が現はれて老婆を死に至らしめた。

【解說】五大國民童話の一。物羨み話で、且つ動物報恩說話。本童話の成形は室町末頃か。江戸時代の赤本に「舌きれ雀」「舌切すゞめ」、青本に「舌切すゞめ」、雛豆本に「舌切雀」があり、又享保三年刊、麟長作の浮世草子「猿源氏色芝居」卷一に、「ぢいとばゞとの昔話に、舌きり雀の云々」と見える等からも立證せられ得る。但し、その原形は「宇治拾遺物語」卷三所載「雀恩を報ゆる事」の腰折雀の話で、それでは、子供に石で腰を折られた雀を助けた老婆が、報恩のために雀の齋した瓢の種を植ゑると、その瓢の實の中から米が無盡藏に湧き出たのを羨んで、隣家の女が故意に雀の腰を折つて助け養ふと、瓢の中からは米の代りに蛇・蜂・百足・蛇が現はれて女を刺し殺した事になつてゐる。この腰折雀は、朝鮮の沒夫興夫（ノルブフンブ）の童話（高橋亨氏著「朝鮮の物語集」）及び蒙古童話（鳥居きみ子女史著「土俗學上より觀たる蒙古」）と類話をなして居り、この二つは何れも腰折燕であるが、後者は一層日本のと近い。恐らく、この大陸からの外來說話が腰折雀となり、更に舌切雀と變形して行はれたものであらう。「燕石襍志」及び「嬉遊笑覽」には、揚寶が黃雀を助けた支那說話を本據と認めようとしてゐるが、類種といふ程度に過ぎない。なほ腰折雀の米瓢は一種の如意寶で、「睽車志」に見える支那說話などの影響か。我が國でも「今昔物語」卷十七に早く見え、同じ「宇治拾遺」にも

（舌切と同話）及び卷六に同種の話を載せてある。【影響】「說舌切雀長歌幷短歌」（巢澤翁滿作、童話長篇）。「かくれ里」（井上滋藏作）等。

【參考】燕石襍志卷四　○嬉遊笑覽卷九　○標準日本御伽文庫の日本童話上卷附錄解說　森・松村・鈴木・馬淵共撰　〔島津〕

下草（したくさ）　連歌集　十卷　【著者】飯尾宗祇。宗長の「壁草」の奧書に「老葉・下草の憚もありぬべけれど、もし其露にだにかゝらまほしくて」とあるは、宗祇の集を指すものであり、宗牧の「東國紀行」に、「宗祇詠草の內下草のうち云々」とあり、「梅巷古筆傳」の宗祇傳にも「下草・老葉・忘草等草藁尤多」とあるから、宗祇の連歌集であることは疑ひなく、且つ宗祇の自選集かと推せられる。なほ集中發句の部に、「水無瀨の御廟法樂に　雪ながら山もとかすむゆふべかな」とあつて、この句は「水無瀨三吟百韻」（別項）の宗祇の發句であるから、この點からも、宗祇の集なることが知られ、同種のものがなほこの外にもある。【諸本】圖書寮に寫本があり、經濟雜誌社版續群書類從連歌部にはこれを補入してゐる。【解說】附合二句の拔萃と發句との集で、第一卷から第九卷までが附合、第十卷が發句である。附合は、春・夏・秋・冬・旅・戀上・戀下・雜上・雜下の如く部立し、發句は四季の順序に從つて集められ、立春から始まつて歲暮に終つてゐるが、四季の標目はしてない。附合の部には凡て前書がなく、發句の部には前書があつて、その前書によると、京都及びその附近、攝津（住吉・池田・伊丹）・和泉（堺）・河內・播磨（書寫）・備中・筑紫・近江・越前・越中・伊豆（湯山）・吾妻・室の八島等で詠まれ、なほ種々の人々との關係に於て詠まれてゐるので、宗祇の傳記資料と

もなる。中に、「老の後會所々奉行承侍し時其會に　あらぬ名をかるや天びこほとゝぎす」といふ北野會所の奉行を勤めた時の作も見える。〔志田〕

順（したがふ）　歌人（三十六歌仙の一）【姓】源【字】具瞻【生歿】延喜十一年に生れ、永觀元年（一六四三）歿す。享年七十三【家系】嵯峨天皇の後裔で擧（こそ）の子【閲歴】延長八年父を失ひ、承平五年母を失つた。二人の兄があり、長兄は早く歿した（扶桑集所載五噴吟の序）。天暦五年十月「後撰集」撰集の宣旨を賜はつて、能宣・元輔・時文・望城等の寄人と共に、梨壺（昭陽舍）に於て「萬葉集」を訓釋する傍ら撰集のことに從つた。これが所謂梨壺の五人である。而して萬葉加點の功は順が第一であつた。時に彼は年四十一にして學生であつた。同七年文章生となり、同十年初めて勘解由判官に任じたが、應和元年に至るまで六年間も在任し、仕途の澁滯を嘆じ、疲れたる馬の型を作り一首の長歌を添へて勘解由長官朝成朝臣に訴へた（家集）。無尾牛の歌（本朝文粹卷一）にも同樣の心情を歌つてゐる。同年二人の娘を失つて世の無常を觀じ、滿誓沙彌の「世の中は何にたとへん」に擬して十首の歌を詠んだ。後東宮藏人、民部大丞などを經て、康保四年（五十七歳）和泉守に任じたが、その後暫く無官であつたので、天延四年和泉守在任中の功績十二箇條を記して、淡路守を望む申狀を上り、更に天元三年和泉守の功、散位九年の勞、進士及第の三箇條を以て伊賀・伊勢等の守を望む申狀を上り（文粹卷六）、同年能登守に任じた。彼の作品には仕々にして不遇の嘆と卑屈なる諂諛とが視られてゐる。或は「一云貧苦愛道」といひ、或は「任勘解由使」といひ、或は「任和泉守」といひ、或は「任能登守」といひ、或は「任越前守」といひ、或は「任越後守」といひ、或は「任越中守」といひ、或は「任越後

【附考】薩摩國諸縣郡には後年まで志多良歌舞が傳へられた。薩藩の國學者山田清安は、「設樂歌考」を著はして、これを考證した。かやうに九州は古くから近時に至るまで、志多良歌が行はれてゐたのであつて、志多良歌は九州をその根本とすべきである。もとは外來の歌舞より發したものであらう。

【參考】古謠集　栗田寬〇日本歌謠史　高野辰之〇建久三年皇太神宮年中行事（續群書類從神祇部所收）〇宮事緣事抄（大日本古文書石清水文書の五所收）

【藤田】

詞壇骨鯁（しだんこつかう）　漢詩漢文　一卷【著者】松邨九山【解說】山本北山の「作詩志彀」「作文志彀」二書の誤りを抉摘したもので、その言ふところ根據あり、取るべきところが多い。「藝園鉏莠」（別項）と併せ觀るべきものである。

【佐久】

七音（しちおん）「韻鏡」を見よ。

七騎落（しちおち）「源氏物の謠曲」を見よ。

七曲吟社（しちきよくぎんしや）「松塘」を見よ。

師竹（しちく）　俳人【姓名】菅原賢五郎。本姓伊藤氏【生歿】文久三年八月に生れ、大正八年三月二十四日歿す。享年五十八。【墓所】宮城縣登米（とよま）郡登米町龍源寺【法名】賢秀院諦道師竹居士【閱歷】もと伊藤氏であつたが登米町の菅原氏を嗣ぎ、農を業とした。幼時元の藩儒中澤敬哉に隨つて經史を學んだ。明治十三年東京に遊學し、後、菅原氏を嗣ぐ。多趣多藝の人で、小西皆雲・長三洲等に就いて書法を學び、又久米水屋に篆刻を學び、書畫の趣味の外、古玩・香・花・茶にも趣味が深かつた。俳句は初め微笑と號して舊派の俳句を詠んだが、明治三十七年安齋櫻磈子と共に句作するに及んで日本派に轉じ、同三十八年秋始めて新聞（日本）に投稿し、同三十九年まで櫻磈子と屢々句三昧に入つた。又、河東碧梧桐・大須賀乙字・喜谷六花・小澤碧童・伊藤觀魚・廣江八重櫻・廣田寒山・荻原井泉水・安齋櫻磈子等と共に三題集を創めた。東北に於ける碧門の重鎭で、高雅滑脫の調に優れてゐる。【著作】師竹句集（安齋櫻磈子編（大正九年刊））

【參考】三千里河東碧梧桐〇俳諧雜誌師竹句集號（大正九ノ八）〇糸瓜（大正一一　三）

【荻原】

紫竹集（しちく）　加賀節淨瑠璃段物集　半紙本一册【編者】山本加賀掾【刊行】元祿十年山本九兵衞版【解說】最初に「門弟教訓」と題し、「此門弟教訓予六十三歳の秋認故七九集と書たけれども前々の題號の竹の緣あれば紫竹集とあらはす也」と加賀掾の序文あり、次に「藝に器用の無器用、無器用の器用」あること、「藝の下手に限り人のそしるを立腹す」ること、「節付しやうを便りに語るは大きなる僻事」たること、「位はかせは上一人より下萬民一切の生類風雨水音迄にある事」「持合引廻し」と云は地ふしにある事」等について懇切に教訓し、最後に自分の經歷を敍し、「我十七歳の春、あはれ世上に名を發する藝をあたへたべと、三十番神へ祈誓をかけ、年來諸藝の家に出入し、其道々を見聞に、丹誠をつくす者にも其家の子ならねば祕事を傳へず、然ば望たりぬべき賴もなし迚、心をつくし修行するならば、たとひいか體の藝にてなりともと淨瑠璃に心をよせぬれども、ならふべき師なし、たとひ師なくとも音曲の法を守り、うすきをあつくし、おもきをかろくしみがくに甲斐のなからんやと思ひ、謠狂言或は平家舞小歌迄の音勢を窺ひ、たゆむをすゝめ、そゝるを引しめ、終に我一流の淨瑠璃とす、親類のいかり朋友の異見、わらひそしるといへども念願むなしうせんやと雜行苦行し、四十一歳にて京都に出、芝居を取立、今年二十四年つゝがなく相勤む、道に達せしとは更々思はねども、或時は高位高官の御前に召、前代未聞の御褒美に預り、又は國主佛者儒者音曲者にも誇をうけず、愚藝といへども、他念なくつとむ故佛神の御あはれみと有がたし」といひ、又「我幾年語る數百段の淨瑠璃いづれか易しと思ふはあらず、中にもむつかしき段八曲有」とて、小原御幸以下八曲を擧げ、それをこの教訓の後に附載してある。

【第二八曲目錄】一小原御幸、二身延、三菅丞相、四松風、五明石卷、六花子、七草刈、八葵上

さて玆に注意すべきは、これと同名同形の十册本の存在することである。その第一卷は序文も目錄もなく、ゆきなり「團扇曾我」の虎少將の行力爭、「薩摩守忠度」の銘づくし、「十六夜物語」の賢女づくし、「團扇曾我」の虎少將道行、「薩摩守忠度」の菊のまへ道行、「曾根崎」の心中道行、同觀音廻り、「源氏供養」の初段、「平安城」の七草粥、河內通風流、「薩摩守忠度」の第二、同名所づくし、「源氏供養」の五段目を丸本より三四枚ばかりを拔きて寄せ合せたもので、中には文章が中途から始まつたり、最初に三四行も空白があつたり、頗る不體裁である。第二卷は一册本「紫竹集」の序文及び門弟教訓の部分を除き去り、第二八曲目錄以下を全く再刷したもので、この卷だけは版下が全部一樣で、他卷の寄せ本なるため面目を異にしてゐる。且つ目錄も一册本「紫竹集」のそれを利用したために、第二八曲目錄、一小原御幸、二身延、三菅丞相、四松風、五明石卷、六花子、七草刈、八葵上となつて、他卷と體裁を異にする。一卷本は一部を門弟教訓にあて、他の一部を八曲にあてて第二八曲としたるを、これはそれを第二卷八曲の義に通用せしめたのである。第三卷は、

【第三目錄】平安城（みさほの前道行）、同（でんけう神おろし）、十夜物語（玉鶴姫道行）、惟喬（しんわうみちゆき）、櫻花物語（こてふのまひ）、同（あかぞめゑもん道行）、船遺恨（たえまのうへ道行）、遊屋物語（ゆやのまへみちゆき）、八鹿大臣（たうくはのまひ）、五百羅漢（くうやみちゆき）、本願記（たまよの姫道行）、粟島御緣起（ひめまつ道行）、戀塚物語（ためわかみちゆき）、十六夜物語（ひめぎみ道行）、熊野開帳（平太郎みちゆき）、三井寺（四き）、同（てるひめ道行）、同（ちから命こひ）、婚禮祝言記（かんじゆ道行）、伊勢物語（やえがきみちゆき）。

【第四目錄】東山殿子日遊（やくものまへ道行）、同（さくらづくし）、和氣淸丸（きやしやものうり）、同（むまのだん）、同（こがらしの前道行）、源氏三代記（そのふのまへ道行）、佛舍利（くれなひ姫みちゆき）、雷論（とうろうのだん）、源海上人（はなじゆの前道行）、三社託宣（てるひの前道行）、同（みやめぐり）、徒然草（はなうり）、同（ひめみや道行）、同（四き）、一心五戒の魂（かほる姫道行）、八はながた（ふせ屋泉川道行）、大江山（頴光みちゆき）、花山院（しゆしやう道行）、同（ぱんぜいのまひ）、大黑天神（そつのないし道行）。

【第五目錄】以呂波物語（しゝのらんぎよく）、同（いろはのまへ道行）、世繼曾我（かりほの高名）、同（けはひ坂）、同（虎少將道行）、同（十ばんぎり）、同（ふうりう）、藍染川（むめのなよせ）、同（辨の君道行）、念佛往生記（名所づくし）、同（きよ姫道行）、同（九ほんのじやうど）、百萬遍（さがの花見）、同（じゆんてい道行）、女人成佛記（あまよ前道行）、靈驗記（とし平枕物狂）、受法記（かざしのまへ道行）、頴朝濱出（ふうりう女武者）、同（虎團三郎道行）、寢物語（朝がほ夕がほ道行）。

【第六目錄】凱陣八島（つくり山伏道行）、同（くはんじんちやう）、同（せつたい）、葵上（石山まふで道行）、同（きぶねまふで）、紀三井寺（ひぎやうのこま）、同（中宮道行）、忠臣身幷物語（かしはのまへ道行）、伊勢御遷宮（あきこのひめ道行）、梅花垣（左七女房道行）、隅田川（きやう女道行）、巴太鼓（学治せた高名物語）、同（たねなをみちゆき）、同（たいこのきよく）、長谷觀音（しのだづま道行）、顯家鞠始（まりのきよく）、同（まんじゆの前道行）、牛若武勇始（都町づくし）、源三位頼政（たつたのまへ道行）、井筒（しらつゆ姫道行）。

【第七目錄】曾我七伊呂波（虎少將みちゆき）、同（かはづすまふ物語）、東山殿逍遥能（しぐれのだん）、同（ふじ山十二けい）、摩耶山開帳（かづらきみちゆき）、同（くんどく）、和訓三部經（によぜ姫道行）、同（双ろくのだん）、靜法樂舞（大夫しなさだめ）、盛久（きくのまへみちゆき）、同（地ごくのゑとき）、猫魔達物語（九相のだん）、同（さよてる姫道行）、新豐饒御祭（小ぎく母道行）、曾我美男草（兄弟母みちゆき）、魂産靈觀音（千里の前道行）、義經懷中硯（ふうりう鎌倉入）、忠信廿日正月（吉野山名所づくし）、飛驒内匠（めいしよづくし）、同（しゆみの記）。

八・九・十の三册は「紫竹集」追加の題簽あつて目錄なし。今その内容を檢するに、八卷にはけいせい大州道行、まさかた道行、安久夫婦道行、きよくずまふ、かほる姫道行、傾城請狀、虎少將道行、三部經、ふせやいづみ川道行、初春野郎足揃、名所づくし、きくのまへ道行、銘づくし、二ねの君道行、反魂香、邯鄲之枕、三熊野かげろふすがた、契情尾上の鐘、もくやおくめ道行、清川道行、忠臣せいざろへ、（と き屋ね物ぐるひ、喜兵衛おみつ道行。九卷には下卷女絲木、女せいざろへ、しのぶの道行、筆法將安感、孫五兵衛おまん道行、北條時宗蒙古、孫五兵衛おまん道行、北條時宗蒙古、孫五兵衛おまん道行、北條時宗蒙古

女のさかしらに聞ゑられて、會ふ事の叶難ないのを悲しみ、我の方は入水して死んだ。これを悲しみ、自分は我の方の菩提のために尼になつた。○第七は、華山院の姫君の事。以上の懺悔話を聞いてゐた今阿彌陀佛は、まだまだ懺悔の心が淺いと冷笑し、懺悔にも、じの懺悔、りの懺悔あることを語り、種々佛理を說いて他の尼と論議し、皆の留めるのも振り捨てて、この庵から立去つた。後にこの尼の素性を聞くと、もとは華山院の姫君で、かねて入内と定まつてゐたが、十六歳の春、花若といふ少年と相思の仲となり、乳母の女房を從へ、都を遁れ出で、難波の浦に泊つたところ、宿の主人は俄かの出來心で、花若を殺して姫を手籠めにせんとしたから、姫はその座に主人を刺殺し、其處を遁れて尼となり、諸國修業の功を積んで今に至つたと云ふ。

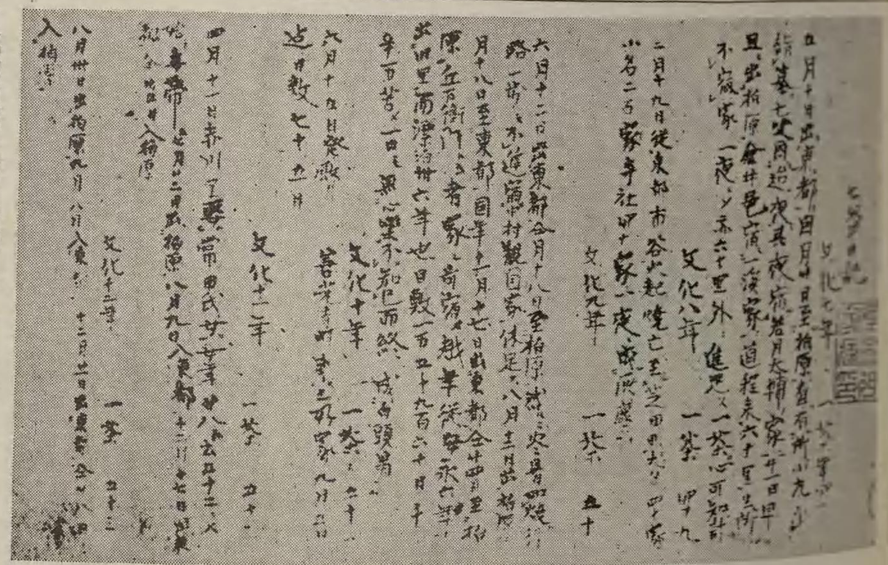
【解說】この小說は、厭世悲觀の室町文學の影響を承けたもので、その傾向の殊に著しい「三人法師物語」(別項)と同種のものである。「三人法師」では、高野山に遁世の僧が、偶然落ち合つて懺悔話をし、「七人比丘尼」は、善光寺附近の關川に、七人の尼が集まつたと云ふ、構想から題號まで、ほぼ同一であり、男を女に變へ、三人が七人に增したと云ふに過ぎない。又個々の話題に就いても、例へば三池殿の尼の話は、謠曲の「藍染川」(別項)に似、華山院の姫君は、「しぐれの緣」(別項)等の改作といふべく、構想には別に新味を感じないが、併し戀の破綻、愛着嫉妬が動機となつて佛門に入るは、未だ眞の悟りとはいへない。犯せる罪もなければ、歎き悲しむ愛着もなく、人を怨み、世を呪つなどいふことあるわけもなく、心は光風霽月でありながら、盛者必衰、無常迅速の佛理を述べて、穢土を厭離してそ、眞の極道であるとの意味を、兵部の尼及び華山院の尼の口を假りて說いてゐる。この點が「三人法師」と異なつてゐる。【影響】鈴木正三の「二人比丘尼」(別項)、「四人比丘尼」など、この構想を學んだものである。なほ宇治加賀掾の淨瑠璃に、「七人比丘尼」といふがあり、白菊や華山院姫君などの事があり、大體を改作したものである。

【參考】近古小說解題　平出鏗二郎　【水谷】

七誹仙（しちはいせん）　俳諧　【解說】精しくは貞門の七誹仙といふ。京都に於ける貞德直門の優れた七人を稱する名稱で、野々口立圃・松江重賴（しげより）・山本西武（さいむ）・鶏冠井令德（かえでいれいとく）・安原貞室・北村季吟・高瀨梅盛（各別項）の七人をいふ。隨流の「貞德永代記」(別項)に、古點者品定の事としてこの七人を擧げて品評し、その後の部分に、古誹七仙・先達七仙・誹七仙・誹仙等の語を使つて居り、沾涼の「綾錦」(別項)に、京貞門七誹仙としてこの七人を擧げてゐるから、「永代記」以前からあつた稱呼であらう。江戸の五誹哲(別項)に對する稱呼のやうである。

【參考】誹諧家譜　早川文石○誹諧家譜拾遺集　青木十口○誹家大系圖　生川春明　【志田】

七番日記（しちばんにつき）　句日記　【著者】小林一茶　【成立】文化七年より文政元年に至る　【諸本】自筆稿本（小坂順造氏藏）。一茶同好會編刊本・新校七番日記（一茶叢書七）・改造文庫本等がある。【內容】文化七年より文政元年に至る九年間に亙る句日記稿本で、上欄に各年月の日次を記し、その日々の行爲と見聞の大要を記し、下欄に作句・俳諧歌・見聞記・知友の作句等を錄したもので、一茶の心的經過を見るに必要なものである。一茶はかくの如き日記的句稿を年々記錄してゐたので、今までに發見されたものに、この「七番日記」の外、「寬政句帖」「享和句帖」「一茶旅日記」「文政二年句帖」「八番日記」「九番日記」及び「文政八年句帖」の七種があり、皆同一樣式の句日記稿本である。



【贊川】

七百五十韵（しちひゃくごじふいん）　俳諧集　一册　【編者】伊藤信德　【本稱】誹諧七百五十韵　【名義】百韵が七卷と五十韵が一卷集まつてゐる所から、かく題した。【諸本】談林俳諧集（俳書大系）所收。【刊行】延寶九年　【內容】第八の尼の事。これは主人の尼で、もとは筑前國の豪族三池某に仕へたものであるが、北の方は夫三池殿が訴訟の事で、都に上つたまゝ久しく歸らないのを氣遣ひ、都に上られるのに伴うた。上つて聞くと、三池殿は訴訟に勝ち、總政の總說の地を賜はり、其處に下向したとの事。これは主人の尼で、もとは筑前國の豪族三池某に仕へたものであるが、北の方は夫三池殿が訴訟の事で、都に上つたまゝ久しく歸らないのを氣遣ひ、都に上られるのに伴うた。上つて聞くと、三池殿は訴訟に勝ち、總政の總說の地を賜はり、其處に下向したとの發句に、「八人や誹諧うたふ里神樂　如泉」とあるやうに、信德・正長・如風・政定・春澄・仙菴・常之・如泉の八人が、一卷づつ發句を出した連句集である。卽ち第一の發句が信德、以下順に正長・如風・政定・春澄・仙菴・常之・如泉（五十韵）となつてゐる。卷頭に春澄の短い序がある。【價値】延寶になると、貞門の諸哲で談林化するものが多かつたが、信德は談林化以上に淸新な調を取つた一人であり、その中でも早い方の人である。春澄の序に、「至詞不レ飾、至實不レ華」とあるやうに、この「七百五十韵」は、信德がかゝる理想を以て同志と試みたものであることが推せられる。それゆゑ、これが芭蕉を刺戟して「次韵」あらしめるに至つたのである。

【影響】越人から蕉風の開基と言はれた「次韵」(別項)は、本集第八の五十韵の末を繼いだものである。卽ち「あいさつを爰ではしたい花なれど又かされての春もあるべく」といふ「次韵」卷頭の詞書は、普通の前書ではなく、「七百五十韵」の第八の五十韵の最末の二句(正長・常之)で、これを前書の如く揭げ來つて、この後を繼ぐものなることを示したのである。かくて芭蕉はこれに繼いで、「鷺の足雉子脛長く繼そへて」と出して、其角等と五十韵を卷き、なほ二百韵を卷いて都合二百五十韵となし、七百五十韵と合せれば十百韵となる如くしたのである。次韵の第二の百韵の發句、「春澄にとへ稻負鳥といへるあり　其角」とあるのは、七百五十韵の第五の卷の發句、「雁にきけいなほせ鳥といへるあり　春澄」に對したもので

あり、同じ巻の揚句、「如泉法師が春力あり楊水」は、發句で春澄を冷やかしたから揚句で如泉を讃めたので、皆七百五十韵に關係ある事である。

〔萩原〕

七部拾遺（しちぶしゅうい）「俳諧七部集」を見よ。

七部集大鏡（しちぶしふおほかがみ）俳諧註釋書　三册【著者】月院社茂呂何丸【名義】天下後世の龜鑑たるべき註書といふ義であらう。【刊行】文政六年【諸本】明治二十六年の覆刻本がある。その後俳諧註釋集（俳諧叢書）にも收められた。【内容】「俳諧七部集」（別項）の拔註である。洽く和漢の書、先人の註に渉り、十九年の星霜を經て大成したものである。月院社の藏版である。序・冬の日・春の日・初懷紙・曠野・ひさご・猿蓑・炭俵といふ順である。「續猿蓑」を除いて「初懷紙」を入れた理由は、「續猿蓑」は芭蕉歿後の書で、歿後の句なども見え、龜鑑とはなし難いといふのであるが、別に「續猿蓑注解」（文政六年刊）と題して何丸の子公石が出版してゐる。序卷には、鵬齋・大江丸・完來・對山・成美・五芳・士朗・蕉雨・大黑庵・月居・鷺笠・梅室・寥松・護物・北元・長齋・芝山・乙二・三津人・大鵬館主人（蜀山）・水母散人（嶋保巳一）こと、大方當時の名流を網羅してゐるといふ大がかりで、版下が各自の肉筆といふ凝り方である。次に凡例七ケ條、引用書目五百餘卷を擧げ、次に「芭蕉翁俳諧口決」といふ文を添へ、又七部の題號は名・體・宗・用・教の五義に依つて名づけたのであるといふ「題號釋論」といふのが出てゐる。書末には中敬齋の跋、文政三年初夏友人辨地の跋がある。【價値】本書は古事・出典を擧げ、句意を解し、附方・切字を論じ、先人・今人一切の說を示さうとした點は、容易ならぬ努力の跡を想はせるけれど、原句にさまで關係なき事まで引用して、くだくだしく論じ、却つて註解の要領を失つて了ふ傾きを持つてゐる。併し本書の出版は當時の俳壇を確かに驚倒させたのである。「奇談夢之棧」の「七部集靈魂滿ニ何丸ニ」には、「續猿蓑」を除いて「初懷紙」を加へたことの不可や、註釋の誤などを指摘して手ひどく攻擊し、「この大鏡は句の意を解せず、其句々に似よりの故事を擧げたるのみにて發句また附方の意をいはず」といひ、「元來諸家の雜說を請賣にして、實は名利の山事なり。其證據はいらざる序文數篇を集め云々」など突込んで、嘲罵を極めてゐるけれど、俳壇に大鏡の名が喧傳されたればこそ、かゝる罵倒も起つたのである。「七部集」の尊崇が高まると共に、本書の聲價も永く續いたのであるが、今日となつてはさまで參考になる書とも思はれない。

【參考】俳諧者流奇談夢之棧行過大人（古俳書文庫第六編）

〔萩原〕

七部集連句早見（しちぶしふれんくはやみ）俳諧表一折【著者】河田寄三。寄三は武藏榛澤郡中瀨河の人で、齋藤甚平といひ、齋藤南々の弟で、出でて河田氏を嗣いだ。不知庵・水石居等の別號がある。兒玉逸淵の門人。明治五年九月十九日歿、享年六十六。【成立】本表刊行は逸淵の歿後なので、惺菴・西馬の校閱、惺菴藏板で出版されてゐる。【體裁】生漉四枚繼ぎ一枚の表で、竪八ツ折にし、それを四ツ折にして、表裏に表紙を附けてある。【刊行】凡例が嘉永元年十二月に記されてゐるから、同年か翌年かの刊行であらう。江戸書林日本橋北十軒店播磨屋勝五郎發行。【諸本】附合作法全集（俳諧文庫）所收。これには色の代りに丸・線などの記號を以てし、句々も全句を記し作者名も表はし、書册の形に改造してある。【内容】「俳諧七部集」（別項）中の歌仙三十九卷、表合二卷及び附錄として「深川集」中芭蕉の加はつた歌仙三卷、都合四十二卷の歌仙と二卷の表合とを一枚の早見表とし、四季・戀・月花の定座、その他注意すべき指合を標記して、蕉風連句の式目上の運用の模樣を一目瞭然たらしめたものである。「炭俵」にある一卷の百韻のみは省いて載せてなく、追つて類を合せて百韻早見を出すとあるが、これは出なかつたのであらう。表には四季・戀・月花の定座を標するに色分けの方法を取つて、春は青色、夏は赤色、秋は黃色、冬は黑色の太い橫線を用ひ、月は丸、花は櫻の花形、戀は角づきの戀の字で、各々赤色を用ひてある。句々は皆語記してゐるからといふ理由で、長句短句共凡て半ばを記してあるだけであり、作者名も記してない。【價値】蕉風連句の粹といふべき「七部集」の連句を、百韻一卷を除いた外の凡てを一目の下に見渡して、蕉風の式目運用の自在さを知り、「冬の日」から「續猿蓑」に至る間の式目運用上の推移異同をも比較考察するに便じた考案は、誠によい思ひつきであつたと云へる。特に附錄として「深川集」をも加へたのは、同集は「七部集」研究者の中に、「續猿蓑」を芭蕉歿後のものといふ理由で省いてこれに代へる論者があり、又價値に於ても「七部集」中の他の集に劣らぬものなので、これを加へたことも宜しきを得たものといふべきである。ただ句々全句を擧げず作者名をも表はさなかつたのは、著者のいふ理由もさることながら、一つは多數の連句を一枚の表にする關係上已むを得ぬ點もあつたのであらうが、看者に取つては不便と云はざるを得ない。

〔志田〕

七部婆心錄（しちぶばしんろく）俳諧註釋書　六册【著者】原田曲齋【名義】老婆心を以て「七部集」を丁寧に註解したとの義であらう。【刊行】萬延元年【諸本】普通枕本型のものが流布してゐるが、枕本を二つ合せた位の大さのものもある。明治になつてからの版本もある。俳諧註釋集（俳諧叢書）所收。【内容】一卷に自註の大概、補註の了管、再板の校正、古註の評論、冬の日。二卷に春の日、鶴の歩み。三卷に曠野。四卷に瓠集。五卷に猿蓑。六卷に炭俵。七卷に續猿蓑、延寶五年芭蕉・信章兩吟百韵、すべて七卷六册に分れてゐる。【價値】曲齋は一卷の卷初自註の概論に於て、附句の案法を見立・趣向・句作の三面より心理的に解剖してゐるが實に精細である。又再板の校正に於て、「七部集」の版本の時代を版木・刀法の上から考證してゐる所も卓見である。かく本書には取るべき所もあるが、我見に執して原作を猥りに改竄し、先註を痛罵してゐる所などは、牽强附會の譏を免れないし、又蕉風の連句を見立で見る事も首肯し難い所である。もと〳〵連句だけの註ではあるが、各集の前に解題を附し、集の終りにその卷の優劣を圖示してゐるなど用意周到である。

〔萩原〕

七部餘錄（しちぶよろく）「芭蕉翁七部錄」を見よ。

七偏人（しちへんじん）滑稽本　五編十五册【作者】梅亭金鷲【名稱】角書に妙竹林話とある。竹林七賢人に擬したものである。【刊行】初編安政四年、第五編文久三年。【諸本】滑稽名作集下卷（帝國文庫）・滑稽本集（日本名著全集）・滑稽文學全集・有朋堂文庫等所收。【題材】鯉丈の「八笑人」「和合人」（各別項）の摸倣で、江戸遊民生活の描寫である。

【梗概】柳橋新道に住む喜次郎の宅へ、遊仲間

の茶目吉、虛呂松が年始に來、下太郎も來合せて例の無駄口を叩いてゐる所へ、半可通の大愚が訪れる。先客三人は二階へ上り、喜次郎一人で應待する。大愚は得意になつて風流談をする。喜次郎は到來物とて香煎と羊羹とを出す。實は下太郎が惡戲から香煎と見せかけて七色蒔椒を、羊羹と見せて鮪の切身を持つて來たのであつた。大愚は苦しくも嚥み下した。二階の連中は下太郎から話を聞き、可笑しさを耐へて覗いてゐる。其處へ

と下太郎とが門附になつて粹な喉を聞かせるといふのであつたが、枝豆ゆで玉子賣の爺が喜次郎・飛八・野良七等に買收され、二人の門附の邪魔をして失敗に終らせる。二人も腹癒せに、途中であつた大愚に定九郎の衣裳を着せ、追剝の姿になつて喜次郎等を待ち伏せる。喜次郎等はお麥お白湯をつれて得意げに戻る所を脅され、根が臆病者なので皆腰を拔かす。大愚は圖に乘つて、田舍親爺のため組伏せら

となる。冬の一日一同が會合して親孝行の座談會を催し、陰德のつもりで來春の陽報を待つことにする。

【構想】春夏秋冬の四季に分けて、茶番や惡戲の趣向に、人々をあつと言はせようとして遊ぶ江戸遊民の一面を傳へてゐるが、本來滑稽な茶番惡戲の計畫を書餠に歸せしめて、滑稽を多くしたり、それと共に氣障な風流人たる大愚を出して利いた風、似而非風流を笑はせたりしたところに痛快味はあるが、瀧亭鯉丈

の案方・附方を分析して說明し、道に入る者の便宜に供へたのである。即ち本文はこの七名八體說を實際の附句に押し當てて解說したものに外ならぬ。

〔各務〕

侍中群要（じちゆうぐんえう）有職　十卷【著者】橘廣相【諸本】丹鶴叢書・續々群書類從第七法制部所收。但し、國書刊行會本丹鶴叢書には、同會本續々群書類從に加へてあるがために省略されて入れてない。【解說】藏人の職掌に關して詳述したもので、卷一初補間ノ事、

の茶目吉、盧呂松を始め、下太郎七兵衛せて例の無駄口を叩いてゐる所へ、年可通の大愚が訪れる。先客三人は二階へ上り、喜次郎一人で應待する。大愚は得意になつて風流談をする。喜次郎は到來物とて香煎と羊羹を出す。實は下太郎が惡戯から香煎と見せかけて七色蕃椒を、羊羹と見せて鮪の切身を持つて來たのであつた。大愚は苦しくも嚥み下した。二階の連中は下太郎から話を聞き、可笑しさを耐へて覗いてゐる。其處へ同類の野良七が來、矢張り香煎と羊羹との馳走になる。とう〳〵二階の連中の惡戯と分り、下りて來た盧呂松を捕へて散々な目にあはす。後は大笑となり、大愚はその儘戻つて行く。やがて下太郎・茶目吉・盧呂松三人が湯にゆく。茶目吉は湯屋でも失敗を演じ、大屋の源兵衞を突つ轉ばし大慌てに逃げ出す。喜次郎と野良七の居る所へ酒肴が屆けられる。不審に思つてゐる所へ、茶目吉が目の色を變へて飛び込み、雪隱の中へ隱れる。そこへ盧呂松が戻り、湯屋の一件を話す。御上酒のお入りと洒落れて、飛八と跂助が入つて來て七偏人が揃ふ。喜次郎の案で初卯詣の茶番の相談をする。茶目吉が大茶釜の番をする案を出して一蹴せられ、結局、歌修行者と武家とが天神橋の上で爭ふ所を年增が仲裁し、後で舟の中で飲む趣向でやることにする。愈々實演の當日になると、武家になつた茶目吉が、眞の武士から挑戰され、散々な目に遭つて茶番は失敗に終る。その後夏の一日に趣向を案じ、茶屋女のお麥お白湯を惚れさせるため、跂助

七偏人（口繪）

れ、結局露顯して大笑になる。秋の夜長の徒然に百物語をして大愚をいぢめる趣向を立てる。愈々百物語の會となり、大愚の話を最後に燈心を引いて眞の闇となる。連中は化物に扮裝する。大愚は怖さに戸棚にかくれる。その拍子に頭から麥の粉と干瓢が頭に落ちかゝつたのを、そのまゝに震へてゐる。其處へ家主の源兵衞が來て見て氣絶し、大騒ぎ大失敗

餘卷を擧げ、次に「芭蕉翁俳諧口決」といふ文を添へ、又七部の題號は名・體・宗・用・教の五義に依つて名づけたのであるといふ「題號釋論」といふのが出てゐる。書末には中敎齋の跋、文政三年初夏友人耕地の跋がある。【價格】本書は二冊・四卷を一冊とし、附

藏板で出版されてゐる。【體裁】生漉四枚繼ぎ一枚の表で、竪八ツ折にし、それを四ツ折にして、表裏に表紙を附けてある。【刊行】凡例が嘉永元年十二月に記されてゐるから、同年か翌年かの刊行であらう。江戸書林日本橋北十軒店鶴屋勝五郎版行。【諸本】附合作法

論者があり、又價値に於ても七部集中の他の集に劣らぬものなので、これを加へたことも宜しきを得たものといふべきである。ただ句々全句を擧げず作者名をも表はさなかつたのは、著者のいふ理由もさることながら、一つは多數の連句を一枚の表にする關係上已むを得ない點もあつたのであらうが、讀者に取

林七賢人に擬したものである。【刊行】初編安政四年、第五編文久三年。【諸本】滑稽名作集下卷（帝國文庫）・滑稽本集（日本名著全集）・滑稽文學全集・有朋堂文庫等所收。【題材】鯉丈の「八笑人」「和合人」（各別項）の模倣で、江戸

となる。冬の一日一門が會合して連句行の座興會を催し、陰德のつもりで來春の開帳を待つことにする。

【構想】春夏秋冬の四季に分けて、茶番や惡戯の趣向に、人々をあつと言はせようとして遊ぶ江戸遊民の一面を傳へてゐるが、本來滑稽な茶番惡戯の計畫を書餠に歸せしめて、滑稽を多くしたり、それと共に氣障な風流人たる大愚を出して利いた風、似而非風流を笑はせたりしたところに痛快味はあるが、瀧亭鯉丈の「八笑人」「和合人」の飜案、摸倣の痕が歷然としてゐる。「七偏人」といふ名稱も「八笑人」の八人と「和合人」の六人との中間を取つた意でもある。【小柴】

七名八躰付合要錄

俳諧作法　一册　【著者】菅梅人。梅人は平山氏、通稱忠左衞門、第一園・採茶庵二世・獨武者と號した。廣岡宗瑞（白兎園二世）門。三河田原藩の老臣、江戸住。享和元年十月十四日歿、享年五十八　【刊行】天明三年秋　【諸本】附合作法全集（俳諧文庫）所收　【由來】著者が門弟錦水・里遊兩人の希望に從ひ、天明三年に稿を草したもので、その後、この兩門弟が梅丸に請うて同年秋の序を得、刊行した。【解說】本文は各務支考の七名八躰說に基いて、芭蕉の「鶯や餠に糞する緣の先」を立句とした芭蕉・支考兩吟の歌仙を解說したものである。七名八躰說は「東華集」や「俳諧古今抄」（各別項）等に說かれた所のもので、七名は附句の案方、八體は附方で、これを詳かにいへば、有心・會釋・遁句・起情・向附・拍子・色立を七名（員外として對附がある）といひ、その人・その場・時分・時節・時宜・天相・觀相・面影を八體（員外として空撓がある）といひ、要するに何れも附句の案方・締方を分所して說明し、謂に入る者の便宜に供へたのである。卽ち本文はこの七名八體說を實際の附句に押し當てて解說したものに外ならぬ。【各務】

侍中群要

橘廣相　【諸本】丹鶴叢書・續々群書類從第七法制部所收。但し、國書刊行會本丹鶴叢書には、同會本續々群書類從に加へてあるがために省略されて入れてない。【解說】藏人の職掌に關して詳述したもので、卷一初補間ノ事、卷二から卷五までは從事以後雜事、卷六恒例雜事、卷七から卷九の初まで臨時急事、臨時儀式事、卷九の大部分は任官類事、卷十臨時雜事とし、各項目を分け諸書を引いて漢文で記してある。侍中は藏人の唐名。【石村】

慈鎭和尚自筆十訓抄

「慈圓」を見よ。

十訓抄

說話集　三卷　【著者】著者については三說がある。一は橘成季說である。これは「古今著聞集」の著者が成季であり且つ本書と「古今著聞集」との文章や說話が酷似してゐる所から出た說である。二は正徹の「清巖茶話」の菅原爲長說である。併し爲長は寬元四年に歿してゐるので、建長四年に出來た本書の作者として妥當でない。三は寫本の奥書によるもので、六波羅二臈左衞門說である。橋本進吉氏藏等の寫本の奥書に、「或人云六波羅二臈左衞門入道作云云長時時茂筭泰公」とあるので、建長四年の著作年代にも符合するし、老僧の手に成つた事も序文等で知られるので、著者としては、この說が最も適切である。【成立】建長四年　【諸本】寫本には東京帝國大學國文學研究室本・同大學圖書館本（もと南葵文庫のもの）・橋本進吉氏藏本・和學講談所本・狩谷棭齋本・望雲子本（芳賀矢一舊藏）・十訓抄略書

等があつて流布本と異る。殊に下卷の第十訓の第四十三話、和泉式部の話以後はない方が多い。流布本には、元祿版・享保版・文化版等がある。明治以後の出版は多く流布本に從つたもので、國史大系・國民文庫・日本文學全書・國文叢書・校註日本文學大系所收。石橋尙寶の「校註十訓抄」等がある。【出典】本書の說話は、「今昔物語」「袋草紙」「江談抄」等より多く出てゐるが、「扶桑略記」「三代實錄」「伊勢物語」「大和物語」「榮華物語」「大鏡」「俊頼口傳」「悦目抄」「本朝文粹」「往生要集」等に出たものも少くない。鎌倉時代のものでは、「愚管抄」「古事談」「宇治拾遺物語」「續古事談」等に依つたものもある。

【內容・組織】流布本には、二卷・五卷・十卷・十二卷などあるが、本書の序文、本朝書籍目錄、寫本等に依つて三卷と認めるが妥當である。內容目次は、上卷が第一可レ定二心操振舞一事、第二可レ離二憍慢一事、第三不レ可レ侮二人倫一事、第四可レ誡二人上多言等一事。中卷が第五可レ撰二朋友一事、第六可レ存二忠信廉直一事、第七可レ專二思慮一事。下卷が第八可レ堪二忍于諸事一事、第九可レ停二怨望一事、第十可レ庶二幾才能藝業一事と考へるが、最も妥當である。內容は「今昔」の說話を以て少年者の修養に資する目的で書かれたもので、狂言綺語に依つての教訓は佛教の教誡にも違反しないと述べて、右の題目のもとに教訓的な說話を主として集めてゐる。第一訓は和漢の例を擧げて君臣の關係の教訓を述べてゐる。君臣は溫情を以て結ぶべきを說き、溫情は動物にも施すべきであるとて山蔭中納言と鵜、漢武帝の昆明池の例話を示してゐる。又優雅情操の養成話が見られる。第二訓には憍慢を誡める說話がある。獨り天狗になつて主君を輕んじ、友人を嘲り、人を無視するを愼めと說いてゐる。列子三怨の誡、莊子木雁の話、小野小町、五千の增上慢等の說話を引いてゐる。第三訓は人を侮る事を誡めたもので、小式部內侍の大江山の歌の話、琴柱を失つて殿居の侍に恥を求めた女房の話、相撲伊成と弘光の話等は、人を侮つたために恥を受けた事を說いて教訓してゐる。第四訓は行基菩薩の遺誡、美女砂金、阿闍梨仁俊や慈惠僧正、三絨の誡等を引いて、口は禍の門であるから徒に人の身の上について云云したり、無考に喋べる事を誡めてゐる。第五訓は朋友の選擇に注意すべき事、殊に妻を定める事には七去三不去の教を以てし、女は立居振舞を愼むべきを說き、夫婦の契は異體同心なる事を諸說話に託して述べてゐる。第六訓は、孫叔敖・介子推・蘇武・義懷・惟成・顯基等の例を以て忠信の德を敎へ、武內宿禰・菅家などは讒言せられて罪を受けながらも忠信を致した話、養老孝子・董華・董永・隨身公助の孝養譚。娥皇女英・望夫石・綠珠等の貞信の德をもつ女の話。延長八年の落雷は不信者が災を受くと誡め、小野皇太后宮と落雷、胤間寺の辻風等は信仰の德を頌してゐる。この外廉直を說くには叔齊の粟、季札の劍、楊震四知、釋迦の毒蛇、綺師良秀等の說話に託して述べてゐる。第七訓は物心付く時から主取して身を立て家を起し、箕裘の業を宗とすべしと說き、主智的な子弟敎育を說いてゐる。有職故實を尊重し、詩歌の道にも用心あるべしと言つてゐる。千手陀羅尼の持者の如きは思慮なきために失敗した滑稽談で、特に思慮の必要を說いてゐる。第八訓は勤必を敎へてゐる。殊に青砥の忍耐を主張し、源信の忍辱、釋迦の能忍、大納言行成・三條內大臣公敎・西行等の說話を擧げてゐる。婦人の嫉妬を忍ぶべきをも示してゐる。第九訓は、朝成・顯光の怨靈譚、寬助・長明等の說話を用ひて、何事によらず物恨みを禁ずべしと言つてゐる。第十訓は、一道一藝に秀でることの大切な事を敎へる說話を主としてゐる。職業の世襲的立場から諸藝道に對する理解と敎養の必要を說いてゐる。小式部內侍・赤染衞門・小大進・都良香等が、詩歌文章に依つて鬼神を感動せしめた話、村上帝と廉承武、八幡の樂人元正、伶人助元等は管絃に達して德を得、賴政・橘直幹等の詩歌文章によつて利益を得た說話がある。なほ流布本には、三十有餘の說話がのせられて才學の必要を說き、文武兩道に優劣なき事を述べ、管絃等の德を更に縷述してゐる。

【註釋書】石橋尙寶の「十訓抄詳解」がある。

【參考】十訓抄典故考 岡本保孝(況齋叢書)〇十訓抄考 藤岡繼平〇鎌倉室町時代文學史 藤岡作太郎〇鎌倉時代文學新論 野村八良〇國文學通史 坂本衡平〇概觀日本文學史 潮鈴木敏也〇攷證今昔物語集 芳賀矢一 〔高島〕

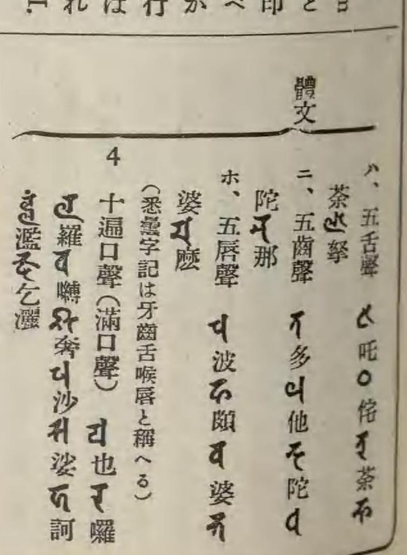
實驗小說 じっけんしょうせつ 〔佛〕 Le Roman Expérimental 【解說】佛の小說家ゾラが醫學家クロオド・ベルナアルの「實驗醫學研究序」から思ひついて提唱した所で、これを初めて日本に紹介した森鷗外の「醫學の說より出でたる小說論」が、よくその概略を盡してゐる。「クロオド・ベルナアルのいはく、今の學は觀察と試驗とに基いたり。人力の化すること能はざる宇宙間のものに逢へば學者これを觀察し、人力の能く化すべき宇宙間のものに逢へば學者これを試驗す。醫の人身の眞作用を知らんとするや、その觀察の力を補ふに試驗の法を以てす。かの病院・講堂・業室の中に入りて、生活の臭穢にして蠕動する疆界を經るは、先づ庖廚を通りて燭光かゞやける大廈に入らんとするが如しと。ゾラはこの言を擧げて、直ちにこれを小說に應用したり。その小說中の人物はゾラが分析と解剖とを經たるものなり。ゾラが人情を分析するや、殆液の酸鹹を擇ばず。ゾラが世態を解剖するや、殆刀の鈍銳を問ふこと無し。しかして此分析、解剖の結果は、卽ち是れ「エチユウド」なり、小說なり。ゾラは此論をなして、「ルゴン・マカルド」の大作を出し、おのが實行の績を示しつ」と。日本でこの傾向を實際創作上に試みたのは小杉天外で、「初姿」(別項)は最も有名であつた。後の自然主義もこれと關係する所がある。(寫實小說參照)

【參考】鷗外全集第二卷〇小說作法 田山花袋〇小說研究十六講 木村毅〇文學理論の諸問題 平林初之輔 〔木村〕

實行敎 じっこうきょう 「神道各派」を見よ。

實語敎 じつごきょう 敎訓書 一卷 【作者・成立】古來弘法大師の作として傳へられてゐるが確證はない。併しその著作は可なり古い時代のもので、長門本「平家物語」(八の上卷)、「山門心變の事」の條にも、實語敎一卷と見えて、「實語敎」の作り替へが載つて居り、文永・弘安頃の僧無住の「雜談集」にも「實語敎」の名が記されてゐる。【刊行・諸本】江戶時代に於ける「實語敎」の初刊は何時であるか明かでないが承應元年に「童子敎」と合して出板され、明曆四年に「敎兒書」と共に刊行されたのが最も古いもののやうである。寬文十年には、「實語敎諺解」「童子敎諺解」が相次いで現はれた。これ等を初めとして異板實に四十四種を數へるに至つた。以てその普及の大勢を下するに足りる。【解說】「山高故不レ貴、以レ有レ樹爲レ貴。人肥故不レ貴、以レ有レ智爲レ貴」の句で始まる一篇の兒童敎訓書で、「童子敎」と共に數百年に亙り、初步敎科書として用ひられたものである。【影響】「實語敎」の影響により出で來つたと見るべきものに「童子敎」がある。「童子敎」は安然の作と傳へられてゐるが、確かなことは分らない。永享頃の書、「出法師落書」に「童子敎」を敎へてゐた記事があり、文安元年著の「下學集」の序にも「實語敎」と並べ擧げられて卽ち廣義の梵字(別項)の一種なる悉曇文字を云ひ、又これより悉曇文字及びこれで書かれた梵語の學をも云ふ。

【文字としての悉曇】卽ち悉曇文字は、古代印度の右行文字ブラーフミー文字から出た諸種の字體中、北方系に屬するグプタ文字から、六世紀に發達したもので、單に梵字(狹義の)ともいふ。その性質、主なる特徵は廣義の梵字と同じである(梵字參照)。【相承說】悉曇文字の起原及び傳來について、密敎家は聲字實相を說き、梵字は本來法爾として(天然自然に)



察するに、義淨は入竺前にこの轉義を知り、悉曇章卽ち字母級字表の劈頭には、siddhaṁ の代りに siddhir astu と書くこともあると傳へたのであらう。(二)アルベルーニー著「印度誌」に、當時(十一世紀前半)カシュミール・ベナレス及び中國地方に Siddhamātṛkā 文字が行はれ、マーラブ地方には Nāgara 文字が行はれ、バーチア及びシンドゥ地方の一部には Ardhanāgari (半ナーガリー)文字が用ひられたと云ふ記載(Alberuni : India tr. Sachau I. p. 173)に基き、悉曇章(シッダマートリカー)

至つた。以てその普及の大勢を卜するに足りる。【解說】「山高故不ㇾ貴、以ㇾ有ㇾ智爲ㇾ貴。人肥故不ㇾ貴、以ㇾ有ㇾ智爲ㇾ貴。」の句で始まる一篇の兒童教訓書で、「童子教」と共に數百年に亙り、初步教科書として用ひられたものである。【影響】「實語教」の影響により出で來つたと見るべきものに「童子教」がある。「童子教」は安然の作と傳へられてゐるが、確かなことは分らない。永享頃の書、「出法師落書」に「童子教」を教へてゐた記事があり、文安元年著の「下學集」の序にも「實語教」と並べ擧げられてゐる點から見て、室町時代には既に弘く普及してゐたことが分る。江戸時代に入つて、慶安三年には「童子教抔抄」が出版され、以來「實語教」と組合せて四十餘板を重ねてゐる。明曆四年に「教兒書」が出で、元祿十一年に「俗語教」が出でて以來「長者教」「湯語教」など「實語教」に摸するもの續出した。寶永五年に「新實語教」、天明元年に手島堵庵の「新實語教續編」が現はれたが、明治年間に入つて、「英和對譯實語教」さへも出版された。以て「實語教」の後世の教訓書に與へた影響の、如何に大なりしかを知ることが出來る。

【參考】改訂增補 日本教育史 高橋俊乘 〇三養雜記 山崎美成 〇燕石雜志 曲亭馬琴 〔石川(謙)〕

實字解 じつじかい 語學書 六卷 【著者】皆川淇園 【解說】漢字の實字、卽ち名詞を時令・宮室等に分類して註解したものがある。字義研究の機運を促進し、國語學の研究にも刺戟を與へた。〔佐久〕

實證美學 じつしょうびがく 「社會學的美學」を見よ。

悉曇 しったん 梵語學 【名稱】又、悉旦・悉談・悉檀・七曇・七旦・肆曇・悉駄などの文字を用ふ。【解說】支那・日本に古く傳はつた梵字、卽ち國語の梵字(悉曇)の一種なる悉曇文字を云ひ、又これより悉曇文字及びこれで書かれた梵語の學をも云ふ。

【文字としての悉曇】卽ち悉曇文字は、古代印度の右行文字ブラーフミー文字から出た諸種の字體中、北方系に屬するグプタ文字から、六世紀に發達したもので、單に梵字(狹義の)ともいふ。その性質、主なる特徵は廣義の梵字と同じである(梵字參照)。【相承說】悉曇文字の起原及び傳來について、密教家は聲字實相を說き、梵字は本來法爾として(天然自然に)存するものとし、隨緣相承として梵天相承・龍宮相承・釋迦相承・大日相承を說く。皆教學的な說明で、文字史的に見れば、架空の說である(安然の「悉曇藏」卷一に詳しい)。また、悉曇家は中天・南天の二傳を分ち、中天は多く拗音を用ひ、南天は多く直音を用ふと說くが、これ亦、中印度・南印度の發音特徵を傳へたものでなく、言語史的價値はない。〔名義〕名稱の起原には二說がある。(一)印度に於て梵語字母表の初に namaḥ sarvajñāya siddham 或は siddhir astu と書いて成就吉祥を願ふ習慣があつた。悉曇・悉地は、共に成就の義である。これから轉化して悉曇は母韻字母の稱となり(悉曇字記・淨嚴寫法隆寺貝葉)、更に意を廣めて、全字母の名稱となつたとする說。「義淨南海寄歸傳」四「一則創學悉談章。亦名二悉地羅窣覩一(=siddhir astu)。斯乃小學標章之稱。俱以二成就吉祥一爲レ目。本有二四十九字一。共相乘轉。成二一十八章一。總有二一萬餘字一。」とある。併し印度に於て siddham 或は siddhir astu が字母又は字母表の意に用ひられた例證はない。故にこの意義の轉化は支那に於て起つたもので、悉曇なる語は隋代以前には發見されない。卽ち悉曇の梵字、別種の一

體文

1 十二摩多
阿(長) 伊 伊(長) 盬 盬(長) 奥 奥(長) 暗(空點) 惡(涅槃點)(二界畔字)
2 四別摩多
紇里 紇梨 里 梨
3 五類聲(五五聲・相隨聲)
イ、五喉聲 迦 佉 伽 哦
ロ、五顎聲 者 車 社 若
ハ、五舌聲 多 他 陀 那
ニ、五齒聲 多 他 陀 那
ホ、五脣聲 波 頗 婆 摩
(悉曇字記は牙齒舌喉脣と稱へる)
4 十遍口聲(滿口聲) 也 囉 羅 嚩 奢 沙 娑 訶 濫 乞灑

このうち、別摩多及び濫字を除けば四十六字(Lalitavistara p. 127—128. 大莊嚴經示書品)、別摩多のみを除けば四十七字(智廣悉曇字記・安然悉曇藏、又玄奘西域記卷二)、濫字・乞灑字を除けば四十九字(義淨南海寄歸傳卷四、安然悉曇藏卷五)となる。又、屢々濫字のみを除いて五十字とする(金剛頂經字母品・文殊問經字母品・北本大涅槃經卷八・大日經字輪品・全眞悉曇次第・空海悉曇字母釋等)。【悉曇章】これ等の字母の結合・分離を「悉曇の切り繼ぎ」と稱し、その建立(結合法)を分類表示して、學習の便に供したものを悉曇章と名づける。普通用ひられるものは十八章から成り、智廣の「悉曇字記」、景祐の「天竺字源」、安然の「悉曇藏」卷八等に詳しく說かれてゐる。また「大悉曇章本末」二卷、「梵字悉曇章」等、多少組織を異にするものも殘つてゐる。〔字義〕密教家は、字母の各々に特殊な意義を附し、これを字相・字義、或は字門と稱し、字觀によつて斷惑解脫の法門に應用した。「金剛頂經」「文殊問經」「大日經」の五十字門、「大涅槃經」の十四音五十字義、「大莊嚴經」の四十六字門(〔字數〕の條參照)、或は「華嚴經入法界品」の四十二字門、「大般若經四念處品」の四十二字門、「不空羂索經」の五十五字門等有名で

ある。字門の内容は一致しないが、通則としては或る字母を含む單語の意味を以てその字義とする。例へば阿字について「大莊嚴經」は唱ふ。阿字ニ時、出ニ一切諸行無常聲一(yadā akāram tadā parikīrtayanti sma, anityaḥ sarvasaṃskārāśabdo ni carati sma, Lalitav. P. 127)と說き、「金剛頂經」は一切法本不生故(ādyanutpatti)と說く類である。この點に於て、悉曇學は單なる語法・書法の域を脫して、佛教哲學と密接に關係してゐる。また諸種曼陀羅中の種子(bīja)として、悉曇文字を使用するため、悉曇は密教家必須の知識となつたのである。

【語學としての悉曇即ち悉曇學】古來窒堵波・五輪塔・護符・鏡銘等にも梵字を書く事が行はれてゐたから、佛教僧侶は多少とも梵字の知識を必要としたが、所謂悉曇學は前述の如く主として個々の文字の書法・發音に止まり、これに依つて種子・字門を知り、經論中の音譯語の意味を探り、或は眞言陀羅尼の祕義を悟るを目的とした。本邦では發音も漢字音譯を賴つて更にこれを轉化した結果、梵語本來の音韻と著しく隔つた。支那に於ても譯經は主として印度・西域の學僧に委ねたので、眞の梵語學は興らなかつた。勿論玄奘・義淨の如く、親しく入竺して梵語に熟達した者もあつたが、一般には文法の研究は等閑にされ、從つて本邦にも傳はらなかつた。〔音論〕悉曇家の字母字音の分類は上述の如くであるが、本邦で所謂悉曇連聲法は梵語の連聲法(Sandhi, 語中語間の音韻變化)とは全く趣を異にし、「山門相承」に四種、「東寺傳」に二種を說く。即ち五句(五類聲)・九字(濫を除く九遍口聲)を五處(喉顎舌齒脣)・三內(喉舌脣)に配當して漢字音譯語の發音を規定しようとしたものである。〔八轉聲〕名詞を蘇漫多聲(蘇漫多聲)と云ふ。原語は Subanta で sup は格語尾の總稱(P. gini IV. 1. 2)、格語尾で終る語の義である。數に一言(單數)・二言(兩數)・多言(複數)を分ち、性に男聲・女聲・非男非女聲(中性)を分ち、格に八種を區別する。即ち體(汎說・Nominative)・業(所說・Accusative)・作(具・Instrumental)・爲(Dative)・因(從・Ablative)・屬(Genitive)・依(於・Locative)・呼(Vocative)の八聲でこれを八轉聲と云ひ、呼稱を除いて七轉聲或は七例と稱する。〔六合釋〕合成語に六種を區別して、六離合釋(saṭsamāsa)と云ふ。即ち持業(同依・Karmadhāraya)・依主(依士・Tatpuruṣa)・有財(多財・Bahuvrīhi)・相違(Dvandva)・隣近(Avyayībhāva)・帶數(Dvigu)の六種釋である。但し舊來の說明は直接梵語について行はないため、肯綮に當らぬものが多い。〔二九韻・十羅聲〕動詞を丁岸哆聲(底彥多聲)と云ふ。原語は Tiṅanta で tiṅは人稱語尾の總稱(Pāṇini III. 4. 78)、人稱語尾で終る語の義である。人稱語尾に十八種を分ち、これを二九韻と云ふ。まづ般羅颯迷(Parasmaipada, active voice)と阿答末迷(Ātmanepada, middle voice)とに分ち、各々當體(三人稱)・說他(二人稱)・說自(一人稱)、一言・二言・多言に開いて十八轉の變化を得る。十羅聲とは時・法の總稱でパーニニ文典に從つて次の十種とする。即ち laṭ (Present), liṭ (Perfect), luṭ (2. Future), lṛṭ (1. Future), leṭ (Subjunctive), loṭ (Imperative), laṅ (Imperfect), liṅ (Optative), luṅ (Aorist), lṛṅ (Conditional) である。

【悉曇學略史】悉曇學は、佛教の東漸と共に起つたもので、支那に於ては唐代に玄奘三藏・義淨三藏が出でて後、その研究も進み、義淨の撰といはるゝ「梵語千字文」(或は梵唐千字文)、智廣の「悉曇字記」、一行の「字母表」、全眞の「梵字次第記」等名高い著作もあらはれた。本邦に於ても佛教の渡來後、經典中の音譯語及び陀羅尼を理解するために、梵字梵語研究の必要を生じた。〔奈良朝〕奈良朝及びそれ以前の狀況は明瞭でないが、印度人の渡來する者、本邦僧侶の韓唐に赴く者があつた故、若干の貝葉梵本の輸入、梵字の學習はこの時代に始まつたらしい。法相宗の智通に、「十四音辨」一卷の著があつたと云ひ、天平年間には有名な波羅門僧正菩提仙那及び林邑の僧佛哲が入朝して大安寺に居り、梵語及び音樂を敎へ、殊に佛哲は「悉曇章」(安然の八家祕錄卷下)を殘したと傳へられてゐる。〔平安朝〕平安朝に入ると、弘法大師空海、傳敎大師最澄、小栗栖の常曉、靈巖寺の圓行、慈覺大師圓仁、安祥寺の慧運、智證大師圓珍、禪林寺の宗叡、その他が續々入唐して顯密の敎學を傳へたが、密敎には殊に梵字梵語の學習が必須であつたから、入唐僧は彼地に於て梵語の發音を學んだと共に、貝葉・紙本の梵本や、諸種の悉曇章や、「悉曇字記」「唐梵文字」「梵唐千字文」「梵語雜名」等の悉曇學敎科書字書類を傳へて我が國に齎した。なほ弘法大師は、「悉曇字母釋義」を著はし、宗叡は「悉曇私記」(禪林記とも林記とも)を作つた。その後、悉曇の學は次第に盛んになつて、著作も續々あらはるゝに至つたが、中にも平安初期に於ける五大院安然は、「悉曇藏」八卷、「悉曇十二例」等を著はして本邦悉曇學を大成し、後世の依據するところとなつた。安然は諸種の悉曇章中、「悉曇字記」を最も正しいものと認めたのであつて、後の悉曇學は「字記」を中心としたものが多い。又院政初期の加賀溫泉寺の明覺は、「悉曇要決」「梵字形音義」「悉曇大抵」「反音作法」等を著はし、屢々獨創の見を出した。その觀察は傍ら國語にも及び、國語を引證して悉曇の事實を說明してゐる。石山內供淳祐(悉曇諸師傳・悉曇集記)、その他玄昭(悉曇略記)、仁和寺花藏院の寬智(悉曇要集記・悉曇祕要・悉曇字記抄)、常喜院の心覺(その多羅葉抄は、いろは引梵語字書として最古のもの)、敎尋(五音聲論)、東禪院心蓮(悉曇口傳寬海記)等は、何れも平安朝に於ける屈指の悉曇家である。〔鎌倉室町時代〕隆盛期の後を承けた鎌倉時代には、小川僧正承澄(悉曇諸師傳・悉曇字記正決・反音鈔)・明了房信範(悉曇字記抄又は明了房記・悉曇祕要抄等)が最も名高く、吉野時代には、東寺の杲寶及び賢寶(杲寶口授賢寶筆受及び增補の悉曇創學抄は、甚だ勝れたものである)が出で、室町時代には高野山の宥快・長覺、三會寺の印融等が出でたが、悉曇學は時代と共に衰運に傾いた。〔江戶時代〕文運復興と共に、悉曇學も亦勃興し、靈雲寺淨嚴(悉曇三密鈔八卷・華梵對翻四卷)を初めとし、澄禪・曇寂・慧晃・興隆・寂嚴・大寂等の學者が輩出したが、特筆すべきは眞言正法律宗の開祖河內高貴寺の慈雲(享保三年—文化元年)である。慈雲は古來の悉曇學に滿足せず、梵語の發音を正し、文法を究め、梵本を直接に解讀せんと志し、研鑽の功を積んで遂に「梵文普賢行願讚」「般若心經」「阿彌陀經」を讀み得るに至つた。畢生の事業として、上は古傳の「貝葉」より、下は「印度西域紀行」に至るまで、凡そ梵學研究の參考資料となるものは細大洩らさず蒐集し、これに自著「悉曇相承口訣」「七九鈔」「同略鈔」「同又略」

等を加へ、自編の字書類をも含めて、「梵學津梁」一千卷の大綱纂を完成した。本末通別略廣雜の七說から成り、本邦悉曇學の集大成と稱し得る。又文化文政の頃、江戶に行智があつて、悉曇の研究に於て弘法大師の古に復るを目的とし、當時我が國に發達した支那の字音の學(韻學)及び國語學等の研究の結果に照し、朝鮮語・滿洲語等の知識をも扶翼として、獨自の見地より梵語梵字の研究を試みて發明するところ少からず、「悉曇字記眞釋」「梵學對

定したのは鎌倉時代以後で、平安朝には行段の順序は、未だ今日の如く一定しなかつたらしい。故に五十音圖は漢字の反切を假名で示す必要に發したとも考へられ、必ずしも最初から悉曇學者の手で作られたと云ふ確證はない。但しその排列の確定に悉曇學の影響があつた事は否定できない。又五十音圖を基礎とした我が國の音韻や發音に關する說は、大抵は直接間接に悉曇學から出たものであつて、

七珍萬寶(しつちんまんぽう) 狂歌師【一世】(森羅萬象二世參照)【二世】(本名)戶村七兵衞【閱歷】江戶の人。芝大門前の、翁屋といふ菓子舖の主人である。森羅萬象二世(別項)の門に入り、二世七珍萬寶と號してゐた。歿年月・年齡共に詳かでないが、墓は芝山內貞松院にある。著書はない。

【野崎】

執筆法(しつぴつぽう) 「書道」を見よ。

十返舍一九(じつぺんしやいつく) 滑稽本作者【本

義太夫語りの家に寄食したり(方言競茶番種本の序)、材木商の家に入壻して離緣になつたりした事もある。併しこゝで彼の文筆生活はその端緒を開いた。即ち寬政元年に、若竹笛躬・並木千柳と共に、近松餘七の名で「木下蔭狹間合戰」といふ淨瑠璃を合作した。けれども、未だ二十五歲の若輩であり、大阪滯在も七年餘りで、終に大成しなかつた(忠臣藏岡目評判の序文)。大阪の漂泊時代を經て、寬政六年の秋、

修を加へ、自編の字書類とも合めて、「悉曇律藏」一千卷の大編纂を完成した。本末通別略攝雜の七說から成り、本邦悉曇學の集大成と稱し得る。又文化文政の頃、江戸に行智があつて、悉曇の研究に於て弘法大師の古に復るを目的とし、當時我が國に發達した支那の字音の學（韻學）及び國語學等の研究の結果に照し、朝鮮語・滿洲語等の知識をも扶翼として、獨自の見地より梵語梵字の研究を試みて發明するところ少からず、「悉曇字記眞釋」「梵漢對譯字類篇」を著はした。江戸時代には、依然として「悉曇字記」が攻究されたが、この時代の特色といふべきは、辭書の編纂の盛んであつた事であつて、高楠順次郎博士の調査によれば、十七種五百十七卷に及ぶといふ。明治年間に至つては、西洋で發達した梵語研究が傳はつて、從來の悉曇學とは方法目的を全く異にする梵語學が興り、奈良朝以來連綿として相承した悉曇學も、漸く衰微するに至つた。

【書體の流派】本邦に於ける悉曇の書體に、大師流・淨嚴流・慈雲流等があるが、淨嚴・慈雲は各々「法隆寺貝葉」「高貴寺貝葉」を藍本として流儀を起した。弘法大師はその請來の梵本を藍本としたものであらうが、高楠博士は高野山寶壽院所藏の大涅槃經一葉（紙本）も、その一つたる事を推定してゐる。

【國語學との關係】悉曇學が國語學に及ぼした最も重大な影響は、五十音圖（古くは五音圖といふ）に及ぼせるものである。五十音圖の「アイウエオ」の段の順序は悉曇摩多の順序と一致し、「カサタナハマヤラワ」の行の順序は、體文のそれと一致する。勿論繁粗の差はあるが、これは國語の音韻組織に適應整理した結果と見られる。併し五十音圖が現今の形に確定したのは鎌倉時代以後で、平安朝には行設の順序は、未だ今日の如く一定しなかつたらしい。故に五十音圖は漢字の反切を假名で示す必要に發したとも考へられ、必ずしも最初から悉曇學者の手で作られたと云ふ確證はない。但しその排列の確定に悉曇學の影響があつた事は否定できない。又五十音圖を基礎とした我が國の音韻や發音に關する說は、大抵は直接間接に悉曇學から出たものであつて、古くから國語の語釋や語源說に用ひられた同紐同韻相通の說の如きも、悉曇學に負ふ所があるであらう。音義說にも字義字門說の影響なしとせぬ。仙覺や契沖（各別項）の語學說に、悉曇學の影響著しきは周知のことである。又悉曇學者中には、傍ら國語の事象を觀察して悉曇の研究に資したものもある。卽ち溫泉寺明覺・東禪院心蓮等は最も著れてゐる。併し「八轉聲抄」などに見る如き、八轉聲（前出）を言語性質の全く異なる漢語邦語に應用せんとした企の如きは、失敗に歸せざるを得なかつたが、そのために、日本語の動詞の活用を見出したもののある如きは注目に値する。（梵語・梵字參照）

【參考】悉曇字記　唐　智廣（大正新修大藏經五四）○悉曇藏　安然（大日本佛敎全書、悉曇具書）○悉曇三密鈔　淨嚴　○八家祕錄　安然　○悉曇具書目錄（大日本佛敎全書、佛敎書籍目錄二）○悉曇並聲明等目錄　眞源（安然尊者悉曇記附錄）○悉曇目錄　赤堀又次郎（日本文學者年表附錄）○悉曇撰書目錄　高楠順次郎（大日本佛敎全書、悉曇具書）○梵語千字文　唐義淨（大正新修大藏經五四）○梵語雜名　唐禮言（同上）○唐梵文字　唐全眞（同上）○飜譯名義集　宋法雲（同上）

漆着語（しつちやくご）「膠着語」（かうちやくご）を見よ。

【福島】

七珍萬寶（しつちんまんぽう）　狂歌師【一世】（姓氏未詳）【二世】（本名）戸村七兵衛【閱歷】江戸の人。芝大門前の、翁屋といふ菓子舖の主人である。森羅萬象二世（別項）の門に入り、二世七珍萬寶と號してゐた。歿年月・年齡共に詳かでないが、墓は芝山內貞松院にある。著書はない。

【野崎】

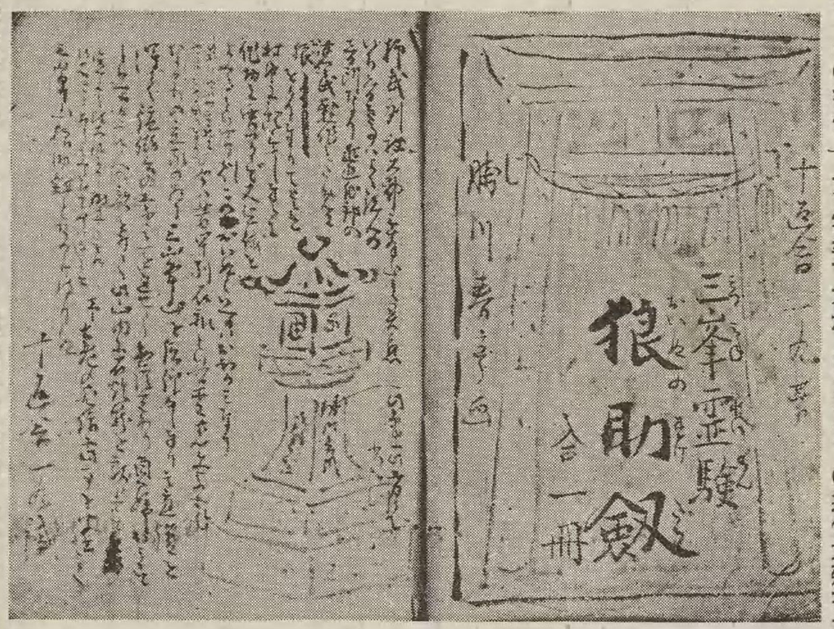
執筆法（しつぴつぽう）「書道」を見よ。

十返舍一九（じつぺんしやいつく）　滑稽本作者【本名】重田氏、字は貞一（さだかず）、通稱を與七或は餘七といひ、代々重田市次良と名乘り、屋號を駿河屋と稱した。【戲號】十返舍一九の號の由來は、幼名市九の市を一に作つて一九となし、十返舍は、大阪にゐて志野流の香道に相當の名を成したので、黃熟香の十返しに因んで附けたもの。別に、醉齋・十遍舍・十偏舍・十偏齋とも號した。【生歿】「續膝栗毛」第五編の卷末に、「一九生酉ノ年也」とあるから、明和二年の生れで、墓石と過去帳とに基けば、天保二年（一八三一）八月七日歿。享年六十七。「江戸作者部類」の記述は信じ難い。【墓所】淺草土富店善立寺地中東陽院であつたが、大震災後、府下北千住の先なる梅田墓地に移された。【法名】心月院一九日光信士【閱歷】明和二年に駿河の府中に生れた。過去帳によれば、もと千人同心の子とある。青年の頃には或る屋敷に仕へて江戸にゐた（續膝栗毛五編）。「江戸作者部類」「戲作六家選」等に依れば、それは小田切土佐守で、その邸で注簿の役を勤めたといふ。その後、小田切侯が大阪町奉行となつた時、彼も隨つて同地に赴いたが、間もなく辭職した。こゝから彼の放浪時代が始まる。これは天明の末から寬政へかけての頃であらう。志野流の香道をやつてゐたのも、この頃か。

淋しく神田紺屋町の宅で歿した。

【著作】主な作品は一九全集（帝國文庫）及び續一九全集（同上）に收められてゐる。

【讀本】深窓奇談五册（享和二年刊）○怪物輿論（別項）（同三年刊）○怪談雨夜鐘六册（同三年刊）○天橋立（別項）（文化二年刊）○甲州鰍澤報讐（別項）（同四年刊）○翁丸物語（別項）（同上）○復仇女實語教（別項）（同五年刊）○通俗巫山夢（別項）同十二年刊）○名勇發功譚五册（春齋英笑畫）（文政十一年刊）。【滑稽本】道中膝栗毛（別項）正續四十三册（享和二年—文政五年）○江之島土産（別項）六册（文化六・七年刊）○大師めぐり（別項）上編三册（同八年刊）○串戲二日醉（別項）二册（同八年刊）○六阿彌陀詣（別項）六册（同八・十年刊）○世の中貧福論（別項）六册（同九年—文政五年）○誹語堀之内詣（別項）二册（同十三年刊）○雜司ケ谷紀行（別項）二册（文政四年刊）。【黃表紙心學時計草三册（寛政七年刊）○怪談筆始二册（同八年刊）○貧福水掛論三册（同九年刊）○人心兩面摺三册（享和元年刊）○的中地本問屋二册（同二年刊）○化物太平記三册（文化元年刊）。【洒落本】倡賣往來一册（寛政五年刊）○野郎玉子一册（享和元年刊）○吉原談語一册（同二年刊）○起承轉合一册（同二年刊）。【人情本】清談峯初花（別項）五册（文政二年刊）○所緣の藤波（別項）六册（同四年刊）○於保見月（別項）九册（同七・八年刊）。【笑話本】口輕噺一册（享和三年刊）○腰巾着一册○店開大安賣一册（文化三年刊）（同七年刊）○夢浮橋三册（同九年刊）○敵討巖柳島五册（同十年刊）○金の草鞋（別項）二十五編（同十年—天保五年）○廣德天神記一册（文化十三年刊）○色男大安賣五册（文政二年刊）○昔語玉菊草紙五册（同五年刊）○雪明常磐松四編（同六年—十二年）○開滿菊一文字六册（同七年刊）○竹生島琵琶湖水六册（同八年刊）○三國志書傳十編（天保元年—同六年）。



狼助劍（一九草稿）

【人物】一九には仕官時代もあり、漂泊時代もあり、入智時代もあり、出戻り時代もあり、食客時代もあり、戲作壇の大家として持囃された時代もあるから、可なり人情世態に通じてゐたに相違ない。彼は「膝栗毛」の作家であるが故に、後世から（恐らく當時に於ても）誤解されて、奇拔、突梯、滑稽の一人物であつたかの如く思はれてゐた。彼の逸事として傳へるものは、大抵不自然で信ずることの出來ないものである。さういふ滑稽な方面よりは寧ろ彼の嚴肅な性格を思はせる逸事の方が信ぜられる。彼は「膝栗毛」の取材のために旅行をした時、默々として行き、茶店に休息しては手帳に見聞を記し、宿に在つても同行者に進んで話しかけることもなかつたので、「膝栗毛」から一九の性格の飄逸滑稽を想像して、同行を請うた人は驚いたといふことや、「膝栗毛」讀者の註文に對して、忠實に耳を傾けてゐることや、娘マイが藤間姓を名乘つて踊の師匠をしてゐたのを、某侯が見て側妾に所望したのを斷然拒絶したといふことや、墨川亭雪麿が「稗史通」を著はして、彼が漂泊時代に某寺の門番を勤めたと記したのを知つて、これを恥辱とし、赫怒して嚴しく詰責し、「稗史通」を數次罵詈してゐる事などから推測すると、彼は決して暢氣な飄逸な滑稽的人物ではなくして、可なり嚴肅な一面を有してゐた人であつたらう。思ふに滑稽作者として最も必要なる性格は、自身が滑稽的人物であるといふことではなく、却つて人生の破綻、矛盾を人より早く看破し、強く感ずる嚴肅性であらねばならない。この點からも一九は眞面目な人物であつたに相違ない。

【史的地位】十返舍一九は、滑稽本界に於ける一大作家であり、文學史上に重要な一地位を占めてゐる作家である。彼は三馬と共に滑稽本（別項）の二大作家と言はれてゐるが、併し史的地位に於ては、或る人は三馬を以て一九の上に置かうとし、或る人は一九を以て三馬以上と見てゐる。根本的に性格を異にし、創作態度を異にしてゐるこの兩作家を輕々しく品隲するわけには行かない。三馬は理智的の人であつて、一九は寧ろ感情的な人であらう。三馬が皮肉諷刺に自己の世界を見出し、一九が單なる滑稽に自己の天地を見出したのは自然なことである。兩者の優劣は暫く論じないとしても、民衆生活を題材にした寫實の世界に、洒落本に行詰り、黃表紙に倦怠を覺えてしまつた讀者に對し、一九が「膝栗毛」を出して一展開の道を拓いたことは、近世小說界に於ける偉大なる功績であつた。この點では三馬は到底一九に及ばない。年齡に於てのみならず、作家としても一九は三馬の先輩である。三馬がその傑作「浮世風呂」（別項）初編を出した文化六年には、一九は既に、「膝栗毛」の第八編を出して東海道中を完了させたのであつた。一九の重要な史的地位は、滑稽本の先輩として後輩を導き、膝栗毛物の一樣式を創めて、傑作「東海道中膝栗毛」を文壇に寄與したことに由つて定められるべきである。

【門弟】「戲作者小傳」「江戸作者部類」等に見えてゐる門弟は、大原市女・東雲舍一河・東憐亭一瓜・五返舍半九・金鈴舍一寶・九返舍一八（三亭春馬參照）・半返舍一朱・愚舍一得・十字亭三九（通稱絲井鳳助、歿後遺書によつて二世十返舍一九を名乘つた）・柴舟庵一双・一返舍白平等があつた。なほ向島長命寺の記念碑の裏面には、以上の外に早春舍一梅・丹仙舍一酒・柳詩葺季雁・眞砂亭珠交・稻廼屋穗女・福輪亭白銅等がある。滑稽本作家としての門弟よりも狂歌方面の門人が多い。

わけて太平の世の中に武士の見せ場は、ただこれだけであるだけに、實錄體小說になつたのも四五十種を數へられよう。併し同型が多く、筋が固定して變化に乏しい。又仇討は武士に限られた事であつたのが、女仇討、さては遊女の仇討なども現はれ、後には町人百姓も仇討をするやうになつた。これで幾分か目先を變へたのも暫時のことで、實錄體小說は、仇討の趣向には隨分窮して、無理なものや、知れ

に過ぎない。從つて作者不明のものや、書卸し年代の推定し難いものが夥しい。無論その數も何程あるか測定し難い。異名同書、同名異書も多く、概數をいふことさへ困難である。その一部分は、實錄全書や帝國文庫等に收められて居り、その中、「眞書太閤記」「大岡政談」などが最も著名である。元來、實錄體小說は寫本で行はれ、主として貸本屋がこれを扱つた。そして實錄體小說の成立も、恐らくこの貸本屋と、（寫本作者成立の）

になり、その時に實錄體小說は衰へて、合卷（別項）の方へ合流する。

【講釋と實錄體小說】講釋といふうちに軍談と講談がある。軍談は戰國時代に諸大將の側近に御伽衆といふ者があつて、聞き傳へやら實歷やらの戰爭談をすることが行はれ、江戸の初めになつて軍學が起り、越後流・甲州流などと云つて、戰史の研究が盛んになり、古い軍書の講釋もした。その流れが軍談であつて

えてゐる門弟は、大阪市女・鼎亭會一河・真體亭一風・五返舎牛丸・金鈴舎一寶・九返舎一八（三亭春馬舎號）・牛返舎一朱・愚舎一得・十字亭三九（通稱林井鳳助、服後遺書によつて二世十返舎一九を名乘つた）・柴舟庵一双・一返舎白平等があつた。なほ向島長命寺の記念碑の裏面には、以上の外に早春舎一梅・丹仙舎一酒・柳詩葊季雁・眞砂亭珠交・稻廼屋穗女・福輪亭白銅等がある。滑稽本作家としての門弟よりも狂歌方面の門人が多い。

【參考】戯作者小傳 ○江戸作者部類 ○列傳體小說史 水谷不倒 ○十返舎一九の出所に就て 紺屋青人（書物往來一ノ三） ○十返舎一九 靄氣樓主人（日本之文化一ノ二三） ○二人の二世一九 朝倉無聲（東京新誌一ノ四） ○十返舎一九の面影 兩石亭主人（浮世繪五五） ○十返舎一九に就いて 去空樓主人（滑稽文學一ノ三） ○十返舎一九の傳 若山居士（國民之友三ノ三五） ○一九と三馬 草野柴二（白百合一ノ二） ○一九研究 藤村作（日本文鑑講座）

（藤村・小柴）

實錄體小說（じつろくたいせうせつ）

【名稱】實錄によつた讀物の意であるが、勿論當時に於てこの名があつた譯ではなく、この一類の讀物に後から與へられた名稱である。實錄小說・實錄物などとも呼ばれる。なほ喜多村筠庭は、「軍談の雙子」といつてゐる。【解說】實錄體小說は多く講談の丸本の整理されたものである。講談の丸本とは、講釋師が持つてゐる、口述する全體を詳悉に認めたもので、所演の要點だけを書いたものを點取と稱するのに對するものである。實錄體小說の悉くがさうとは言へないが、大體に於て講釋師の手になつたものと見られるものが多い。而してそれと體裁の似寄りのものを一括して同樣に取扱ふに過ぎない。從つて作者不明のものや、實際し年代の推定し難いものが夥しい。無論その數も何程あるか測定し難い。異名同書、同名異書も多く、概數をいふことさへ困難である。その一部分は、實錄全書や帝國文庫等に收められて居り、その中、「眞書太閤記」「大岡政談」などが最も著名である。元來、實錄體小說は寫本で行はれ、主として貸本屋がこれを扱つた。そして實錄體小說の成立も、恐らくこの貸本屋といふ專業者が成立つた後であらう。「武玉川」十七編に、「秋更けて獨口利くかし本屋」といふ句があるから、この書の出た寶曆頃には、既に當業者があつたのである。その前に何程溯れるかは分らないが、現存する實錄體小說を見ると、その數量に於て寶曆度ものが特に多く、體裁の整頓したところからも、寶曆以來と考へたい。それは實錄體小說と貸本屋との交涉を考へさせるだけでなく、根本に於て實錄體小說と講釋との關係を明かすものでもあらう。なほこの實錄體小說も明治十六七年以降、活版に附せられるやうになり、兎屋版、榮泉社版など續々發賣された。【分類】趣向によつて分類すれば、御家騷動、仇討、捌き物、武勇傳の四つに大別される。但しこの御家騷動も伊達對決、越後評定など、大名の內訌を幕府が裁判したのは、評定物といつて捌き物と共に裁判事件である。捌き物も民衆相手に町奉行のする裁判事件であつて、專ら世話でゆく。評定物にしても捌き物にしても、結末が標目になつてはゐるものの、それまでの經過に興味があるのだ。明治の半を過ぎてから、飜譯によつて始めて探偵小說（別項）が出て來るまで、我が國に探偵物はあまりなかつた。仇討は曾我・伊賀越・赤穗が名高い。わけて太平の世の中に武士の見せ場は、ただこれだけであるだけに、實錄體小說になつたのも四五十種を數へられよう。併し同型が多く、筋が固定して變化に乏しい。又仇討は武士に限られた事であつたのが、女仇討、さては遊女の仇討なども現はれ、後には町人百姓も仇討をするやうになつた。これで幾分か目先を變へたのも暫時のことで、實錄體小說は、仇討の趣向には隨分窮して、無理なものや、知れ切つた嘘をも憚らない風を生ずるに至つた。それでありながら仇討を實錄體小說が等閑にすることは系統的に許されないのみならず、面白くはなくても讀者の方が、仇討は實錄體小說で讀まうとする心持を繼續してゐた。これは軍談から出發したのを忘れられないためであらう。とにかく實錄體小說の仇討物は、數も多く、出來事も久しく絕えなかつたので、長期に亙つた呼び物であつた。そこを南仙笑楚滿人の「敵討三味線由來」（別項）以來の黃表紙が、橫合から敵討に洒落氣を見せ、その跡を讀本が、これは眞面目で忠孝を說き、その方面では、一時仇討物の流行をさへ見せた（黃表紙・讀本參照）。武勇傳は軍書戰記の中の一騎打などから脫化したとも言へようが、手短く仇討に最も必要な武術勇力を拔萃したものと言ひたい。型の變らない仇討から目先を變へるのに、幾分餘裕のある武勇傳を派生する。端物が講談に勢力を得るやうになると、武勇傳は軍書の俤を留めるものでなく、仇討の筋から轉化したのでもない方面へ展開する。角力や俠客の話もその强味から見れば、武勇傳からの延長に外ならぬ。泥坊の話が白浪物として强味と俠氣を同伴して出て來る。こゝまで來ると芝居の直世話、生世話と同樣なものになり、その時に實錄體小說は寧ろ（別項）の方へ合流する。

【講釋と實錄體小說】講釋といふうちに軍談と講談がある。軍談は戰國時代に諸大將の側近に御伽衆といふ者があつて、聞き傳へやら實歷やらの戰爭談をすることが行はれ、江戸の初めになつて軍學が起り、越後流・甲州流などと云つて、戰史の研究が盛んになり、古い軍書の講釋もした。その流れが軍談であつて太平記讀み（別項）などといふのは、その原文を讀んで聞かせるのだが、讀んだだけでは分らないから講釋もする。講釋といふ名も此處から出る。元來は娛樂のものではなかつたが、武士を離れて民衆相手のものとなる頃は、研究でなく娛樂のものにならなければならぬ。それが娛樂のものになると戰爭談ばかりでは濟まなくなり、泰平の天地に相應した話柄に移る。この分界は彼等が御記錄讀みと云はれた頃にあらう。御記錄とは德川氏の記錄をいふので、主として家康の話說なのだが、その一代は亂世の結末から治世の最初に跨つてゐる。從つて戰爭談ばかりではない。此處から治世の話柄に分岐したのであらう。講釋師は話すと言はずに讀むといふ。それは太平記讀み、御記錄讀みの系統に出たものなのを忘れないためであらう。また無本でなく本を控へて演じるのを原則とするのも淵源を示すものである。既に軍談から講談になつて、本文を離れての口演になるからは、講釋の必要もなく、講釋といふ名前も變なものであり、講談といふのも不相應だ。しかし因襲によつて舊慣が捨てられないのみならず、口演には無本でなく有本にする。軍談用の原本は在來の軍書戰記を用ひるが、講談用の方は次から次へ

太平記三册（文化元年刊）。【洒落本】倡賣往來一册（寬政五年刊） ○野郎玉子一册、享和元年刊） ○吉原談語一册（同二年刊） ○起承轉合一册（同二年刊）。【人情本】清談峯初花（別項） 五册（文政二年刊） ○所緣の藤波（別項） 六册（同七年刊） ○美濃近江寢物語 七册（同八年刊） ○夢浮橋三册（同九年刊） ○敵討嚴柳島 五册（同十年刊） ○金の草鞋（別項）二十五編、同十年—天保五年） ○廣德天神記一册（文化十三年刊） ○色男大安賣五册（文政二年刊） ○當時玉菊草紙 五

匠をしてゐたのを、某侯が見て側妾に所望したのを斷然拒絕したといふことや、墨川亭雪麿が「稗史通」を著はして、彼が漂泊時代に某寺の門番を勤めたと記したのを知つて、これを恥辱とし、赫怒して罵しく詰責し、「稗史通」を敎次郎に買收してゐる事などから推測すると、彼は決して「輕薄な饒舌な無節操な人物ではなく」

三馬がその傑作「浮世風呂」（別項）初編を出した文化六年には、一九は既に、「膝栗毛」の第八編を出して東海道中を完了させたのであつた。一九の重要な史的地位は、滑稽本の先輩として後輩を導き、膝栗毛物の一樣式を創めて、傑作「東海道中膝栗毛」を文壇に寄與したことに由つて定まるべきである。

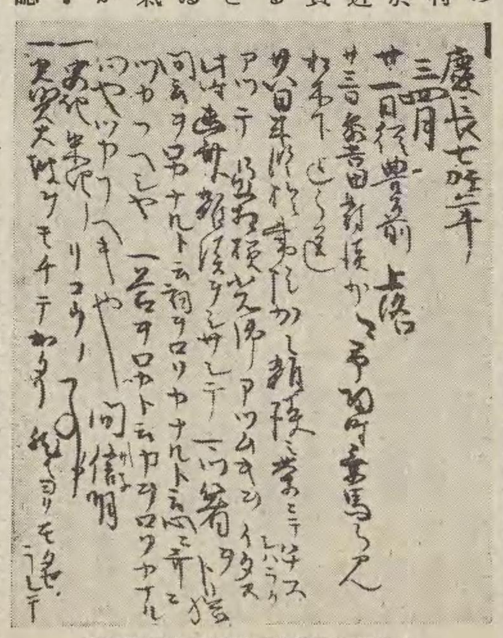
【門弟】

と新作もすれば改作もして行く、これが點取であつたり丸本であつたりする。その孰れにしても文章體に書いてある。口語で述べるのではあつても書くには必ず文章體にする。聞いて濟ます講釋のお客の外に、讀む丸本のお客も出來てくるのは、口述の外に興味を求めようとする上に、聞きに行く煩勞を避ける人のためには已むを得ない。これが又貸本屋の好い顧客でもある。辯舌の技巧を誇る外に講釋師自身の學識を見せて、當人を莊嚴にする意味もあつたらう。讀まれるとなると、かねての丸本に相應な修飾も加へられる譯だ。文字のない聞くお客よりも、讀むお客の數は勘いが、お客の種類は高級である。卽ち口演するものよりも貸本屋へ廻す實錄體小說の方が高尙なものとされた。それに彼等は太平記讀み、御記錄讀みの系統を堅く執つて、何時も自作にもせよ有本で口述すると共に、自分だけの見聞に限らず、必ず典據のあるものを採用したといふのが定例で、それは隨分怪しいものなのだけれども、荒唐無稽なおしやべりはしないと高く標置してゐた。であるから是非實錄によると稱した。實錄とは根本資料といふ心持に使用してゐる。それは、脚本・丸本乃至假作物語等に對して別段に有力なものであるやうに思はせた。これが實錄體小說といふ名稱と、その體裁とを產んだ母胎である。かうした體裁は享保以後の特有で、元祿に溯ればその氣風は著しく稀薄になり、寶曆へ下れば明白になる。この體裁を具備したいために過去の話が都合がよく、新しい際物には不向であつた。手早く申渡しの濟んだばかりの裁判記錄を材料にしたやうな例がないこともないが、兎角現代物は風聞錄とか、實見記とか云つた體裁になりたがるので、實錄體小說には際物が勘い。だが享保以後には、出版の取締も行屆き（出版法參照）、筆者その他に對する刑罰も嚴重であり、出版には資金を要し、彫刻等に手間も掛る。其處を寫本で早手廻しに、際物を出せば初耳が喜ばれ、恐いもの見たさがあり、旁々以て貸本屋の繁昌にもなる譯だ。これが寫本で行はれた大きな理由である。

【他文藝との關係】 應仁以來の軍書戰記は、近松歿後の淨瑠璃作者が好んで採用した材料で、元文・寶曆度の時代物は戰國末期の情味を取入れたものだ。その丸本が臺本になつたから、歌舞伎・操の双方へ大きな影響を與へもした。さうした時代淨瑠璃の傾向から、約四十年おくれて讀本（別項）が出て來た。讀本は寬延二年の「英草紙」（別項）を最初として、寶曆になつて體裁が備はり、寬政を最盛期とする。當時讀本は戲作とは見られずに、戲作以上のものとして優遇され、その作家の中で曲亭馬琴が巨擘とされた。彼の「南總里見八犬傳」や「椿說弓張月」（各別項）は何を捉へたものなのだらう。近松歿後の淨瑠璃作者の行き方と比較し、更に「眞書太閤記」の手際と併せ考へるに、この三者は一つ竈から出てゐる。のみならず讀本が高級實錄體小說なのに心付くであらう。併し、この事に就いては、未だ涉獵が足らないので、存分に立言することは差控へる。なほ明治の初期に現はれた「高橋於傳夜叉譚」（別項）を初め、その他幾多の實錄ものも、この實錄體小說の系統を引くものであると思はれる。（實話文學參照）　〔三田村〕

【參考】 講談實錄物研究　三田村鳶魚（日本文學講座）○雜誌「彗星」（三ノ一〇）○嬉遊笑覽

實話文學（じつわぶんがく）　【名稱】 實話とは事實談である。この實話が作者の主觀に依つて制統され、作者の技巧に依つて調整され、その結果文學的表現となつたものを指して實話文學といふ。それゆゑ、單なる實話と實話文學との區別は、かなりデリケートな問題であつて、勿論、文學的表現になつてゐるか否かが、その分岐點には相違ないが、それを決定するのが容易でない。作者が實話ではあるが文學として表現しようとしたものなら、一應實話文學と認めねばならぬ。【沿革】 明治以前に遡れば、實錄體小說（別項）があり、實錄物があり、講談（別項）の如きものもある。明治になつてからは、特にその十年代に、魯文の「高橋於傳夜叉譚」（別項）、松村春輔の「近世櫻田紀聞」等を初め、多くの實錄物がある。自然主義時代になると、松崎天民の「淪落の女」などが（何といふ名稱を與へられてゐたかは暫く別として）非常な人氣を呼んだ實話文學であつた。しかし實話文學の眞の流行は、昭和四・五年頃からである。最初は、雜誌「文藝春秋」が、讀者の間から實話を募集して載せ始めた。それが事實の强みで、非常な評判になつて文壇に實話が流行するやうになつた。それから更に實話文學の宣言提唱にまで進んだのである。尤もこれは當時に於ける世界的流行に投じたのであつたが、實話文學の旗印を最も明白に掲げたのは木村毅で、彼はその理論の裏付として、東京日日新聞に、「ラグーザお玉」を、昭和六年一月から三月まで連載した。これと前後して、大佛次郎の「ドレフェス事件」、牧逸馬の「世界怪奇實話」等が現はれ、これに在來の作家で、村松梢風や田中貢太郎等が主としてその方面に筆を向けて、こゝに實話文學時代を出現するに至つたのである。この流行は、やがて「實話雜誌」の如き專門雜誌をさへ生むやうになつた。外國ではエドガア・ウォレス、ルキュー、コナン・ドイル等が最も注目すべき作家である。　〔宮島〕



古寫本「耳底記」（佐佐木信綱氏藏）

耳底記（じていき）　歌論書　三卷一册　【著者】 幽齋口述、光廣筆記。【成立】 卷一の初めに「慶長三年八月四日」とあり、卷二の初めに「慶長四年」とあり、卷三の初めに「同年四月四日」とあるから、慶長三・四年にかけて成つたものである。【諸本】 光廣自筆本が存する。刊本は「于時寬文元年六月吉祥日、二條通鶴屋町田原仁左衞門板行」とあるものがある。【內容】 慶長三年八月四日から、同七年十二月晦日までの間の記事が載つてゐる。和歌に關する故實、釋義をはじめ、歌書のこと、連歌のこと等、和歌を中心とした雜話集で、斷片的ながら幽齋の博識、又その歌學思想を反映せしめてゐる。俗語を交へてかゝれてゐる點、三光院の說として書いてある部分の少くない事等も注意すべく、彼の說ばかりでなく、その身邊の消息が明かにされてゐる點等も注意される。歌論に關する見解としては、昔の歌は餘情をあながち詠まうとしないで餘情限りなく、今の歌は餘情あらせようとして餘情がない。歌は餘情のある程よいのであると論じ、又當代の歌は皆連歌である。いひつめたがりてきつい。歌はそんなものでなく幽玄であると云ひ、正風體をこそ詠むべく、先づ「古今」、次に「新古今」、近代では逍遙院の歌等を大に推賞して注ぐ。お爪一卷を奪ふ。（市原野無常場）御厨三郎、死したる良門を燒場へ運ぶ。お爪一卷を持ち來る。この德にて良門火中より蘇生。桔梗の前と相馬六郎出でてだんまり。（二幕）（弘徽殿山御所）正盛、成春を手籠めにする所へ、伊勢海老あかん平出でて救ふ。（古御所奥殿）季武・公時、化生退治のために入込む。傾城胡蝶のクドキ。胡蝶は正盛に殺された蜘蛛の雌である。山姥の靈現れて公時と足柄山を三升に逢つて、錦繪と違ふと嚴談。三升、暫をして見せる事になる。中間栗の木又次の强請り。（芝居茶屋二階）唐土の枡花女・玉眼・藤馬來り、市川玉柏となつた美女丸の詮議をしようとする。三升、暫の碓氷貞光に扮して來り、枡花女のウケ・又次・鯰坊主の引立て。枡花女實は奥女中袖崎にて、美女丸へ逢ひに來た趣向。三升、素顏になつて取持つ。又次實は伊賀壽太郎、美女丸を害せんとする。袖崎

四天王産湯玉川（してんわうぶゆのたまがは）　脚本　五幕十五場　【作者】 四代鶴屋南北　【通稱】 世話の「暫」　【名義】 「前太平記」の世界を四天王で表はし、玉川座初開場を祝つて産湯の玉川と續けた。　【諸本】 大南北全集第八卷所收　【興行】 文政元年十一月一日初日、江戸玉川座顏見世興行に上演。

〔役割〕 卜部季武・足柄山の山姥・鐵門鬼兵衞實は相馬六郎公連・高麗屋錦升・中間栗の木又次實は伊賀壽太郎（五代松本幸四郎）

意すべく、彼の記ばかりでなく、その身邊の消息なども明かにされてゐる點等も注意される。歌論に關する見解としては、昔の歌は餘情をあながち詠まうとしないで餘情限りなく、今の歌は餘情あらせようとして餘情がない。歌は餘情のある程よいのであると論じ、又當代の歌は皆連歌である。いひつめたがりてきつい。歌はそんなものでなく幽玄であると云ひ、正風體をこそ詠むべく、先づ「古今」、次に「新古今」、近代では逍遙院の歌等を大に推賞してゐる。「家隆などの歌、近代は逍遙院、三光院殿のを見るべし」等とも書かれてゐる。「歌の中庸は定家、家隆なり」ともある。さて自然に風情を求めて詠むべきであるといひ、詞を求めて心をつくるはあしく、心によりて詞を飾り求むべし等とも說いてゐる。後鳥羽院の御製ばかり面白きはなしといひ、西行はよき歌詠みであつたといつてゐる。この評言にて彼の態度は察せられる。【價値】幽齋の歌論を系統的に見るためには、「幽齋翁聞書」(別項)等に據るのが、より便宜ではあるが、この書の斷片的な不用意の言葉に、一層彼の面目があらはれてゐる部分も少くない。中世歌學史上に於ける幽齋の地位が動かされない以上、この書も必讀さるべきであらう。〔藤川〕

耳底記(じていき)　「俳諧耳底記」を見よ。

詩轍(してつ)　漢詩作法書　六卷　【著者】三浦梅園　【刊行】天明六年　【解說】大意、詩義、體製、變法、異體、篇法、韻法、句法、字法、雜記の十門に分ち、毎門更に數十項の小目を置き、假名交り文で詳述し、說くところ極めて平明。我が國の漢詩作法を論じた書中に於て有數の好著である。〔佐久〕

辭典(じてん)　「辭書」を見よ。

四天王産湯玉川(してんわううぶゆのたまがは)　脚本　五幕十五場　【作者】四代鶴屋南北　【通稱】世話の「暫」　【名義】「前太平記」の世界を四天王で表はし、玉川座初開場を祝つて産湯の玉川と續けた。　【諸本】大南北全集第八卷所收　【興行】文政元年十一月一日初日、江戸玉川座額見世興行に上演。

〔役割〕　卜部季武・足柄山の山姥・鐵門鬼兵衞實は相馬六郎公連・高麗屋錦升・中間栗の木又次實は伊賀壽太郎成信(五代松本幸四郎)、傾城胡蝶實は葛城山の女郎蜘蛛・百足のお百實は秀鄕娘千晴・濱村屋路考・奥女中袖崎實は壽太郎娘玉琴(五代瀨川菊之丞)、御厨三郎正頼・長井長助實は二の瀨源吾・音羽屋薪水(坂東彦三郎)、物部平太有風(市川宗三郎)、伊勢海老あかん平(市川高麗藏)、榛立三郎成春・紀伊國屋曙山(澤村源之助)、因幡の局實は熊手のお爪(松本小次郎)、加藤豐後次郎忠正(松本五郎市)、平常陸介正盛・大通辭藤馬實は大宅太郎光遠(大谷馬十)、滿仲一子美女丸後に市川玉柏(山科甚吉)、野伏り菰垂れの安實は純友娘桔梗の前・大和屋杜若(五代岩井半四郎)、坂田公時・渡邊源次綱・猿島歌遊實は相馬太郎良門・成田屋三升(七代市川團十郎)。

【題材】　吉例の前太平記の世界を南北の新案で料理した。二番目に入れた團十郎の錦繪の件は事實に基いた。

【梗概】「一番目」〔序幕〕(北野天滿宮)女官因幡の局、鬼切丸内見に上使。加藤忠正の入込み。(同廻廊)橋立三郎成春と保昌娘小式部の色模樣。藤原仲光が滿仲の仰せを受け、美女丸の首討つと見せて因幡の局實は非人お爪と見破る。平正盛の姦計。(葛城山)忠正・お爪、讓葉の御鏡を爭ふ。(棧敷ケ嶽)正盛、物部平太と力を合せ、葛城山の土蜘蛛を退治。秀鄕が龍宮より持歸りたる驪龍の一卷へ血を注ぐ。お爪一卷を奪ふ。(市原野笹塚)御詠三郎、死したる良門を蘇場へ運ぶ。お爪一卷を持ち來る。この德にて良門火中より蘇生。桔梗の前と相馬六郎出でてだんまり。〔二幕〕(弘徽殿山御所)正盛、成春を手籠めにする所へ、伊勢海老あかん平出でて救ふ。(古御所奥殿)季武・公時、化生退治のために入込む。傾城胡蝶のクドキ。胡蝶は正盛に殺された蜘蛛の雌である。山姥の靈現れて公時と足柄山を偲ぶ振。蜘蛛の精正盛にかゝる。山姥の靈も加勢して首尾よく正盛を斃す。常本淨瑠璃「魏鬼宿直噺(さにやまおよづめはなし)」。〔三幕〕(戻橋廣小路)仲光の許を逃げた美女丸に捕手かゝる。(極樂寺堤)菰垂れの安實は良門は家臣を集めて相馬内裏のまねび。鐵門鬼兵衞、良門に雪駄の鼻緒をすげさせる。〔大詰〕(童子長屋切見世)大江山千丈ケ嶽を切見世に開き直したといふ趣向、主は鬼兵衞である。鏡山から住替へに來たお百、八人蠻の猿島歌遊、居合拔きの長井長助が入込む。(切見世座敷)渡邊の綱、地廻りの姿で上使に來り、鬼兵衞へ良門の首を討てと賴光の命を傳へる。鬼兵衞實は相馬六郎。(谷底)菰垂れの安とお百と歌遊が相馬内裏の圖を見ての渡り臺詞。安は初め相馬良門と男の姿をしてゐたが、歌遊を誡の良門と知ると、實は許嫁桔梗の前と名乘り、自殺して夫の身替りに立つ。長助實は渡邊の臣源吾、その首を持ち歸る。良門は相馬六郎を斬る。六郎、本心を明かして死ぬ。お百實は千晴、良門に詰めかけて引張りの見え。(玉川座寄初め)三升・錦升・杜若・路考、その外出勤俳優一同集まつて手打ち。美女丸は三升へ弟子入り。「二番目」(堺町成田屋内)三升・錦升・路考集まつて春狂言の相談。大通辭藤馬と唐人玉眼來り、三升に逢つて、歸綸と聞ふと觀破。三升、暫くして見せる事になる。中間栗の木又次の長詞り。(芝居茶屋二階)唐土の桝花女・玉眼・藤馬來り、市川玉柏となつた美女丸の詮議をしようとする。三升、暫の碓氷貞光に扮して來り、桝花女のウケ・又次・鮫坊主の引立て。桝花女實は奥女中袖崎にて、美女丸へ逢ひに來た趣向。三升、素顏になつて取持つ。又次實は伊賀壽太郎、美女丸を害せんとする。袖崎實は娘玉琴、身替りになる。三升實は誠の貞光、源家の臣多勢と共に壽太郎を取卷く。

【解說】脚色は甚だ荒唐無稽であるが、顏見世狂言の脚本中では筋の通つた方である。種々な約束に縛られた顏見世狂言を、これまでに面白く奇拔な脚色をしたのは南北の手腕である。市原野のだんまりの凄味、大江山を廓にした奇拔な趣向と山入りを世話で見せる種々の當込み、調子のいゝ半四郎を男から女に變らせる技巧、寄初めの芝居の描寫、三升宅の當時の描寫等、到れり盡せりである。顏見世吉例の「暫」を、世話場で見せる工夫に至つては顏見世狂言中の白眉で、當時の看客の腹を抉つた趣向である。〔渥美〕

四天王御江戸鏑(してんわうおえどのかぶらや)　脚本　六幕二十二場　時代世話物　【作者】本屋宗七の署名になつてゐるが、大部分は福森久助の作。【名稱】顏見世狂言で、「四天王」と置き、それが江戸の株であると利かせた。【諸本】日本戲曲全集第四十六卷所收　【興行】文化十二年十一月一日初日、江戸中村座顏見世興行に上演。

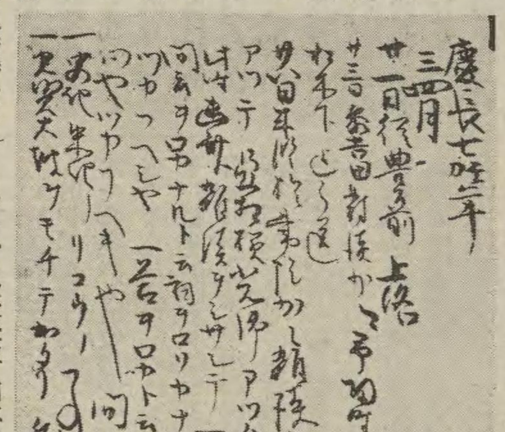
〔役割〕　中組の綱五郎實は渡邊の綱・栗の木又次・山樵根草の李右衞門實は三田の仕(三代坂東三津五郎)、美女御前實は蜘蛛の精・中根屋花吹實は蜘

と新作もすれば改作もして行く、これが點取であつたり丸本であつたりする。その孰れにしても文章體に書いてある。口語で述べるのではあつても書くには必ず文章體にする。聞いて濟ます講釋のお客の外に、讀む丸本のお客も出來てくるのは、口述の外に興味を求めようとする上に、聞きに行く煩勞を避ける人のためには已むを得ない。これが又貸本屋の好い顧客でもある。辯舌の技巧を誇る外に講釋師自身の學識を見せて、當人を莊嚴にする意味もあつたらう。讀まれるとなると、かねての丸本に相應な修飾も加へられる譯だ。文字のない聞くお客よりも、讀むお客の數は尠いが、お客の種類は高級である。卽ち口演するものよりも貸本屋へ廻す實錄體小說の方が高尙なものとされた。それに彼等は太平記讀み、御記錄讀みの系統を堅く執つて、何時も自作にもせよ有本で口述すると共に、自分だけの見聞に限らず、必ず典據のあるものを採用したといふのが定例で、それは隨分怪しいものなのだけれども、荒唐無稽なおしやべりはしないと高く標置してゐた。であるから是非實錄によると稱した。實錄とは根本資料といふ心持に使用してゐる。それは、脚本・丸本乃至假作物語等に對して別段に有力なものであるやうに思はせた。これが實錄體小說といふ名稱と、その體裁とを產んだ母胎である。かうした體裁は享保以後の特有で、元祿に溯ればその氣風は著しく稀薄になり、寶曆へ下れば明白になる。この體裁を具備したいために過去の話が都合がよく、新しい際物には不向であつた。手阜く由緣の濟んだばかりの裁判記錄を材料にしたやうな例がないこともないが、元祿現代物は風聞錄とか云つた體裁になりたがるので、實錄體小說には際物が尠い。だが享保以後には、出版の取締も行屆き(出版法參照)、筆者その他に對する刑罰も嚴重であり、出版には資金を要し、彫刻等に手間も掛る。其處を寫本で早手廻しに、際物を出せば初耳が喜ばれ、恐いもの見たさがあり、旁々以て貸本屋の繁昌にもなる譯だ。これが寫本で行はれた大きな理由である。

【他文藝との關係】 應仁以來の軍書戰記は、近松歿後の淨瑠璃作者が好んで採用した材料で、元文・寶曆度の時代物は戰國末期の情味を取入れたものだ。その丸本が臺本になつたから、歌舞伎・操の双方へ大きな影響を與へもした。さうした時代淨瑠璃の傾向から、約四十年おくれて讀本(別項)が出て來た。讀本は寬延二年の「英草紙」(別項)を最初として、寶曆になつて體裁が備はり、寬政を最盛期とする。當時讀本は戲作とは見られずに、戲作以上のものとして優遇され、その作家の中で曲亭馬琴が巨擘とされた。彼の「南總里見八犬傳」や「椿說弓張月」(各別項)は何を捉へたものなのだらう。近松歿後の淨瑠璃作者の行き方と比較し、更に「眞書太閤記」の手際と併せ考へるに、この三者は一つ竈から出てゐる。のみならず讀本が高級實錄體小說なのに心付くであらう。併し、この事に就いては、未だ涉獵が足らないので、存分に立言することは差控へる。なほ明治の初期に現はれた「高橋於傳夜叉譚」(別項)を初め、その他幾多の實錄ものも、この實錄體小說の系統を引くものであると思はれる。(實話文學參照)　〔三田村〕

【參考】講談實錄物研究　三田村鳶魚(日本文學講座)〇雜誌「歷史」(三ノ一〇)〇續帝國文庫　實話文學　【名稱】實話とは事實談である。この實話が作者の主觀に依つて制統され、作者の技巧に依つて調整され、その結果文學的表現となつたものを指して實話文學といふ。それゆゑ、單なる實話と實話文學との區別は、かなりデリケートな問題であつて、勿論、文學的表現になつてゐるか否かが、その分岐點には相違ないが、それを決定するのが容易でない。作者が實話ではあるが文學として表現しようとしたものなら、一應實話文學と認めねばならぬ。【沿革】明治以前に遡れば、實錄體小說(別項)があり、實錄物があり、講談(別項)の如きものもある。明治になつてからは、特にその十年代に、魯文の「高橋於傳夜叉譚」(別項)、松村春輔の「近世櫻田紀聞」等を初め、多くの實錄物がある。自然主義時代になると、松崎天民の「淪落の女」などが(何といふ名稱を與へられてゐたかは暫く別として)、非常な人氣を呼んだ實話文學であつた。しかし實話文學の眞の流行は、昭和四・五年頃からである。最初は、雜誌「文藝春秋」が、讀者の間から實話を募集して載せ始めた。それが事實の强みで、非常な評判になつて文壇に實話が流行するやうになつた。それから更に實話文學の宣言提唱にまで進んだのである。尤もこれは當時に於ける世界的流行に投じたのであつたが、實話文學の旗印を最も明白に揭げたのは木村毅で、彼はその理論の裏付として、東京日日新聞に、「ラグーザお玉」を、昭和六年一月から三月まで連載した。これと前後して、大佛次郎の「ドレフュス事件」、牧逸馬の「世界怪奇實話」等が現はれ、これに在來の作家で、村松梢風や田中貢太郎等が主としてその方面に筆を向けて、こゝに實話文學時代を出現するに至つたのである。この流行は、やがて「實話雜誌」の如き專門雜誌をさへ生むやうになつた。外國ではエドガア・ウォレス、ルキュー、コナン・ドイル等が最も注目すべき作家である。　〔宮島〕

耳底記(じていき)　歌論書　三卷一册　【著者】幽齋口述、光廣筆記。【成立】卷一の初めに「慶長三年八月四日」とあり、卷二の初めに「同年四月四日」とあるから、慶長三・四年にかけて成つたものである。【諸本】光廣自筆本が存する。刊本は「于時寬文元年六月吉祥日、二條通鶴屋町田原仁左衞門板行」とあるものがある。【內容】慶長三年八月四日から、同七年十二月晦日までの間の記事が載つてゐる。和歌に關する故實、釋義をはじめ、歌書のこと、連歌のこと等、和歌を中心とした雜話集で、斷片的ながら幽齋の博識、又その歌學思想を反映せしめてゐる。俗語を交へてかれてゐる點、三光院の說として書いてある部分の少くない事なども注



古寫本「耳底記」(佐木佐信氏藏)

意すべく、彼の說ばかりでなく、その身邊の消息が明かにされてゐる點等も注意される。歌論に關する見解としては、昔の歌は餘情をあながち詠まうとしないで餘情限りなく、今の歌は餘情あらせようとして餘情がない。歌は餘情のある程よいのであると論じ、又當代の歌は皆連歌である。いひつめたがりてきつい。歌はそんなものでなく幽玄であると云ひ、正風體をこそ詠むべく、先づ「古今」、次に「新古今」、近代では逍遙院の歌等を大に推賞してゐる。「家隆などの歌、近代は逍遙院、三光院殿のを見るべし」等とも書かれてゐる。「歌の中庸は定家、家隆なり」ともある。さて自然に風情を求めて詠むべきであるといひ、詞を求めて心をつくるはあしく、心によりて詞を飾り求むべし等とも說いてゐる。後鳥羽院の御製ばかり面白きはなしといひ、西行はよき歌詠みであつたといつてゐる。この評言にて彼の態度は察せられる。【價値】幽齋の歌論を系統的に見るためには、「幽齋翁聞書」（別項）等に據るのが、より便宜ではあるが、この書の斷片的な不用意の言葉に、一層彼の面目があらはれてゐる部分も少くない。中世歌學史上に於ける幽齋の地位が動かされない以上、この書も必讀さるべきであらう。【藤川】

耳底記（じていき）「俳諧耳底記」を見よ。

詩轍（してつ）　漢詩作法書　六卷　【著者】三浦梅園　【刊行】天明六年　【解說】大意、詩義、體製、變法、異體、篇法、韻法、句法、字法、雜記の十門に分ち、每門更に數十項の小目を置き、假名交り文で詳述し、說くところ極めて平明。我が國の漢詩作法を論じた書中に於て有數の好著である。【佐久】

辭典（じてん）「辭書」を見よ。

四天王産湯玉川（してんわうのうぶゆたまがは）　五幕十五場　【作者】四代鶴屋南北　【通稱】世話の「暫」　【名義】「前太平記」の世界を四天王で表はし、玉川座初開場を祝つて産湯の玉川と續けた。【諸本】大南北全集第八卷所收　【興行】文政元年十一月一日初日、江戸玉川座顏見世興行に上演。

【役割】卜部季武・足柄山の山姥・鐵門鬼兵衞實は相馬六郎公連・高麗屋錦升・中間栗の木又次實は伊賀壽太郎成信（五代松本幸四郎）、傾城胡蝶實は葛城山の女郎蜘蛛・百足のお百實は秀鄕娘千晴・習村屋路考・奥女中袖崎實は壽太郎娘玉琴（五代瀨川菊之丞）、御厨三郎正頼・長井長助實は二の瀨源吾・音羽屋薪水（坂東彦三郎）、物部平太有風（市川宗三郎）、伊勢海老あかん平（市川高麗藏）、桝立三郎成春・紀伊國屋曙山（澤村源之助）、因幡の局實は熊手のお爪（松本小次郎）、加藤豐後次郎忠正（松本五郎市）、平常陸介正盛・大通辭藤馬實は大宅太郎光遠（大谷馬十）、滿仲一子美女丸後に市川玉柏（山科甚吉）、野伏り菰垂れの安實は純友娘桔梗の前・大和屋杜若（五代岩井半四郎）、坂田公時・渡邊源次綱・猿島歌遊實は相馬太郎良門・成田屋三升（七代市川團十郎）。

【題材】吉例の前太平記の世界を南北の新案で料理した。二番目に入れた團十郎の錦繪の件は事實に基いた。

【梗概】「一番目」〔序幕〕（北野天滿宮）女官因幡の局、鬼切丸內見に上使。加藤忠正の入込み。（同廻廊）橋立三郎成春と保昌娘小式部の色模樣。藤原仲光が滿仲の仰せを受け、美女丸の首討つと見せて因幡の局實は非人お爪と見破る。平正盛の姦計。（葛城山）忠正・お爪、讓葉の御鏡を爭ふ。（棧敷ケ嶽）正盛、物部平太と力を合せ、葛城山の土蜘蛛を退治。秀鄕が龍宮より持歸りたる驪龍の一卷へ血を注ぐ。お爪一卷を奪ふ。（市原野鬼塚場）御劍三郎、死したる良門を墓場へ運ぶ。お爪一卷を持ち來る。この德にて良門火中より蘇生。桔梗の前と相馬六郎出でてだんまり。〔二幕〕（弘徽殿山御所）正盛、成春を手籠めにする所へ、伊勢海老あかん平出でて救ふ。（古御所奥殿）季武・公時、化生退治のために入込む。傾城胡蝶のクドキ。胡蝶は正盛に殺された蜘蛛の雌である。山姥の靈現れて公時と足柄山を偲ぶ振。蜘蛛の精正盛にかゝる。山姥の靈も加勢して首尾よく正盛を斃す。富本淨瑠璃「鬼宿直嫩（おにやまおよつぎわかばなし）」。〔三幕〕（戻橋廣小路）仲光の許を逃げた美女丸に捕手かゝる。（極樂寺堤）菰垂れの安實は良門は家臣を集めて相馬內裏のまねび。鐵門鬼兵衞、良門に雪駄の鼻緒をすげさせる。〔大詰〕（童子長屋切見世）大江山千丈ケ嶽を切見世に開き直したといふ趣向、主は鬼兵衞である。鏡山から住替へに來たお百、八人藝の猿島歌遊、居合拔きの長井長助が入込む。（切見世座敷）渡邊の綱、地廻りの姿で上使に來り、鬼兵衞へ良門の首を討てと賴光の命を傳へる。鬼兵衞實は相馬六郎。（谷底）菰垂れの安とお百と歌遊が相馬內裏の圖を見ての渡り臺詞。安は初め相馬良門と男の姿をしてゐたが、歌遊を誡の良門と知ると、實は許嫁桔梗の前と名乘り、自殺して夫の身替りに立つ。長助實は渡邊の臣源吾、その首を持ち歸る。良門は相馬六郎を斬る。六郎、本心を明かして死ぬ。お百實は千晴、良門に詰めかけて引張りの見え。（玉川座寄初め）三升・錦升・杜若・路考、その外出勤俳優一同集まつて手打ち。美女丸は三升へ弟子入り。〔二番目〕（堺町成田屋內）三升・錦升・路考集まつて春狂言の相談。大通辭藤馬と唐人玉眼來り、三升に進つて、錦絵と違ふと饅頭。三升、暫くして見せる事になる。（芝居茶屋二階）唐土の桝花女・玉眼・薩馬來り、市川玉柏となつた美女丸の談議をしようとする。三升、暫の碓氷貞光に扮して來り、桝花女のウケ・又次・鮫坊主の引立て。桝花女實は奥女中袖崎にて、美女丸へ逢ひに來た趣向。三升、素顏になつて取持つ。又次實は伊賀壽太郎、美女丸を害せんとする。袖崎實は娘玉琴、身替りになる。三升實は誠の貞光、源家の臣多勢と共に壽太郎を取卷く。

【解說】脚色は甚だ荒唐無稽であるが、顏見世狂言の脚本中では筋の通つた方である。種々な約束に縛られた顏見世狂言を、これまでに面白く奇拔な脚色をしたのは南北の手腕である。市原野のだんまりの凄味、大江山を廓にした奇拔な趣向と山入りを世話で見せる種々の當込み、調子のいゝ半四郎を男から女に變らせる技巧、寄初めの芝居の描寫、三升宅の當時の描寫等、到れり盡せりである。顏見世吉例の「暫」を、世話場で見せる工夫に至つては顏見世狂言中の白眉で、當時の看客の腹を抉つた趣向である。【渥美】

四天王御江戸鏑（してんわうおえどのかぶらや）　脚本　六幕二十二場　時代世話物　【作者】本屋宗七の署名になつてゐるが、大部分は福森久助の作。【名稱】顏見世狂言で、「四天王」と置き、それが江戸の株であると利かせた。【諸本】日本戲曲全集第四十六卷所收　【興行】文化十二年十一月一日初日、江戸中村座顏見世興行に上演。

【役割】中組の綱五郎實は渡邊の綱・栗の木又次・山樵根竜の李右衞門實は三田の仕（三代坂東三津五郎）、美女御前實は蜘蛛の精・中根屋花咲實は蜘

蛛の精・源頼光・下村の使ひ新介實は田原の千晴・怪童丸後に坂田公時(三代尾上菊五郎)、坊門太郎景成・若い者喜兵衛(中村東藏)、岩倉中納言實は和泉式部・又次女房おしづ(中村松江)、巨勢國岡(片岡我長)、初花姫・妹住の江(中山龜三郎)、物部平太有風・部屋頭伴森右衛門・竹中一庵實は伊賀壽太郎(淺尾友藏)、奥女中浪花江實は將門娘七綾姫・兼房息女花園姫(二代澤村田之助)、淡路守顆親(中村七三郎)、茨木婆實は良門乳人さしま・大江正時實は相馬太郎良門・通り者又四郎實は大藏原四郎將平(五代松本幸四郎)、碓井貞光・源頼信・卒井保昌・鍛ざこの十實は二の瀬源六近忠・足柄山の山姥(七代市川團十郎)。

【梗概】「第一番目」〔序幕〕(宇治別殿)滿仲末子美女御前は八代龍王の姿に扮し、初花姫藤原仲光等を捕へ窮命、物部平太に首を刎ねさせんとする所へ碓井貞光、吉例の暫で出て初花姫等を助け、名鏡をかざせば、美女御前は土蜘蛛の正體を現はす。〔二幕〕(洛陽鷹ケ峯山館)頼光病氣平癒を豊後次郎忠正、妹住の江等祈りに來る。坊門太郎は梁の武帝が畫いた鷹の白絹へ巨勢國岡に彩らせ、源家を調伏せんと企む。(奥殿)國岡は坊門太郎の企みを挫かんと狂亂を裝ふ。血汐の穢れで鷹が拔けて飛び去る。(鷹ケ峯)六部實は相馬良門、順禮實は渡邊綱の出會ひ。平井保昌、盗賊姿にて出てだんまり。(戻り橋)下村の使ひ新介實は田原千晴と、奥女中浪花江が偶然出會ひての色模様。鷹の拔けた白絹、千晴の手に入る。〔三幕〕(吉原羅生門河岸)鳶の者綱五郎、友達と河岸見世の遊び。部屋頭森右衛門と若い者喜兵衛のいきさつ。茨木婆、平井保昌よりの使ひを殺して密書を奪ひ取る。(中長屋所作)綱五郎と友達の遣取。森右衛門と喜兵衛のもどかしや。(奥殿)浪花江實は將門の娘七綾姫。千晴を敵方と知つて自害しようとするのを大四郎が止め、一庵實は伊賀壽太郎と坊門太郎を殺して自殺し、大鷹原四郎と明かし七綾姫を見捨てぬやう頼む。鰕ざこの十實は二の瀬源六來りて大四郎が血汐に依つて、千晴所持の白絹へ再び鷹を戻す。〔大切〕(三島明神)源頼信と池田中納言息女花園姫との色模様。雜兵栗の木又次が軍の注進。又次女房おしづが色の取持ち。(足柄山)山中に一子快童丸を育てる山姥。柚李右衛門實は三田の仕は、快童の力量を見抜き、頼光へ推擧して坂田公時と名乘らす。山姥、快童に名殘りを惜しみ山に入る。「極彩色山路の曙」上の卷、富本節。下の卷、常磐津節。

【解説】顔見世狂言としては、比較的連絡のとれた作である。「暫」や「山姥」の幕は、從前の作を訂正したもの。羅生門河岸の描寫の面白さは無類、この種の狂言としては大傑作で、會話や技巧は實に冴えたもの。その世話と時代の味を連絡する手法も優れてゐる。當時流行の新内節を他所事に使つたのも珍らしい。二番目の滑稽場は餘り冴えない。〔温美〕

四天王剿盗異錄 してんわうせうたういろく 讀本 十卷【作者】曲亭馬琴【挿畫】歌川豐廣【名稱】頼光の四天王が怪盗袴垂を討つ異傳といふ意。【刊行】文化二年【諸本】曲亭馬琴翁叢書(野村銀次郎編)所收【題材】頼光及びその四天王の酒呑童子退治の傳説。「古今著聞集」「宇治拾遺物語」に見える袴垂の所業を併せて構成した説話に、謡曲「土蜘蛛」「山姥」の説話等を加へて脚色したものであるが、直接には、「前太平記」に題材を求めた歌舞伎や、かの謡曲に據つた近松門左衛門の浮瑠璃、「國八州繋馬」「嵐山姥」「酒呑童子」などお考へられる。【梗概】藤原政忠は、下總に下向して平將門を討ち、その臣武藏與世の後妻節折(よおり)を救うて伴ひ歸つた。やがて節折は與世の子朧丸を生んだので、致忠の臣沼田正通は母子を上野に預けんとして京を出で、木曾寢覺の里で姥捨山の鬼婆に襲はれて死んだ。この時節折は那米川村の六郎二方に伴はれたが、六郎二は弓矢村の橘平を殺して正通の金を奪つた惡事の發覺を怖れて、節折をも殺害しようとした。節折は折柄泊り合せた道魔法師の術に依つて遁れ、陰陽頭加茂保憲の妻妙藏比丘尼に遭うてその庵に救はれたが、比丘尼から九族に禍すると豫言されて朧丸を捨てた。朧丸は偶々六郎二に拾はれて彌介と言つて育てられたが、長ずるに及んで兇惡の性を現はし、惡事を重ねた末出奔し、京に來つて賊を働き、或る夜藤原保昌を狙つてその威にうたれ、邸に伴はれた。保昌は致忠の子で、父の遺命に依つて彌介を弟とし、右京亮保輔と名乘らせたが、世人はこれを袴垂の保輔と呼んだ。保輔は保昌の室和泉式部に繼慕して挑んだが、その子小式部に阻まれ、後、保昌の別莊に移されてからは、多くの盗賊を手下として殘暴を極め、富家藤原善時の館を襲つて大金を奪ひ、遂に部下に命じて江州高島の要塞に城を築かしめた。又源滿仲が城中の田植に、後園で密會した卜部次官季國の子季武と侍女姫松を罪せんとするや、保輔は姫松の父玉瀬平太郎の歎きに乘じて闘白の使者と僞り、滿仲の城中に使して季武を追放せしめ、姫松を平太郎の許に伴つて多額の謝金を取つたが、姫松に情を動かして海上に奪ひ去つた。併し風雨に遭うてこれを海に流し、後、宇津より書寫山に赴かうとして道路法師に會ひ、師事して袈を脱んだ上、これを殺して高島の城に到り、腰下を

京にやつて初皇式部を奪はうとしたが、却つて保昌に攻められて城を落され、逃れて赤山の岩窟に鬼同丸といふ者と會して術を比べたが、鬼同丸の化した馬に乘つて走り、馬は源頼光の弟頼信の邸に引かれる。又鬼同丸は大童と化して頼光に鎖で縛められるが、その夜鎖を切つて頼光を狙ひ、渡邊源二綱に追はれて市原野で牛と化し射られて石と化した。その後頼光は上總の國司に任ぜられて下向の途次、足柄山で賊魁となつてゐた保輔を走らし、

た。その後、中納言關光の場所の館を襲ひ、遂にかの四天王に捕へられて梟首された。綱光、四天王それ〳〵重職に就いて源家の繁榮を致した。

【影響】文化三年春、大阪角座で、これの一節が歌舞伎に仕組まれて上演された。又一時文壇に覇を爭つて互に趣向を競つた山東京傳が文化三年に出した「善知鳥安方忠義傳」、同六年の「本朝醉菩提」「浮牡丹全傳」(各別項)に、これと相似たる節がある。〔雜野〕

○倭訓人物便覽 三浦梅園 ○梅門分布史攷 事蹟 ○梅園(早稲田文學大正一四ノ九) ○淡路島附錄 野田別天神(稲門珍書百種)

兒童藝術 じどうげいじゅつ 〔獨〕Die Kunst d. Kindes 【解説】藝術學上藝術の發生的研究に資するため、知能の低い段階にある兒童の形成活動を觀察する事は、今世紀に入つてから屢々試みられた。一般に兒童藝術に就いて觀察される諸點は、(一)現實と假象(別項)とが區別されない、(二)空想と現實とが區別されない、(三)模倣性が多い、(四)單調を厭ふ、(五)自己中心的である、(六)自己表現の慾望が強い、(七)自己滿足的である、(八)自己批判の缺如、(九)自己暗示に陷り易い、(十)集團的である、(十一)遊戯的である、(十二)即興的である、(十三)模倣的である、(十四)自己陶醉的である、(十五)自己暗示的である、(十六)自己滿足的である、(十七)自己批判の缺如である、(十八)自己暗示に陷り易い、(十九)集團的である、(二十)遊戯的である、(二十一)即興的である、(二十二)模倣的である、(二十三)自己陶醉的である、(二十四)自己暗示的である、(二十五)自己滿足的である、(二十六)自己批判の缺如である、(二十七)自己暗示に陷り易い、(二十八)集團的である、(二十九)遊戯的である、(三十)即興的である、(三十一)模倣的である、(三十二)自己陶醉的である、(三十三)自己暗示的である、(三十四)自己滿足的である、(三十五)自己批判の缺如である、(三十六)自己暗示に陷り易い、(三十七)集團的である、(三十八)遊戯的である、(三十九)即興的である、(四十)模倣的である、(四十一)自己陶醉的である、(四十二)自己暗示的である、(四十三)自己滿足的である、(四十四)自己批判の缺如である、(四十五)自己暗示に陷り易い、(四十六)集團的である、(四十七)遊戯的である、(四十八)即興的である、(四十九)模倣的である、(五十)自己陶醉的である、(五十一)自己暗示的である、(五十二)自己滿足的である、(五十三)自己批判の缺如である、(五十四)自己暗示に陷り易い、(五十五)集團的である、(五十六)遊戯的である、(五十七)即興的である、(五十八)模倣的である、(五十九)自己陶醉的である、(六十)自己暗示的である、(六十一)自己滿足的である、(六十二)自己批判の缺如である、(六十三)自己暗示に陷り易い、(六十四)集團的である、(六十五)遊戯的である、(六十六)即興的である、(六十七)模倣的である、(六十八)自己陶醉的である、(六十九)自己暗示的である、(七十)自己滿足的である、(七十一)自己批判の缺如である、(七十二)自己暗示に陷り易い、(七十三)集團的である、(七十四)遊戯的である、(七十五)即興的である、(七十六)模倣的である、(七十七)自己陶醉的である、(七十八)自己暗示的である、(七十九)自己滿足的である、(八十)自己批判の缺如である、(八十一)自己暗示に陷り易い、(八十二)集團的である、(八十三)遊戯的である、(八十四)即興的である、(八十五)模倣的である、(八十六)自己陶醉的である、(八十七)自己暗示的である、(八十八)自己滿足的である、(八十九)自己批判の缺如である、(九十)自己暗示に陷り易い、(九十一)集團的である、(九十二)遊戯的である、(九十三)即興的である、(九十四)模倣的である、(九十五)自己陶醉的である、(九十六)自己暗示的である、(九十七)自己滿足的である、(九十八)自己批判の缺如である、(九十九)自己暗示に陷り易い、(百)集團的である。

であり、その三は兒童のために兒童の手によつて演ぜられる兒童劇であるが、なほ廣義に言へば、狹義の兒童劇は、兒童のために兒童の手によつて演ぜられ、且つ兒童自身の所有し支配する演劇でなければならぬ。兒童のための演劇をすべて廣義の兒童劇と稱し、そこに童話劇と狹義の兒童劇とを包含させても、敢て差支はないが、兩者の間には自ら差別がある。即ち(一)童話劇はお伽話、或は童話文

京にやつて和泉式部を奪はうとしたが、却つて保昌に攻められて城を落され、逃れて赤山の岩窟に鬼同丸といふ者と會して術を比べたが、鬼同丸の化した馬に乘つて走り、馬は源頼光の弟頼信の邸に引かれる。又鬼同丸は大童と化して頼光に鎖で縛められるが、その夜鎖を切つて頼光を狙ひ、渡邊源二綱に追はれて市原野で牛と化し射られて石と化した。その後頼光は上總の國司に任ぜられて下向の途次、足柄山で賊魁となつてゐた保輔を走らし、計らず猪に襲はれたが、一人の狩人が現はれて猪を倒すと、大童が現はれて狩人と格闘した。狩人は卜部季武で、大童は母の山姥に山中で育てられた酒田郡司時景の子怪童丸であつた。頼光は二人を臣として怪童丸を酒田公時と名乘らしめ、上總市原郡府中の城に到つて仁政を布いた。公時は一日城外に遊んで悪修験者のために犠にされようとする美女を救ふと、姫松であつたので、頼光はこれを季武に配はした。又季武は碓氷峠を通り、嘗て六郎二を討ち、母を喰ひ殺した狼三頭を斃して東國に下つた弓矢村の荒太郎の勇力を見、伴うて頼光に推擧し、荒太郎は碓氷貞光と名乘つて仕へ、これより綱・公時・季武と共に、源家の四天王と稱された。然るに天祿三年この方、畿内に群盗蜂起したので、頼光は京に召返されてこれを平定し、市原野を過ぎて病を得たが、病床に現はれた鬼同丸を膝丸の名刀で斬り、なほ四天王がその後をつけて、蜘蛛の精なるを知つた。この頃保輔は殘餘の配下を集めてまた都に現はれ、嵯峨龜山慈心寺の千手觀音の手に、磁石を仕掛けて賽錢を集め、これを奪はうと亂入したが、寺主晝佛尼に叱責されて退いた。晝佛尼は彼の生母節折であつた。その後、中納言顕光の館を襲ひ、遂にかの四天王に捕へられて梟首された。頼光、四天王それ〳〵重職に就いて源家の繁榮を致した。

【影響】文化三年春、大阪角座で、これの一節が歌舞伎に仕組まれて上演された。又一時文壇に覇を爭つて互に趣向を競つた山東京傳が文化三年に出した「善知鳥安方忠義傳」、同六年の「本朝醉菩提」「浮牡丹全傳」（各別項）に、これと相似たる節がある。

〔笹野〕

之道（しどう）　俳人【姓名】槐本氏。通稱伏見屋久右衞門【號】後、諷竹と云ふ。北方・蟻門亭【生歿】未詳【俳系】芭蕉門【閲歴】大阪道修町の藥屋で大阪蕉門では先輩であり中心人物でもあつた。一時酒堂（別項）が移り住んだ時には、二人が中心である形であつた。他門では鬼貫（別項）と親しかつた。元祿三年芭蕉を幻住庵に訪ね、この近江行の收穫を元とした「江鮭子（あめこ）」が彼の處女撰集である。家は貧しかつたが旅行を好み、貞享の末、長崎に旅行し、歸つて一集を思ひ立つたが、十二年後に果して「淡路島」を出したりしてゐる。元祿七年、芭蕉がその亭で發病したので、歿後「力なきお宿申せし時雨かな」と悼んでゐる。

【作風】許六の評に「天性柔弱なり。久しく草藥をなめて藥毒になやまされ侍る。しかれどもその藥毒の力によつて相應にとりはやせり云々」とあるが、例のあくたいは別として、穩かな作風ではあるが、確かに臭みがある。【著作】江鮭子（別項）一册（元祿三年刊）○淡路島二册（元祿十一年刊、蕉門珍書百種）○砂川集二册（元祿十二年刊）○つんぼ猿一册（寶永四年刊）。

【參考】誹諧問答森川許六○芭蕉翁反古文　文曉○蕉門諸生全傳遠藤日人○俳林小傳中村光久

兒童藝術（じどうげいじゅつ）【獨】Die Kunst d. Kindes【解説】藝術學上藝術の發生的研究に資するため、知能の低い段階にある兒童の形成活動を觀察する事は、今世紀に入つてから屢々試みられた。一般に兒童藝術に就いて觀察される諸點は、(一)現實と假象（別項）とが區別されないこと。(二)常に記憶を基礎とすること。客觀物の重要な諸點の記憶心象を描く。即ち寫實的でなく觀念的再現であることが多い。(三)對象の全體より部分の摸寫が著しく、結局それは一種の報告として描かれる。(四)動く對象に興味を持つため、人・動物等が多く描かれる。(五)線描から賦彩に進み最初は裝飾的であるが、次第に寫實的になる。兒童の藝術的表現は、傳統なく、技術上習癖の少い直接的印象の表現である點に於て、特殊な藝術的意義を與へ、原始藝術及びその發展を觀察するに役立つ　とする　者がある。（樣式化・手法參照）

【參考】Wundt : *Die Kunst.* | Wulff : *Die Kunst d. Kindes.* ‖ Eng : *The Psychology of Children's Drawings.* 1931. ‖ Britsch : *Theorie d. bildenden Kunst.* 1926. ‖ Dessoir : *Aes. u. a'lg. Kunstwiss.*

〔村田〕

兒童劇（じどうげき）【性質】兒童に關係する演劇を三種に分別することが出來る。その一は主として成人の慰みのために兒童をして劇を演ぜしめる子供芝居であり、その二は兒童の娯樂のために主として成人の手によつて演ぜられるお伽芝居、或は童話劇（別項）であり、その三は兒童のために兒童の手によつて演ぜられる兒童劇であるが、なほ嚴密に言へば、狹義の兒童劇は、兒童のために兒童の手によつて演ぜられ、且つ兒童自身の所有し支配する演劇でなければならぬ。兒童のための演劇をすべて廣義の兒童劇と稱し、そこに童話劇と狹義の兒童劇とを包含させても、敢て差支はないが、兩者の間には自ら差別がある。即ち(一)童話劇はお伽話、或は童話文學から出發して演劇の領野へ進出して來たものであるが、兒童劇は最初から兒童の演劇本能に出發したもので、文學は寧ろ從であつてその要件ではない。(二)從つて童話劇は、成人の立場から兒童に働きかけ、兒童は受け身になるが、兒童劇は兒童自ら演劇に働きかける立場になる。(三)童話劇は、大衆的・大劇場向の開演でも差支ないが、兒童劇は成るべく內輪の家庭劇場、或は學校劇場向の開演に適する。この意味の兒童劇は、大正十年頃から坪內博士によつて提唱され、同時に家庭用及び學校用の兒童劇脚本も提供され、これに相應じて、全國に學校劇としての新兒童劇が興つて普及された。なほこの兒童劇の效用を擧げれば、(一)平生は成人の主觀的立場から、やゝもすれば抑壓され勝ちな兒童の奔放な本能を、一定の調節の下に一定の目標に向つて思ふ存分に發揮させることが出來、心身ともに伸び伸びとする。(二)商業主義に害はれた兒童娯樂を、兒童自身の手で創り出すことによつて、創造本能の發展や、諸機能の成長があり、就中、分業による兒童の天才の發見がある。(三)演劇には何よりも協力一致の活動を必要とするから、自然と和衷協同の精神が涵養され、將來の社會人としての重要な德育

が施される。(四)兒童の倫理的訓練は、智的の說敎によつて施すことは、頗る困難であるが、兒童劇にすれば極めて自然に倫理的情操を浸潤せしめることが出來る。同時に兒童は眞の人生の初步を解釋し會得する。(五)學校用兒童劇の應用として各課目をこれに結びつけて練習することが出來る。特に手工・圖畫・唱歌・歷史・語學等は勿論のこと、近來は算術などに至るまでも演劇的方法が應用されてゐる。(童話劇參照)　〔飯塚〕

【參考】逍遙選集第九卷 坪內逍遙 ○兒童敎育と演劇 同上 ○家庭用兒童劇 同上 ○學校用小脚本 同上 ○兒童劇の敎育的研究 片岡鐵月 Herts, Alice M. *The Children's Educational Theatre.* ‖ Mackay, Constance; *How to Produce Children's Plays.*

兒童雜誌（じどうざっし）　【解說】明治八年「新聞小學」と題する和紙木版刷の冊子の發刊されたのが兒童雜誌の嚆矢であるらしい。活版の行はるゝに及び、同年「學庭拾芳錄」が出で、つゞいて同十年に「穎才新誌」(別項)、同十二年に「小學雜誌」及び「小學敎文雜誌」、同十五年に同名の「小學雜誌」、同十八年に「小學作文新報」等が相次いで創刊された。殊に新生面として明治の末から大正年代にかけて、畫雜誌類が勃興した。これは學齡前の小兒のためのもので、畫を主としたから、このために童畫家なる專門の畫家が發生したほどである。一時は書店の店頭に立つと、この畫雜誌類が數十種の多きを數へたが、中にも「コドモノクニ」(東京社)などが優れたものとされた。これより先、明治の末頃から新興童話の氣勢が昂るに及び、その影響として兒童雜誌界に新軌道が敷設され、その第一線として鈴木三重吉鞏の「赤い鳥」(別項)が大正七年に創刊された。この誌の特色は、殆ど全誌を擧げて童話・童謠等の創作及び古童話の創作的改作を揭げた事で、在來の兒童雜誌を通俗的とすれば、これは純文學的のものであつた。文壇知名の大家の作品が號を追つて揭載され、童話の文藝的價値を一般に認識せしめた。これが雜誌界の新風潮となり、「おとぎの世界」(大正八年創刊)、「こども雜誌」(同上)、「金の星」(同上)、「童話」(同九年創刊)等、同傾向の雜誌が續々として發刊された。併しこれ等の諸雜誌は、新興童話運動の氣勢によつて生れたもので、その運動が或る程度まで達成した後には、最早存在の意義が半減されるのが當然で、多くは大正末年頃までに廢刊し、「赤い鳥」の如きも、昭和二年に至つて一時休刊した(昭和六年一月再刊)。その一種の反動は、不思議にも文學的とは全く色彩を異にした學習的方面に移り、「小學一年生」より「小學六年生」まで、學級別で學藝を主とした雜誌(小學館發行)等が現はれ、通俗的のものとしては、「少年俱樂部」「少女俱樂部」「幼年俱樂部」(以上講談社發行)等が覇を唱ふるに至つた。(童話參照)　〔北原〕

【參考】明治大正の童話界 山內秋生(日本童話選集第二輯附錄) ○大正昭和の童話界 濱田廣介(日本童話選集第三輯附錄) ○明治初期の少年雜誌 石井研堂(昭和二ノ六「太陽」臨時增刊「明治大正の文化」)

自動詞（じどうし）　「動詞」を見よ。

兒童自由詩（じどうじゆうし）　【名義】兒童自身の作に成る自由律の口語發想の詩をいふ。北原白秋の提唱にかゝる。【解說】大正七年新童謠勃興と共に、また目ざましく開花したのがこの兒童自由詩である。この誘掖指導は主として雜誌「赤い鳥」(別項)に於て行はれ、北原白秋が當初よりこれに當つた。嚴選・採錄・批評等十數年に亙り、年毎に向上した。兒童達は、もとよりその當初に於ては、歌謠としての童謠體を摸倣したに過ぎなかつたが、彼等の本性と感動の生々律とから、次第に、必然的に、自由詩形の發想法を創造するに至つた。眞の童心をそのまゝの言葉にうち出し、句に行に、自由詩形に、眞の實相を帶びるに至つたが、その經過は全く驚くべきものであつた。この「赤い鳥」に於ける新運動に響應して、類似の雜誌が頻々として刊行され、全國小學校に於ても啓發され、實際敎育の上にも實施されて來た。かうして日本の兒童はその素質と觀照に於て、時に成人の世界をさへ凌がうとする優秀さを發揮して來た。のみならず未來の詩の萌芽をさへ既に胚胎して來た。自由詩人、口語歌人、或は新しい俳句の作者達も、これ等に依つて何等かの貴い暗示を受けた。なほ兒童自由詩の運動は、學齡以下の幼兒の口誦による詩の發見に及び、雜誌「コドモノクニ」を主として續々發表された。北原白秋編「兒童自由詩集」(兒童文庫二十六卷)、「鑑賞兒童自由詩集」「日本幼兒詩集」等は、これ等の結集であり、基準たるべきものである。この兒童自由詩運動に參加した詩人には、西條八十・若山牧水・濱田廣介・百田宗治・福田正夫等がある。　〔北原〕

持統天皇（じとうてんわう）　歌人 【御名】鸕野讚良皇女（うのさらのひめみこ）【御諱】高天原廣野姫天皇（たかまのはらひろのひめのすめらみこと）【生歿】大化元年御生誕、大寶二年(一三六二)十月二十二日崩御。【壽算】五十八 【御陵】大和國高市郡高市村大字野口、檜隈大內陵 【閱歷】天智天皇の第二皇女、御母は遠智娘(一名蘇我連子娘)

しどうほ　しなどの

第四代天武帝の大海人皇子時代に嫁ぎ給ひ、草壁皇子（日並皇子）を産み給ふ。大海人皇子に嫁ぎ給うてからは、皇子と天智帝との微妙な關係（天武天皇・額田王參照）の間に立つて居られたが、大海人皇子が近江朝廷を退いて吉野に入られる折、共に吉野に行かれ、壬申の亂迫るや、皇子に從つて宇太から伊勢に出で、（御歳二十八）、「持統紀」によれば、與に謀を定め、軍の終るまで終始皇子を輔けて天下を定められた。かくて皇子御卽位の後も、その政を輔佐せられた。朱鳥元年九月、天武帝崩御せらるゝや、御自ら政をみそなはした。時に御歳四十二（翌年を持統元年とす）。その翌月大津皇子謀叛の擧があつたが、事前に發覺して事なきを得た。然るに持統三年四月、皇太子草壁皇子が薨ぜられた（御歳二十八）ので、群臣の請によつて、翌四年正月、正式に卽位あらせられた。同十一年、御位を輕皇子（文武天皇）に讓られ、太上天皇と稱せられた。これが太上天皇の尊號の起原である。時に御歳五十三。この後五年にして崩ぜられた。御在位中及び太上天皇としての御生活中、屢々吉野・紀伊・伊勢等の山水明媚の地に行幸あり、ために百姓の困苦を憂ひて諫言申上げる臣下さへ現れたが、一方この行幸は、延臣等の詩心をそそり詩情を養つて、文學のためには大いなる幸であつた。「萬葉集」にはその從駕の折の作が、人麿・赤人等をはじめ數多く傳へられてゐる。また天皇は「持統紀」に、「天皇深沈有ニ大度一……好ニ禮節一儉、有ニ母儀德一」とあるによれば、女性には稀な偉大な御性格の持主でいらせられたらしい。

【作品】すべて、「萬葉集」に出づ。他の後世の歌集その他に入るものは、萬葉の作品に出でたものか、然らずば昔の御製でないものを誤傳したものである。「萬葉集」所載の作品は、卷一雜歌部に著名な「春過ぎて夏來るらし」の一首（天皇御製と記す）、卷二挽歌部に、天武天皇崩御の時の長歌一首（太后御作と記す）。同時の短歌二首（これは卷二の原本でない他の一書から取つたもので、太上天皇御製と記す）。持統八年九月九日、天武帝の御齋會の夜の長歌一首（これには作者名無し）。卷三雜歌部第二首目の「否と云へど」の短歌（これは、天皇……御歌と記す）。總計長歌二首短歌四首である。而してこの六首は、時代順に分ける事が出來る。卷二の初めの三首は天武帝崩御（朱鳥元年）の時の歌、御齋會の夜の御製はその九年後の歌、卷一・卷三の二首は、作年月は不明であるが、天皇時代（一三四六年九月―一三五七年八月）の作である事だけは明かである。この二首だけが雜歌に類するもので、他の作（卷二所載の作）は、皆戀愛の意をこめた挽歌である。

【歌風】天皇の御製の代表作と言はれてゐるものは、卷一の「春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香具山」の短歌で、これが「新古今集」に、第二句を「來にけらし」、第四句を「ほすてふ」と變化して取り入れられ、更に小倉百人一首に入つた。しかし御製の秀作としては、この一首などよりも、卷二挽歌部の天武帝崩御の時の長歌を擧げるべきである。この作は抽象的假空的に悲しみを述べたものでなく、大和神奈備の神岳（雷岳）を中心とし、天皇が朝夕御覽になつて慰まれ、今居らるれば、定めて今日も明日も樂しまれるであらうところの雷岳の紅葉を、今は自分一人で眺めやりつゝ朝夕涙にくれてゐると云ふ意の長歌で、その哀切の情と云ひ、適切な對句の排列と云ひ、調に歌人持統帝の代表作に擧すべき秀作である。天武帝への眞情も、その優れた歌作の手腕も、この一首に十分に看取出來る。その他卷三の志斐嫗に賜うた戲歌は、題材の特異な點で注意せられる。【森本】

止動方角（しどうほうがく）能狂言【格式】內神文濟相傳の部（大藏流）【解說】氣むづかしい某が、東山に茶競べがあるといふので、冠者を伯父の許へやつて茶壺と太刀と馬とを借りさせる。冠者はうまく借り受けるが、馬取が無いので自ら馬に乘つて歸ることにする。伯父はその馬には惡い癖があつて咳をすると暴れるから、その時は寂蓮童子六萬菩薩鎭まり給へ止動方角と唱へよと敎へる。冠者が馬に乘つて歸つて來ると、時刻が遲れたと怒りながら某がやつて來て、冠者を突退け馬に乘つて出掛け、色々と冠者を酷使する。冠者は立腹して故意に咳拂ひする。馬は暴れ出して主は落ちる。そこで冠者は代つて馬に乘り、幸ひ邊りに人もゐないから、せめて御主人を伴の者の如く一度呼んでみたいと言つて納得させ色々主に返報する。主も遂に腹を立て、冠者を再び下して自ら乘るので、冠者はまた咳をして主を落馬させ、自ら乘らうとして慌てて馬の逃げたのを知らず、主の上に乘つて呪文を唱へ、叱られて逃げ入るといふ筋。暴れ馬を鎭めるに呪文を以てする趣向は、「二中歷」の呪術歷にも「馬腹病時誦」とか「鼻噓時誦」とかが載つてゐる所から見ると、實際に行はれたものであるかも知れないが、狂言の呪文は滑稽な創作であるらしい。止動は馬追の懸聲で「卯花園漫錄」一にも、「牛馬を追ひ又留るにシドウと云ふ。シといへば走り、ドウといへばとゞまる也。（中略）止とはとゞまる也。動はうごく意なるに、古よりかく誤り來れると見えたり」と記されてゐる。（鷲田）

級長戶風（しなどのかぜ）國學書　三卷【著者】沼田順義（三芳野城長）【名稱】級長津彥の神、級長戶邊の神に祈請して神風を起し、妖雲を吹き拂つて道の本旨を現はさうとする意である。【成立・刊行】宣長の古道觀に對する駁論で、文政十一・二・三年の序及び著者の端書及び筆受者・書者の凡例がある。文政十三年刊行。【內容】「直毘靈」「萬我比禮」「葛花」（各別項）等の本文を條項を分つて引用し、著者の批評を加へたもので、「直毘靈」「葛花」について論難すると共に、「直毘靈」の駁論書たる「萬我比禮」についても、著者が「神の道」を知らないために「葛花」に於て論破されたとなし、その見解の誤謬を指摘してゐる。けれどもその宣長說を反駁せんとする一貫した態度については諸所に賞揚してゐる。立論の基礎は、端書に記されてゐるやうに、宣長が「古事記」を重んじ、「日本書紀」「舊事本紀」等を輕く見て古道を說くのに對し、「古事記」は後世の僞撰であるとし、「舊事本紀」が最も古い撰述で、「日本書紀」これにつぎ、ついで「古事記」「古語拾遺」等が成つたとなし、「日本書紀」及び「舊事本紀」を中心とし、「古事記」「古語拾遺」を參考して、宣長の一語一句について駁論を試みてゐる。そして結局は、宣長等が皇・漢に區別を立て、「聖人の道」を異端扱ひしてゐることを反覆非難し、「聖人の道」卽ち「神の道」であることを結論しようとしてゐる。【價値】著者は國學に關する古書にも親しんでゐるけれども、思想の根柢が儒者的立場に立つ神儒習合思想の系統であつて、宣長等が佛意・漢意に染まらない純乎たる我が古道を自覺しようと

自動詞（じどうし）「動詞」を見よ。

兒童自由詩（じどうじいうし）【名義】兒童自身の作に成る自由律の口語發想の詩をいふ。北原白秋の提唱にかゝる。【解說】大正七年新童謠物興と共に、また目ざましく開花したのがこの兒童自由詩である。この詩體提唱は主

持統天皇（じとうてんわう）歌人【御名】鸕野讚良皇女（うのさらのひめみこ）【御諱】高天原廣野姬天皇（たかまのはらひろのひめのすめらみこと）【生歿】大化元年御生誕、大寶二年（一三六二）十月二十二日崩御。寶算五十八【御陵】大和國高市郡高市村大字野口、檜隈大內陵【閱歷】天智天皇の第二皇女、御母は遠智娘（一名美濃子）。

する熱情に對して同感が無く、從つて古道説の根本を理解してゐない。又その論旨は本居宣長對市川匡麿の論爭批判を旨とするものではなく、道の難を救はんとするにあるといつてゐるけれども、實際には二人者が所論の斷片的反駁に過ぎず、部分的には肯綮に當る論がないではないが、全體としては止揚もなければ發展もない。しかも當時既に僞撰たることが論定されてゐた「舊事本紀」を立論の根據とし、「古事記」僞撰説を試みるなど、批判の足りない所説たるを免れ得ない。

【參考】葛根 新庄道雄○麻須美能鏡 小林文康○伽倍志廼風 原田重枝○花能志賀良美 菅原定理○辨鏡眞僞 級長戸道風 沼田順義○讀直毘靈附錄讀級戸之風 會津安 〔西尾〕

支那文學の影響 しなぶんがくのえいきやう 【解説】

國文學を和文脈・漢文脈に二大別し得る程、支那文學の國文學に及ぼした影響は廣大且つ深甚である。記錄文學の出現以前に於ける歸化人等によつて傳播された大陸の傳説・民譚等を檢討したならば、我が國民思想の淵源に於ても相當の影響を認めねばなるまい。以下記錄に現れた所を基として概説するに止むる。

【大和・平安時代】〔三韓媒介時代〕(應神—推古 三國—隋末)應神帝の御宇、阿直岐・王仁等の「論語」「千字文」の貢進に、漢籍の舶載は始まつたが、爾來欽明天皇に至る約二百七十餘年間、文筆の業は率ね三韓・支那の歸化族の手に委ねられ、支那文化の輸入はその媒介に負ふ所多く、繼體天皇の御宇、百濟から五經博士段揚爾の來るあり、その後も交番に學者の來朝があつて我が國の學事に貢獻する所が多かつた。されば「宋書」等に載せられた我が國書と稱するものも純粹の日本人の手になつたかどうか疑問である。紀・記・萬葉出づるに及んで我が國文學の發生を見たが、その古歌謠中にも、舒明天皇以前はともかく、天武天皇頃のものより次第に漢文學の影響が認められる。古傳説に就いても記・紀神代の卷に見ゆる化生傳説と、支那の盤古傳説の類似、桃の實に關する信仰も支那の桃苅・桃人・桃符との近似が認められる。

〔遣唐使時代〕(推古—宇多 唐初—唐末)推古帝十五年、小野妹子を大使とし、高向玄理等の留學生を宋に遣はしてより、宇多帝の遣唐使廢止に至るまで約三百年間は、支那文化の直輸入による支那摸倣の黄金時代で、文學に於ても「懷風藻」「凌雲集」「文華秀麗集」「經國集」(各別項)等が編纂された。文は六朝から唐にかけて盛行した駢儷體の影響を受け、「文選」(別項)がその手本とされ、その摸倣・影響は奈良・平安の兩時代を通じての盛んな現象であつた。漢詩は、近江・奈良の二朝は、文選體の古詩が行はれて「懷風藻」が生れ、平安時代の初期になると唐代の近體詩が行はれて「凌雲」「文華秀麗」「經國」の三集にその成績を窺ふ事が出來る。空海は「文鏡祕府論」(別項)によつて詩文の修辭法を精論し、その「八病」の説の如きは、支那にもこれ程には遺されてゐない位の研究が發表されてゐる。當時嵯峨天皇(別項)を初め、多くの文人詩人輩出して漢文學界に清新の氣漲り、特に嵯峨帝の御製の中には盛唐の音があり、或は中唐の風が拜誦せられ、就中、當時支那に於て漸く起らんとした「詞」(塡詞參照)の體に倣はせられた御製「漁歌」五首さへ見出される。小説の輸入されたものに、張文成の「遊仙窟」がある。この小説は早く天平時代に輸入せられ、その後、世々盛行して我が文學に與へた影響は少くない。その他宇多天皇の時に編せられた「日本國見在書目」の中に、小説と目すべき「穆天子」「漢武内傳」「漢武洞冥記」「搜神記」「續齊諧記」「十洲記」「靈異記」「神異記」「燕丹子」「志林小説」「小説」等がある。これ等の支那小説と我が物語(別項)類との關係は、重要な研究題目であらう。「浦島子傳」(別項)や「柘枝傳」等の傳奇小説らしいものが支那説話の影響多きを見れば、かゝる種類の漢文小説の發達は、支那小説の誘導に因つて起り、それが先驅となつて、後、遂に和文小説の發生を促したものと思はれないでもない。この時代の和文系國文學の淵叢は、「萬葉集」「祝詞」「壽詞」「風土記」(各別項)であるが、これ等の和歌・和文が漢字(別項)の輸入により不如意ながらも記載の具を與へられたために、その發達が促進された事は論を俟たない。現存最古の和文と認められる 推古天皇十五年の「法隆寺藥師佛造像記」(群書類從所收「法王帝説」)、或は同二十九年の「天壽國曼陀羅繡帳」の銘(法王帝説)の如き、如何に字訓・字音を借りて國語を書記せんとするに努力したか、この努力の集大成が和銅五年の「古事記」(別項)の完成を見るに至つた。又この記載法の發生が從來諷誦に止まつた和歌・歌謠の發達に大貢獻をなし、諸家の歌集(古歌集參照)が出來、それ等が遂に「萬葉集」を生み出した。「萬葉集」が直接、内容・精神に於ての支那文學の影響は甚だしくないとしても、その形式に於て五七調の確立と五言詩・七言詩との關係、歌調の整頓や雄篇の出現が外來文學に促進され、又は刺戟されたことは全然否み去るを得ないであらう。特に題材の點に多くの例證を擧げることが出來る。作歌態度に就いても應詔の歌は應制の詩に相當し、遊宴の歌は公讌の詩に、贈答の歌は唱酬の詩に、和歌は和韻の詩に當る。題詠や送別の歌も支那の風習を學んだものではあるまいか。(大和時代文學參照)

〔和文勃興時代〕(醍醐—安徳 五代—南宋孝宗)假名文字の發達は和文系文學の勃興となつて物語に和歌に日本文學の大發展となり、光彩陸離たる平安時代文學(別項)の出現となつた。一方宇多天皇の遣唐使廢止後、民間の交通、僧侶の留學は絶えなかつたとしても、漢文學系文學の衰微を來した事は爭へぬ事實である。この時代に於ける漢文は、前代の餘風を承けて「文選」の摸倣があり、その事實は「本朝文粹」や「和漢朗詠集」(各別項)に認められる。詩は白樂天の影響が最も大きかつた。「白氏文集」(別項)が樂天のまだ生存中に我が國に傳來し、白樣なる詞が用ひられ、淸少納言は「文は文集・文選・博士の申文」と指摘してゐる。從つて蘇東坡の所謂「元輕白俗」の弊風を承けて平凡無氣力となり、「本朝麗藻」(別項)より以下は、意到りて句到らず、「本朝無題詩」(別項)より以後は、官家に文字なしと林泰齋をして嘆ぜしめてゐる(本朝百人一首)。「白氏文集」のかくの如き流行は和文・和歌に影響を與へ、和歌の中に白詩の飜案があり、散文に於ても「源氏物語」の桐壺の卷が白詩の「長恨歌」に負ふ所あるは既に先人の指摘する所である。「竹取物語」はその構成法に於て遙かに支那小説を凌いでゐるが、その題材に於ては、佛教的・支那神仙性が認められ、「伊勢物語」は、唐の孟啓の「本事詩」に倣つたものだらうとの説があり(揔堂文話)、「大和物語」(別項)は殊にその感が深い。又、李義山の「雜纂」と「枕草子」との或る部分の關係の如き、「枕草子」が出藍の作としても、その創作に當つて數へられる所は多かつたであらう。併しこの時代は「源氏物語」を初め、物語の發達は、遙かに同時代の支那小説を凌駕して、日本文運の進歩實に驚くべきものがあつた。(平安時代文學參照)

【鎌倉・室町時代】(後鳥羽—後陽成 南宋孝宗—明神宗)後鳥羽帝の時、僧榮西が禪宗(別項)を我に齎し歸つて以來、僧侶の來往次第に頻繁を加へ、禪學の外に支那の學藝を兼修し、詩文に於ても甚だ觀るべきものが多かつた。殊に佛書の外に「宴と同時の「庭訓往來」(別項)は、支那の故事三十七條を和文で記したものである。室町時代の小説「李娃傳」(別項)は、「李娃傳」の忠實な飜案で、支那小説の完全なる飜案として最古のものであらう。更に注意すべきは、この時代に發達した戰記物語(別項)に、盛んに支那の説話を挿入してゐる事で、筆者も讀者も支那の説話を好んだ事が窺はれる。次に鎌倉時代の「宴盛を一時に競うた。就中、很齋の「古文辭」(別項)の提唱は、飄忽として一世を風靡するの概があつた。門下の南郭の「唐詩選」(別項)の校刊は從來の「三體詩」の地位を奪ふに至り、後者が中晩唐を主とするに對して盛唐の風を尊んだ。この盛行は末流に及んで弊を生じ、北山(別項)等の徂徠派攻撃となり、北海(別項)も亦これに不滿の意を表し、將に風氣一轉の兆ろが夥しい。なほ彼の考案に成る「大和之詩」は眞名詩・假名詩の二種あり、前者は狂詩の一種で從前から行はれてゐたが、後者は漢詩の形式を以て國語の詩を作らんとする試みである。國語の五言二句若しくは七言二句を以て漢詩の五言一句、七言一句に相當せしめ、國語の八句を以て漢詩四句の絶句に比し、十六句を以て八句の律詩に比して居り、それ以上

物語の發達は、遙かに同時代の支那小說を凌駕して、日本文運の進歩實に驚くべきものがあつた。（☞安土時代文藝參照）

【鎌倉・室町時代】（後鳥羽天皇―後陽成天皇）後鳥羽帝の時、僧榮西が禪宗（別項）を我に齎し歸つて以來、僧侶の來往次第に頻繁を加へ、禪學の外に支那の醫藝を兼修し、詩文に於ても甚だ觀るべきものが多かつた。殊に佛書の外に儒道百家より小說の類にまで精通した僧雪村山の來朝は支那文學研究の熱を高め、これがため、王朝時代朝臣の手に在つた學柄は僧侶の手に移つて所謂「五山文學」（別項）の興隆となつた。

この期間、漢唐の訓詁の學は斥けられて、宋・明性理の學が行はれ、文に於ては樟・柳の復古文、詩に於ては蘇東坡・黃山谷を取り、傍ら中唐・晚唐に出入した。初學必讀書とされたものに「古文眞寶」と「三體詩」（各別項）がある。

この結果、文に於ては古文を主とし、駢文を併せ取つて王朝時代の弊風を去り、詩に於ては中唐・晚唐の律詩・絕句を歸趣とした。一縷本朝通鑑」の僧周崚の傳に「笠雲に就て漢書を習ひ、江心に就て柳文を開き、而して杜詩・蘇・黃集を周鳳に受く」とあるは、以て當時の風潮を見るに足るであらう。

【江戶時代】（後陽成天皇―靈元天皇）慶長から寬永頃まではなほ五山文學の餘波であるが、この頃から學柄は土林の手に歸した。その文運の風氣を開いた者は藤原惺窩（別項）である。その門下より羅山・活所・春庵・尺五（各別項）等の碩學が輩出し、儒學は盛んであつたが詩文は平凡で、ただ明人の詩に注目し始めた事を記すれば足る。元祿から享保にかけては詩文は著しく進歩し、徂徠・白石・蘭海・東涯（各別項）等が起り、朝鮮の使節と筆談唱和して國交の方に於ては支那の故事熟語を文中に用ひる風が著しくなり、或はその意譯を試み、稍々小說の饒舌さへ見た。この類の先鞭は平安末期の「今昔物語」（別項）につけられてゐるが、この期に入つて說話文學（別項）のみ盛行は支那文學との交涉密接なものがある。「蒙求和歌」（別項）は蒙求の中から二百五十の故事を選んで和歌に詠じ且つ事蹟を記したもので、殆ど同時の「庭訓往來」（別項）は、文那の故事三十七條を和文で記したものである。室町時代の小說「本朝物語」（別項）は、「李娃傳」の忠實な飜案で、支那小說の完全なる飜案として最古のものであらう。更に注意すべきは、この時代に發達した戰記物語（別項）に、盛んに支那の說話を挿入してゐる事で、筆者も讀者も支那の說話を好んだ事が窺はれる。次に鎌倉時代の「宴曲」（別項）や室町時代の「謠曲」（別項）に於ける支那文學の影響は、單に詞章の上のみならず、題材までも彼に求めてゐる。「宴曲」の文體は漢文訓讀の語法及び對句が甚だ多い。これは朗詠からの現象ではあるが、一篇の結構が古語成句を羅列して、徒に文辭の修飾を事としてゐる點は、漢魏六朝の「賦」の或る者と甚だ似てゐる。萬葉歌人が「賦」と題してゐるのに比すれば、これは「賦」と題せずして遙かに賦に近く、殊に詠物體の曲に甚しい。「能樂」（別項）と「元曲」との關係は、結局否定說が今日有力であるが、「延年舞」（別項）と相距る餘り遠からぬ原始の形より觀世以降の整齊した形態を備ふるまでに、元末明初の傳奇に負ふ所なきか更に研究を要すべく、從來の研究が主として雜劇との比較論なるは當を失するものである。（鎌倉室町時代文藝・五山文藝參照）

【江戶時代】（後陽成天皇―靈元天皇）慶長から貞享頃までは五山文學の餘波であるが、この頃から學柄は土林の手に歸した。その文運の風氣を開いた者は藤原惺窩（別項）である。その門下より羅山・活所・春庵・尺五（各別項）等の碩學が輩出し、儒學は盛んであつたが詩文は平凡で、ただ明人の詩に注目し始めた事を記すれば足る。元祿から享保にかけては詩文は著しく進歩し、徂徠・白石・蘭海・東涯（各別項）等が起り、朝鮮の使節と筆談唱和して國交の方に於ては支那の故事熟語を文中に用ひる風が著しくなり、或はその意譯を試み、稍々小說の饒舌さへ見た。この類の先鞭は平安末期の「今昔物語」（別項）につけられてゐるが、この期に入つて說話文學（別項）のみ盛行は支那文學との交涉密接なものがある。「蒙求和歌」（別項）は蒙求の中から二百五十の故事を選んで和歌に詠じ且つ事蹟を記したもので、殆ど同時の「庭訓往來」（別項）は、文那の故事三十七條を和文で記したものである。室町時代の小說「本朝物語」（別項）は、「李娃傳」の忠實な飜案で、支那小說の完全なる飜案として最古のものであらう。更に注意すべきは、この時代に發達した戰記物語（別項）に、盛んに支那の說話を挿入してゐる事で、筆者も讀者も支那の說話を好んだ事が窺はれる。次に鎌倉時代の「宴曲」（別項）や室町時代の「謠曲」（別項）に於ける支那文學の影響は、單に詞章の上のみならず、題材までも彼に求めてゐる。「宴曲」の文體は漢文訓讀の語法及び對句が甚だ多い。これは朗詠からの現象ではあるが、一篇の結構が古語成句を羅列して、徒に文辭の修飾を事としてゐる點は、漢魏六朝の「賦」の或る者と甚だ似てゐる。萬葉歌人が「賦」と題してゐるのに比すれば、これは「賦」と題せずして遙かに賦に近く、殊に詠物體の曲に甚しい。「能樂」（別項）と「元曲」との關係は、結局否定說が今日有力であるが、「延年舞」（別項）と相距る餘り遠からぬ原始の形より觀世以降の整齊した形態を備ふるまでに、元末明初の傳奇に負ふ所なきか更に研究を要すべく、從來の研究が主として雜劇との比較論なるは當を失するものである。（鎌倉室町時代文藝・五山文藝參照）

【江戶時代】（後陽成天皇―靈元天皇）慶長から貞享頃

朝は支那文學研究の熱を高め、これがため、王朝時代朝臣の手に在つた學柄は僧侶の手に移つて所謂「五山文學」（別項）の興隆となつた。

この期間、漢唐の訓詁の學は斥けられて、宋・明性理の學が行はれ、文に於ては樟・柳の復古文、詩に於ては蘇東坡・黃山谷を取り、傍ら中唐・晚唐に出入した。初學必讀書とされたものに「古文眞寶」と「三體詩」（各別項）がある。

この結果、文に於ては古文を主とし、駢文を併せ取つて王朝時代の弊風を去り、詩に於ては中唐・晚唐の律詩・絕句を歸趣とした。一縷本朝通鑑」の僧周崚の傳に「笠雲に就て漢書を習ひ、江心に就て柳文を開き、而して杜詩・蘇・黃集を周鳳に受く」とあるは、以て當時の風潮を見るに足るであらう。

【江戶時代】（後陽成天皇―靈元天皇）慶長から貞享頃

が發達したものらしい。平安時代の聯句に往々狂詩と見做し得べきものがあり、これ等が發達の端緒ではあるまいか。この聯句は室町時代の連歌（別項）と相對峙し、更に提携して漢和聯句が出來るに至つた。これが次第に狂詩的に傾いて來て、僧文之（慶長元和間の人）等の間に、俄然狂詩（別項）の創作が試みらるゝに至つた。又一方漢詩の飜譯は、歌謠方面に新天地を開拓し、江戶期の琴曲（箏曲參照）に至つては安村檢校作曲の「飛燕曲」は一名「清平調」三首を組歌六段に譯出配當したもので、石塚檢校の「三の調」は、一名「春宮曲」といひ、唐の王昌齡の七絕「春宮曲」「西宮春怨」「西宮秋怨」三首を六段に譯出

感を一時に鎭うた。就中、徂徠の「古文辭」（別項）の提唱は、斷然として一世を風靡するの概があつた。門下の南郭の「唐詩選」（別項）の校刊は從來の「三體詩」の地位を奪ふに至り、後者が中晚唐を主とするに對して盛唐の風を尊んだ。この盛行は末流に及んで弊を生じ、北山（別項）等の徂徠派攻擊となり、北海（別項）も亦これに不滿の意を表し、將に風氣一轉の兆があつた。化政度に至つて果然宋詩の研究となつた。宋詩を奉ずる者に釋六如・賞齋・詩佛・五山・菘山（各別項）等がある。これに次いで陽・星巖（各別項）等の淸詩の紹介となり、明治に入つて槐南（別項）等の淸詩鼓吹となつた。文章に於ては李王の古文辭が跡を絕ち、唐宋八大家の流行となつた。文化十一年官版「唐宋八大家讀本」が飜刻せられ、遂に（別項）は支那學入門書として「文選」の外に、「文章軌範」「唐宋八大家文」（各別項）を必須の書として擧げてゐる。この風は明治にまで及び、最近の傾向たる「古文辭類纂」の流行までは、この兩書の普及は著しかつた。又江戶中期以降は、詞即ち詩餘が學者の注意を引くやうになり、竹田（別項）に至つて「填詞圖譜」二卷の著述が公にせらられた。（漢籍・江戶時代の漢詩參照）

右の外、影響の著しいものに俳文と狂詩（各別項）とがある。許六の「風俗文選」（別項）は俳文集の嚆矢であるが、その文體は和漢混淆文に屬するもの多く、書名は勿論、題名も多くは支那に倣ひ、編次の法は「古文眞寶」に則つてゐる。ただ特別な發生を見たのは、「諧」の一體である。支考の「本朝文鑑」「和漢文操」（各別項）に至つては、支那趣味更に多く、俳文の法を論ずるに方つては、支那の文章論に倣るとこ

の頃から次第に狂文（別項）に移つて行つたが、この狂文は、題名は愚か內容までも漢讀漢文をもぢつたものが續出した。狂詩（別項）は支那にもこれに類する所謂「打油詩」「釘鉸詩」が已に唐代からあつたが、我が國の狂詩は獨自の發達をしたものらしい。平安時代の聯句に

の期の露伴の「短詩」もこの統系か。俳文は延享和詩選」「白山和詩」等の專集も出た。明治來これが後繼者としては「鶯衣」に若干あり、一大みて唐の李白の長短句に擬すと稱してゐる。

の句を以て八句の律詩に比して居り、それ以上更に押韻法をも漢詩に則り、又三五七調を試

漢詩の五言一句、七言一句に相當せしめ、國語の八句を以て漢詩四句の絕句に比し、十六

形式を以て國語の詩を作らんとする試みである。國語の五言二句若しくは七言二句を以て

稱で從前から行はれてゐたが、後者は漢詩の

は普名詩・假名詩の二種あり、前者は狂詩の

してゐる。その他「長恨歌」は勿論、「詩經」の國風までも譯出されてゐるは驚くに足る。

支那戯曲小説類の流行は江戸期に於てその頂點に達した。從つて國文學に及ぼした影響は甚だ大なるものがある。第一期（元祿以前）は主として古文體を以て書かれた小説が行はれた。第二期（寛永―寛政）は支那語の研究が盛んに起り、主として俗語體の小説戯曲が行はれ、就中寶暦から寛政までを極盛期とする。第三期（享和・文化以後）は前代の餘勢を保ちつつ次第に衰へて行つた。

〔第一期〕　明の瞿佑の怪談短篇集「剪燈新話」は既に室町期に輸入されてゐたが、慶長年間活字版を以て飜刻せられ、尋いで李昌祺の「剪燈餘話」五卷も亦、元和年間に印行された。これが淺井了意の「御伽婢子」（別項）を生み、續々その摸倣作が出て我が國の怪談小説に一系統を形造つた。又宋の桂萬榮の「棠陰比事」は、西鶴の「櫻蔭比事」（別項）以下の「何々比事」と稱する一群の裁判小説を世に送つた。また林道春の「怪談全書」五卷（元祿十一年刊）は、古文體の支那小説の短篇を譯出してゐる。元祿年間には、多少俗語の雜つた小説が飜譯され始め、「通俗三國志」（別項）は、羅貫中の「三國志通俗演義」（通行の清初毛宗崗の改訂本と異る）を譯したものである。この書一たび世に出づるや忽ち支那歷史を說いた種々の軍談が風を望んで競ひ起り、享保頃までに支那歷朝の通俗本殆ど備はらざるなく、これを集めて「通俗二十一史」と稱するに至つた。この種の演義小説の飜譯が、第一期の末より第二期の初にかけて多く出たことは、我が國人の俗語小説へ向つて行く機運が開けたことを示すもので、俗語小説の流行は演義小説から始まつたと論斷し得るであらう。

〔第二期〕　俗語小説流行の端緒を開いたのは岡島冠山（延寶三年―享保十三年）である。通事出身で、專ら宋學を研究し、京都に遊んで「通俗元明軍談」を出版し、後、江戸に出た。徂徠等は、彼を師として支那語研究會を起し、その門下に多くの支那語を解する學者が輩出した。晩年の冠山は京都に移り東涯と近づいたらしく、東涯門からも支那語を解する人々を出した。冠山以前にも、支那語を解した僧侶・學者もあつたが、それを普遍的ならしめた功は一に冠山にあつた。彼は「忠義水滸傳」（別項）に訓點を付け、その譯本は「通俗忠義水滸傳」と題して、その死後寶暦七年に刊行された。この「水滸傳」は世の歡迎をうけて、綾足の「本朝水滸傳」（別項）以下、多數の摸擬作が現はれた。支那語研究の流行は、徂徠の漢文直讀論となり、白石等の元曲と諸曲の比較論となり、近松の淨瑠璃にまでも支那俗諺の音讀が挿入せらるゝに至つた。この結果は寶暦以降戯曲・小説・笑話等の各方面に偉大な展開を見せた。

播磨の儒者岡白駒は、支那小説の原文に訓點・傍訓を施して、「小說精言」「小說奇言」を刊行し、これに倣ふ著書の刊行が相次いだ。大阪の都賀庭鐘は、近路行者（別項）の名を以て「英草紙」「繁野話」「秀句册」（各別項）を著はして材を支那に採つてゐる。又、上田秋成の「雨月物語」、森羅子の「月下清談」、石川雅望の「飛驒匠物語」（各別項）等、皆粉本を支那小説に求めてゐる。

飜譯書は柳澤淇園の「麟兒報」を初めとして「通俗醉菩提」（寶暦九年刊）、「通俗隋煬帝外史」（寶暦十年）、「通俗金翹傳」（同十三年刊）、「通俗孝肅傳」（明和七年刊）、「唐土眞話」（安永四年刊）、「通俗女仙外史」（寛政元年刊）、「通俗醒世恒言」、（同二年序）「通俗小説奇事」（同上）、「通俗平妖傳」（寛政十一年刊）、「通俗西湖佳話」（享和三年序）等の刊行があり、「小説字彙」などの辭書類まで著はさるゝに至つた。戯曲方面に於ては、「新刻役者綱目」（明和八年刊）には李笠翁の作に訓點を施した譯文を載せ、「四鳴蟬」（明和八年刊）には、諸曲・一中節・義太夫節等の作品を傳奇の形式で支那譯してゐる。「役者全書」（安永三年刊）や「唐土奇談」（寛政二年刊）には、支那劇の說明等があつて當時の風尙を知るに足り、「蝴蝶夢」（寛政か）は支那劇の飜譯である。俗語で書いた笑話「笑府」「笑林廣記」の類の拔萃譯や、訓點本の和刻も行はれ、これを摸倣した「前戯錄」（寛政六年序）「鬼說新話」「奇談一笑」等がある。笑話集は從來「醒睡笑」（別項）等が行はれてゐたが、この時代のものには、漢文口調を用ひたり、漢文で書いたものも現はれてゐる。甚だしきは「茶式」（明和七年刊）の如く、茶の湯の禮式を俗語體の漢文で綴つたものもあり、讀本等の序文にも俗語體の漢文が多くなつた。洒落本（別項）にも甚だしき影響があり、「和唐珍解」（別項）の如く支那人と通事とを點出して盛んに支那語を使はせたり、或はその書名に明かに支那趣味を發揮してゐるものが續出した。

〔第三期〕　文化以後支那小説通を以て自ら任じた者に馬琴がある。彼の讀本は、構想・題材を多く支那小説に求めてゐる事は周知の事實で、又換骨奪胎した作も少くない。京傳も亦、支那種を驅使し居り、その他諸作家の作に影響著しきものあり、甚だしきは支那語をそのまゝ用ひて、振假名によつてやつと國訓を知らせるやうなものまで現はれた。飜譯物では「通俗西遊記」（寛政八・天明四・六・寛政十二・天保三年刊）、「通俗古今奇觀」（文化十一年刊）等が飜譯され、大に行はれたが、天保頃を最後として支那俗文學の流行は次第に下火となつた。

【明治以降】　藤井理伯の「支那小説辭彙」（明治十一年刊）、桑野顧柳の「小説字林」（明治十四年刊）が出版され、森槐南の「後水滸傳」、田中從吾軒等の「結水滸傳」、岡島獻太郎の「西廂記」等あり、大正年間には、平岡龍城は小説「紅樓夢」を、鹽谷・金井・宮原氏等は戯曲「還魂記」「西廂記」「琵琶記」「桃花扇」「長生殿」「燕子箋」等を譯出し、更に元の雜劇までも譯されるに至つた。誠に前代未曾有の盛事であり、昭和に入つては、魯迅等の現代小説の譯本まで出版せられるに至つた。

【參考】　日本詩史　江村北海　○本朝學原浪華鈔　松下見林　○漢學紀源　伊知地季安　○近江奈良朝の漢文學　岡田正之　○日本漢文學史　同上　○日本漢文學史　芳賀矢一　○日本宋學史　西村天囚　○近代支那の學藝　今關天彭　○江戸文學研究　藤井乙男　○國字小説通　木村默斎　○支那文學の馬琴の作品に及ぼせる影響　麻生磯次（日本文化叢考）　○支那近世戯曲史　青木正兒　○支那文藝論叢　同上　○支那文學同上（岩波講座日本文學）

（青木）

自然居士（じねんこじ）

死の蔭に（しのかげに）

小説的紀行文　【著者】　德富蘆花　【刊行】　大正六年三月、大江書房。

【解說】　內容は、大正二年九月二日、粕谷の里を出でたる著者は、上諏訪・名古屋を經て、伊勢・鳥羽より奈良・大阪に到り、木浦丸にて別府に渡り、大分・佐伯・延岡・宮崎・都城等を經て鹿兒島に出で、肥後にては故郷水俣・熊本・菊池を訪ねて長崎に行き、九州を一巡して門司に到り、嘉義丸に乘つて瀨戸內海を遡り、海岸・奉天を見、朝鮮を

説話して馬關に上陸、東日本の要所を見、京都に來りて宇治に行き、旅行日數九十日、水陸道程約四千五百五十八哩を踏破して粕谷に歸る。上の卷「門出から九州めぐり」、中の卷「南滿洲と朝鮮」、下の卷「裏日本を傳うて」。著者が最も感謝と平和に充ちたる時代の末期大正元・二年頃から、著者は漸次悲哀と憂鬱とに鎖されはじめた。冷たき死の手が自己を捉ふる日の近きを豫感し、死處を尋ねて九十日間の長き旅行をなした。その小説的紀行文を書き上げた著者は、最初これを「さまよひ」と題し、次いで「死の方へ」と改めたが、最後に「死の蔭に」と題して出版した。著者自らこの書を以て、「人生の旅の中途に、何時とはなく死の蔭の谷に迷ひ込んだ旅人の著者が、片手を死神にとられつゝ日本の西半部から滿鮮かけて蹌々踉々とさまようた其の道行を、父の死の後三年生きながら埋れた墓の中で、思ひ出し思ひ出し書いて見たもの」だと云ひ、「死の蔭を感じて苦める詩人が、活路を求めて、のたうち廻れる三ヶ月の旅の記。著者が告白自傳の一節とも見るべく、斬新なる小說的紀行文とも云ふべきである」と云つてゐる。〔沖野〕

しのだづま　淨瑠璃　五段　【作者未詳】【名稱】「しのだ妻」ともあるが、內容によつて信田森の妻なる義であらう。題簽の小書に、「あべの晴明出生」とある。【諸本】現存する最古のものは、延寶二年九月鶴屋版十八行十七丁本（山本角太夫正本か）であるかと思はれる。その他、延寶六年二月正本屋版山本角太夫正本（德川文藝類聚所收）、正德三年正月江戸鶴屋版小本その他がある。最後の小本は正本の省略本と見られる。【題材】「簠簋抄」等に傳ふる安部晴明の說話に、狂言「こんくわい」（別項）等が結ばれ、假名草子「鶴のさうし」（別項）の構想が轉用されたかと思はれる。

【梗概】〔初段〕村上天皇の御代、攝津阿部野に、仲麿七代の孫、阿部郡司保秋といふ武士がゐた。一子權太左衞門保名は當年二十三歲、溫良の勇士であつた。この頃、占方の名人蘆屋道滿の弟なる河內の守護職石川惡右衞門之丞常平は、妻の難病平癒のために、兄に敎へられて女狐の生膽を獲ようと一族を催して信田森をめざす。保名は信田宮へ月參りの下向の際、逃げて來た子狐を救はうとして惡右衞門と戰つたが、衆寡敵せず生捕となつた。併し惡右衞門の旦那寺のらいはん和尙が來合はせて助命せられた。この和尙は狐であつた。〔二段〕手傷を負うた保名は谷川に下りた時、二八許りの女性に會ひ、助けられてその住家に行く。館で急を聞いた保秋は、急ぎ自ら馬を馳せて惡右衞門と戰つたが、返り討にあふ。惡右衞門が保秋の郎黨三谷禪司に追はれて來たのは、かの女性の家の門で、遂に保名のために首を刎ねられた。〔三段〕信田森近く住まふ保名と女との間には、阿部童子が生れて、やや七歲になつた。一日、女は亂菊に氣を奪はれて、野狐の姿を童子に認められたのを悲しみ、障子に「戀しくば尋ね來て見よ和泉なる信田の森のうらみ葛の葉」の一首を殘し、書置を認めて姿を消す。森の邊りで、狐は獵師の手妻の働きによらずしては、表現し得ない特殊な場面である。又その方法によつて、これ程成功した曲はなかつたと思ふ。狐が人間の姿に化けるために、その瞬間を屢々見せて效果を求めたが、こゝにも手妻操の手法が、恐らく大に作用したものと察せられる。而してかゝる種類の演出は、超人間的な部分に特徵があると共に不自然と不合理との暴露が强い弱點でもある。然るに本曲の如き題材は、これを爰うて餘りがある。寧ろ超人間的である。作者の成功は一にこゝに在つたと言ふべきであらう。本曲は更に信田森の狂ひの所作に「しのだづま」等もあつたが、元祿十二年秋、京早雲座に「しのだづま」二番續が上演された書替と見られる。流石に南京操式の場面は現はれないが、三谷禪司が若衆になつてゐる等、かなり人間世界の筋になつてゐる。同時と思はれるが、大阪嵐座に於て「しのだづま後日」三番續が興行された。これは原曲の後日の形式をとつたものである。これ等を集成したものが、竹田出雲の「蘆屋道滿大內鑑」（別項）である。

【構想】南京絲操や手妻の太夫山本角太夫の正本として、代表的なものとされただけに、本曲はまづその點に於て、優れた脚色を示してゐる。五段目保名蘇生の條は、全然絲操や手妻の働きによらずしては、表現し得ない特殊な場面である。又その方法によつて、これ程成功した曲はなかつたと思ふ。狐が人間の姿に化けるために、その瞬間を屢々見せて效果を求めたが、こゝにも手妻操の手法が、恐らく大に作用したものと察せられる。而してかゝる種類の演出は、超人間的な部分に特徵

【參考】「葛の葉」戲曲の系統的研究　黑木勘藏（近世演劇考說）〇「しのだづま」考　守隨憲治（近世戲曲研究）　【守隨】

不忍文庫　しのばずぶんこ　文庫　【解說】屋代弘賢の藏書をいふ。弘賢（別項）は、生涯圖書に親しんで、愛書の念深く、蒐集の廣きこと當代及ぶ者はなかつた。弘賢は私にこれを不忍文庫と稱し、藏書に同名の藏書印を捺した。その居所が江戸不忍池畔にあつたためである。弘賢歿後、散佚を免れなかつたが、その大部分は、蜂須賀家の藏に歸して、阿波國文庫（別項）の一部をなし、今日に及んでゐる。弘賢は

塙保己一の學統を繼いで、その學問の範圍廣く、藏書も各方面に亙つてゐる。その目錄に「不忍文庫書目錄」がある。【植松】

忍踊歌（しのびをどりうた）　歌謠　【解說】江戸の初世に行はれた忍踊の歌。尾州德川家の藏「采女歌舞伎草紙」に四首、「おどり」と題せる書（佐佐木信綱氏藏）にも同一のものを載せ、「松の葉」（元祿十六年刊）所載の組歌にも、そのうちの二首が見えてゐる。「松の葉」の所載を左に示す。

暇乞には來たれども、碁盤面で目がしげければ、先づお待ちあれ、柴の編戸も押せば鳴る。あはれ霰がはらほろと降れがな、其の間にあゝ笑止や、立つ名や、笑止と立つ名や、忍踊は面白や、忍踊は面白や。

戀をせば〳〵二十三夜の月を待て、月の僞なきものを、てててからこ、しやんぎしやかんこ、はらりついやひよ、ついや〳〵つやに、ちやうらうらに、やうつほほ、忍踊は面白や、忍踊は面白や。

【參考】日本歌謠集成第六卷　○近代歌謠集　藤田德太郎編　【高野】

忍四季揃（しのびしきぞろへ）　淨瑠璃段物集　半紙本　一册　【刊行】延寶二年刊　【解說】井上播磨の語り物中の忍びの段や四季の景事、合計二十二種を集錄した繪入細字十五行の一册本で、表紙・題簽はほぼ全紙大で、中央に

播磨少掾（はりまのせうじょう）　しのびのだんしきぞろへ
◎天下一　忍　四　季　揃
藤原要榮　しほがま并花うり　付タりめいしよづくし

直傳寫　正本屋　太兵衞

かく記し、その左右に目錄を揭げてある。全紙數四十丁を上下（各二十丁）に分ち、上卷は「しのびのだんめいしよづくし」と內題を置き、

第一　日本王代記はついたのねの由來
第二　十二段　御曹司しのびのだん
第三　業平　河內がよひ
第四　いかづち論義家ちわ物語　景久
第五　跡目論　しほがま
第六　紅葉狩　しほがま
第七　小ざらし　宇治の名所づくし
第八　にたんの四郎　書物うり
第九　一條合戰

下卷は「四きぞろへ」と內題して、

第十　十二段
第十一　熱田合戰
第十二　源平いくさ論
第十三　鬼若丸
第十四　太子傳記
第十五　菅原の親王四季の立花
第十六　四季の亂曲
第十七　役の行者花賣
第十八　花ものぐるひ
第十九　禪師房曾我
第二十　いけどり問答
第二十一　金剛山合戰
第二十二　石山おち　月見

右合二十二番之忍揃四季揃者、井上播磨太夫從三語物一今延寶二年之春迄、不殘書集加三曲節一令三板行一者也

正本屋　西澤太兵衞

井上播磨の正本は、傳存するものが稀少なので、本書は景事・節事の一部分に過ぎないが、これに依つてその全豹を推察すべき貴重な資料である。高野辰之氏藏。　【藤井】

忍音物語（しのびねものがたり）　物語　一卷　【作者】未詳　【成立】本書の名は、「月詣集」「色葉集」「八雲御抄」「風葉集」等に見えてゐる。「風葉集」には、三首の歌を引いてゐるが、現存本にはない。黑川春村は、今の本は文明頃の僞作ならんとしてゐるが、「風葉集」の歌も今の本と關係があるやうに見えるから、あながち僞作と斷定することは出來ない。【諸本】續群書類從卷五〇六・丹鶴叢書所收。寫本には、神宮文庫・京都帝國大學國文學研究室・內閣文庫・彰考館文庫等の本がある。

【梗概】內大臣の子四位少將きんつねは、世にも稀なる美男とて親達も限りなく戀しみかしづいてゐた。御妹は東宮の女御で、桐壺にゐられる。少將は十月頃嵯峨の邊りに紅葉狩に行つて、とある家から聞える琴の音に中をのぞき見る。けれど童が少將の香を怪しむ聲がするので歸る。夜又紛れ入つて見ると、美しい姬君と四十ばかりの尼が繪物語に向つてゐる。そこで少將は一夜の宿を賴み、早くから思ひをかけてゐたやうに戀に尼に語る。翌朝御迎の車が來て、內大臣の子四位少將と知れる。その後も度々消息をする中、尼もかく物はかない有樣では世の交らひも如何とは思ふが、自分の命の明日をも知れないことを思つて遂に少將を許す。少將は乳母の子の左中辨の家に尼と姬君を移す。やがて美しい男子も出來て愛情は愈々增すが、その前から左大將が少將を婿にと望んでゐるので、父大臣はあやしい忍び步きを苦々しく思つてゐる。この尼君は故式部卿宮の姬君で、故中務の宮との間に、この姬君が生れられたのであるが、いづれの宮もうせ給うて、かくはかない有樣で居られたのである。少將は宰相中將に昇進する。父大臣は將來のために左大將の姬君との緣談を無理に承諾させる。若君は殿に迎へて育てる事にして連れて來るが、常に母君を戀ひ悲しまれる。やがて婚禮の日となり、中將已むなく左大將の邸に行くが、姬君の容色は較ぶべくもない。明くるをまたず歸つて來て姬君と嘆く。その後も左大將殿へは稀に通ふ許りである。中將は又中納言に昇り、勢愈々盛んになるが、內大臣は中納言が三條に御所を造つて中務宮の姬君を移さうとしてゐるのを聞き、左大將を憚つて中納言が物忌で宮中に籠つてゐる隙に、文を遣はして尼君姬君を迫ひ出す。二人は仕方なく由緣の典侍の所に身を寄せる。中納言は歸つて來てこの事を知り大に悲しんで只管籠つてゐる。典侍は心慰めにもと宮仕へを奬めるが、姬君はただ涙にくれてのみゐる。帝はこの由を聞かれ、典侍の局におはして、姬君を御覽になり慰め給ふが何の甲斐も無い。帝は中納言のこの頃の物案じや噂などを聞かれ、この人こそ中納言の戀人ならんと察せられるが、御龍愛の心日に添ひて深く、日々に局を訪はれる。中納言は或る日、ふとこの局を窺つてこの事を知り、今は定まる運命と諦めて出家の決心をする。その夜一度姬君に會ひ、來し方行末の事を語つて別れる。二月ばかり久しく途絕えた左大將の姬君にも會つて形見を殘し、姬君にも別れを告げる。姬君は諸共にと慕はれるので、明日の暮に迎へに參らんと欺いて別れる。翌早朝隨身みつ家を供に殿へ參つて若君に最後の對面をし、そのまゝ橫川へ赴いて出家する。京では遺書を見て大に騷ぐが、行方は知れない。姬君への文には吾子のために自身を捨てるのであるから、御身も帝の御心に違はずさぶらふやうにとある。かくて過ぎゆくまゝに、姬君は忍音の內侍と名を賜はりて若宮を產み奉り、承香殿の女御となる。內大臣の若君七つで殿上を許され、中宮は見られる毎に哀れに思される。十二歲で中將になり、明暮父のおはす所を知らせ給へと神佛に祈られ、橫川

とほの聞いて訪ね入られる。入道は成人した吾子を見て今更懷舊の淚にくれる。京に歸つて中宮に事の樣を奏すれば、御淚も盡きず哀れに思された。やがて中將は二位の中納言に昇り、右大臣の婿となつて幸福に暮された。

【構想】平安朝式の戀愛物語で、最初の邊は源氏が紫の上を得る段に似てゐる。中納言入道の事は、同時代の「苔の衣」「岩清水」等の物語と關係があるやうに見えるから、あながち僞作と斷定することは出來ない。【諸本】續群書類從卷五〇六・丹鶴叢書所收。寫本には、神宮文庫・京都帝國大學國文學研究室・內閣文庫・彰考館文庫等の本がある。

【梗概】內大臣の子四位少將きんつねは、世にも稀なる美男とて親達も限りなく戀しみかしづいてゐた。御妹は東宮の女御で、桐壺にゐられる。少將は十月頃嵯峨の邊りに紅葉狩に行つて、とある家から聞える琴の音に中をのぞき見る。けれど童が少將の香を怪しむ聲がするので歸る。夜又紛れ入つて見ると、美しい姬君と四十ばかりの尼が繪物語に向つてゐる。そこで少將は一夜の宿を賴み、早くから思ひをかけてゐたやうに戀に尼に語る。翌朝御迎の車が來て、內大臣の子四位少將と知れる。その後も度々消息をする中、尼もかく物はかない有樣では世の交らひも如何とは思ふが、自分の命の明日をも知れないことを思つて遂に少將を許す。少將は乳母の子の左中辨の家に尼と姬君を移す。やがて美しい男子も出來て愛情は愈々增すが、その前から左大將が少將を婿にと望んでゐるので、父大臣はあやしい忍び步きを苦々しく思つてゐる。この尼君は故式部卿宮の姬君で、故中務の宮との間に、この姬君が生れられたのであるが、いづれの宮もうせ給うて、かくはかない有樣で居られたのである。少將は宰相中將に昇進する。父大臣は將來のために左大將の姬君との緣談を無理に承諾させる。若君は殿に迎へて育てる事にして連れて來るが、常に母君を戀ひ悲しまれる。やがて婚禮の日となり、中將已むなく左大將の邸に行くが、姬君の容色は較ぶべくもない。明くるをまたず歸つて來て姬君と嘆く。その後も左大將殿へは稀に通ふ許りである。中將は又中納言に昇り、勢愈々盛んになるが、內大臣は中納言が三條に御所を造つて中務宮の姬君を移さうとしてゐるのを聞き、左大將を憚つて中納言が物忌で宮中に籠つてゐる隙に、文を遣はして尼君姬君を迫ひ出す。二人は仕方なく由緣の典侍の所に身を寄せる。中納言は歸つて來てこの事を知り大に悲しんで只管籠つてゐる。典侍は心慰めにもと宮仕へを奬めるが、姬君はただ涙にくれてのみゐる。帝はこの由を聞かれ、典侍の局におはして、姬君を御覽になり慰め給ふが何の甲斐も無い。帝は中納言のこの頃の物案じや噂などを聞かれ、この人こそ中納言の戀人ならんと察せられるが、御龍愛の心日に添ひて深く、日々に局を訪はれる。中納言は或る日、ふとこの局を窺つてこの事を知り、今は定まる運命と諦めて出家の決心をする。その夜一度姬君に會ひ、來し方行末の事を語つて別れる。二月ばかり久しく途絕えた左大將の姬君にも會つて形見を殘し、姬君にも別れを告げる。姬君は諸共にと慕はれるので、明日の暮に迎へに參らんと欺いて別れる。翌早朝隨身みつ家を供に殿へ參つて若君に最後の對面をし、そのまゝ橫川へ赴いて出家する。京では遺書を見て大に騷ぐが、行方は知れない。姬君への文には吾子のために自身を捨てるのであるから、御身も帝の御心に違はずさぶらふやうにとある。かくて過ぎゆくまゝに、姬君は忍音の內侍と名を賜はりて若宮を產み奉り、承香殿の女御となる。內大臣の若君七つで殿上を許され、中宮は見られる毎に哀れに思される。十二歲で中將になり、明暮父のおはす所を知らせ給へと神佛に祈られ、橫川

本・八本・九本が普通用ひられるが、特に四本・五本・六本の三種が、最も主要なものになつてゐる。四本の篠笛は全長一尺六寸位、指孔は直徑凡て三分、尾端から第一孔迄は三寸八分、第一孔と第二孔との距離は五分、第二孔と第三孔との距離は五分五厘、第三孔と第四孔との距離は五分五厘、第四孔と第五孔との距離は六分五厘、第五孔と第六孔との距離は六分

前に示した方法が一般に用ひられてゐる。篠笛は單獨に俗曲の吹奏にも多く用ひられる外に、長唄囃子に於て、能管と相並んで行はれる。卽ち長唄囃子に於ては、笛の奏者は能管と篠笛とを錯用する。それで篠笛は、三味線の旋律に大體合はせて吹くのであつて、能管が全然それと違つて吹くに對して、特殊な働きを現はしてゐるものである。【沿革】篠笛

萬册に及んでゐたといふ（鷲峯文案）。　【植松】

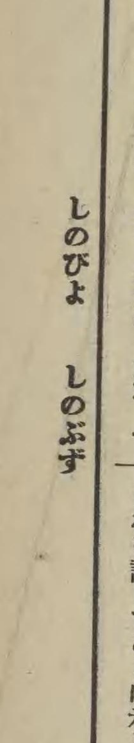
しのぶ草（しのぶぐさ）　歌集　四卷　【作者】八田知紀　【成立】安政二年　【刊行】同年　【諸本】桂園門下家集（續日本歌學全書）・明治初期諸歌集（國歌大系）所收　【解說】安政二年十月の鶴園親義の序文がある。第一編は文政六年より天保の末まで、折々につれて詠み出で

とほの聞いて訪ね入られる。入道は成人した吾子を見て今更懐舊の涙にくれる。京に歸つて中宮に事の樣を奏すれば、御涙も盡きず哀れに思された。やがて中將は二位の中納言に昇り、右大臣の婿となつて幸福に暮された。

【構想】平安朝式の戀愛物語で、最初の邊は源氏が紫の上を得る段に似てゐる。中納言入道の事は、同時代の「苔の衣」「岩清水」等の物語と同じく時代思潮を反映してゐる。〔大野木〕

忍夜戀曲者（しのびよるこひはくせもの）「將門」を見よ。

篠笛（しのぶえ）樂器【別名】篠（しの）【解説】長唄囃子及び俗曲に用ひられる樂器。横笛の一種。篠竹を以て造る。管は頭と尾とを少しく樺皮で巻き漆を塗るの外、他の部分は竹のまゝである。指孔は七つある。これを筒口に近い方から順に、下（ひ）・干（かん）・五（ご）・上（じやう）・夕（せき）・中（ちう）・六（ろく）と呼ぶ（明治三十七年刊、鶯聲散士著の「篠笛獨習之友」には、この孔の名を順にル・コ・カ・ク・ヤ・ヨ・ウと呼ぶ由に記してある。或る一派にはかく



呼ぶことも行はれてゐるのか。なほこの書では指孔を全部閉ぢた音をロといひ、第一孔と第七孔とを開けた音をヒといひ、第四孔と第七孔とを開けた音をヒといふ。又全部の指孔閉ぢた音を由といふ。百足登氏著「横笛のを栞」には、由をユ、下をケ、干をカ、五をコ、上をウ、夕をタ、中をチ、六をロと略稱するやうに記してある。これも一部の實際家の間に行はれるものである。篠笛は長短十二種あつて人聲の高下に從ひ、又は三味線の調子に從つて、その筒音が一越（いちつ）から上無（かうな）まで十二律の音に合ふやうにしてある。その中で一本・二本・三本・三本半・四本・四本半・五本・五本半・六本・七本・八本・九本が普通用ひられるが、特に四本・五本・六本の三種が、最も主要なものになつてゐる。四本の篠笛は全長一尺六寸位、指孔は直徑凡て三分、尾端から第一孔迄は三寸八分、第一孔と第二孔との距離は五分、第二孔と第三孔との距離は五分五厘、第三孔と第四孔との距離は五分五厘、第四孔と第五孔との距離は六分五厘、第五孔と第六孔との距離は六分五厘、第六孔と第七孔との距離は七分、第七孔から歌口迄の距離は四寸七分五厘、歌口の直徑は縦五分、横四分である。他の管もこれに準じてその寸法を定める。但し管の全長は、三本は一尺六寸七分五厘、四本は一尺五寸九分五厘、五本は一尺四寸四分五厘、六本は一尺三寸八分五厘、七本は一尺三寸三分五厘、八本は一尺二寸六分、九本は一尺二寸六厘、十一本は一尺二分五厘である。その音階は由が宮、下が商、干が角、五が變徴、上が徴、夕が羽、中が變宮、六が宮になつてゐる。篠笛を三味線と合奏する場合には、その本數の選び方に依つて多少の相違がある。「篠笛獨習之友」の記すところによると、

	（本調子）（二上り）	（三下り）
【一の絃】	五	五
【二の絃】	中	六（下）
【三の絃】	五	干

又「横笛の栞」の記す所によると、

	（本調子）（二上り）	（三下り）
【一の絃】	干	干
【二の絃】	夕	中
【三の絃】	干	下

但し兩書とも實は説明に誤謬があるので、今これを訂してこゝに示した。この兩者の中で前に示した方法が一般に用ひられてゐる。篠笛は單獨に俗曲の吹奏にも多く用ひられる外に、長唄囃子に於て、能管と相並んで行はれる。即ち長唄囃子に於ては、笛の奏者は能管と篠笛とを錯用する。それで篠笛は、三味線の旋律に大體合はせて吹くのであつて、能管が全然それと違つて吹くに對して、特殊な働きを現はしてゐるものである。【沿革】篠笛は初め支那の横笛から變化したと稱せられるが、町田嘉章氏は「長唄稽古手引草」に於て、「この笛の起原は詳かでないが、今日では、草深い田舍で牧童などが使用した草笛が段々に工夫されて、今日の篠笛にまで進化したのであらうといふことになつてゐる」と述べてゐる。それからこれが長唄に用ひられるやうになつたことに對して、同氏は「長唄・芝居などに用ひる前、既に獅子舞・里神樂・屋臺囃子、地方の村祠の祭典などで用ひられてゐたものを長唄に應用するやうになつたものらしい」と言つてゐる。長唄界に於てこれを傳へた系統の主なものは、住田・梅屋・望月である。

【參考】横笛之栞 百足登〇篠笛獨習之友 鶯聲散士〇長唄稽古手引草 町田博三 〇日本音樂概論 伊庭孝 〔田邊〕

忍岡文庫（しのぶがをかぶんこ）文庫【解説】林羅山が江戸忍岡（今の上野公園内）に建設した文庫である。羅山（別項）は寛永九年五十歳の時、文庫を創立した。その後明曆元年に至り幕府から二の丸にあつた銅造の官庫を下賜され、これをその宅地内に移したが（寛政重修諸家譜）、間もなく明曆三年正月十九日の大火に遭つて全部灰燼に歸して了つた。而して文庫は、漢籍千三百八十餘部、和書七百六十部、三萬冊に及んでゐたといふ（鶯聲文集）。〔植松〕

しのぶ草（しのぶぐさ）歌集　四卷【作者】八田知紀【成立】安政二年【刊行】同年【諸本】桂園門下家集（續日本歌學全書）・明治初期諸歌集（國歌大系）所收【解説】安政二年十月の鶴園親義の序文がある。第一編は文政六年より天保の末まで、折々につれて詠み出でた歌を集錄したもので、詞書も詳しいものがある。第二編以下は折節の心持を詠んだ歌もあるが、多く題詠を集めた。第二編は上下に分ち、上下共に四季・戀・雜に部立し、第三編も亦四季・戀・雜に分つた終りに、更に四季の歌を集め、その次に長歌と文章とを添へた。第四編また前編と同じ體裁で、殆ど題詠ばかりである。別に「しのぶ草」第五編も門人澁谷國安が撰んだ。知紀は歌數多く、その作歌の技倆も亦凡でなかつた。抒情よりも叙景歌にすぐれてゐたが、桂園派の弊なる平弱の風は、その歌に最も著しく現はれてゐる。但し彼は「萬葉」以前の作爲なき歌を尊び、技巧を斥けてゐるが、歌は純然たる古今風である。

波の上にうちなびきても唉きにけり清瀧川の山吹の花

山里の春の暮れがたうぐひすの古巢にかへる聲はかりして

【附記】愛發春樹の編纂せる「桃岡集」も亦知紀の歌集である。海上胤平は、「八田知紀歌集評論」（明治三十七年刊）を著はして、その歌を非難した。〔佐佐木〕

垣衣戀寫繪（しのぶぐさこひのうつしゑ）「双面」を見よ。

信夫摺在原草紙（しのぶずりありはらざうし）讀本五卷【作者】中川昌房、感和亭鬼武校【插畫】一峯齋馬圓【名稱】角書に復讐奇譚とある。「繪本在原草紙」ともいふ。【刊行】文化五年【諸

かく記し、その左右に目錄を掲げてある。全紙數四十丁を上下（各二十丁）に分ち、上卷は「しのびのだんめいしよづくし」と内題を置き、

扉一　日本王代記はついたのね由來
てるひのまへしのびのたん

忍音物語（しのびねものがたり）物語　一卷【作者】未詳【成立】本書の名は、「月詣集」「色葉集」「八雲御抄」「風葉集」等に見えてゐる。「風葉集」には、三首の歌を引いてゐるが、現存本にはない。黒川春村は、今の本は文明頃の僞作ならんとしてゐるが、「風葉集」の歌も今の本る。父大臣は將來のために左大將の姫君との緣談を無理に承諾させる。若君は殿に育てる事にして連れて來るが、常に母君を戀ひ悲しまれる。やがて婚禮の日となり、中將已むなく左大將の邸に行くが、姫君の容色は較ぶべくもない。明くるをまたず歸つて來てぶらふやうにとある。かくて過ぎゆくまゝに、姫君は忍音の内侍と名を賜はりて若宮を産み奉り、承香殿の女御となる。内大臣の若君七つで殿上を許され、中宮は見られる毎に哀れに思される。十二歳で中將になり、明暮父のおはす所を知らせ給へと神佛に祈られ、隅川

本】文化九年再版、感和亭鬼武校合とあり、「繪本稗史小說」(博文館)所收。

【梗概】文德帝の第一皇子惟高親王と、第二皇子惟仁親王との間に、皇位繼承の爭が起つたが、帝の御計らひに依つて、惟仁親王が繼承者と定められた。そこで惟高親王の母靜子の父紀名虎は謀叛を企て、孫娘井筒姫と契つた在原業平を巧に欺いて惟高親王と僞稱し、兇賊藤原千方を味方にしようとて賊黨に投じさせた。又靜子は、陸奥・忍摺の姉妹を從へて禁廷を脫し、惟高親王を奉じて小野の里に向ふ途中、千方の幻術で陸奥・忍摺を奪はれ、陸奥は非業の死を遂げるが、忍摺は業平に救はれて遁れ、大和石上の井筒姫にその在所を知らせた。かくて業平は、井筒姫と忠臣足立蘭平に救はれて仕官するが、藤原一族の奸計に依つて蟄居する。その後業平は、千方を討伐に向ふに當り、姉の亡靈の告げで千方をその敵と狙ふ忍摺をも伴つて東國に下つた。忍摺は角田川に待つ千方の奸策を看破つてこれを討取り、姉陸奥の仇を報いた。

【構想】「伊勢物語」(別項)を素材として、その歌をその儘取り入れ、陸奥・忍摺の姉妹、殊に忍摺と業平、井筒姫殊に業平を主要な人物とし、敵討の趣向を以てしたもので、人口に膾炙してゐる業平を全く異つた人物とし、健氣な女丈夫忍摺の敵討と照應して筋の複雜を計り、讀者の興味を狙つてゐるが、筋の不統一は免れなかつた。【笹野】

志濃夫廼舍歌集　しのぶのやかしふ　歌集　五卷【作者】橘曙覽【編者】橘今滋【成立】明治十一年【刊行】同年【諸本】橘曙覽全集・近代名家歌選(和歌叢書)・明治初期諸家集(國歌大系)所收。その他、明治十一年の刊本及び藤井乙男鑒修「校註橘曙覽集」等がある。【解說】曙覽の集めて置いた草稿五卷に、男今滋の編せる補遺を附し、卷頭に千虎の書ける曙覽の像、元治二年二月二十六日に松平春嶽のものせる「橘曙覽の家にいたる詞」、明治十年六月の近藤芳樹の序文及び同十一年六月に今滋の記せる例言を付して刊行したもの。五卷の中第一集は「松籟集」、第二集は「櫨綠集」、第三集は「春明集」、第四集は「君來集」、第五集は「白蛇集」と名づけ、補遺は「福壽草」と名づけてゐる。何れも卷頭の歌によつたものである。歌の順序は作歌の年代により、第一集は曙覽三十一歲以後二十年間の自選歌と思はれ、第二集は五十一歲以後、第三集は五十三歲前後、第四集は五十四歲の二月以後、第五集は五十六歲の作を集めた。中に長い詞書のある歌もあり、獨樂吟五十五首の如きは、每首「たのしみは」と云ふ起句を持つ歌で、集中の異色ある部分となつてゐる。【歌風】幕末歌人の傑れたものとして、言道(別項)と並び稱すべきである。「萬葉」を學んで「萬葉」に泥まず、獨創の境地を詠み出でた。洒落のうちに高い氣品があり、日常の瑣事を捉へて縱橫に詩化し、高邁脫俗の味、淡泊沖澹の趣がある。その歌は內容に變化があり、用語に自在で、諸體を兼ね備へてゐる。鏡山に於ける工夫の勞働を歌ひ、紙漉場の情景をも歌つた。彼の歌は叙景よりも好んで人事を歌つてゐる。殊に作歌に困難とせられる書賛と詠史の歌に秀歌が多く、その奇才を見るに足る。就中、王政復古を喜ぶ歌の如きは逸することが出來ない。又數首續いてゐる連作の歌も少くない。かくの如く異彩に富む獨特の歌風をなしてゐる。なほ彼の後期の作には、「萬葉」を好むと共に、古今風を學ぶところもあつた。要するに彼は「萬葉」の自由の精神、感情の率直な流露を喜んだのであつた。

こぼれ絲網につくりて魚とると二郎太郎三郎川に日くらす
たのしみはすびつのもとに打ちふしてゆすり起す

戲場樂屋圖會

【參考】新釋橘曙覽歌集　植松壽樹　【佐佐木】

戲場樂屋圖會　しばるがくやづゑ　演劇書　二卷二冊　拾遺二卷二冊【著者】松好齋半兵衞【刊行】正篇は寬政十二年、拾遺は享和二年、浪速叢書第十五所收。【解說】ほぼ同じ頃に、江戸で刊行された「戲場訓蒙圖彙」「戲場年中鑑」(各別項)、大阪で刊行された「戲場一覽」等と同じく、歌舞伎芝居萬般の詳細な解說書であつて、正篇二卷は當時の大阪の劇場內外の制度・風俗・習慣等を、拾遺では歌舞伎・操芝居の淵源の外、正篇に漏れた劇界の諸內幕を收めてゐる。著者が畫工であるから寧ろ畫を主とし文を從とした傾向が見えて、それが又特色ともいふべきであり、精密な畫風が大阪演劇史の資料として注目される。乘込・本讀・稽古・樂屋等の寫生もあるが、俳優の替紋・家名・俳名の記載や、樂屋棧敷暖簾の圖案や、素顏の寫生など俳優史上の好資料であり、操芝居の舞臺面等や人形の解剖圖・品目等も、その方面での有益な資料といふべきである。【增田】

戲場訓蒙圖彙　しばるきんもうづゑ　滑稽本　八卷五冊　再刷本三冊【作者】式亭三馬【名稱】「訓蒙圖彙」(別項)に做つて戲場のことを記した故の名稱。【成立】享和三年。文化三年再刷、大正年間にも複製した。【內容】【卷一】天紋。この章には芝居の道具中、日・月・雲・霞・星・雪・電・雷・雨・風などの氣象に關係あるものを擧げて說明してある。戲場國の時候の條には、芝居の年中行事を記してある。狂言國の時候の條には、實際の時候と違ふこと、晝と夜とが實際と違ふことなどを皮肉に書いてある。【卷二】地理。表方を初め、棧敷・落間・舞臺・樂屋口・囃子町・稻荷町・三所等に就いて

記し、その他、芝居起原、各座の興廢等を說いてある。【卷三】人事。この章には主として曾我祭の由來、大踊・俄狂言見主藝盡などから道具方・小道具方・床山・衣裳藏などのことを記してある。【卷四】宮室並に地理餘。この章は家屋に關して記し、天王建・館・城・宮・鐘樓・娼家・茅屋・茶屋等から、墓・井・竈等に及んでゐる。【卷五】生植・動物。この章には本舞臺

集式に排列し解說を附した。但し大阪の出版であるから、上方に關して比較的詳細である。江戸の出版にかゝる「戲場訓蒙圖彙」「三座例遺誌」「劇場漫錄」(各別項)等と比較して興味がある。【守隨】

戲場年中鑑　しばゐねんぢゅうかがみ　演劇書　三卷【著者】算千里【插繪】初代豐國【本名】繪本

戲場年中鑑【刊行】享和三年【解說】同年刊

案內・宣傳等の目的を以て印行された殆どすべてのものを含めていふ。これを大別すれば開場前に市中の四辻や盛り場等に張出し、又は役者・芝居茶屋・出方等から最屓先に配られる廣告用の一枚摺のものと、劇場內(多くは茶屋、特殊なものは繪草紙屋)から賣り出され、狂言の內容や役割の說明をする書籍の形式のものとがある。その種類甚だ多く、三都

年間に出勤すべき役者を主に、囃子方・淨瑠璃連中・振附・狂言作者等を定め、順位によつて排列した番附である。【江戸】糊入紙(大判)一枚摺。その半分の上部に、役者・囃子方等の次第、即ち顏見世興行に出す紋看板・櫓下看板・庵看板・割床等の寫しがあり、下部に順位による主な役者の繪組がある。版行期は寬文から

記し、その他、芝居起原、各座の建興等を說いてある。〔巻三〕人事。この章には主として曾我祭の由來、大踊・俄狂言見主藝盡などから道具方・小道具方・床山・衣裳藏などのことを記してある。〔巻四〕宮室並に地理餘。この章は家屋に關して記し、天王建・館・城・宮・鐘樓・娼家・茅屋・茶屋等から、墓・井・窟等に及んでゐる。〔巻五〕生植・動物。この章には本舞臺の飾附け、草木竹を初めとし、鳥獸魚蟲等に關して記してある。〔巻六〕支體並に疾病・鬼。この章には面部、手足より鬘髭の類に關して考證的に記し、疾病魂魄の部には骸骨・幽靈等に關して記してある。〔巻七〕人物。この章は評判記によつて、位附を萬國の人物に見立てて記してある。〔巻八〕器用飲服並に神佛。この章には、小道具を初め、衣服・食類・神佛等を圖入に說明してある。

【解說】本書は、歌舞伎の通と穿ちと滑稽から成立つものである。故に歌舞伎を構成する諸要素、殊に劇場に關する詳細な知識を網羅しようとして、繪畫と文章とを以て說明してゐる。それと共に、實際と對照することなどによつて、その實際との相違や不合理等を穿ち、且つ殊更に惡戲的の觀察などによつて滑稽化してゐる。かくして本書は歌舞伎劇及びその劇場に關する說明的の書であると共に、滑稽本たる一面をも持つものである。〔小柴〕

戲場節用集（しばゐせつようしふ）　演劇書　一册

【著者】好文舍青氏【名稱】內容に節用集の形式を摸した所から、書名に附したらしい。【刊行】享和元年【解說】三ケ津戲場圖、江南八景、同詩歌、琴碁書畫、士農工商、人倫之圖以下、俳名一覽、十干十二支等すべて三十二項に分つて歌舞伎芝居に關する諸事項を節用集式に排列し解說を附した。但し大阪の出版であるから、上方に關して比較的詳細である。江戸の出版にかゝる「戲場訓蒙圖彙」「三座例遺誌」「劇場漫錄」（各別項）等と比較して興味がある。〔守隨〕

戲場年中鑑（しばゐねんぢゆうかがみ）　演劇書　三卷

【著者】篁千里【插繪】初代豐國【本名】繪本戲場年中鑑【刊行】享和三年【解說】同年刊行の「三座例遺誌」（別項）に比較すると、半紙判全丁數六十六丁で、全然年中行事のみを扱つたから、本書は相當詳細な記述であつて、看板・番付の外、豐國の插繪等も多く興味も深く、注意すべき點が多いやうである。巻末に後編三册の豫告がある。〔增田〕

芝居乘合話（しばゐのりあひばなし）　演劇書　五卷

【著者】狂言作者中村重助と傳へられる。【名稱】乘合船で逢つた人の物語に擬した形式で綴つたからである。【成立】寬政十二年か。【諸本】寫本で傳はつたが、新群書類從巻三に飜刻された。【解說】芝居に關する諸種の考說を述べてゐるもので、一巻には江戸歌舞伎芝居の歷史と役者の略傳を揭げ、二巻は年中行事を收め、三巻以下には劇場經濟や當事者、卽ち太夫元・帳元・仕切場・棧敷番その他の任務、役者の心持、上手下手、狂言作者の仕事、座頭の意義、古今役者の巧拙比較論等を述べてゐる。一種の祕密國としての存在であつた劇場內部の狀況や、各分業者の權威等を察知することができる。「劇場新話」（別項）は、本書を後人が改削したものである。〔增田〕

芝居番附（しばゐばんづけ）　歌舞伎【解說】普通には出演者の等級の順序表、又は狂言の各繪組と配役との順序書等であるが、なほこれ等以外の引札や口上等、凡そ興行上觀客への案內・宣傳等の目的を以て印行された殆どすべてのものを含めていふ。これを大別すれば開場前に市中の四辻や盛り場等に張出し、又は役者・芝居茶屋・出方等から贔屓先に配られる廣告用の一枚摺のものと、劇場內（多くは茶屋、特殊なものは繪草紙屋）から賣り出され、狂言の內容や役割の說明をする書籍の形式のものとがある。その種類甚だ多く、三都により又は時代によつてその形式を異にしてゐる。【沿革】番附の發生年代は、未だ明瞭でないが、「役者名物袖日記」（明和八年正月版）によると、江戸の例をあげ、寬文十二三年まではその時〳〵の依頼に應じて京へも大阪へも行つて勤めた中に、萬治年中歌舞伎四座となつたために、明石勘三郎（二代）の工夫で霜月を諸役者の入替りと定め、十月から役者附・紋看板等、その他芝居一黨の格式を極めたといふ。また「新撰古今役者大全」（寬延三年三月版）にも大阪の松本名左衞門座から役者の一年抱へを初め、霜月に顏見世興行をする事になつたと傳へてゐる。これ等から考へるに、萬治から寬文の初めにかけて三都が各々役者附を出す事になつたものと思はれる。かくて顏見世番附が最初に生れ、辻札が辻番附と變つたものである。而して後の各種番附は各種看板の寫しであつて、その變化も自らこれに應じてゐる。その變遷の上から見れば、初めは概ね地味で簡素であるが、漸次精細となり、複雜になつて寶曆期に至つて樣式が定まつた。爾後多少の變遷や例外はあるが、殆ど幕末或は明治期までこの形式が繼續された。大別すれば左の四種である。

【顏見世番附】別名、極り番附・役者附。俗稱、面附。每年十一月の顏見世興行前に、次の一年間に出勤すべき役者を主に、雛子方・淨瑠璃連中・振附・狂言作者等を定め、順位によつて排列した番附である。〔江戸〕糊入紙（大判）一枚摺。その半分の上部に、役者・雛子方等の次第、卽ち顏見世興行に出す紋看板・櫓下看板・庵看板・割床等の寫しがあり、下部に順位による主な役者の繪組がある。版行期は寬文から文久まで。〔大阪〕杉原紙一枚摺。繪組なく順位による面附のみで、江戸のに比べれば、地味で淋しい。版行期は凡そ寬文から天保までであるが、寶曆頃から江戸樣式も並行され、化政度以降は寧ろ江戸樣式が普通とされて、明治前まで行はれた。〔京都〕初めに「一根本極」とあつて普通、極番附と稱へるが、これは京都に限られてゐた。糊入紙（大判）半切。大阪と同樣に繪組がなく面附のみで、上下二段に區分して總てを收めた如きは、極めて單純であつて、細長いのと共に著しい特色である。版行期は寬文から寶曆末までで、以後大阪樣式となり、時に江戸樣式を摸す事もあり、化政度以降は大阪と同樣の形式であつた。

【辻番附】別名、櫓下番附。俗稱、配番附。開場前から市中の四辻や盛り場に貼出し、又は役者・茶屋・出方等から初番附といつて贔屓先に配つたものである。〔江戸〕糊入紙（大判）一枚摺。普通、初めに大名題を出し、その上にカタリ・小書等があり、小書は俗に角書ともいふ（大名題看板の寫し）。右の地を橫に上下に區分して、上部は一番目・二番目・淨瑠璃等、その場〳〵の繪組を描いて、人物には役者の定紋を附ける（櫓下看板や淨瑠璃看板等の寫し）。下部は末まで橫枠で、順位によつて役人替名を記す（役割看板寫し）。これと關連して追番附・別番附と呼ばれるものがある。（イ）追番附。

は免れなかつた。

志濃夫廼舍歌集（しのぶのやかしふ）　歌集　五巻　〔笹野〕

【作者】橘曙覽【編者】橘今滋【成立】明治十一年【刊行】同年【諸本】橘曙覽全集・近代名家歌選（和歌叢書）・明治初期諸家集（國歌大系）所收。その他、明治十一年の刊本及び藤

淡泊沖澹の趣がある。その歌は內容に變化があり、用語に自在で、諸體を兼ね備へてゐる。鏡山に於ける工夫の勞働を歌ひ、紙漉場の情景をも歌つた。彼の歌は叙景よりも好んで人事を歌

ものを擧げて說明してある。戲場國の時候の條には、芝居の年中行事を記してある。狂言の時候の條には、實際の時候と違ふこと、晝と夜とが實際と違ふことなどを皮肉に書いてある。〔巻二〕地理。表方を初め、棧敷・落間・舞臺・樂屋口・囃子町・稻荷町・三階等に就いて

俗稱、跡附。非常に複雜で、續き幕・差し幕・切幕等を出した時の番附が追番附であり、形も雜多である。(ロ)別番附。普通、淨瑠璃物又は長唄物等の看板(招看板・約看板)の繪組を寫して、特に呼物として出す。これに限つて役人替名を出さぬのが通例である。なほこの外にも引札類、下り役者附又は口上番附等、各々形式を異にするが、目的からいへば辻番附に附屬すべきものと考へられるものがある(追番附以下は京阪にも見られるが、その形式は勿論差違がある)。辻番附版行期は凡そ寛文(正德頃まで別番附の形式)から明治まで。〔大阪〕杉原紙(大判)一枚摺。一枚看板の寫しで、普通、縱を上下二段に區分して、上欄に主要な場面の繪組、下欄の初めに座本、中央に大名題、その上に小書、兩脇にカタリを數行、時に一部に口上を出すこともある。役人替名を出さぬのが通例で、時に横式のもある。版行期は寛文(正德頃まで繪を主とし中判)から明治まで。〔京都〕凡そ大阪と大差なく、ただ横の形式に相違があり、時に役人替名も出したが、安永以後は殆ど大阪式である。

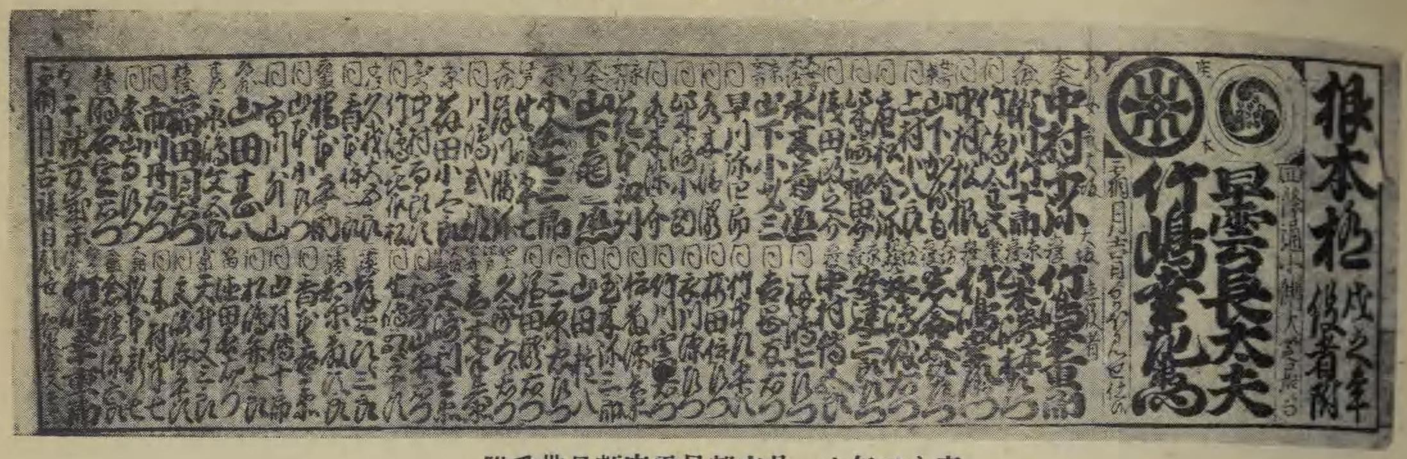
【役割番附】狂言が出揃つてから出すのが通例で、繪本番附と共に、古來三都とも、芝居茶屋より賣り出した。〔江戸〕通稱、役者紋番附。通語に通し番附。半紙本、丁數三枚。卷首は中央に櫓紋と座本名。その他役者の順位による定紋と役者名がある。次の丁には大名題・小名題、淨瑠璃又は長唄名題とその小書等。卷尾には一座の全役人替名がある。版行期は元祿から明治十一年まで。〔大阪〕半紙一枚摺。初めに座本、次に角書と大名題など、カタリをその兩脇に附ける。その次横二段の上下を役順によつて一座の全役附を記し、末に淨瑠璃・囃子方・作者等の連名を揭げる。版行期は元祿期より明治中頃まで(但し寶曆期は二枚)。〔京都〕普通、顔見世番附(極番附)の紙形で、二枚。切狂言・追番附は一枚。初めに大名題。次に名代と座本を並べ、頭に紋所を置く。その左にワキ・二番目の名題、次に再び大名題を置き、割書を頭に、カタリを左右に細字で揭げ、その次に三番續等の小名題や小書を附ける。あとは順位によつて全役人替名がある。二枚物は一枚物を延長しただけのもの。この樣式が京都特有のものであるが、寶曆末に至つて滅び、同時に大阪の寶曆期に於ける二枚物(半紙)の樣式となり、文政まで繼續した。天保以後は顔見世興行に限り二枚、常は一枚物で明治の中頃に及んだ。

【繪本番附】略稱、繪番附。目的や作用に就いては狂言本(別項)の系統を引く。通例狂言が出揃つてから發行され、役割番附と共に三都とも芝居内茶屋から賣り出した。これを正系として他に繪草紙屋等から賣り出された傍系のもの(彩色刷が多い)と二種類ある。〔江戸〕古く狂言繪盡、後に芝居繪雙紙、又は芝居繪本・繪組番附等と稱へた。小菊半紙判。天保以後やゝ小形になつた。六・七丁より十丁。表紙は、寶曆まで黒表紙、共紙で、普通中央に櫓紋と名題があり、袋と共に意匠を凝してある。序幕(又は二立目)より大詰(又は大切)まで順次に各場面を描き、主な役名と役者名とその場の仕種の小書(說明)を記し、又長唄・淨瑠璃の名題や連名も揭げる。版行期は享保より明治十一年まで繼續され、以後役割番附と合併合綴にされた。〔京都・大阪〕大阪と京都はほぼ同樣で初め狂言繪本・狂言本等といひ、後に殆ど江戸と同樣に稱へた。半紙本、紙數六・七丁から八・九丁。表紙は鼠色の厚紙、その中央に名題と座本を書いた題箋を貼り、袋は色刷で、主な場面を描いてゐる。又一方に表紙も共紙で、後には表紙を色刷にした所謂カッパ刷が流行した。カッパ刷は、寛政頃から紙數四・五丁になり、年の下るにつれて漸次粗畫・粗刷となり、明治の中頃まで繼續された。内容はほぼ江戸と同樣である。

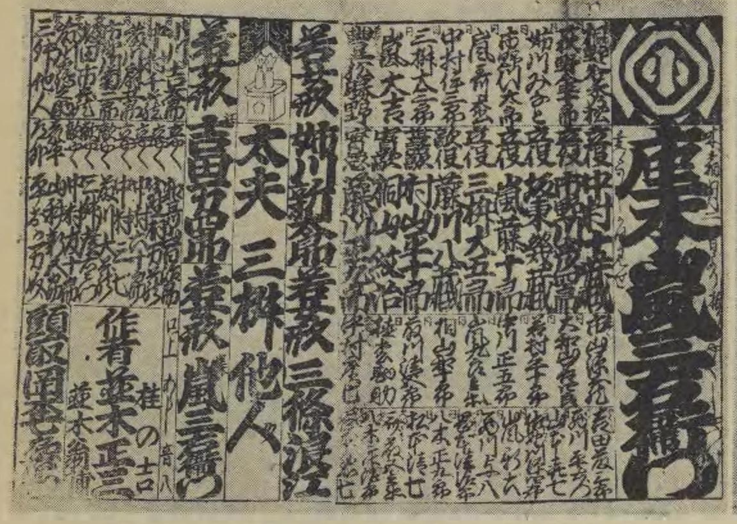
【參考】劇場一覽顯微鏡(歌舞伎研究一一三)○守貞漫稿(喜多川守貞(近世風俗志))○番附の發行(秋葉芳美(歌舞伎圖說解說篇))〔秋葉〕

柴垣踊(しばがきをどり) 舞踊 【解說】明曆年中盛んに行はれたが、天和の頃には廢れた。もと北國の下部の米搗歌に振をつけたものだといふ。二人の者が相並んで手を拍ち、胸を打つて踊る。江戸では變つた姿で踊つた。即ち作髭をし、肌をぬいで、何ともいへない顔つきをして、肩をうち胸を叩き、癲癇やみの狂ふが如く、右へ左へ飜つて、息もつかずに俯向いたり仰向いたりして音を助け、手を鳴らして謠ひ興じた。「東海道名所記」に「柴垣とやらん、もとは山の手奴どもの踊歌なるを、比丘尼さゝらにのせて謠ふ」とあり、萬治元年刊の「舞正語磨」にも賤しい藝ぶりの頂上だが、流行するので、若い者はみんなこれをすくとある。これに「奴柴垣」とて舞臺で興行したものがある。「正事記」(津田藤兵衛の隨筆)萬治元年の條にくはしい。曰く、大刀さし、作り髭をして、五人にても三人にても、中なる男首頭を取つて、さま〴〵の續くせ尚、手曲足踏をして謠ふ也。手足調子にて拍子を打ち、小歌もあり、言葉もあり、論議問對もあり。聲にきほひ後れ有つて、白眼がちにて、ゑひ〳〵さあ〳〵の掛聲しをく、勇立つ躍にて、興がる見物なり。裝束はゆきも裾も短めて、今織の金襴にて、袖無の長羽織に馬乘を明け、胸紐は眞紅に金紗をまぜて、釣瓶繩の太さにうたせ、大小は金銀の拵に、鹹鞘に角頭巾をかぶり、舞臺に出て藝をつくす。鼓太鼓さはり三味線胡弓などにて、はやし立てたる仕組の面白さに、錢敷どよみ渡り、貴賤ともに、ほんのくほの髮立ち、膏脂のあたりを毛孔のはふやうに思ひて、前後左右踏き立て我を忘る、風情なり。奴柴垣の踊手の樣は「卜養狂歌圖卷」に出してある。歌詞には次の如きものがある。

奴　柴　垣　(卜養狂歌圖卷)高野辰之氏藏



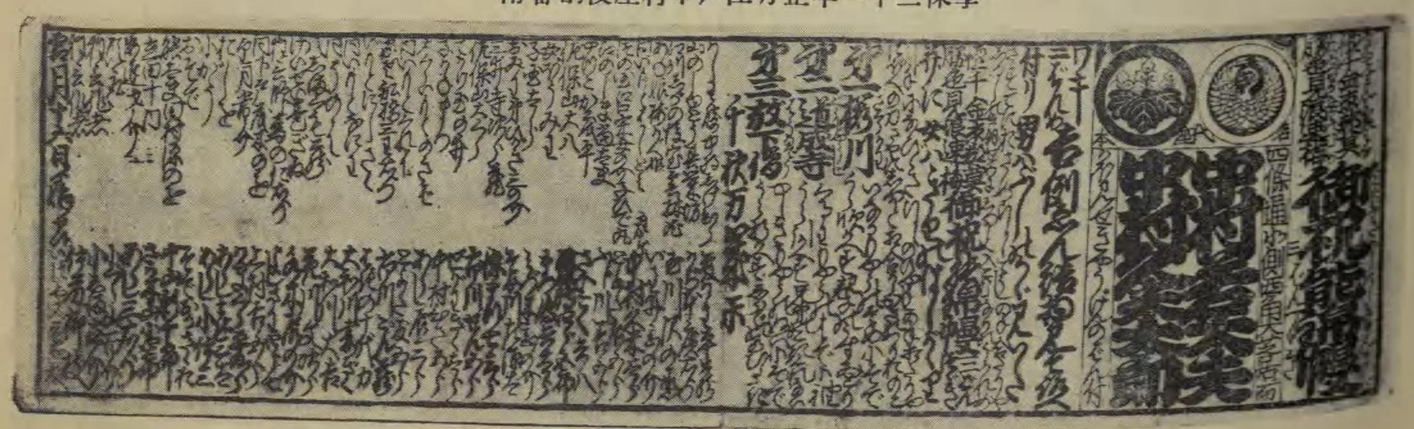
寛永二年十一月京都早雲座顔見世番附



寛延元年十一月江戸市村座顔見世番附

寶暦四年十一月大阪中の芝居顔見世番附

享保二十一年正月江戸中村座役割番附



元文四年十一月京都中村座役割番附

小名題、淨瑠璃又は長唄名題とその小書等。巻尾には一座の全役人替名がある。版行期は元祿から明治十一年まで。〔大阪〕半紙一枚摺。初めに座本、次に角書と大名題など、カタリをその兩脇に附ける。その次横二段の上下を位順によつて一座の全役割を記し、末に淨瑠璃の名題や連名も掲げる。版行期は享保より明治十一年まで繼續され、以後役割番附と合併合綴にされた。〔京都・大阪〕大阪と京都はほぼ同様で初め狂言綫本・狂言本等といひ、後に殆ど江戸と同様に帰へた。半紙本、紙數六・七丁から仕種の小書（說明）を記し、又長唄・淨瑠璃の名

んなこれをすくとある。これに「奴柴垣」とて舞臺で興行したものがある。「正事記」（津田藤兵衛の隨筆、萬治元年の條にくはしい。曰く、大刀さし、作り髭をして、五人にても三人にても、中なる男音頭を取つて、さまざまの傾くせ前、手拍足踏をして謡ふ也。手足調子を打ち、小はり三味線胡弓などにて、はやし立てたる仕組の面白さに、錢數どよみ渡り、貧賤ともに、ほんのくぼの髪立ち、膏脂のあたりを毛蟲のはふやうに思ひて、前後左右跳ぎ立て我を忘る、風情なり。奴柴垣の踊手の様は「下養狂歌圖巻」に出してある。歌詞には次の如きものがある。

天明七年七月大阪大西芝居辻番附

正徳五年正月江戸中村座辻番附

繪本番附表紙（カツラ）
（明和七年二月大阪角の芝居）

繪本番附表紙
（天明四年正月江戸中村座）

繪本番附表紙
（寛保三年正月大阪中の芝居）

繪本番附表紙
（明和八年正月京布袋屋座）

寶暦十年五月大阪角の芝居繪本番附（八百屋お七歌祭文）

寶暦五年七月江戸市村座繪本番附（菅丞相册摺）

目黒隆の若松屋や、枕もさかゆる萬も繁る。
柴垣のひたてられて、もはや此町にや住まれ申すまい。（正本記）

柴垣柴垣、柴垣越で雪の振袖ちらと見た。振袖、雪の振袖ちらと見た。（絵竹初心集）

【參考】嬉遊笑覽〇日本歌謠史高野辰之〔高野〕

支麥の徒（しばくのと）「乙由」（おついう）を見よ。

柴車（しばぐるま）小説集【作者】川上眉山【刊

て戀を思ひ切る。三郎も亦お鶴を思つたが、許されない戀なので、遂に歌子と結婚する。ひとり取殘された武夫は毎日のやうにお鶴の心を動かさうとする。母の貞子は、それと知つて、二人の將來のためその間を割かうとし、お鶴の緣談を進める。武夫は怒つて兩親と口論を續けた。お鶴は心の痛みに堪へかねて病臥し、一生結婚せぬと決心した。武夫は日毎

寛政五年（一七九三）五月二十七日歿す。享年四十四【墓所】麻布區櫻田町妙善寺【法名】全交院舞山日翁【閲歷】江戸芝西の久保神谷町に住んだ。父の吉川氏は富裕な商人であつたらしく、全交は大藏流の狂言を習ひ、恐らくはそれが緣となつたのであらう、水戸藩山本藤七の嗣となり、その家業をついだ。天才肌で、幼少にして通人はだしと鳴瀧音人（なるたきのおとんど）（別項）

逸話結（別項）〇當世大通傳（別項）〇一醉女智（別項）〇吉原傳授仕習鏡（重政畫風）〇煙霞蕎麥屋眞木（政美畫）〇冷水灰毛猫（清長畫）〇交古世むかし噺（清長畫風）（以上天明元年刊）〇風雷神天狗落種（政美畫風）（天明二年刊）〇茶羅通人（清長畫）（天明三年刊）〇闇羅三茶替（重政畫風）（天明四年刊）〇大悲千祿本（別項）〇馬鹿文盲鬪會（重政畫）（以上天明五年刊）〇芝全交實惠

月島岸の若松繁や。枝もさがめる霜も雪る。
柴垣のひたてられて、もはや此町にや住まれ申すまい。（正岑記）

柴垣柴垣、柴垣越で雪の振袖ちらと見た。振袖、雪の振袖ちらと見た。（綾竹初心集）

【參考】嬉遊笑覽〇日本歌謠史高野辰之〔高野〕

支麥の徒（しばくのと）「乙由」（おつゆう）を見よ。

柴車（しばぐるま）小說集【作者】川上眉山【刊行】明治二十七年八月、春陽堂。【内容】本書は「撫子」及び「かぢり舟」といふ短篇小說及び「潢潦」と題した俳文を收めてある。「撫子」は名人肌の繪師小倉芳州がその祖父及び妻と貧しいながら平和に生活してゐるうち一子富士太郎が生れた。ところが一年餘の後、愛兒は病のため日々に衰へて行くので一同心痛し、平癒を神に祈つたりした。芳州は愛兒の病が氣になつて繪筆は澁りがちであつたが、その命が旦夕に迫つたのを知り、一方ならず心を痛める。妻は子を抱いて醫師の許へ出かけ、芳州はひとり家にゐて繪を描いてゐて、うとうと疲れて眠つた夢に、愛兒の病が癒えたと見たが、突然妻の聲に目覺めるともう事切れてゐたといふ筋。「かぢり舟」は薄命の佳人お鶴を中心として描いてゐる。彼女は魚屋久藏の孫娘で、十四歲の時久藏に死なれてからは孤兒となり、家主の知人山尾義直のもとに引取られた。美しく且つ聰明な彼女は主人夫婦に可愛がられ、長女の歌子とも親しんだ。そのうち、同家の長男武夫が失戀に悶々するのをお鶴が慰めると、武夫はお鶴に戀する。折柄山尾家の知人木村三郎が妹と共に上京來訪したが、お鶴は一目、三郎を見て思ひを焦がす身となつた。併し三郎は歌子と約婚の間柄と聞き、恩義ある家のため苦しい胸を抑へて戀を思ひ切る。三郎も亦お鶴を思つたが、許されない戀なので、遂に歌子と結婚する。ひとり取殘された武夫は毎日のやうにお鶴の心を動かさうとする。母の貞子は、それと知つて、二人の將來のためその間を割かうとし、お鶴の緣談を進める。武夫は怒つて兩親と口論を續けた。お鶴は心の痛みに堪へかねて病臥し、一生結婚せぬと決心した。武夫は日毎に衰へゆくお鶴を見て熱心に看護したが、彼女の病は重るのみであつた。「潢潦」には、「俳文摺小木辭」「百味譜」「酒正月」の三篇を收めてある。【批評】眉山の初期の作風を知るに足る程のものではない。唯その瀟洒な、艷のあふさはしい小說集であるが、別に取立てて言はれた筆致に見るべきものがある。彼の俳文「潢潦」は、也有・許六の風骨を得て、彼の一特色をなしたもので、後の「ふところ日記」（別項）の出現を、豫約したかの如き點に於て意義がある。

【高須】

司馬江漢（しばこうかん）「春波樓筆記」を見よ。

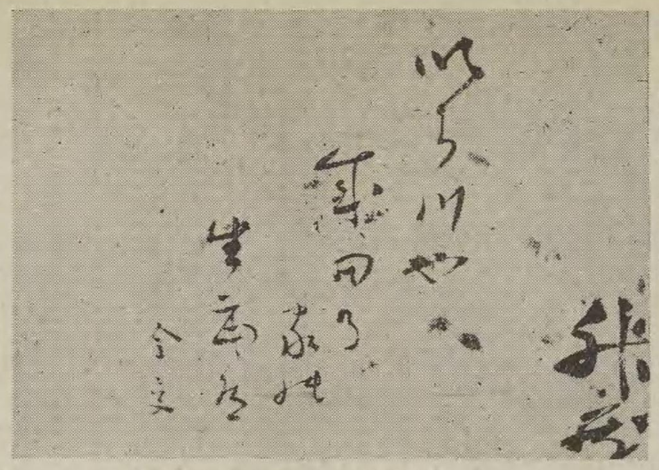
芝全交（しばぜんかう）黃表紙作者【姓名】山本藤十郎【別號】司馬全交・司馬交・芝全交坊・司馬亭【生歿】寬延三年六月十九日に生れ、寬政五年二月二十五日歿。享年四十四【墓所】麻布區櫻田町妙善寺【法名】全交院舞山日翁【閱歷】江戸芝西の久保神谷町に住んだ。父の吉川氏は富裕な商人であつたらしく、全交は大藏流の狂言を習ひ、恐らくはそれが緣となつたのであらう、水戸藩山本藤七の嗣となり、その家業をついだ。天才肌で、幼少にして通人はだしと鳴瀧音人（なるたきのおとんど）（別項）に言はれた程であつた。多才多能で、辯舌も巧みであつたらしい。その作者生活は僅かに十三年間に過ぎなかつたが、黃表紙作者中の第一人者であり、春町・喜三二・京傳（各別項）と伍し、特に才の働きは、春町・喜三二をぬく。時代の子として時代の精神を最も適した形式によつてよく表現してゐる。捌けた通人で、洒脫淡泊だが感受性は鋭い。趣味は高く、茶道を嗜み、香もやり、琴も巧みだつたらしい。常識が發達し、理解力も豐かであつた。交友は廣く、特に芝居・遊里方面に多く、人からは愛されてゐた。洞山三頓棒の會下に參禪したのは、寬政元年に妻に逝かれた爲めであらうか。養父藤七は安永六年に、嗣子善次郎は寬政八年に歿した。過去帳によると、この後も不幸が續いたらしい。【門人】芝甘交・芝賀交（深交）・芝光交等があり、式亭三馬は、遺言により全交を襲名すべきであつたが、故人の高名を穢さんことを恐れて差控へた由である。晋米齋玉粒は二代目全交を名乘り、他にも全交名の者がある。

（稿本戲作者考）

【作品】作品の主なものを次に擧げる。時花鶸兮茶會我（軍政書）〇鬼袋豐物語（以上安永九年刊）〇大通傳貫帳（軍政書風）〇通一解女智（別項）〇吉原傳授仕習鏡（軍政書風）〇燈籠蕎麥屋員木（政美書）〇冷水灰毛猫（清長書）〇交古世むかし噺（清長書風）（以上天明元年刊）〇風雷神天狗落種（政美書風）（天明二年刊）〇茶羅通人（清長書）（天明三年刊）〇闇羅三茶碧（軍政書風）（天明四年刊）〇大悲千祿本（別項）〇馬鹿文盲鬪會（軍政書）（以上天明五年刊）〇芝全交智惠程（政演書）〇茶歌舞妓茶自傘（政演書風）（以上天明七年刊）〇引返狸之忍田妻（政美書）〇拜壽仁王參（別項）〇親之敵現歟夢也（柳郊書）（以上寬政元年刊）〇俵藤太振出百藥（政美書）〇本能見世物（柳郊書）〇玉子の角文字（別項）（以上寬政二年刊）〇京鹿子娘泥鰌汁（豐國書）〇直讀見臺萩（柳郊書）（以上寬政三年刊）〇鼻下長物語（黃表紙名作二十三部を見よ）（寬政四年刊）〇十四傾城腹之内（軍政書風）（別項）〇白髮大明神御渡申（同上）〇尻採御用神（豐國書）〇年寄之冷水會我（豐國書）（以上寬政五年刊）〇全交法師常々草（軍政書風、實は京傳の作ならん）（寬政六年刊）〇素後壯雪信（遺稿、寬政十年刊）〇全交通鑑（讀本、遺稿、刊年未詳）。

【作風】安永九年（三十一歲）始めて全交署名の作品二部を出し、天明元年には七部、以後每年一二部づつ出したが、寬政五年には六部を出版した。黃表紙以外の作としては、「全交通鑑」などが知られてゐるが、一年後の天明元年の作品には傑作が多く、當時に於ける第一流の作となつてゐる。全交の黃表紙は遊里生活を取込み、洒落本的の色彩が强い。子供を目標とした寬政改革後の少數の作品の如きは、得意のものではない。遊里的材料と共に、常に趣向の骨子をなしてゐるのは、歌舞伎方面からのものであ

る。彼は狂言役者でありながらその影響と思はれるもの、或は謡曲から趣向したものは、歌舞伎方面のものに比較すると僅かである。全交の素材の取扱方には、出來る限り各種の材料を取込み、故意にプロットの混亂を來さしめ、漸次に統一を與へる手法と、初めから重心を定めて描いて行く方法とが二つながら屢々用ひられ、前者は初期に、後者は後期に多い。而して全交は前者を得意とし、屢々傑作を出してゐる。その作中には揶揄はあるが、爲政者への諷刺はない。寛政に入つてからは教訓物・敵討・おめでた物・子供向の物・廣告物等の傾向を持つた作品も作つた。そしてかゝる傾向から、未だ何等の展開をも示さないうちに彼は世を去つたのである。その作風には喜三二や春町・通笑（各別項）の影響も認められる。洒落に長じた點は黄表紙作者中稀に見る所である。文章も奔放洒脱で才氣が溢つてゐる。



芝全交筆蹟（蜀山判取帖）

また後年の滑稽本風に言葉の寫實を行つてゐる。漢文をも屢々文中に挿入して好笑の材料とし、童謡も頻りに用ひ、子供の發音の寫實に特色がある。全交の作と確定し得られる黄表紙三十九部。「菊壽草」（別項）に六部、「岡目八目」「江戸土産」（各別項）に各二部の批評がのせてある。挿繪は重政・政演が多く、傑作は多くこの二畫工との協力によつてゐる。かくて全交は春町が高め、喜三二が深めた黄表紙を、趣向・態度・手法・世界等に於て展開の最高頂に達せしめた功を、山東京傳と共に擔ふものである。

【小池】

芝全交夢寓書（しばぜんかうゆめのむだがき）　黄表紙三册　十五丁十八圖【作者】式亭三馬【畫工】歌川豐國【名稱】夢物語りのむだ書きに、生死を夢と觀ずる心持をからませて、芝全交追善の意味を持たせてゐる。【刊行】寛政九年和泉屋刊【題材】「芝全交知恵程」（全交作、政演畫）及び地獄・極樂の佛説。

【梗概】漢文の自序。（一）文殊・普賢の二菩薩が智慧問屋を開いて、人々に智慧を授ける。（二）司馬溫公の智慧袋が日本へ飛び去り、溫公はうつけ者となる。（三）それは佛が帳面の附違ひからで、溫公の智慧を得た全交は智慧滿々となる。（四・五）阿彌陀如來は、極樂の景氣恢復に一狂言書いて貰ひに來、一つ案じてくれと賴む。（六）地獄の閻魔大王は借金で首が廻らず、阿彌陀が極樂へ同道する全交を奪つて、一狂言書かせようと企てる。（七）待伏して奪ひ、彌陀・閻魔の大達引となる。（八）全交が調停に立ち、草雙紙や浮世草紙などの講釋で皆を通にする。（九）全交三途の川に新地を埋立て、興行物で賑はす。（十）天女が遊女となり極樂が繁昌する。（十一）地獄の立直しを閻魔は全交に賴む。（十二）全交の力で地獄は意氣になる。（十三）幕無地獄を案じて地獄樂が奢侈になるのを全交が戒める。（十四）工面よくなつた地獄を繁昌させる。（十五）全交娑婆に歸る。（十六）溫公は邵康節から我が智慧袋が全交の腹中にありと聞き、（十七）來りて掛合つてゐると、阿彌陀が現れて、問屋から又一つ智慧袋を取寄せ、等分にして與へる。（十八）全交の屠蘇機嫌の夢がさめる。

【解説】黄表紙作者として、偉大な立場を占めてゐる全交の死を題材とした作品で、「芝全交腹内」（芝山人盧呂利作、長喜畫、寛政六年刊）の後をうけて創作され、「芝全交智恵程」「全交法師常々草」（芝全交作、寛政六年刊）等と共に、競作者としての全交に關れてゐる作品である。全交の智慧を取扱つたことや、溫公を題材にした點に於て、三馬は、全交自身の趣向たる「芝全交智恵程」から出發して、黄表紙の天才を讃嘆哀惜し、追善する。しかも「芝全交智恵程」が萬八物であり、矛盾の滑稽に人を哄笑せしむるに反し、本書は「延壽返魂談」（山東京傳作　政演畫　寛政元年刊）の先蹤にならつて、取違ひから神佛を人間化する茶の手法に據つてゐる。挿繪中の全交の容貌は、「芝全交智恵程」よりも寫實味が濃く、全交の似顔によつてゐるらしい。三馬が全交の才を崇拜したことは本書にも現され、又彼の作品に親しんでゐたらしいことも窺はれる。

【小池】

芝廼屋山陽（しばのやさんやう）　狂歌師【本名】能勢嘉門【別號】大井千尋・山陽堂玦沙・奇應觀【閲歴】江戸芝將監橋馬場の前千村家の臣で、もと小島氏、後、能勢と改む。自記によると、初め萬象亭の門に入つて狂歌を詠じ、寢惚先生に從つて狂詩を學び、又菅江・橘洲の兩社中にも遊び、寛政八年四方側の判者に列し、文化十年京師に上つて栗の本狂歌所穗波家の御坐衆に加はり、後、宗匠號の免許を得たと述べてゐる。生歿の年は共に詳かでないが、天保元年尚齒會を開いた時六十八歳であつたと云ふから寶暦十三年の生れであらう。【著書】狂歌立雲集一册（寛政十一年刊）○布毛登濃夷歌一册（享和元年刊）○四方戯歌名盡一册（文化六年刊）○狂歌年代記（初編二編）二部（同年刊）○狂歌三十六家撰一册（文化年間刊）○臨詠東同風三册（天保一年刊）

【野崎】

暫（しばらく）　脚本　一幕一場（歌舞伎十八番

の一）【作者】初代市川團十郎【本名題】（惣方明勢揃宿）參會名護屋（別項）【初演】元祿十年正月江戸中村座「參會名護屋」第二番目、北野天滿宮社頭の場【解説】不破名古屋の世界で、東山家の後見役正親町太宰之丞（山中平九郎）が北野の社に雷丸の名劍を奉納するため、「大福帳」の繪馬を下さうとする時、暫と聲をかけ、不破伴左衞門（初代市川團十郎）が、これをとめて、大福帳の謂はれを述べ、遂に太宰之丞を殺かけて出た狂言があるのかも知れないが、古くからこれが最初とされ、今でもこれ以前に溯れないのである。【沿革】初代團十郎は、その後、數種の「暫」を演じたが、通説には二代團十郎が正德四年十一月中村座の「萬民大福帳」に景政が懸けておいた「大福帳」の繪馬に黒塚の老女（山中平九郎）が手をかけた時、鎌倉權五郎景政の役名で出て「暫」を勤めたのが、後世の「暫」の基準とされてゐる。併し「歌舞伎年代記」の記事は、その起因を同じく市川宗家に置いてゐるが、その證左を缺いてゐる。「歌舞伎年表」

の一。【作者】初代市川團十郎【本名】（生方明敷施宿）參會名護屋（別項）【初演】元祿十年正月江戸中村座「參會名護屋」第二番目、北野天滿宮社頭の場【解說】不破名古屋の世界で、東山家の後見役正親町太宰之丞（山中平九郎）が北野の社に雷丸の名劍を奉納するため、「大福帳」の繪馬を下さうとする時、暫と聲をかけ、不破伴左衞門（初代市川團十郎）が、これをとめて、大福帳の謂はれを述べ、遂に太宰之丞を說き破つて無事に「大福帳」を懸けるといふのが荒筋である。初演當時は勿論、後世のやうな拵へでもなく、又後世程の重要なものではなかつたので、寧ろその中心は大福帳のツラネで、この言立てが主要な條件でもあつた。この言立てを中心にして立役が公家惡を懲らすといふやうな筋立は、當時の狂言にもいくらも見られる。例へば元祿五年正月森田座所演「大福帳朝比奈百物語」や、同七年正月京都村山座所演「源氏武者譽勢力」等でも既に團十郎が演じてゐる。唯この脚本が最初とされてゐるのは、暫といふ掛聲のみで、偶然にも暫といふ掛聲を附加したのが、意外な舞臺效果を現はしたので、遂に今日までも傳存する主因をなしたのである。或はこの以前にも暫と聲を

［暫］のせりふ盡し（元文四年）

かけて出た狂言があるのかも知れないが、古くからこれが最初とされ、今でもこれ以前に溯れないのである。【沿革】初代團十郎は、その後、數種の「暫」を演じたが、通說には二代團十郎が角前髮で三度呼止めの「暫」を勤めたのは、享保二年十一月森田座の「奉納太平記」の時であり、その後二代團十郎は諸種の「暫」を演じてゐるが、後世、「暫」の基準とされた正統の型である角前髮に紅隈をとり、素袍に大太刀を佩き、中啓を持つてゐる形の大成されたのは元文元年十一月、河原崎座の「順風太平記」の時からであらう。次いで同三年十一月、市村座の「貢船太平記」所演の時、型を變じたもので、これが進化して現行の基準とされてゐる。併し「歌舞伎年代記」によるこの時の「暫」の扮裝及び型は、少しく疑問がある。現存する資料からいへば、十郎が正德四年十一月中村座の「萬民大福帳」に景政が懸けておいた「大福帳」の繪馬に黑塚の老女（山中平九郎）が手をかけた時、鎌倉權五郎景政の役名で出て「暫」を勤めたのが、後世の「暫」の基準とされてゐる。併し「歌舞伎年代記」によるこの時の「暫」の扮裝及び型は、少しく疑問がある。現存する資料からいへば、不破伴左衞門（初代市川團十郎）が、これをとめて、大福帳の謂はれを述べ、遂に太宰之丞を說き破つて無事に「大福帳」を懸けるといふのが荒筋である。初演當時は勿論、後世のやうな拵へでもなく、又後世程の重要なものではなかつたので、寧ろその中心は大福帳のツラネで、この言立てを中心にして立役が公家惡を懲らすといふやうな筋立は、當時の狂言にもいくらも見られる。例へば元祿五年正月森田座所演「大福帳朝比奈百物語」や、同七年正月京都村山座所演「源氏武者譽勢力」等でも既に團十郎が演じてゐる。唯この脚本が最初とされてゐるのは、暫といふ掛聲のみで、偶然にも暫といふ掛聲を附加したのが、意外な舞臺效果を現はしたので、遂に今日までも傳存する主因をなしたのである。或はこの以前にも暫と聲を

十一月、市村座の「和合一字太平記」に、三升の一文字を拔いて海老藏と和睦してよりこの系があり、その後三代團藏が寶曆十一年十一月、森田座の「神園生萬歲鉢木」に、長袴で勤めた如きもので、本形でなく氣味合の「暫」である。「草」は本形を略して種々の趣向によるもので市村鰕藏（後の九代羽左衞門）が寶曆十一年十一月、市村座の「壯士故郷錦」に井筒（濶卷）飛脚の文使ひ役で勤めた「奴暫」以來、諸種の工夫で勤めたもの。又四代瀨川路考が振袖姿で柿の素袍を着せた團十郎の人形を手に携へて勤めた「女暫」の如きものは草中の草であると說いてゐる。この中「眞」は、「參會名護屋」に端を發し、「萬民大福帳」に更新され、變遷進化して現行の「暫」に及ぶ本格の「暫」である。併し「行」と「草」とはその要領はほぼ盡してゐるが、その起因を同じく市川家に置いてゐないのは、未だよく「暫」の系統を探究してゐるとは云へない。卽ち「行」も「草」も二代團十郎によつて既に所演されてゐるからで、それ等によつてこの系もあると見るべきである。また四代團十郎以後もこれを勤めてゐる。これ等の例は枚擧に遑がないが、その中特に注目すべきは、市川家及びその門弟等で勤めた「奴暫」や「二重の暫」（最初僞暫、後に本格の暫が出る）や、女方が勤めた所謂「女暫」（後出）等である。併し現今では「女暫」以外は廢滅に歸した。【附記】「暫」の出端に用ひられる音樂は、古くは外記節で、享保に大薩摩節に改めて以後、現今までこれが通例となつてゐる。但し九代團十郎所演までは上演毎に新作された。またツラネは初演以來、現今に於ても上演毎

開壇梅檀燈樂（安永七年市村座）

傾向を持つた作品も作つた。そしてかゝる傾向から、未だ何等の展開をも示さないうちに彼は世を去つたのである。その作風には喜三二や春町・通笑（各別項）の影響も認められる。趣向に長じた點は黃表紙作者中稀に見る所である。文章も洒落調で才氣が溢つてゐる。

つて、一狂言書かせようと企てる。（七）待伏して奪ひ、彌陀・閻魔の大達引となる。（八）全交が調停に立ち、草雙紙や浮世草紙などの講釋で皆を通にする。（九）全交三途の川に新地を埋立て、興行物で賑はす。（十）天女が遊女となり極樂が繁昌する。（十一）地獄の立直しの全交に觸れてゐる作品である。全交の智慧

【解說】黃表紙作者として、偉大な立場を占めてゐる全交の死を題材とした作品で、「芝全交腹內」（芝山人盧呂利、長喜畫、寬政六年刊）の後をうけて創作され、「芝全交智惠程」「全交法師常々草」（芝全安作、寬政六年刊）等と共に、戯作者としての全交に觸れてゐる作品である。全交の智慧

集一冊（寬政十一年刊）○四方戯歌名盡一冊（文化六年刊）○和元年刊）○狂歌年代記（初編二部（同年刊）○狂歌三十六家撰一冊（文化年間刊）○戯訣東同風三冊（天保二年刊）【野崎】

暫 しばらく 脚本 一幕一場 ○歌舞伎十八番

に新作するのを慣例とする。

【女暫】「暫」を女で見せる趣向は、「劇代集」によると延享二年十一月市村座の「婦楠靨粧鑑」（作者津打治兵衞）に、二代芳澤あやめが楠女房菊水役で演じたのが最初と傳へる。併し通説では翌三年十一月、中村座の「天地太平記」（作者中村清三郎）に初代嵐小六が備後三郎妹九重役で勤めたのが初めで、請の亘新左衞門（市川海老藏）が、女道軒の額を外させようとする時、「暫」と掛聲して鶴菱の着附に掛素袍の形で出で、海老藏が筋隈の角前髪の顔を畫いたのを顔に當てて睨むといふ趣向であつた。その後各時代の名女方が諸種の趣向によつて勤めたが、後世の基準ともいふべきは寛政三年十一月河原崎座の「御影講妙法鉢木」（作者壻山金八）に四代岩井半四郎が、秋田城之助義景實は藝者お仲の役で勤めたもので、その扮裝は殆ど市川家正統の「暫」と同一であつた。而して弘化元年十一月市村座で、坂東しうか所演以來、中絶してゐたのを、明治三十四年十一月市村座で、「女暫」の名題の下に、五代中村芝翫（現中村歌右衞門）が巴御前の役名で復活した。現行のは扮裝はほぼ一定してゐるが、ツラネは「暫」同樣、上演毎に新作される。

【參考】歌舞伎年代記烏亭焉馬〇壽十八番歌舞伎狂言考 石塚豐芥子（新燕石十種第三）〇「暫」の型 林翠浪（舞臺と面影）〇「暫」の研究 伊原青青園・岡鬼太郎等（演藝畫報合同六ノ一二〇歌舞伎十八番の研究）〇しばらく 伊原青々園（同上一九ノ八）〇「暫」について 同上（九代團十郎「暫」鋼像除幕式記念頒布）〇歌舞伎十八番「暫」の年表 溫美清太郎（歌舞伎狂言往來）〇「暫」のツラネぞろへ（同上）〇歌舞伎劇說守護職治・秋葉芳美共編〇「女暫」の型三本打二（演藝畫報歌舞伎八二〇歌舞伎十八番）

女暫 川尻清潭（演藝畫報七ノ一）〇歌舞伎細見 飯塚友一郎（秋葉）

慈悲成（じひなり） 黃表紙・滑稽本作者・落語家【姓名】八尾大助。通稱、錺屋大五郎。【別號】親の慈悲成・櫻川慈悲成・芝樂亭・暫亭。【生歿】寶曆十二年に生れ、天保四年（一四九三）歿す。享年七十二【人物・閲歷】芝宇田川町に住み、初めは鞘師、後は陶器商とも言はれてゐ、又金工杉浦如泉の門弟で、則久と號した。櫻川杜芳晩年の門人で、杜芳の歿後に親の慈悲成を櫻川慈悲成に改めた。天明八年の處女作から天保三年に至る迄、四十五年の長い年月に、黃表紙・噺本・滑稽本・合卷等を創作したが、部數に於ては黃表紙が最も多く、噺本がそれについでゐる。多藝多才の江戸ッ子で、落語・茶道・茶番狂言・繪畫・狂歌などに、それぞれ優れた手腕を見せ、就中落語は初代烏亭焉馬（別項）と共に中興の位置に立つ。茶道を以て富豪や諸侯に召され、天才的な辯舌と、芝居がかりの身振りと、廣い世間と趣味とが、幇間的な生活をもさせた。櫻川甚好・同新孝・同全好・同善孝等が弟子或は孫弟子で、純然たる幇間となり、新吉原には彼の系統をひいて幇間が多い。五代目・七代目の團十郎とは親交があり、熱心な團十郎贔屓であつた。當時の一流の戯作者に比して修養は遙かに劣るが、才氣で間に合せ、必要に應じては先行作品を漁りもしたが、漢學は特に苦手であつたらしい。ただ「徒然草」には通じてゐた。初代豐國とは特に親しく、兄弟分の誼があり、共に茶番などをやつた。慈悲成の作品の挿繪が豐國一點張である點も、兩者の交情を語るものである。印章は寶珠で、寛政三年の「化物夜更顏見世」（黃表紙）からであらう。肖像は寛政三年の「御存高麗屋傳」（黃表紙）より天保四年の「延命養談數」（合卷風の噺本）まで、枚擧に暇のない程現はれるが、最後のものは老年の彼の風貌を窺ふに足りる。二代目慈悲成は實子で、大五郎と稱し、後年西の久保八幡前に住んだ。寛政五年に、鎌つ坊として、序に署名してゐる者らしい。

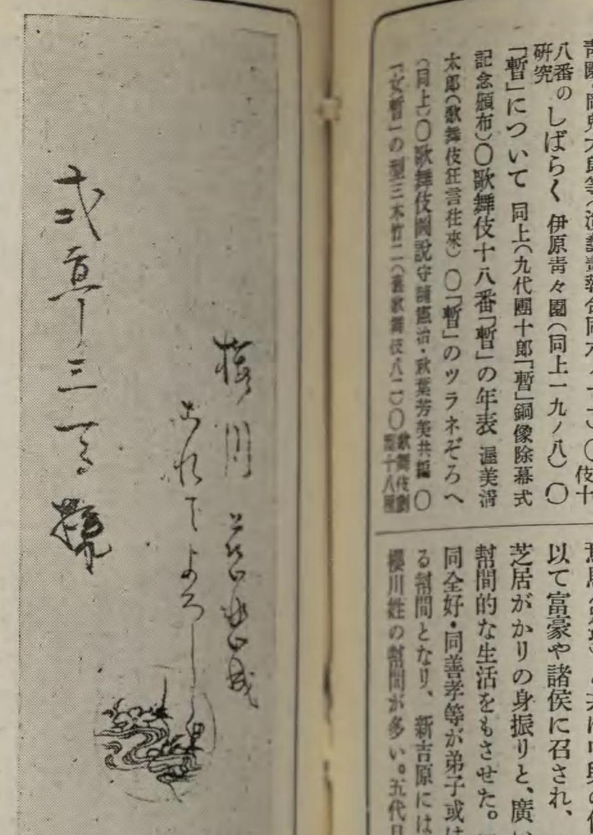
櫻川慈悲成（延命養談數）

【作品】〔黃表紙〕天筆阿房樂（豐國畫）（天明八年刊）〇御贔屓他之三升（同畫）〇二日若（同畫）〇以上寛政元年刊）〇持來餅者餅屋（同畫）（同二年刊）〇化物夜更顏見世（同畫）〇馬鹿長命子氣物語（同畫）〇今昔緣氣の白綾（同畫）〇御存高麗屋傳（同畫）〇壬生踊戯作面目（同畫）（以上同三年刊）〇夏浴衣團七絞（同畫）（同四年刊）〇猿尻金平牛房（同畫）〇朝日奈茶番實我（同畫）（以上同五年刊）〇繪本阿房袋（同畫）（同六年刊）〇桃太郎大江山入（同畫）（同七年刊）〇押强者何茂八文（同畫）（同九年刊）〇二文字鬼角文字（同畫）（同十年刊）〇作者根元江戸錦（別項）（同十一年刊）〇食言の大木（同畫）（同十二年刊）〇文盲先生珍學問（同畫）（享和三年刊）。〔噺本〕三才智惠（豐國畫）（寛政九年刊）〇木の葉猿（豐廣畫）（同十二年刊）〇滑稽好（子興畫）（別項）〇櫻川話帳絨（豐國畫）（以上享和元年刊）〇一口饅頭〇一粒撰噺種本（豐廣畫）（以上同二年刊）〇輕口噺（北溪畫、同三年刊）（別項）〇江戸錦（豐春畫）〇口豆飯（長喜畫）（以上文化元年刊）〇太平樂（同七年刊）〇延命養談數（國貞畫）（天保四年刊）。〔滑稽本〕滑稽素人芝居（豐國畫）（享和三年刊）（文化六年再刊）〇口豆飯茶番樂屋（國直畫）（同十三年刊）。〔合卷〕達磨大通花見毛氈（豐國畫）（文化七年刊）〇定紋花輪違（國直畫）〇壽五百八十七曲（國滿畫）（以上同九年刊）〇人面樹鼻の親玉（同畫）（同十一年刊）〇今昔虛實錄（二世豐國畫）（天保二年刊）。

【作風】〔黃表紙〕處女作の出來榮えと、それ以後の作品との間に大した開きがない。ただ彼の態度そのものが完成したに過ぎない。師匠の敎に從つて、喜三二・全交に作の標準を置き（處女作の「天筆阿房樂」はそれである）、更に京傳を初め他の作者からヒントを得て、普通の行き方で創作し、寛政三年には七部を出して最も油が乘つてゐる。而も慈悲成自身の個性は世間普通の黃表紙から離脫するが如き傾向を漸次に呈して來、「夏浴衣團七絞」が早く仕方噺の趣向を以て將來の噺本への轉向を暗示する。「繪本阿房袋」の內容は全く小噺本となり、「押强者何茂八文」は、小噺を杜芳の「色男拾人三文」（別項）風に綴つて、黃表紙の軌道に戻つたが、「三才智惠」に於て全く小噺本となり、爾來噺本と黃表紙とを同時に創作し、噺本は累年增加し、享和三年よりは滑稽本も加はり、黃表紙は享和三年までその作を續けた。慈悲成の黃表紙の特徵は、第一に演劇方面の影響が色濃く、第二には商賣に案じた作品が多く、大體に作品はお目出度物であり、絶間に

（三）黃表紙體裁の合卷の三種に分け

於て他奇がない。第三には、穩かで纏まつてゐるが綾がなく、内容が空疎で、杜芳ほどではないが噺本風の落しを持つものがある。寛政五年頃には子供を主とする態度が加はつて來てゐる。作中の人物、就中息子は、親の慈悲に溺れる不肖兒で、正直だが毒にも藥にもならず、彼自身の性格の反映であるらしい。直接的の教訓味は尠く、讀者に追從する態度は見られない。文章は平易・流暢で、駄洒落が多い。〔噺本・滑稽本〕落語作者と肩書し、又咄の文字を崩して花押としてゐ、この方面は慈悲成が最も得意とした態度が見える。「滑稽好」(別項)は、彼がこの方面で地歩を占めたことを語り、「無事志有意」(別項)の亞流である。慈悲成の噺本には、落ちを地口や洒落にとるものが多い。それも輕い程度で、穩かな滑稽を含み、焉馬(別項)ほど下がかりの滑稽がない。換骨奪胎による先行作品の摸倣も勿論あり、或は自作を落ちの部分だけ、再三流用してゐるが、落語作者と標榜するだけに自作が多く、且つ長いものは尠い。滑稽本中注意すべきは彼の體驗の記錄と見られる「滑稽素人芝居」で、迫眞力を持つが、茶番の準備のみに終つてゐる。後年の「花曆八笑人」(別項)の先蹤と思はれる。〔合巻〕慈悲成の合巻は、(一)普通の合巻、(二)外形は合巻であるが内容は噺本、(三)黄表紙體裁の合巻の三種に分けられる。(一)も内容は殆ど滑稽本で、(二)は單に形態ばかりで(一)(二)のいづれかに屬する。慈悲成には眞の合巻は書けず、噺本或は黄表紙の行き方である。諧謔を交へずに、人情・忠孝・節義などの、人生の嚴肅なる方面に觸れてゐない。各種の缺陷が認められ、結局、噺本内容の「延命養談數」などが作者本來のものであらう。〔小池〕



慈悲成筆蹟

詩病（しびやう）　漢詩【名義】詩の聲律上禁止されてゐる病である。病とは瑕疵の意で、謂ふ所の未だ善たらざるを稱して語病ありといふと同じである。【沿革】唐の皎然は、詩病として六迷を擧げてゐる。即ち虚誕を以て高古なりとなすこと、緩漫を以て沖淡なりとなすこと、錯りて意を用ふるを以て獨善なりとなすこと、詭怪を以て新奇なりとなすこと、爛熟を以て隱約なりとなすこと、及び氣力の弱きを以て容易なりとなすこと、これを避くべしといつてゐる。宋の嚴羽は五俗六忌を說いてゐる。五俗とは體・意・句・字・韻の俗惡なることをいひ、六忌とは語の直なること、意の淺なること、脈の露なること、味の短なること、及び音韻の散緩又は迫促なることを忌むをいふ。けれども普通に詩病といふ時は、梁の沈約の八病の說を指していふ。沈約は普通に四聲(韻參照)八病の首唱者として知られてゐるけれども、沈約の言に八體といふ語が「答北魏甄琛書」に見えてゐるけれども、八病といふ語は見えてゐない。蓋しその當初に於ては八體と稱せられてゐたのが、後世に至つて八病と呼ばれるやうになつたものである。【性質】八病とは、平頭・上尾・蜂腰・鶴膝・大韻・小韻・傍紐、及び正紐をいふ。而してこれは何れも漢魏六朝時代の詩の正體であつた五言詩の句に就いて立てた說である。今これを略說すれば、(一)平頭とは、上句の第一字と下句の第一字、上句の第二字と下句の第二字とは、平上去入(韻參照)何れでも同聲ではいけない。もし同聲であれば平頭の病を犯した事になる。(二)上尾とは上句の第五字と下句の第五字とが同聲ではいけない。もし同聲であれば上尾の病を犯した事になる。(三)蜂腰とは、同じ一句の中に於て第二字と第五字とが同聲ではいけない。もし同聲であれば蜂腰の病を犯した事になる。(四)鶴膝とは、第一句の第五字と第三句の第五字とが同聲なるを許さぬ。もし同聲であれば鶴膝の病を犯した事になる。(五)大韻とは、上下二句に於て、下句の第五字に韻を押す時は、その他の九字中には、この韻と同じ韻に屬する文字を用ひてはならぬ。もし同韻の文字を用ふれば、大韻の病を犯したことになる。(六)小韻とは、上下二句に於て、下句の第五字に韻を押す時は、他の九字の中に、韻脚とは異なる他の同韻に屬する文字を二つ用ひてはならぬ。もしこれを用ふれば、小韻の病を犯した事になる。(七)傍紐とは、同一の句のうち、又は上下二句のうちに於て、字を隔てて雙聲(韻參照)の文字を用ひてはならぬ。もしこれを用ふれば傍紐の病を犯す事になる。(八)正紐とは、上下二句のうちに於て、一紐(韻參照)の文字を用ひてはならぬ。若しこれを用ふれば正紐の病を犯してゐるといふ。【歌式との關係】和歌に於て歌式と稱するものがあるが、蓋しこの詩病に擬して作つたものである。濱成式(別項)に於て頭尾・遊風・遍身・胸尾といふものがある。頭尾は上尾に擬したもので、遊風は蜂腰に擬し、遍身は小韻に擬し、胸尾は大韻に擬したものである。又喜撰式に於て、岸樹といふものがあるが、これは平頭に擬したものである。【備考】古來學者の說をなすものは甚だ多いが、要するにこの八病は相當に根據があつて、全然否定することは出來ない。已むを得ざる場合は、時にこれを犯すとも、あながち妨げとはならぬといふことに歸する。

【參考】文鏡祕府論 僧空海 ○詩轍 三浦安貞 ○詩律初學鈔 梅室雲洞 ○詩格集成 長山貫 ○詩律兆 中井積善 ○詩律 赤澤一 ○詩式 唐 皎然 ○滄浪詩話 宋 嚴羽 ○藝苑巵言 明 王世貞 〔西澤〕

澀江抽齋（しぶえちうさい）　小說【作者】森鷗外【發表】大正五年一月十三日より、同年五月十七日まで東京日々・大阪每日兩新聞に連載。【刊行】鷗外全集第七卷所收【内容】「わたしの抽齋を知つたのは奇緣である。わたしは醫者になつて大學を出た。そして官吏になつた。然るに小さい時から文を作ることを好んでゐたので、いつの間にやら文士の列に加へられることになつた。その文章の題材を、種々の周圍の狀況のために、過去に求めるやうになつてから、わたしは德川時代の事蹟を搜つた。そこに武鑑を檢する必要が生じた。……この蒐集の間に、わたしは弘前醫官澁江氏藏書記と云ふ朱印のある本に度々出逢つたのが機緣

で、「經籍訪古誌」を書いた澁江道純が、「江戸鑑圖目錄」中に考證を記してゐる抽齋と同人たることを知つた。そして同じく醫者であり官吏であつて、しかも經書や諸子のやうな哲學方面の書をも讀み、歷史をも讀み、詩文集等文藝方面にも心を寄せた抽齋に、自己との相似を認め、また彼が哲學文藝に於て立派に考證家として樹立してゐる點を畏敬した。その上、抽齋が宋槧の經子を購めたばかりでなく、古い武鑑や江戸圖をも翫んだことが、同嗜の人としての馴染を感じさせ、親愛の情を抱かせるに至つたのである。作者はかういふ經路から、かういふ氣持で、飽くなき探訪追跡をつづけて、抽齋の人物・生涯を闡明しようと企てて遂に本篇を成したのである。——澁江道純、諱は全善、號を抽齋、小字を恆吉と云ひ、文化二年十一月八日、津輕家の侍醫の子として江戸神田辨慶橋に生れ、安政五年八月二十八日、五十四歲を以て江戸龜澤町に歿した。彼の一生に就いては、官途に於ける閱歷、學問上の業績のことは勿論、師弟交友の關係や家庭生活の微細な點に至るまで、一々考證して傳へられ、よくその人物・思想・性向・風貌を現前せしめると共に、その環境や背景たる時代も明瞭に寫し出されてゐる。しかもそれは抽齋一人の上に行はれてゐるばかりではなく、夫人五百の如きも、宛らその聲音に接するが如くに活寫されてゐる。その上、「しかし古人を景仰するものは、其苗裔がどうなつたかと云ふことを問はずにゐられない」として、抽齋の生涯を記し畢つても筆を投ずることなく、彼の子孫・親戚・師友のなりゆきを記し、繼嗣保(成善)、娘陸(枠屋勝久)等に關してゐる實玉・實祖華・香爐等の事物。ポーロの劍、ネプチューンの三叉鉾、ペテロの鍵等。持物の美的意義は、それが單なる附屬物として事物的意味を表出するのでなく、主要形象と內面的關係に於て結合し、形象の本質的意味を表出するに役立つところにある。〔村田〕

四部の博士　しぶのはかせ　【解說】四道の博士ともいふ。四部又は四道とは、大寶令にて制定せられた大學(別項)の學科で、明經道・紀傳道・明法道・算道の四部門をいふ。博士とは、それぞれの學業の教授學生の課試を掌つた官である。大學寮にはこの四部の博士があり、陰陽寮にも陰陽・曆・天文・漏刻の博士があつた。但し普通に四部の博士といへば大學寮の博士を指す。卽ち明經博士・紀傳博士・明法博士・算博士をいふ。以上の外に、音博士・書博士・非業ノ博士・遙授ノ博士等があつたが、これ等は四部の博士以外のものであつた。非業ノ博士は、非受業ともいひ、試驗の合格者ではないが、素讀のみを試驗して式部省に採用され、後に諸國の國學(別項)などに用ひた者をいふ。この博士は學事に關係することを得ず、常に俗務に從事する書記の如きものであつた。遙授ノ博士は後世京都にゐて然るべき官職に就き、地方の國學の博士を兼攝してゐる者を指して稱したので、これは博士の祿を收得するためのものであつた。(大學參照)〔山岸〕

澁よつ手　しぶよつで　俳諧作法　一册　【著者】鈴木道彥　【刊行】文化七年　【諸本】道彥七部集に編入。付合作法全集(俳諧文庫)所收　【內容】連句の附味、又は發句の修辭等に就いて啓蒙的解說を記したものである。〔賀川〕

思辨的美學　しべんてきびがく　「形而上學的美學」を見よ。

字母　じぼ　「韻鏡」を見よ。

史邦　しほう　「史邦」を見よ。

四方太　しはうだ　俳人　【姓名】坂本四方太　【別號】文泉子・角山人・虎穴生　【流派】日本派　【生歿】明治六年二月四日鳥取縣岩井郡大谷村に生れ、大正六年五月十六日東京市本鄉區駒込動坂町に腸胃を病みて歿す。享年四十五。　【法名】文莊院天岳守万居士　【墓所】東京駒込染井墓地　【閱歷】第三高等中學校・第二高等學校大學豫科を經て、明治二十九年東京帝國大學國文學科に入り、三十二年卒業。三十三年大學助手に任ぜられ、附屬圖書館に兼勤し、三十六年文科大學助教授兼司書官に任ぜられた。大正二年六月病のため退官して靜養に努めた。初め二高にあつて、同學の碧梧桐・虛子と共に句作に入り、二十九年上京、始めて子規を訪ひ指導を受けた。子規の叙事文(後の寫生文)の提唱により、三十二年十一月「根岸草廬記事」を書いて、子規の激賞を受けてから寫生文に熱中し、當時每月病子規の枕頭で開かれた文章會に光彩を放つた。三十四年四月發行の「寒玉集」第二編には、「田園日記」以下四篇の作が收められ、三十五年十月から「ホトトギス」誌上に寫生文の選をなした。三十六年九月「寫生文集」を編して、「寒玉集」以後「ホトトギス」誌上に現はれた諸家の作を收錄し、自作三篇を收め、三十九年虛子と共著の「寫生文集帆立貝」を公にした。當時寫生文の特色がやゝ一般に認められ、就中漱石・虛子・節等の作品が世間に喧傳せられるに及んで、四方太は「寫生文に對する迫害」なる一文を草して、寫生文をして飽くまでも子規の提唱當時の如き敍事文に止まらしめようとした。三十六年九月「寫生文集」以後「ホトトギス」誌上に現はれた諸家の作を收錄し、自作三篇を收め、三十九年虛子と共著の「寫生文集帆立貝」を公にした。當時寫生文の特色がやゝ一般に認められ、就中漱石・虛子・節等の作品が世間に喧傳せられるに及んで、四方太は「寫生文に對する迫害」なる一文を草して、寫生文をして飽くまでも子規の提唱當時の如き敍事文に止まらしめようとした。卽ち子規以來養ひ來つた寫生文の技倆に據つて寫生文を擴充して行かうとする虛子等の文を目して廣義の寫生文と見做し、自らは飽く迄

も子規以來の寫生文の眞を守らうとした。四十年「續寫生文集」を編し、「寫生文雜話」を附錄としてその主張を明かにした。併し子規歿後の四方太の作品の中では、ただ「夢の如し」(明治四十一年刊「新寫生文」所收)の一篇が見るべきものであつた。寧ろ「ホトトギス」誌上の寫生文の選者として後進の誘導に努力した點に功績が多かつた。

【參考】ホトトギス第二十卷第十號(諸家の追

編輯して多くの門人を養成し、長くアララギ派の重鎭となつてゐた。【著作】【歌集】山上湖上(太田水穗と合著)○馬鈴薯の花(中村憲吉と合著)○切火○氷魚○太虛集○島木赤彥選集(別項)○十年○柿蔭集(別項)○歌道小見(別項)○萬葉集の鑑賞及び其の批評等がある。以上の外「赤彥童謠集」第一・第二・第三。「島木赤彥全集」がある。【批評】初め新體詩人として活動し、山百合の名と共に、その特色と長所

筑摩郡神坂村(現在南安曇郡)に生れた。父の名は正樹、平田篤胤の息織胤に師事した國學の研究家であつた。九歲の時東京に遊學。暫く高瀨氏に嫁した姉園子の許に在り、後に吉村忠道の家に移つた。以後その家に育つて三田英學校・神田共立學校を經て、明治學院に入學、明治二十四年、二十歲で同校卒業。在學當時牧師木村熊次に洗禮を受けた。卒業後、巖本善

で死去した。同年「一家」下卷を脫稿。越えて大正二年(四十二歲)五月、神戸から佛國西の旅に上つた。翌三年歐洲大戰に際會し、動亂を佛國中部リモオジュに避けた。大正五年(四十五歲)、戰時不安の裡に三年間の巴里を去つて歸朝した。翌六年、旅行以前に着手した「櫻の實の熟する時」を完成した。翌七年、「新生」上卷に着手し、同八年、同下卷脫稿。大正十一年

も子規以來の寫生文の氣を守らうとした。四十年「續寫生文集」を編し、「寫生文雜話」を附錄としてその主張を明かにした。併し子規歿後の四方太の作品の中では、ただ「夢の如し」（明治四十一年刊「新寫生文」所收）の一篇が見るべきものであつた。寧ろ「ホトトギス」誌上の寫生文の選者として後進の誘導に努力した點に功績が多かつた。

【參考】ホトトギス第二十卷第十號（諸家の追憶談收載）　【石井（庄）】

仕舞（しまひ）「能樂」を見よ。

姉妹語（しまいご）「語族」を見よ。

島木赤彥（しまぎあかひこ）歌人【本名】久保田俊彥。前姓、塚原【別號】伏龍・山百合・柿人・柿の村人・柿蔭山房主人等。【生歿】明治九年十二月十六日長野縣上諏訪町に生れ、大正十五年三月二十七日、下諏訪町高木の自宅にて胃癌で歿した。享年五十一【流派】正岡子規系統、アララギ派。伊藤左千夫門人【閲歷】

島木赤彥

明治三十一年長野縣尋常師範學校を卒業し、大正三年三十九歳に至る十六年間小學教育に從事した。その間に新體詩を「文庫」（別項）等に發表した。次いで正岡子規の唱道した根岸短歌會の歌風を慕ふやうになり、後、專ら伊藤左千夫に師事するに至つた。その作は概ね雜誌「馬酔木」「アカネ」「アララギ」等に發表されたが、なほ信濃の友人と相計つて雜誌「比牟呂」を發刊した。大正三年東京に上り、歌道に專念し、且つ雜誌「アララギ」を編輯して多くの門人を養成し、長くアララギ派の重鎭となつてゐた。【著作】【歌集】山上湖上（太田水穗と合著）○馬鈴薯の花（中村憲吉と合著）○切火○氷魚○太虛集○島木赤彥選集（別項）○十年○柿蔭集（別項）○歌道小見（別項）○萬葉集の鑑賞及び其の批評等がある。以上の外「赤彥童謠集」第一・第二・第三。「島木赤彥全集」がある。【批評】初め新體詩人として活動し、山百合の名を以て、その詩作を發表してゐたが、短歌の製作をなすやうになつてからは、專ら子規・左千夫の考へを追尋し、淺薄な主觀的言語を斥けて寧ろ客觀的に行かうとした。この傾向は、歌集「氷魚」の一面に最もよく表はれ、作歌の信條として寫生を說いたのもその故である。寫生とは事象の核心を捉へることであり、寫生道は感情活動の直接表現をなす唯一の道だとも說いた。又作歌に際して全心的の集中といふことを說き、それを釋明する東洋國の鍛鍊道を以てし、その言說は極めて倫理的であつた。彼の歌風はこれを凡そ三期に分つことが出來る。第一期は新體詩から短歌に移り、左千夫・長塚節等の導きのもとに專心向上した時代で、この歌風は明治四十年頃までに一先づ完成したと謂つてよい。第二期は「馬鈴薯の花」から「氷魚」の初期に至る迄で、世運の變化に連れて歌風に動搖を來した時である。第三期は赤彥調の完成時代で、「氷魚」の後半から「太虛集」「柿蔭集」の歌がそれを代表してゐる。彼の晩年の作は、森嚴沈痛に加ふるに人麿風の雄大なる歌調を以てしたが、それが「柿蔭集」になると、もつと靜寂平淡なものに移つていつた。【齋藤（茂）】

島崎藤村（しまざきとうそん）小說家・詩人【本名】春樹【閲歷】明治五年二月十七日、長野縣西筑摩郡神坂村馬籠驛に生れた。父の名は正樹、平田篤胤の息鐵胤に師事した國學の研究家であつた。九歲の時東京に遊學。暫く高瀨氏に嫁した姉園子の許に在り、後に吉村忠道の家に移つた。以後その家に育つて三田英學校・神田共立學校を經て、明治學院に入學、明治二十四年、二十歲で同校卒業。在學當時牧師木村熊次に洗禮を受けた。卒業後、巖本善治の「女學雜誌」（別項）に飜譯をよせ、同じ寄稿家の北村透谷と相知つた。同二十六年、二十二歲で雜誌「文學界」（別項）の創刊に與り、初めて文學生涯に入つた。この年教會の籍を退き、明治女學校の教職をも辭し、自ら恩人とよぶ吉村の家を出て漂泊の旅に出た。二十七年透谷死去。二十九年（二十五歲）東北學院に赴任。翌年詩集「若菜集」を出し、續いて「一葉舟」「夏草」を刊行した。三十二年二十八歲の時、信州小諸義塾に赴任。この年函館の人秦冬子と結婚した。翌年「落梅集」を出した。この頃、詩より散文に移るべき決意が動き、「千曲川スケッチ」の稿を作りはじめた。小說の試作、「舊主人」を出して發賣禁止を受け、續いて「嵐草履」「水彩畫家」等を發表し、一方、「藤村詩集」を刊行した。三十七年（三十三歲）に、「破戒」の稿を起し、翌三十八年、七年ゐた小諸を去つて上京完成、四十年自費出版にて刊行した。翌四十一年「春」を發表、四十三年「家」上卷に着手。その翌四十四年（三十九歲）、妻冬子が四人の子女を殘して三十三歲で死去した。同年「家」下卷を脫稿。爾來大正二年（四十二歲）五月、神戸から佛國西の旅に上つた。翌三年歐洲大戰に際會し、動亂を佛國中部リモオジュに避けた。大正五年（四十五歲）、戰時不安の裡に三年間の巴里を去つて歸朝した。翌六年、旅行以前に着手した「櫻の實の熟する時」を完成した。翌七年、「新生」上卷に着手し、同八年、同下卷脫稿。大正十一年（五十歲）「ある女の生涯」を書き、透谷全集を改訂出版した。翌十一年一月より十二月に亙つて藤村全集十二卷を刊行した。一方同人組織にて婦人雜誌「處女地」を自ら主宰編輯、且つ經營し、新しき文藝とフェミニズムの機運をつくるべく努めた。同年末同誌廢刊。又十二年春より重患にかゝり、八ケ月にして全癒した。大震災にあひ感ずる所が多かつた。十三年、「三人」及び「伸び支度」を書いた。翌年「明日」を書き、又「藤村讀本」六卷を少年期より青年期に移る頃の年若き人々のために編んだ。十五年（五十五歲）、「嵐」「食堂」を發表した。昭和二年、小說集「嵐」出版。又「分配」を書き、夏は山陰地方に旅し、紀行「山陰土産」を書いた。昭和三年（五十七歲）頃より所謂第五の長篇小說「夜明け前」の用意にかゝつた。同十月加藤靜子と結婚。同四年「中央公論」四月號より年四回づつ「夜明け前」の連載を始め、同七年一月同第一部完成、二月新潮社より刊行。爾來その稿をつづけて今日に及んでゐる。

島崎藤村

【著作】藤村全集十二卷がある。【詩集】若菜集○一葉舟○夏草○落梅集（以上各別項）○藤村詩集（明治三十七年刊、以上の詩集をまとめたもの）。【小說】水彩畫家○破戒○並木○春○家○櫻の實の熟する時○新生（以上各別項）○ある女の生涯○三人○伸び支度○明日○嵐（別

かし古人を景仰するものは、其苗裔がどうなつたかと云ふことを問はずにゐられない」として、抽齋の生涯を記し畢つても筆を投ずることなく、彼の子孫・親戚・師友のなりゆきを記し、繼嗣保（成善）、娘陸（枡屋勝久）等に關しては、大正五年即ち抽齋歿後五十七年に至るま

三卷【詩風】その詩は行雲流水の趣があるが、時に纖巧に墮するものあるを憾む。【佐久】

持物（ちぶつ）藝術論【英】attribute【解說】知的表象的象徵の一種。宗教藝術に多く見られるもの。例へば佛教美術の諸佛が持つてゐる寶玉・寶相華・香爐等の事物。ポーロの劍、

七部集に編入。付合作法全集（俳諧文庫）所收【內容】連句の附味、又は發句の修辭等に就いて啓蒙的解說を記したものである。【賀川】

思辨的美學（しべんてきびがく）「形而上學的美學」を見よ

字母（じぼ）「韻鏡」を見よ。

史邦（しほう）は「史邦」を見よ。

四方太は「寫生文に對する迫害」なる一文を草して、寫生文をして飽くまでも子規の提唱當時の如き敍事文に止まらしめようとした。即ち子規以來養ひ來つた寫生文の技倆に據つて寫生文を擴充して行かうとする點等の文を目して廣義の寫生文と見做し、自らは飽く迄

項)○食堂 ○分配(嵐參照)○夜明け前等。〔短篇小說集〕綠葉集(明治四十年)○藤村集(同四十二年)○食後(同四十五年)○嵐等。〔紀行・小品〕千曲川スケッチ○佛蘭西だより○飯倉だより(以上各別項)○伊豆の旅(明治四十一年)○熱海土産(大正十三年)○震災記「子に送る手紙」(大正十二年)○山陰土産(昭和二年)。〔童話集〕幼きもの へ○ふるさと○をさなものがたり。これ等の童話は佛蘭西の旅の前後から書いたもので、簡素な、而も日常平凡の現實生活から材料を得たものが多く、作者自身が幼いジネレーションに語りかけるといつたやうな作である。又後に、藤村讀本・藤村カルタ等を編んだ。

【業績】〔小說家として〕明治中期以後現代日本文藝の歷史は、一言にして言ふならば現實主義發達の歷史である。浪漫的の時代以後、詩の發達が著しく停滯し、近代的戲曲の發達が同じく萎微したのもその半面の現象で、現代文藝が散文藝術、殊にノベルを主流とした發達の歷史を辿つて來たのはこの故に外ならぬ。若くして「文學界」一派の浪漫的の詩の運動によつて文藝界に現はれた藤村が、「千曲川スケッチ」に初めてそれを試み、「破戒」に最初の叫びをあげた散文藝術と現實主義への轉向は、現代日本文藝とその社會的背景との發達と變化につれて、その現實主義の內容及び藝術表現の技巧と文體の上にも幾何かの進化の時期を劃してゐる。藤村の生活とその藝術表現の歷史を大略區劃づけて、

(一)「藤村詩集」の時代(浪漫的の時代)
(二)「破戒」「春」「家」の時代(自然主義の時代)
(三)「新生」前後の時代 (新現實主義自覺の時代)
(四)「嵐」の時代(現實主義完成の時代)
(五)「夜明け前」の時代。

と見ることも出來る。この間の變化は、極めて徐々に且つ若干の過渡の時代を經てゐることは言ふまでもない。藤村の生活と思想とその藝術表現の歷史は、いはば現代日本の文藝社會の歷史の、一個の摸型であり象徵である。就中、彼の文體の歷史的の變化について見ても、その內容の現實主義の發達、進化について見ても、この事は言はれ得る。藤村が新しく着手した「夜明け前」の內容と文體と、その藝術表現とが在來の彼の生活と、その藝術表現の集大成であり、窮極の境地であるべきことは想像される。彼自ら「夜明け前」の大作について、「たゞこれが第五の長篇小說であり、私はまた成るべくやさしい平談俗語をもつてこれを綴るであらうことが言へるのみである」(昭和四年一月「中央公論」)と書いてゐる。半世紀餘に亙る生活によつて、藤村は自分自身に一つの歷史を經驗して來た。彼は時代と社會の發達と進化を自ら目睹し且つ經驗して來た。「夜明け前」が一面自身の生活して來た時代と社會の歷史的描寫であらうことだけは、ほぼ想像される。一方に、藤村の短篇中にはこれ等の長篇小說の註解であり、習作である一面を有つものも少くない。獨立した作品としては、これ等の長篇に對照してそれへの單なる道程とし、基礎としてのみ存在するに過ぎない作さへもある。〔以上武藤〕

〔詩人として〕藤村の發足は、雜誌「文學界」であり、その生命はこの雜誌と終始し、青春期の感化者の最大なるは友人北村透谷で、透谷は最も早く身を以て日本浪漫思潮の犧牲者となつた。藤村詩の新鮮と想像力と異彩趣味とは「文學界」そのものの獨擅場であり、先輩にしてこの魅力を體感してゐたのは僅かに森鷗外一人であつた。藤村は明治新體詩を最初に「藝術」にまで生育せしめた人で、彼あつて以來、人々は新體詩の藝術性を尊崇する所以を知つた。「秋風の歌」はそれであり、「小諸なる古城のほとり」はそれである。が、その詩的發聲は、その青春の逝くと共にその音を止めた。自ら青春を葬るの志は、「千曲川旅情のうた」にも表はれてゐる。藤村が蘆笛のうめきのやうに囁いた詩聲は、今迄にない新しい、ほのかな、自由な哀泣であつた。晚翠と共に西洋らしいハイカラな歌口を示してゐながら、兩人とも日本らしい傳說的な感情美の要素を含んで人の心情を刺戟した。これ兩人がよく時代の情念の好代表たり得た所以である。柔媚なれど複雜な背景に立つ藤村の詩は、雄健なれど單純な素質に基く晚翠の詩よりも長く感化を與へた。聲高に放歌せられた晚翠の詩は學校々歌にその痕をとゞめたが、感傷して微吟せられた藤村の詩は、後の泣菫・有明等の多くの詩人を生んだ。藤村の語法は新國文の提唱に多く感化せられて起り、獨自の詩風を發揮して後の殆どあらゆる詩人に、大きく永い影響を與へてゐる。藤村は明治三十年代前半期の代表詩人として晚翠と並稱せられるが、その詩は藤村一人から見れば、二十年代末期からの勞作であり、三十年代後期には既に散文に轉じてゐたけれど、畢竟藤村は生涯を通じて詩人であり、抒情詩で歌つてゐる如く散文小說に於ても隨所にその詠嘆を示してゐる。卽ち詩人の小說であり、散文詩であり、如何に自然主義藝術のモットオを旨としてその客觀作風に感化せられても、彼は飽かに客觀しながらなほ小聲に微吟する事をやめない。これが長所であり缺陷でもある。とはいへ「藤村詩集」一卷は凡そ青春そのものの價値の如く、普遍的であり、淸らかであり、夢見心地であつた。この點彼の詩は不朽である。が、その藝術價は絕對的に見るよりも史的に相對的に飽くまでも置かねばならぬ。蓋し彼の詩は彼の賦才の最大限を發揮して餘りあるほどのものではなかつたからであり、詩才圓熟せざるに散文に轉じた爲めである。なほ一つ、彼がその詩と同時にものした美文は、散文詩の要求から生じた詩的欲求の散文的體現で、これに於ても上田敏・內海月杖・鹽井雨江などと共に、明治時代の散文史・詩史の上に注目すべき一種の寄與をなしてゐる。〔以上日夏〕

【參考】明治文學史岩城準太郎○明治大正詩史日夏耿之介○時代文學史高橋淡水○新體詩史岩野泡鳴○藤村の歩める道山崎斌○島崎藤村先生の足跡水上瀧太郎

島田一郎梅雨日記 しまだいちらうさみだれにつき 小說 五編十五册 【著者】岡本勘造(起泉)【畫工】櫻齋房種 【刊行】明治十二年六月—十月 【解說】石川縣人島田一郎・長連豪等が明治十一年五月十四日、時の參議兼內務卿大久保利通が參朝の途中を要擊して、これを東京紀尾井坂に暗殺するに至つた事件の顚末を、半ば空想を交へて記した作である。征韓論に敗れて政府を退き、故山に還つてゐた西鄕隆盛の高風を慕うてその後を追つたのは、此木小次郎(後に長連豪)で、次いで島田も官廳の要務で鹿兒島に下り、二人親しく西鄕の門に出入し、私學校の生徒とも交際する折柄、小次郎が父母病氣のため歸國の已むなきに至つたのは明治九年の一月で、次いで一郎もその年の冬に

は鄕里に歸つて來た。それより二人が中心となつて大事を企つるに至つた。本書には憚る節があるとして斬奸趣意書は記載してゐないが、その罪狀五箇條目を擧げてゐる。曰く、公議を杜絕し民權を抑壓し以て政事を私するその罪一。法令設施請託公行恣に威福を張るその罪二。不急の土工を起し無用の修築を事とし以て國財を徒費するその罪三。慷慨忠節の士を疎斥し憂國敵愾の徒を嫉忌し以て內亂を釀成するその罪四。外國交際の道を誤り以て國權を失墜するその罪五。その全文は罫紙十三枚、執筆者は同縣士族陸義猶といふものであつた。兇徒六人は直ちに自首して、斬に處されたのが同年七月二十七日、死體は谷中天王寺に埋葬された。

島田沼南（しまだせうなん）　評論家　【本名】三郎　【生歿】嘉永五年十一月歿す。享年七十一　【閲歴】江戸旗本の家に生れ、後、橫濱の島田豐寬の養子となつたが、本姓を鈴木と云つた。最初、昌平黌に學び、轉じて沼津の兵學校に入り、田口卯吉（鼎軒）と相知つた。上京後、大藏省附屬英語學校に學び、大學豫備門に入つたが、明治七年、聘せられて橫濱毎日新聞主筆となつた。その頃から政治經濟について一家の見を有し、立憲政治の必要なることを力說した。かくて新聞記者生活を送るうち、陸奥宗光に學才を認められ、元老院小書記官となつた。同十四年大隈重信と共に、官を去つて改進黨に入り、熱心に黨務に從事したが、その前に彼は沼間守一に迎へられて、今迄の寄稿家から東京毎日新聞の主筆となり、同四十二年まで同紙を經營して健筆を揮つた。明治二十年、「開國始末」を著はし、維新史上に、異常な創說を出して讀書界を驚がせた。彼が翌年歐米を遊歷して歸朝するや、當時の問題となつてゐた條約改正について意見を述べ、「條約改正論」を出版した（二十二年十月）。同二十三年、神奈川縣第一區から立候補して衆議院議員に當選。爾來、その卒去に至るまで議員生活を送り、雄辯家として知られ、大正四年に衆議院議長に選擧された。新聞記者時代に於ける彼の最も花々しい活動は、一代を睥睨するの概あつた星亭の政治的不正を彈劾し、東京毎日新聞に堂々の筆陣を張つたことであつた。彼の名聲の頂上に達したのは、その前後であつた。

【著書】立法論綱（ベンサム原著）（明治十一年刊）○法律原論（テリー原著）（翌年刊）○開國始末（別項）等。　【高須・千葉】

島田清次郎（しまだせいじらう）　小說家　【生歿】明治三十二年二月二十六日加賀國手取川の河口美方町に生れ、昭和五年四月二十九日東京市外巢鴨保養院に歿す。享年三十二。【閲歷】明治四十四年金澤中學校に入り、翌年四月、上京して明治學院に入學。大正二年、歸國して再び金澤中學に入つた。翌三年、同校四年を修了した後に退學。叔父の勸めに隨つて商業學校に入學したが、幾くもなくまた退學、上京して一時放浪的な生活に入る。翌四年、金澤に歸つて新聞記者となり、雜誌「精神界」に關係してゐる佛敎家などと親しんだ。この年秋から翌四年四月にかけ、紙數五六百枚の叙事詩一篇を作り、京都の中外日報に寄せて同社長の知遇を受け、大正六年、その客員となつた。翌七年七月、長篇小說「地上」（別項）第一部を完成し、その稿を携へて上京、生田長江の推輓によつて、翌八年六月、新潮社から刊行。非常な好評を博し、この一作によつて作家としての地位を確立したが、その後の製作は餘り思はしくなかつた。同十一年渡歐、その年十二月歸朝した。翌十二年四月、舟木芳江との戀愛事件のために蹉跌し、爾來精神の平衡を失して、また起つことが出來なかつた。同十三年八月、長野縣明治溫泉に病氣療養中、縊死を企てたこともあつたといふ。【著作】叙事詩篇。〔長篇小說〕地上（第一部）○地上（第二部）○地に叛くもの（第三部）○靜かなる暴風（第四部）○燃ゆる大地○改元（第一卷）○我れ世に勝てり等。〔短篇小說集〕大望。〔戲曲〕帝王者○革命前後。〔感想評論集〕早春○勝利を前にして○世界の現狀及將來等。

【人物・作風】極めて早熟で、覇氣と野心と激情と素晴らしい自信とに生きたが、さういふ性癖が、弱冠「地上」第一部に成功したことに煽られて反省を缺き、大した敎養がなかつただけに、不穩當な措辭や生硬な文字遣ひが多かつた。社會改造の熱情に燃え、且つその可能を信ずる事が厚かつたが、その作品に底の淺い感じを有たせてゐた。併し彼の存在は、新現實主義文壇に理想派的の情熱と意志とが稀薄になつて、さうしたものが多く通俗小說の側に見られるやうになつた時代の、その方面の一代表作家乃至一先達として注意されなければならない。　〔片岡〕

島衞月白浪（しまちどりつきのしらなみ）　脚本　五幕　世話物　【作者】二代河竹新七（默阿彌）【通稱】島藏と千太【諸本】默阿彌全集第十六卷所收　【初演】明治十四年十一月、東京新富座。

【役割】明石の島藏（尾上菊五郎）、松島千太・福島屋淸兵衞（市川左團次）、望月輝（市川團十郎）、旅藝者辨天お照（岩井半四郎）、漁夫磯右衞門（市川團右衞門）、野州德・お照母ねぢ金お市（尾上松助）、福島屋娘おなか（中村福助）、島藏妹お濱（坂東しう調）、島藏倅岩松（尾上菊之助）等。

【題材】明治の新社會に取材した創作、所謂散切物の一つである。

【梗概】〔序幕〕松島千太は奥州白川の宿で、銀行家濱崎千右衞門と稱し、土地の藝者お照を相手に十日餘も逗留して、ひたすらお照の歡心を買はうと努めたが、明神峠で車夫の野州德に素性を見現はされ、訴人せられたので逃げてしまふ。そのあとでお照は德の手籠に逢はうとしたが、折よく望月輝がこれを救ふ。〔二幕〕明石の島藏は、明石浦に住んでゐる父親磯右衞門の許へ三年振りで歸つて來た。圖らずも倅岩松の足へ棚から庖丁が落ちて足の筋を切り跛になつた。その時刻は、丁度彼が千太と一緒に質屋福島屋へ押入り、主人に傷を負はせたのと全く同じ時であつたことを知り、因果應報の恐ろしさをまざまざと見せつけられて改心した。その話を立ち聞きした漁夫沖藏は、島藏の妹にふられた意趣返しに訴へに行くので、島藏は舟で逃げたが、播磨灘で難船する。〔三幕〕島藏は堅氣になり、神樂坂下に明石屋と云ふ酒店を出し、いつかは福島屋へ盜んだ金を返したいと一心に働いてゐた。千太はお照が望月輝の家にゐるのを知つてゆすりに出かけるが、却つて言ひ負かされてしまふ。（淸元淨瑠璃の「色增艷夕映（いろぞえきそうなるゆうばえ）」（一名雁金）は、この幕中に於て初めて用ひられたもので、今なほ盛んに獨立しても行はれてゐる）。〔四幕〕島藏は店へ醬油を買ひに來た娘おなかから、福島屋がわかり、零落のあまり娘を藝者に賣らうと話してゐるのを聞いて、百兩の金子を用立てる。そこへ千太が望月の家に乘込むので力になつてくれと賴みに

藝術表現の技巧と文體の上にも幾何かの進化の時期を劃してゐる。藤村の生活とその藝術表現の歷史を大略區劃づけて、

（一）「藤村詩集」の時代（浪漫的の時代）
（二）「破戒」「春」「家」の時代（自然主義の時代）
（三）「新生」前後の時代（新現實主義自覺の時

道程とし、基礎としてのみ存在するに過ぎない作さへもある。　〔以上武藤〕

〔詩人として〕藤村の發足は、雜誌「文學界」にあり、その生命はこの雜誌と終始し、青春期の感化者の最大なるは友人北村透谷で、透谷は最も早く身を以て日本浪漫思潮の犧牲者となつた。藤村詩の新鮮と想像力と異邦趣味とらの勞作であり、三十年代後期には既に散文に轉じてゐたけれど、畢竟藤村は生涯を通じて詩人であり、抒情詩で歌つてゐる如く散文小說に於ても隨所にその詠嘆を示してゐる。即ち詩人の小說であり、散文詩であり、如何に自然主義藝術のモットオを旨としてその客觀作風に感化せられても、彼は細かに客觀し

て政府を退き、故山に還つてゐた西鄕隆盛の高風を慕うてその後を追つたのは、此木小次郎（後に長連豪）で、次いで島田も官途の要務で鹿兒島に下り、二人親しく西鄕の門に出入し、私學校の生徒とも交際する折柄、小次郎が父母病氣のため歸國の已むなきに至つたのは明治九年の一月で、次いで一郎もその年の冬に

來たが、その夜改めて逢つて相談することとする。〔五幕〕約束の時刻に、二人は招魂社鳥居前で落合つた。島藏は自分の改心した動機を語つて意見をするが、千太はきかず、短刀で斬り附けるのを取つて押へ、結局改心させてしまふ。それを見てゐた望月は命が助かつた禮として二百兩を出したので、島藏は福島屋へ返金することが出來ると言つて悦ぶ。

【脚色】作者が隱退披露のために執筆したもので、彼が屢々盜賊を題材としたので、白浪作者などと稱されてゐたが、この記念すべき新作も主要人物の殆ど悉くを盜人とし、後に悔悟させるといふ趣向のものであつた。【價値】上に述べた意味で、作者の力作として注目すべき物であるばかりでなく、作者が門弟の助筆を借らずして、全部自分一人の作であるところに意味がある。殊に五幕目招魂社の場は一篇の眼目でもあり、作者獨特の名臺詞に富んでゐる。この一篇は、作者の世話狂言中の代表作であり、散切狂言中の白眉であると言つてよい。

【參考】河竹默阿彌 河竹繁俊〇續々歌舞伎年代記〇明治劇壇五十年史 關根默庵 〔河竹〕

島村抱月（しまむらほうげつ）評論家・新劇運動家

【本名】瀧太郎【生歿】明治四年一月十日、島根縣那賀郡久佐村に生れ、大正七年十一月五日東京牛込横寺町藝術倶樂部にて逝く。享年四十八【墓所】東京雜司ケ谷墓地【閲歷】佐山一平の長男に生れ、二十一歳の時那賀郡濱田町裁判所檢事島村文耕の養子となる。同年十月東京專門學校（早稻田大學の前身）文學科に入學し、二十七年卒業。直ちに第一期「早稻田文學」記者となり、傍ら母校文學科講義錄の講師となる。三十年四月、從藤南外・小杉天外・伊原青々園・水谷不倒等と、文學雜誌「新著月刊」（別項）を創刊した。三十一年、讀賣新聞社會部主任となり、兼ねて母校專門學校文學科に教鞭を取り、美辭學・支那文學史、及び西洋美學史等を講じ、傍ら讀賣新聞月曜附錄を主宰す。三十二年讀賣新聞社を辭して三省堂編輯部に入り、三十三年同所を辭して早稻田中學校教員となり、英語及び倫理を講じた。三十四年同中學校を辭し、專門學校講師の職に專念し、三十五年三月同校海外留學生として英獨に遊學した。出發に先立つて「新美辭學」（別項）を公けにした。三十八年九月歸朝、專門學校改稱早稻田大學文學部に於て、美學・英文學史・歐洲近世文藝史・文學概論等を講じ、且つ又東京日日新聞の月曜文壇を主宰した。

島村抱月

三十九年一月、文藝協會（別項）の幹部の一人となり、且つその機關として再興せる「早稻田文學」を主宰し、その第一號に長篇の論文「囚はれたる文藝」（別項）を發表し、爾來數年、同誌に依つて文學藝術の諸問題を論述し、更にイブセン、メエテルリンク等近代諸名匠の戲曲の飜譯をかゝげ、自然主義運動のために大に力めるところがあつた。四十年九月、早稻田大學英文學科教務主任、四十一年一月、同大學維持員に推され、四十四年五月、文部省の文藝委員に任ぜられた。大正二年四月、文藝協會幹事を辭し、同年九月、藝術座（別項）を起して新劇運動のために盡瘁するところ多かつたが、大正七年十月末より流行性感冒にかゝり、翌月五日長逝した。

【著作】〔論著〕風雲集（明治三十三年刊。宙外、青青園と合著）〇新美辭學（別項）〇懷疑と沈默の傍より（大正三年刊）。〔小說集〕亂雲集（明治三十九年刊）。〔隨筆集〕滯歐文談（明治三十九年刊）〇影と影（大正二年刊）〇雫（同上）。〔飜譯〕ズウダアマン作「故鄉」（明治四十五年刊）〇イブセン作「人形の家」（大正二年刊）〇同「海の夫人」（大正三年刊）〇メエテルリンク作「ペレアスとメリサンド」（大正二年刊）〇同「モンナ・ヴンナ」（同年刊）〇トルストイの原作をフランスのアンリ・バタイユの譯から重譯した「復活」（大正三年刊）等があり、この外に英國の小說家グラント・アレンの原作を飜案した「しとげた女」（明治四十年刊）、沙翁原作を改訂した「クレオパトラ」（大正三年刊）等がある。〔戲曲〕運命の丘（明治四十四年）〇競爭（同四十五年）〇復讐（大正三年）〇清盛と佛御前（同五年）等がある。なほその死の翌年大正八年に、以上の諸著及び未發表の研究・稿本・書簡等を整理し分類して編纂された抱月全集八卷がある。

【業績】抱月の生涯は、凡そ三期に分けられる。第一期は、明治三十五年東京專門學校の海外留學生として渡歐するまで、第二期は大正二年藝術座を組織するまで、第三期はそれからその死に至るまでである。この中で文學者としての抱月を見る上に特に重大なのは、言ふ迄もなく第一期及び第二期である。第一期は第一期「早稻田文學」に依つて文藝評論、時事評論を專らにし、且つ「西鶴論」「悲劇論」等の長篇の研究論文を公にした時である。これ等の諸論攷には、文藝批評家としての抱月を遺憾なく發揮してゐる。第二期は文藝批評家として最も聲名を恣まゝにした時であつて、我が國の浪漫主義思潮から自然主義運動への推移、その文化史的意義、並びに我が國自然主義の指導原理等は、抱月のこの第二期の諸論攷を度外視しては、事實これを理解することが出來ないのである。なほこれ等の諸論攷は、「近代文藝の研究」（別項）に收錄されてゐる。第三期は藝術座を組織して、その演出・經營等、一切の責任者として活動した時代で、一方にはイブセン、トルストイ、メエテルリンク、オスカア・ワイルド等の諸名作を上演紹介して、我が新劇運動に刺戟を與

抱月の墓

詩人の情熱と哲學者の洞察と科學者の分析とが夙く既に現れてゐる外に、從來の我が評壇に餘り多くの類例を見なかつた考察の對象を文化史的に觀察しようとする一點のあることを注目すべきである。更にその劃期的の名著「新美辭學」（別項）の公刊されたことも特筆に値する。又この第一期は「白あらし」（明治三十年作）、「月がさ日がさ」（同三十一年作）、「白薄華」（同上）、「待つ間あはれ」（同三十三年作）等の小說をも出し、その作家としても注目される。これ等の作は、必ずしも新味に富んだものとは云へないが、その結構布置の整然たると、その文章の瑰麗なると、その浪漫的情調の豐潤であるのを以て稱せられてゐる。第二期は文藝批評家として最も聲名を恣まゝにした時であつて、我が國の浪漫主義思潮から自然主義運動への推移、その文化史的意義、並びに我が國自然主義の指導原理等は、抱月のこの第二期の諸論攷を度外視しては、事實これを理解することが出來ないのである。なほこれ等の諸論攷は、「近代文藝の研究」（別項）に收錄されてゐる。第三期は藝術座を組織して、その演出・經營等、一切の責任者として活動した時代で、一方にはイブセン、トルストイ、メエテルリンク、オスカア・ワイルド等の諸名作を上演紹介して、我が新劇運動に刺戟を與

へ、清新味を發揮し、かくして我が新劇を向上させることに專念すると共に、他方には一般民衆をして容易に新劇に近づかしめ、新劇をして少數知識階級から一般大衆に解放しようと努力した時代である。藝術座は抱月の死と、更にその跡を追つて自ら殺した女優松井須磨子の死に依つて事實解消はしたが、この藝術座から派生した故澤田正二郎一派が、やがて新劇の大衆化に成功し、又藝術座

十三戊申正月起き出でて、「公事喧譯地震雷火事晦日饑饉わづらひなき國へ行く」との辭世一首を詠み、湯を浴び髮を結ひ、大神宮の幣帛を拜みながら、その儘うつぶしになつて死去したが、この臨終の記を、如幻庵東湖老和尙が書いたのが世に傳はつてゐる。今なほ存する金龍寺の墓石は瓢形で、側面に彼の辭世が刻してある。〔野崎〕

生かしてゐる。

持明院流（じみょうりゅう）書道 【解說】持明院基春の創めた書道の流派。平安朝以來入木道の本宗、上代樣（別項）の中心として古い歷史を有し、口傳傳授をやつてゐた世尊寺家が、後奈良天皇の享祿二年、十七代行季の卒去に依つて家道の斷絕を來したので、天皇これを慨し給ひ、前代行高の高弟である持明院基春に

不贊成を押してその苦境を助けた。やがて江戸へ着いて源八郎は御用金の封印を切つた理由を明かにして處罰を待つてゐると、意外にも御褒めに預つた上百石の加增となり、岡右衞門は武士の義なしとして叱責された。（二）吉備の家中宮城貞右衞門の子貞之丞は、殿の御意を受けて同家中の娘くらを娶り仲睦じく暮してゐたが、偶々殿が流行の疱瘡に罹

へ、清新味を發揮し、かくして我が新劇を向上させることに專念すると共に、他方には一般民衆をして容易に新劇に近づかしめ、新劇をして少數知識階級から一般大衆に解放しようと努力した時代である。藝術座は抱月の死と、更にその跡を追つて自ら殺した女優松井須磨子の死に依つて事實解消はしたが、この藝術座から派生した故澤田正二郎一派が、やがて新劇の大衆化に成功して藝術座意圖の一半を繼承し實現したのである。この意味で新劇運動の先覺者としての抱月の努力も亦十分に認めらるべきである。又彼の戯曲は何れも藝術座の舞臺に上演されて、それ〴〵相當の成功を收めたことも、抱月の多才にして藝術家としての天分の豐かなことを證據立てるものである。（藝術座參照）

【參考】早稻田文學（大正七ノ一二、島村抱月追悼號）〔本間〕

清水如水（しみづじょすい）　狂歌師　【本名】清水如水【別號】藤根堂・迷洲幡鯰侯【生歿】明曆三年に生れ、享保十三年（一三八八）正月五日歿す。享年七十二。【法名】一陽如睡信士【墓所】淺草森下町金龍寺【閲歷】江戸の人。兩國横山町に住した。或る時大和法隆寺の什物に賢聖の瓢といふもののあるのを見てそれに倣ひ、鈍刀を以て瓢に彫刻する事を始め、その巧妙人の目を驚かす程になつたので註文續々絶えず、我は瓢のために身を押へられたとて、自ら迷洲幡鯰侯と號した。或る時漁夫之辭の意を取つて詠んだ狂歌に、「世はすめり我ひとりのみ濁り酒醉うて寢るにてさうらうの水」といふのがある。又隣町藥研堀に知人の家を訪うた時、「見おろせば氣の藥なり藥研堀月は素湯（さゆ）にて影は水にて」と詠んだ。享保十三戊申正月起き出でて、「公事喧譯地震雷火事晦日饑饉わづらひなき國へ行く」との辭世一首を詠み、湯を浴び髮を結ひ、大神宮の幣帛を拜みながら、その儘うつぶしになつて死去したが、この臨終の記を、如幻庵東湖老和尙が書いたのが世に傳はつてゐる。今なほ存する金龍寺の墓石は瓢形で、側面に彼の辭世が刻してある。〔野崎〕

志水冠者（しみづのくわんじゃ）「木曾義高物語」を見よ。

しみのすみか物語　讀本　二卷【作者】石川雅望【刊行】天保二年【諸本】石川雅望集（有朋堂文庫）所收【解說】江戸時代後期には國學者が擬古文を以て小說を書いてゐるが、この筆者も六樹園・宿屋飯盛等の號をもつて、「近江縣物語」「飛驒匠物語」（各別項）を初め多くの讀本小說を著はしてゐる。これもその筆のすさびの一つで、後人によつて版行されたもの。書名「しみのすみか」は、「蠹魚の栖處」で、簽底の昔譚を取出して見せる意であらうか。插畫の筆者は不明であるが、漫畫的手法の好ましいものである。全篇茶話或は落語に類する說話五十餘を上下二卷に書いたものであるが、その說話は作者の獨創によるものではなく、專ら「宇治拾遺物語」（別項）の話柄と文體に擬したものと言はれてをり、寧ろその點で我が國の代表的說話文學集「今昔物語」（別項）以後の說話文學の直系を繼いだものとして注目されるのである。殆ど總て滑稽な失敗談を僅か數行か乃至一頁の長さで記したものであるが、行爲の失策よりも言葉の過誤による話が多く、作者の能文の才がよく表はれてゐて、何れも換骨奪胎の妙を得てゐる。即ち古い說話文學の流れを汲み、小咄・笑話・落語に流布された話材を取り、よき小品として生かしてゐる。〔横野〕

持明院流（じみやうりう）　書道　【解說】持明院基春の創めた書道の流派。平安朝以來入木道の本宗、上代樣（別項）の中心として古い歷史を有し、口傳傳授をやつてゐた世尊寺家が、後奈良天皇の享祿二年、十七代行季の卒去に依つて家道の斷絶を來したので、天皇これを慨し給ひ、前代行高の高弟である持明院基春にその傳統を承けしめられた。これ卽ち持明院流の始祖で、子孫世々公事の書役を勤仕するのは世尊寺家の如くであつた。然るに基春の曾孫基久が、元和元年五月大阪夏の陣で戰死して、その統一時絶えんとしたが、基久の父基孝の門人良恕法親王から基久の養子基定に筆意を傳へて、僅に存續することができた。併し後水尾天皇の叡慮に依り、賀茂の祠官藤木敦直が書博士となつて公事の書役を勤め、賀茂流を興すこととなつたので、爾來持明院家は、上代樣の傳授をなすに過ぎぬ有樣であつた。尋いで寬政の頃、幕府の右筆森傳右衞門尹祥、持明院家の免許を得て旗下や諸藩士などに傳授を行ひ、流の復古に力めたが、その後次第に衰頽するばかりであつた。その傳系は次の如くである。〔伊木〕

基春―基規―基孝―基久―良恕法親王―基定―基時―基輔―基雄―家胤―宗時―基武（下略）

四民乘合船（しみんのりあひぶね）　浮世草子　四册【作者】不詳【刊行】正德四甲午歲三月吉日大阪平野町二丁目象牙屋如柳軒三郎兵衞板。享保二年再版。【梗概】〔士之部〕（一）源八郎と岡右衞門といふ士、御用金の宰領役を勤めて東海道を下る途すがら、仕官の仕度金貳拾兩の借用を浪人から申込まれ、源八郎は同情して岡右衞門の不賛成を押してその苦境を助けた。やがて江戸へ着いて源八郎は御用金の封印を切つた理由を明かにして處罰を待つてゐると、意外にも御褒めに預つた上百石の加增となり、岡右衞門は武士の義なしとして叱責された。（二）吉備の家中宮城貞右衞門の子貞之丞は、殿の御意を受けて同家中の娘くらを娶り仲睦じく暮してゐたが、偶々殿が流行の麻疹に罹られ、貞之丞はお側離れず看護してゐる留守中に、くらも同じ病に罹つて死んだ。併し貞右衞門は、勤めの大事を思つて息子に知らせなかつた。或る夜貞之丞はそゞろ心に誘はれて城を出で、我が家の邊を徘徊し、始めてこの事を知つたが、父の意中を想ひ、そのまゝ殿中に歸つて殿の全快まで看護に盡した。（三）西國の或る城主の家中に、竹内流の兵學者があつた。その門人柴垣吟之助は、同門高尾甚八との仲をとやかく騷がれたが、未だ契りを結ばぬうち師匠の子竹内唯八郎と兄弟の固めをした。甚八これを恨んでゐるうち、主命で兩人が大阪藏屋敷へ屆け物をする事になり、唯八郎の伯父吉左衞門が道中目付として同道する事になつた。その歸途慰勞の酒宴の後で、甚八は唯八郎を斬り殺し逃げんとする所を吉左衞門に討たれた。（四）元木甚太夫といふ人、諸事目附役となつたが、每年御用金の費えが夥しいので、臺所向のやり繰りにより大に費用の節約を得た。（五）伊浪與三平といふ士、舊友が仲間を殺して逃れ來り、妻子の身の上を賴むので下灘の庄屋に預けることにした。然るに舊友は東下の途中で捕はれ、下灘の妻子も追手に捕へられ、與三平は閉門を仰せ付かつた。後、彼は義を重んじて切腹し、その子も暇を請うて家を去つた。〔農之部〕（一）鮮

人來朝して京大佛門前の耳塚へ詣るといふので、その石塔の掃除を附近の百姓に命ぜられる事になり、二貫目前後の入札が多かつたが、七條の百姓が銀五百目で落し、人々はその無謀を笑つた。一日烈しい雷雨があつたので、六七人の者に用意の箒を持たせ、忽ちのうちに多くの石塔を洗ひあげ、その才智を賞せられた。(二)播州勝間の里に正直な百姓があり、毎年干瓢の苗を盗まれるので庄屋に訴へたら庄屋は内密にせよとて一袋の種をくれた。すると又もや盗まれたが、それは瓢箪の種であつたので盗人はすぐに捕はれた。(三)播州江口の里の名主の伜市兵衛、茶屋女しげと深い仲となつて勘當され、女に心中を迫ると、月の入る頃死なうといふので、表に立つて夜中待つてゐると、足許にしげの文が投げ出された。それには死ぬは易い、よく〳〵思案せよとあつたので、心變つて元の百姓に返つた。(四)播州木津の朝起の働き者で通つてゐる百姓久三、或る朝己が畑を見廻ると、自害して死んでゐる若者があつた。人に知れたら畑を踏み荒されると、その死骸を他の畑に運び入れ、知らぬ顔でゐた。(五)さる庄所に四平治といふ大

四民乘合船（工之部）

百姓と、その隣に吉兵衛といふ小百姓とがあつた。或る時吉兵衛方の藪際で隣の牛が仔を産んだのを自分のものにして育てた。これを知つた四平治は早速取戻さうとしたが、肯かぬので裁判となり、嘗て自分の藪の筍が隣の庭に出たのを四平治が我が物としたことを申立てて勝つた。〔工之部〕(一)江戸の五郎兵衛の細工振りが見事で引續き御用を承つた。(二)或る人親のために一宇の堂を建立しようと、番匠に積らせると、升形の斗を作りて小屋に山の如く積み上げた。これを見て、その中の二つを隱して置いたところ、愈々建前となつて升形二つ不足といふので、日延べを請うたゆゑ、始めてその見積りの確かなのを知つて、軒並にある染物屋の反物が當され、はるといふ妓と共稼ぎをするやうになつたが、ふとした緣で博奕に耽つてゐた。或る夜その最中、はるが吹鳴り込んで來たので、已むなく今一番といふ事ではるを歸し、あり金全部を賭けて最後の勝負を決し、兵右衛門は三百兩を儲けて歸つた。はるが吹鳴り込んだのは、彼を勝たさうと居賽(すわり)を取りかへるためであつた。以後これを資本に水引職に精出して榮えた。〔商之部〕(一)京のさる資産家、當主の放蕩に、零落して裏店住ひの身となつた。或る日古櫃から文反古を取出して徒然を慰めてゐると、近所の者がそれはよい元結にならうと言ふに心付き、舊友と圖つて元結職となり、諸國に賣擴げて成功した。(二)大阪中の島の紙武といふ人、北濱の米相場で大分儲けたが、その後失敗を續けて、元手銀まで失つた。そこで一計を案じ、中味は瓦石の銀箱を造り、それを中衆に擔がせて、北濱の兩替の前を明暮往來し、いかにも銀の口入してゐるやうに見せかけたので、誠の口入を賴む兩替屋が段々に出來、遂に元の分限者に返つた。(三)或る酒屋、一步の僞金を摑まされ、それを或る夜酒を買ひに來た客に、丁銀一丁のつりに三百二十文をつけて渡した。ところがその丁銀も贋銀であつた。(四)江州の甚六といふ商人は、毎年夏の初めに近江縞といふ布を大阪で賣り、その賣上で木綿縞類を江戸に送り、江戸の賣殘りを更に仙臺で捌き、又仙臺のかつぱの煙草入れの染料として江州の青花紙を賣約して、俄分限となつた。又大阪難波御堂前の小さな果物屋が、御堂普請の棟上の時、餅屋から宵搗の餅を仕入れて群衆に撒餅と見せたので、拾ふことの出來なかつた在所の人々が爭つてこれを買ひ、果物屋は僅かな資本で大分の冥加錢を稼ぎ、これより青物の商ひも榮えた。(五)長崎に入る唐船を待つ人々の中に、堺の喜介といふ手代、丸山肥前屋の女郎櫻井に現(うつつ)をぬかすと見せて、唐人の商法を聞き出し、その年商人達は何れも大損の憂目を見たが、喜介のみは水銀を買ひ占めて歸國し、翌年その値が上るのを待つて賣り、大に儲けた。

【解說】題名に示す四部門を一册づつに分ち、武家の義理、百姓の才覺、職人の細工、商人の工夫等を現はすもので、說話の取扱ひ方は教訓的であるが、その種類は樣々である。說くところは概念的な世渡りの術に過ぎず、文學的價値の高いものとは言へない。序を海音が書いてゐて、「契情手管三味線」(別項)に海音の署名のあるものもあるところから、或は海音の作ではないかと言はれてゐる。後に、「渡世今日鑑」と改題されたものもあるといふ。

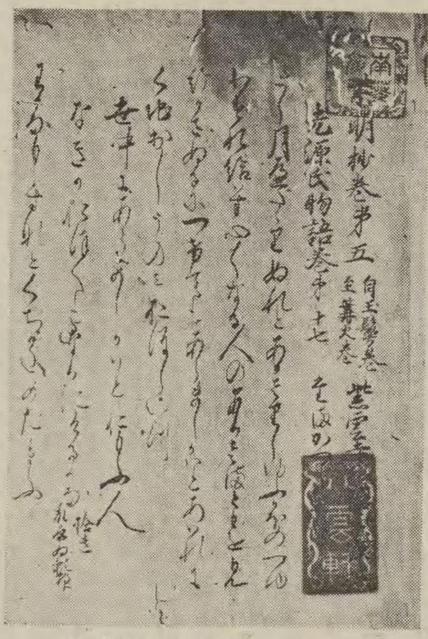
【參考】新撰列傳體小說史(前編)水谷不倒 ○海音の小說 巖原退藏(あかほんや) 〔笹野〕

四明(しめい) 俳人 【姓名】中川重麗、幼名勇藏、後、登代藏 【別號】霞城山人 【生歿】嘉永三年二月二日、京都二條城南の城番屋敷に生れ、大正六年五月十六日歿す。享年六十八 【葬所】洛西西院村高山寺墓地 【閱歷】下田耕作の二男として生れ、同月十五日北城番組與力中川重興に養はれ、明治二年三月家督を相續した。四年より七年に亙つて京都中學に於て獨逸語を修業し、八年以來京都府出仕・師範學校助敎授・同敎授・京都府御用掛・同五等屬・東京大學豫備門御用掛・同敎諭・第一高等中學助敎諭等に歷任。二十年新聞「日本」に入り、二十三年京都「中外電報」(後の日出新聞)に入つた。この間に雜誌「少年文武」を出し、綴

谷小波等と初めて俳句を作つた。二十六年京都美術協會員となり、三十二年大阪朝日新聞に入つたが、翌年再び日出新聞に轉じ、別に市立美術工藝學校教授を囑託され、四十年市立繪畫專門學校講師を囑託された。明治三十七年俳誌「懸葵」(別項)を創刊し、子規選の新聞「日本」の俳壇に投句したこともある。關西に於ける日本派の元老として德望があつた。

【著書】小學理學階梯　○博物學階梯教授本○農家小學讀本○維廉得自由一箭○遊戲全書○理科春秋○俳諧美學○四明句集○觸背美學等がある。【作風】俳人としての彼を價値づけるものは、「懸葵」の創刊と「俳諧美學」以下の三書とであるが、作風は「金剛を出れば四條や春の月」「水無月や氷室の使ひ鞍馬より」の類の作多く、主として京都趣味・古典的興味に特色を持つものである。　【白田】

紫明抄（しめいせう）　註釋書　十卷　寫【著者】素寂【名稱】卷頭の序に、「(前略)かるがゆゑに、紫のいろをまし、まどひのやみをはるけんがためにこれを撰ぶ。名づけて紫明抄といふ」とあり、佛教的意味が含まれてゐるらしい。「紫の物語」を釋明する抄の意ではあるまい。【卷册數】本書序文に「とまきの玉の光をみがき出せる事しかなり」とあり、卷末に附した添書に、永仁二年五月六日、著者が「紫明抄」一部を、將軍久明親王に上つた書狀がある。それに「紫明抄十卷」とあり、現存諸本いづれも內題に卷數を明記してゐるから、十卷であつたことは確かである。尤も「仙源抄」の跋文には十二卷とあり、內閣文庫藏の殘缺本(昌平坂學問所舊藏)には、十二卷あるやうになつてゐるが、これは誤りである。但し册數は十册にかぎらず、五册・三册に分けたものがあるから、或は十二册に分けたものもあつたかも知れない。【成立】紫雲寺の僧侶たる著者が、將軍久明親王の命によつて書いたもので、成立年代は明かでない。ただ卷末に附せられた添書によつて、永仁元年の暮に二册だけ將軍家の命に從つて貸し上り、翌年四月十五日、改めて全部進上すべき由の命令があつたので、五月六日までに十卷を悉く書寫して奉つたことが分る。これによつて、永仁元年の頃は「紫明抄」は全部成立して、相當有名であつたと思はれる。しかし「弘安源氏論義」には、この書の引用がないから、或はその頃はまだ成立してゐなかつたのかも知れない。先づ正應二年以後、數ヶ年の間に出來たと見るのが穩當であらう。【諸本】「紫明抄」の現存傳本として主なるものに四種の異本がある。(一)は京都帝國大學所藏本系統、(二)は內閣文庫十册本系統、(三)は同三册本系統、(四)は宮內省圖書寮藏五册本系統である。京大本は內閣文庫藏の殘缺一册本と同系統で、本文は他の諸本よりも詳しく正しいやうである。內閣十册本は神宮文庫所藏本、東京帝國大學所藏本等と同系統で、素寂自筆本を寫したらしいが、第一類のものに比して、「源氏」の本文のあげ方など簡單であるが、まれに詳しいこともある。內閣三册本は十册本の內容を少し省約したと思はれる本で、「源氏」の本文なども擧げ方が粗雜であるやうである。宮內省本は內題には「光源氏物語抄」とあり、三十六卷で、青・黃・赤・白・黑の册を立てた五册本で、奧に應永廿三丙申陽春下旬、前上總介の識語がある。上總介とは今川範政のことで、この人には「源氏物語提要」六卷がある。第一册は、震災で燒失し、殘る四册は前記諸本と全く別の異本である。これは「紫明抄」の異本といふよりも、「紫明抄」をもとにして、諸說を書き入れた本を整理した一種の諸註集成と云ふべきものである。本文のあげ方も解釋も詳しく、他に類本がない。「紫明抄」にかく異本が多く、これに抄出せる「源氏」の本文に、長短精粗があるのは、轉寫の誤りに起因するであらう。又著者の草稿本と獻上本との間にも、多少の相違のあつたことが想像し得られるし、これ等の本を轉寫するうち、更に誤差が增して來たといふ事も想像し得られる。かうした事情から、今日の如き多くの異本が發生したと考へられる。



紫明抄（南葵文庫舊藏）

【內容】卷頭の序を見ると、著者は京洛に生ひ立ち、後、東國に在つたこと、以前仕官して主殿助正六位になつたが、今は紫雲寺の住僧であること、家學たる「源氏物語」を紹述し、和漢の口傳をあらはさうとして本書を撰んだことが書いてある。次に紫式部の系圖を出し、本文の釋義にうつり、桐壺の名義、準據說、女御、更衣、立后の事等の考證に及び、語句の解釋に入る。語句の解釋には、「源氏」の本文の一部をあげ、和語に眞名をあて、和漢佛の諸書に亙つて考證してゐる。伊行の「釋」、定家の「奧入」等の傾向を一層徹底せしめ、更に語句の解釋に向つて新しく進み出たものである。【價値】本書は、現存せる「源氏物語」古抄中、「釋」「奧入」と共に最も古いものの一で、源語研究史上注目すべき著述である。本書は「原中最祕抄」に多少の影響を與へたかとも思はれるが、しかし「最祕抄」は「水原抄」を傳へた流派の業績であつて本書とは別派の著述である。それ故に「水原抄」、又は「最祕抄」との關係が、本書によつて明かにされないのは甚だ遺憾である。本書を傳へた一派と、「水原」「最祕」の兩抄を傳へた一派とが、「仙源抄」に於けるやうに統一される經路は、興味ある研究題目であらう。また所謂河內本の本文を察知するには、この書に引かれた「源氏」の本文を參考するのが最も便利である。　【池田】

能色相圖（あるやこれいろのかおにこおり）　「神田祭」を見よ。

指紋（しもん）　小說　【作者】佐藤春夫【發表】大正七年七月、「中央公論」臨時增刊「祕密と開放」號。【刊行】大正十五年九月「佗しすぎる」(代表的名作選集)、新潮社。

【梗概】永い海外生活で、飲み覺えた阿片に中毒してゐたR・Nは、歸朝後もそれをやめられず、親友の佐藤(作中で「私」と呼ばれてゐる說話者)の家にかくまはれた。彼は樣々の幻覺妄想に捉はれてゐるらしく、その氣狂ひじみた言動は不可解なことばかりであつた。或る日、散步がてら見に行つた映畫「女賊ロザリオ」の中で、ジョンソンといふ人物の指紋の大寫しを見てから、R・Nは一心に指紋の研究を

始めたり、佐藤を伴れて長崎M・B町の或る阿片窟の陰慘な廢屋を見に行つたりした。その後、R・Nが佐藤に一切を打ち明けた所によると、彼は歸朝後間もなく行つたM・B町のその阿片窟で、壯麗怪奇な幻想からはつと醒めると、外には誰もゐない傍に、今まで耽つてゐた幻の中で見たと同じやうな一人の人間が刺し殺されてゐるのに氣が付いた。それ以來、現實と夢幻との混同したR・Nは、自分が夢中でやつたのではないか、といふ考へに始終脅迫され、そのため何かに追はれてゐるやうな生活を送つてゐた。ところが、その時橫死者の附近で手に入れた金時計の蓋に殘されてあつた指紋と、その後に見た「女賊ロザリオ」の中のジョンソンの指紋とが寸分違はず同一であることを知つたR・Nは、いろ〳〵と調べた結果、「世の中に全く同一指紋は決して二つない」事と、從つてジョンソンのものとして示された指紋を持つ人間が、嘗て例の金時計に觸れた事のあるのを確め得た。唯ジョンソンに扮した俳優が大寫しにされた指紋を持つ人間であり、且つ長崎M・B町の阿片窟で實際に人殺しをしたかどうかには、なほ疑問の餘地があつたが、R・Nの鋭い直覺は、ジョンソンに扮した人間が眞の犯人で、自分は殺人者ではないと次第に信ずるやうになつた。と、さうR・Nが自信ありげに語るのを聞いて、佐藤は未だ半信半疑でゐたが、その後暫くして、ふと眼にとまつた地方新聞の記事によつて、曾ては狂人の妄想かとも考へてゐたR・Nの物語が、事實に符合するのを知つて愕然とした。そして、その時には既に故人になつてゐたR・Nは、狂人とは別個の不思議な世界に住んでゐたのだと、佐藤は思ふやうになつた。

【構想】その傍題に「私の不幸な友人の一生に就いての怪奇な探偵的物語」とある如く、或る阿片吸飲者を主人公とし、その幻怪な夢想の間に展開される奇異な殺人事件、それを周る不可思議な經緯を主人公の友人の口を藉りて詳細に物語らしてゐる。【批評】非常に空想的で、科學的に事件の解決はついてゐないが、想像の餘地を直覺の世界に殘してゐるため、却つて深みが感ぜられる。殊に、オピアム・イーターを包む幻怪の氣分を搖曳させ、その間に、鋭い感覺によつて潜在的な美を暗示してゐるところに見るべきものがある。なほこの作は、昭和の初年に擡頭した近代的な探偵小説の先驅をなした。［湯地］

社會學的美學（しやくわいがくてきびがく）［獨］Soziologische Aesthetik【解說】社會學の見地より觀察する美學。經驗科學的美學が、美意識一般の研究から漸次美の具體的實現たる藝術作品を主要な研究對象として研究するやうになると同時に、この藝術といふ具體的事實は、又一の社會的産物であると考へられる。こゝに藝術に對する社會學的研究が生ずる。この社會學的美學の中にも、藝術の組織的方面に對する社會學的觀察をなすものと、その發生的方面に對する社會學的觀察をなすものとがある。前者に屬する學者としては、テーン(Taine)、ギュヨー(Guyau)があり、後者に屬する學者としては、ハウゼンシュタイン(Hausenstein)、ヘルバート・キューン(Herbert Kühn)等がある。そのうち後者は事實上、社會經濟制度を主要な動機として藝術の樣式變遷を説くので、生理學的美學(別項)と並んで、唯物論的美學又は實證美學などといはれて、プレハーノフ・ルナチャルスキーの藝術論の基礎となる。

【參考】Taine, H.: *Philosophie d l'art.* 1865. ‖ Guyau, M.: *L'art au Point de Vue Sociologique.* 1889. ‖ Hausenstein, W.: *Der nackte Mensch in der Kunst aller Zeiten und Völker.* 1913. ‖ Kühn, H.: *Die Kunst der Primitiven.* 1923. ［渡邊］

社會主義小說（しやくわいしゆぎせうせつ）【解說】社會主義宣傳のための小說で、社會現狀の不合理性の摘發、社會運動家の勇敢なる行動、その指導者の苦心などを描いたものと、未來世界、無何有鄉に假託して懷抱を述べたものとに二大別され、後者は特にまたユートピアなる獨立名稱を有つてゐる。明治文壇に早く社會主義的作品の出現を期待したものは、片山潜主幹の「勞働世界」である。實際作品としては、矢野龍溪の「新社會」(別項)と、德富蘆花の「黑潮」(別項)が先頭を切つた。但し前者はより多くユートピアであり、後者はより多く政黨的小說である。我等は木下尚江に至つて初めて完全な資格を具備した社會主義小說を見る。「火の柱」「良人の自白」(各別項)はその代表的作品で、「靈乎肉乎」になると、宗教味が次第に濃厚を加へるが、未だその特色は失つてゐない。要するにこの派の作は、木下尚江に最高頂を劃されてゐると言つていゝであらう。別に平民社に白柳秀湖があつて、「驛夫日記」「黃昏」などを公けにしてゐる。ツルゲネフの影響が多分にあり、尚江のものより文學的には洗練されてゐるが、宣傳效果は乏しい。大逆事件後は殆と絶滅に歸して、漸く平出修の「逆徒」、荒畑寒村の「逃避行」、宮島資夫の「坑夫」などによつて氣脈をつなぎ、大正十年前後から第四階級の文學、プロレタリア文學(別項)の議論と創作が起るに及んで、その使命をそれに繼承し、社會主義小說の語は漸く廢れるに至つた。

【參考】明治文學の階級的考察 平林初之輔 ○第四階級の文學 宮島資夫 ○明治の社會主義小說 木村毅(文藝東西南北) ○日本社會主義文獻年表 森戸辰男・内藤赳夫編 ［木村］

社會小說（しやくわいせうせつ）［英］Social novel ［獨］Sozialroman ［佛］Romain Social【解說】在來の小說の描くところが、餘りに戀愛・煩悶・家庭・狹斜等、狹い範圍に局限せられてゐるので、今少しく眼界を廣濶にして社會を見、社會に觸れ、その風潮や思想と關聯することを念とした小說の謂である。元來社會の發見は産業革命の眞の展開は日清戰爭に始まるので、それ以前の事は、謂はば前奏曲に過ぎなかつた。隨つて社會小說が問題となつたのが日清戰爭の後であつたことは見落してはならぬ。議論としては、後世の文學史家から内田不知庵のそれに關して隨時公けにした論文(就中、三十二年五月「新小說」所載の論文、「嚼氷冷語」等)、高山樗牛の魯庵に對する贊成論(三十二年六月太陽)、及び「時代の精神と大文學」等が代表的なものとされ、作品としては、不知庵の「暮の二十八日」(別項)及びその他の數篇、小栗風葉の「政鷲」、後藤宙外の「腐肉團」(各別項)などが數へられてゐる。そして何分にも、社會小說の語義が非常に曖昧に用ひられてゐたと云はれる。今その意義を明瞭にするために、この問題の提唱の經過を辿ると、明治二十九年十月「國民の友」(第三百二十號)は、「社會小說出版廣告」を掲げて、宣言の中に「花鳥風月に安眠

する時に非ず、……文士も亦、社會、人間、生活、時勢と云へる題目に着眼して……期する所は文壇にあり」の文言があつた。これがたま〳〵評壇に物議を釀し、「帝國文學」の記者が先づ反對の烽火を揚げ、後には社會小說を要望した樗牛も亦反對論に左袒し、東京毎日新聞、「世界の日本」その他はこれに贊成して、評壇がこの問題を中心に著しく賑はうて

の議論を再燃させて、「今の小說家は、身當に社會を離るゝが故に、全く時代の精神を理解せず、政治・宗教・學術の社會は彼等にとりて風馬牛のみ」と喝破して、特に現友社派作品の時代粧式の弊所を衝き、「今の單調なる戀愛小說を複雜なる社會小說たらしむるは即ち文壇の革新である」と說いた。樗牛が前說を飜してこれに滿腔の贊意を表したのは、その少し前

スペンサアのこの書に接するに及び、正義仁惠(Justice Benevolence)等の文字に魅せられ、これこそ新時代を指導する原理であると心醉せる餘り、その飜譯を思ひ立つたと云ふ。なほ彼には外に「アモス政理汎論」第一卷(明治十六年刊)「彌兒教育論」(同十八年刊)、米國ウォルソン原著「日淸文明論」(同二十一年刊)等の譯書がある。【解說】本書は我が國に於て公刊

想ふべきである。何れにしても本書は、この頃の政治思想を說くに方つては、顧して開却することの出來ない貴重な文獻である。

【附記】本原書の邦譯に、もう一種の異本がある。それは明治十年十二月に第一册を出した尾崎行雄譯の「權理提綱」(二册)である。これは原書の第二編と第三編の初めの一章との意譯である。

する時に非ず、……文士も亦、社會、人間、生活、時勢と云へる題目に着眼して……拘する所は文壇にあり」の文言があつた。これがたま〳〵評壇に物議を釀し、「帝國文學」の記者が先づ反對の烽火を揚げ、後には社會小説を要望した樗牛も亦反對論に左袒し、東京毎日新聞、「世界の日本」その他はこれに賛成して、評壇がこの問題を中心に著しく賑はうて來た。その時常に文壇の行司役の如き任にあつた「早稲田文學」の彙報は、それを左記の如く分類清算した。

(一)社會小説とは、貧民又は勞働社會の爲に氣を吐かんとする一種の傾向小説也。(「帝國文學」記者の解これに近し)

(二)社會小説とは、敢へて貧民又は勞働社會の爲に、特に辯護するものにあらずと雖も、在來の作家が見落せる社會下層の眞相を主題とするものを云ふ。(「太陽」記者の説これに近し)

(三)社會小説とは、從來の作が戀愛小説の一隅にのみ偏せるに對し、社會の全體卽ち政治、宗教、その他あらゆる部面に、廣く材を取るものを言ふ也。(「八紘」記者の説これに近し、「太陽」記者のも或る所にては此の説に似たる趣見ゆ)

(四)社會小説とは、人間の心裏の波瀾を精寫する在來の心理小説、個人を描くに偏せる在來の寫實主義に對し、社會を主として個人を客とし、心的狀態よりも外界の現象に重を置くものたらざるべからず。(「世界の日本」記者の論これに近し)

(五)社會小説とは、一代の風潮を指導し、社會の豫言者たる任務を盡くすに堪ふるものたらざるべからず。(「毎日」記者の論これに近し)

議論はかく甚だ賑やかであつたが、作品がこれに伴はなかつた。その時、内田不知庵が「新著月刊」に「暮の二十八日」(明治三十一年)を公けにし、翌三十二年、一時下火になつてゐたその議論を再燃させて、「今の小説家は、身當に社會を離るゝが故に、全く時代の精神を理解せず、政治・宗教・學術の社會は彼等にとりて風馬牛のみ」と喝破して、特に硯友社派作品の時代粧式の弊所を衝き、「今の單調なる戀愛小説を複雜なる社會小説たらしむるは卽ち文壇の革新である」と説いた。樗牛が前説を飜してこれに滿腔の賛意を表したのは、その少し前から唱道してゐた「時代精神論」の極めて當然の歸結であつた。(なほ明治十九年出版の「日本の未來」なる小説に、社會小説と冠してあるが、あれは一種のユートピア的政治小説で、後の社會小説とは何の關係もない。)〔木村〕

【參考】社會小説研究 木村毅(日本文學講座)

社會平權論(しやくわいへいけんろん) 飜譯書 【譯者】松島剛 【原著者】スペンサア(Spencer) 【名稱】如何にせば、社會の平衡安寧が期待し得らるゝかを説ける、謂はば理想社會論とでも云ふべきもので、原名の社會靜學(social statics)は、今日學界に通用する社會靜學とその類を同じうしないのは云ふまでもない。譯者は右の意味からして最初「社會平衡論」と題したのであつたが、書肆の販賣政策に制せられて衡を權に改めたと云ふ(譯者の直話)。原書は一八五〇年に初版を出してゐるが、本書は一八六四年の米國再版本に依つたとある。【刊行】初め分冊の形で公刊された。全六冊、第一冊は明治十四年五月刊である。完結後合本再刊され(明治十七年)、その後、二十四・五年の頃までに引續き再三の複刻を見た。明治文化全集第五卷自由民權篇には、全卷の眼目たる第二編だけが收錄されてゐる。【成立】譯者はもと和歌山藩の人、幼より洋學に志し、壯年道を求めて外國宣教師の門を叩きなどし、スペンサアのこの書に接するに及び、正義仁惠(Justice Benevolence)等の文字に魅せられ、これこそ新時代を指導する原理であると心醉せる餘り、その飜譯を思ひ立つたと云ふ。なほ彼には外に「アモス政理汎論」第一卷(明治十六年刊)「彌兒教育論」(同十八年刊)、米國ウヰルソン原著「日清文明論」(同二十一年刊)等の譯書がある。【解説】本書は我が國に於て公刊後十數年にわたり、熱狂的歡迎を受けた。我が明治初期に於てスペンサアの著書が殆ど盲目的と觀らるゝまでに持て囃されたことは云ふまでもないが、かく持て囃さるゝに就いては、彼の立言中に、我が國當面の必要に應ずる幾多恰好の教訓を見出された爲めであらうが、就中この社會平權論は、この點に關し最も時人の渇望に應ずるものであつたと思はれる。スペンサアが政治的幷に經濟的自由主義者として功利説に反對し、自然法幷に自然的權利を固執し、人間の正しき社會生活の根柢として、「各人はその全能力を發揮する完全なる自由の權利を有し而してこの自由は凡ての他人が有する自由と一致する」と述べ、それには、(一)他人に積極的害惡を加ふべからざること、(二)各人は他人の幸福を促進すべく努めることの二條件が必要だと云ひ、この二條件に依つて初めて人間に道德的意識が賦與されると説いたことや、その他隨處に現はれてゐる自由・平等・正義・權利・義務等の言葉が、非常な感銘を與へたに相違ない。よく人は曰ふ、明治前半期に於て最も多く日本を教へた外國人はスペンサアであり、スペンサアの著で最も多く譯されたものは代議政體論、而して最も多く讀まれたのは「社會平權論」であると。以てこの書が如何に廣く頒布されたかを想ふべきである。何れにしても本書は、この頃の政治思想を説くに方つては、顧じて閑却することの出來ない貴重な文獻である。

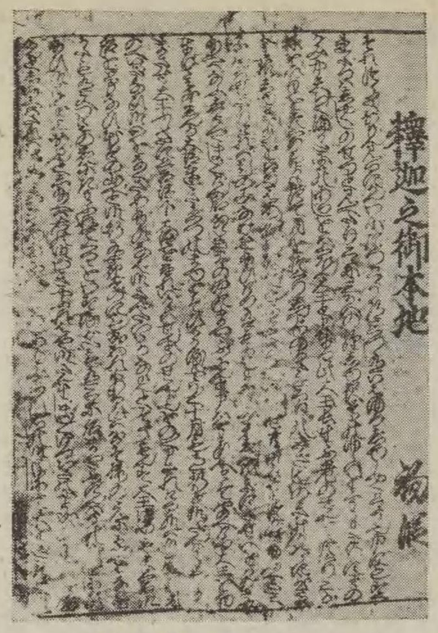
【附記】本原書の邦譯に、もう一種の異本がある。それは明治十年十二月に第一册を出した尾崎行雄譯の「權理提綱」(二册)である。これは原書の第二編と第三編の初めの一章との意譯である。

【參考】社會平權論解題(明治文化全集第五卷「自由民權篇」) 【吉野】

釋迦如來誕生會(しやかによらいたんじやうゑ) 淨瑠璃 五段 時代物 【作者】近松門左衛門 【興行】元祿八年四月八日より竹本座(外題年鑑) 【諸本】七行九十四丁本、山本九兵衛板。十行三十五丁本、奥付缺。近松門左衛門全集第二卷・近松全集第四卷・近松戯曲集(國民文庫)・近松時代淨瑠璃(帝國文庫)・近松淨瑠璃集上(有朋堂文庫)所收 【題材】釋迦の傳記に種々の佛教説話を織り込んだもの。釋迦を題材とした淨瑠璃は、外に「釋迦之御本地」がある。これは、寛永二十年に板行された假名草子「釋迦の本地」三卷を六段物に改めたもので、説經節の正本らしい。麟形屋孫兵衛板で、享保頃の板行であるが、それ以前から行はれたものと思はれる。次に「しやか八さう記」(新群書類從第五)は、寛文六年に大阪から板行された假名草子「釋迦八相物語」八卷の第三卷釋尊誕生までを五段物に改作したものである。寛文九年八文字屋の板行であるが、何人の正本か明かでない。「釋迦八相物語」は、天和四年江戸で板行された時には「釋迦如來一代記」と改題された。假名草子では、他に江戸板の「しやか出生記」(刊行年代未詳)があるが未見。「釋迦如來誕生會」は、「釋迦八相物語」を骨子として御

家物風に改作したものである。

【梗概】〔一段〕（大序）五天竺淨飯大王の后憍曇彌は妹の摩耶夫人の懐姙と聞き、嫉妬の餘り、右の司婆將軍と謀り、大王の甥提婆達多を世繼と定めようとして、左の司烏陀夷の女房吉祥女の反對にあふ。（中）烏陀夷は、愚鈍の子槃特を伴ひ雞足山の帝釋天に日參の途中、婆將軍の郎黨伯了頓の落した密書を手に入れ、健陀羅山に摩耶夫人調伏の壇が構へあることを知り、大に驚いて駈出すが、折から飛び來れる鷲のため槃特を攫はれる。（切）四月八日、百花を以て飾られた歡喜園の産屋に於て、摩耶夫人の右腋蓮華の開く如くして太子誕生あるが、夫人はそのまゝ虚しくなる。ところへ憍曇彌・婆將軍等が官兵を引具し來り、太子を親殺しと詈つて取廻すを、吉祥女、官女達を指揮し、豫て鉾を仕込んで置いた花の棹を以て應戰する。そこへ烏陀夷入り來り、彼等が夫人調伏の陰謀を發き、劍を拔いて官兵を蹴散す。〔二段〕（序）太子十九歳となり、耶輸多羅女といふ美人を后に迎へ、后は懷胎するが、太子は氣常を觀じて出離の志固く、時機を窺つてゐる。父の大王がこれを知り、四方の門を嚴重に固めしめてあるので、太子は所志を遂げ得ないでゐる。（中）二月七日の夜更、遂に太子は門番共の寢入れる隙を窺つて門を拔け出で、金泥駒に跨り、車匿童子を供として檀特山に向ふ。耶輸多羅女は夢覺めて始めて大騒ぎとなり、吉祥女等と共に城内を穿鑿し、門番共の寢入れるを發見してこれを責める。併し彼等は實は提婆の廻し者伯了頓等であつたので、兩方入り亂れて戰となり、吉祥女は伯了頓を討つが、我が身も深創を負ひ、辛うじて后のみを遁れしめる。（切）提婆は郎黨左倍軍・右倍軍の二人を從へ、中天竺の咽喉に當る恒河の橋に要して待つところに耶輸多羅女逃れ來り、既に危い所を折から馳せ來つた烏陀夷に救はれる。烏陀夷は左倍軍を打殺し、提婆等を追散らす。〔三段〕（序）「悉達太子道行」檀特山に着いた太子は、車匿と金泥駒とに別れを告げて歸國せしめる。（切）烏陀夷は后の供をして檀特山に向ふ途中、こうふの里で、圖らずも十九年以前驚に攫はれた槃特に邂逅する。槃特は宿の主なる獵師林丹に救はれ、子として育てられたのである。折から提婆の家來俱牟波羅等が取逃した一羽の山鳩が窗から飛び込むが、阿呆の槃特はこれを打殺してしまふ。俱牟波羅は怒り、鳩の代償として鳩の目方だけの槃特の肉を切つて渡せと逼るが、烏陀夷・林丹等に追散らされる。〔四段〕（序）檀特山に入つた太子は、阿羅々仙人の弟子となり、剃髪して名を曇曼沙彌と改め、難行苦行の結果、遂に正覺成道して、釋迦牟尼如來天人師佛世尊となる。遙々尋ね來つた后と烏陀夷は、この有樣を見て隨喜の感涙に咽び、結緣により共に悟の道に入る。（中）林丹の妻瑠璃仙女は、五天竺第一の須達長者方に奉公してゐるが、外道の提婆を信仰してゐる長者は、瑠璃仙女が佛法に歸依し、子槃特を釋尊の弟子としてゐる故を以て迫害を加へる。そして折から門外に托鉢に來た釋尊の一行にまで侮辱を加へるが、槃特が釋尊の命を受けて示せる奇蹟を見るや、忽ち一念發起して提婆を請ぜんとして建立せる祇園精舍を釋尊に奉る。（切）今宵釋尊が忉利天に昇るといふので、長者は如來昇天の道を照し奉らんとて萬燈會を催す。林丹夫婦はこれを聞いて一燈を供養する。人々は長者の萬燈に比して林丹夫婦の一燈の貧弱さを笑ふが、俄かに吹き來つた黒風に、萬燈は瞬く間に消えて一燈のみ殘る。釋尊は呆然自失してゐる長者一家の人々に向つて、汝等が我慢の心を挫かんための示であると諭される。長者は始めて長者の萬燈貧女の一燈に劣る事を知つて懺悔すれば、萬燈再び一度に耀く。かゝる所へ提婆駈け來り、釋尊に危害を加へようとすると、忽ち大地二つに裂け、阿鼻焦熱の猛火燃え上り、提婆は煙に咽んで死ぬ。〔五段〕（序）跋提河の邊り沙羅雙樹の下で、釋尊が涅槃に入るといふので、耶輸多羅女は未だ父の顔を知らぬ子羅睺羅を伴つて道を急ぐ途中、跋提河の邊で、零落せる憍曇彌に會ふ。憍曇彌は既に罪障を懺悔して釋尊涅槃の會座に列りたいと請ふので、耶輸多羅女は同じく涅槃に參り會はうとて、三人通りかゝつた御弟子摩訶迦葉に請うて、三人共に戒を受け佛弟子となる。（大切）釋尊は御齢八十一歳にして沙羅雙樹の下で御入滅あ



六段本「釋迦之御本地」

五段本「しやかさうし」（東大圖書館藏）

る。折から迦葉の一行が馳せつける。

【構想】第三段目、林丹宅の段は山本土佐掾の正本「天王寺彼岸中日」（天王寺開帳）から暗示を得たものである。卽ち「彼岸中日」の第三段目、曇勝が殺生の獵を業としてゐる報いに、子のとらのおを鷲に攫はれるいふのが、本作で

は殺生の戒を犯としてゐる報いに、夫婦の間に子が育たなかつた林丹が、鷲に攫はれて來た槃特を我が子として育てることになつて居り、又鳩の代償として槃特の肉を切り取り倶牟波羅に與へるといふのは、第一段目、豐勝が鷹に追はれて己が袂に逃げ込んだ鳩を助けるため、鷹の餌として己が肉を切り取らしめるといふ事の流用である。なほ鷲に攫はれた我が子が成人してゐて再會するといふ本作の趣向は、明治二十年二月彦六座初演の加古千賀女作「良辨杉の由來」に取入れられて居り、又第一段目、歡喜園の產屋の段の官女の花軍は、「國姓爺合戰」(別項)第一段目、南京宮殿の段の梅檀女緣定めの花軍として再用せられてゐる。影響に就いては「釋迦八相倭文庫」參照。

【參考】近松全集第四卷解題藤井乙男〇天王寺彼岸中日(稀書複製會本所收)　【高野(正)】

釋迦八相倭文庫(しやかはつさうやまとぶんこ)　合卷五十八編　各編四册合二册　【作者】萬亭應賀　【畫工】豐國(一陽齋)・國貞(二代)・惺々狂齋(河鍋曉齋)　【刊行】弘化二年に初編を出し、明治四年に第五十八編を出す。上州屋重藏梓。猪波曉花は、續帝國文庫第四十二編中に一編を拾遺補作する。【名稱】釋迦が一代に示現した降兜率・入胎・住胎・出胎・出家・成道・轉法輪・入滅の八相を、我が國ぶりの平易な婦女向の讀物に飜案したことを標榜する。【諸本】續帝國文庫に第五十七編までの本文を收めてゐる。【題材】「釋迦八相物語」(假名草子、八册、寬文六年刊)、「釋迦八相記」(井上播磨掾正本、寬文九年刊)、「釋迦如來誕生會」(別項)等によつたところも認められる。

【梗概】〔初編〕中天竺摩迦陀國の都、迦毘羅城の開闢大賢王より三十六世の帝師子頬王(みかどしゝけふわう)には、淨飯・甘露飯・斛飯・斛飯の四太子があり、御代を淨飯太子に讓る。淨飯大王は高明大臣の勸めにより、新内裏に移り、又三百人の官女を召抱へる。善業國の將軍善覺大臣の娘轎曇彌(きやうどんみ)・摩耶(まや)の二女は、絶世の美人で、斛飯太子の戀を拒絶し、淨飯大王にかしづく。帝は、淨飯・甘露飯・斛飯・斛飯の四太子があり、御代を淨飯太子に讓る。淨飯大王は高明大臣の勸めにより、新内裏に移り、又三百人の官女を召抱へる。善業國の將軍善覺大臣の娘轎曇彌・摩耶の二女は、絶世の美人で、斛飯太子の戀を拒絶し、淨飯大王にかしづく。帝は

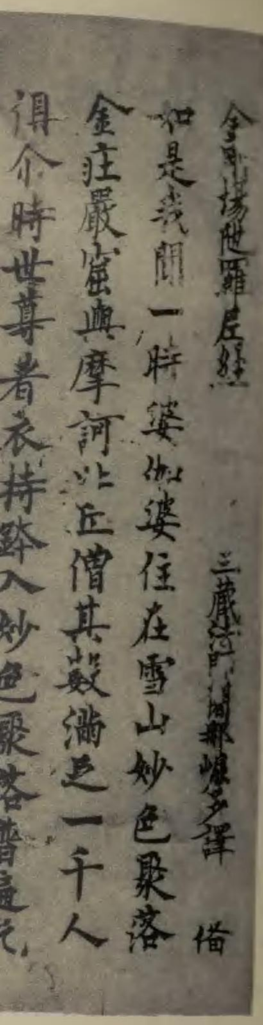
釋迦八相倭文庫(表紙)

姉を月の方、妹を花の方とよび、摩耶の寵愛は特に厚く、姉が嫉妬する。久遠の佛が胎内に入り、且つ我が前生は瑠璃女であると夢みて、摩耶は姙娠する。〔二編〕轎曇彌が妹を呪詛させた行者は金輪際へ陷る。十三ケ月を經るも出產せず、苦惱と不安とのために自殺を企てる。夢に過ぎし頃の佛が現れて、轎曇彌の嫉妬强く、誕生せば邪念を增す故に胎内に留まると告げる。百人の人相見中の唯一人のみが、衆生濟度の法王の誕生を豫言する。藍毘尼園(らんびにゑん)の花の宴に、摩耶は帝の望により提婆羅樹(だいばらじゆ)の花を折らんとする時、產氣づく。〔三編〕摩耶の左の脇より王子が誕生し、夫人は花の萎むが如くに瞑目する。摩耶夫人を夕陽山の頂に葬る。轎曇彌の心が改まり悉達太子を子として育てる。太子は三歲の時、夕陽山の墓參に、摩耶を誡の母と悟り、佛を念ずる心を起す。〔四編〕斛飯王の息、提婆達多は心荒く、小弓の勝負に悉達太子に敗けて無念がる。鬱頭藍弗(うづらんぶつ)を師とした太子は、求道の念止み難く、年長の番僧に欺かれて淫肆へ通ひ、正眞の佛に會はんとする。〔五編〕淫肆の長に瞞かれて太子は、鬱頭藍弗の院に戻り、忠臣優陀夷(うだい)の妻の諫に、亡母への孝養からとは言へ、淺慮な行爲を恥ぢ、自殺せんとする。年長の番僧は、法性妙顯といふ魔王で、提婆達多の命を受けて、太子の學問を妨げんとしたものである。〔六編〕院から王宮への歸途、般若の半偈に王位を捨てた孱昭(せんぜう)太子に會ひ、無常を觀ずる。殿上人から檀特山その他の峯にゐる賢道無爲の神仙の話を聞く。〔七編〕十五歲元服。嘗て會つた孱昭太子も、實は淨居佛の化身で、更に藍毘尼園の花見に現はれて、有爲轉變の世相を說く。美人によつて太子の思想を轉じようと、鹿野女(ろくやによ)・瞿陀彌女(くだみによ)を妃にそなへ、更に迦夷衞國王の姬耶輸陀羅(やすだらによ)女を迎へる。〔八編〕耶輸陀羅女の寵愛深く、鹿野女・瞿陀彌女は嘆く。摩耶の腰元であつた好容夫人は淨飯王の寵を受けて難陀太子を產む。好容の兄夜叉軍士は、心邪曲で、達婆太子に屬する。〔九編〕耶輸陀羅女姙娠。淫肆の遊女婆須蜜多が夢に普賢菩薩と現じて、太子に發心をすゝめる。〔十編〕耶輸陀羅女の手に片袖を殘し、王宮を遁れ、愛馬犍陟(こんでい)に跨り、車匿(しやのく)を伴ひ、諸天諸佛に圍繞されて檀特山の麓に着く。時に御年十九歲。〔十一編〕太子は阿羅々仙人に仕へ、着慣れた衣を車匿に渡し、僞家の袈裟を着る。太子出奔後の宮中は大騷ぎで、耶輸陀羅女は押込(おしこめ)、車匿の妻は捕へられる。〔十二編〕南花女の讒言により、耶輸陀羅女の產んだ羅睺羅は間男の子と言ひ觸らされ、共に牢に繫がれる。〔十三編〕觀世音に導かれ、若宮を伴ひて修行中の太子今は瞿曇沙彌(くどんしやみ)に、耶輸陀羅女は會ふ。〔十四編〕提婆達多は、耶輸陀羅女を戀ひ、奪はんとする。太子は照普比丘と改名し、二千五百戒を備へ、伽羅々仙人の般若臺へ向ふ。耶輸陀羅女を戀ひ慕ふ達婆太子は、摩耶慕參の折に攫つて行き口說く。〔十五編〕耶輸陀羅女の身代りに、力士獅子が獄は、我が妻を岳父に殺させて、姬の危難を救ふ。〔十六編〕獅子が獄は母の舍利女及び妻の菩提のために、舍利弗と改名し、その弟子目蓮と共に悉達太子の成道を待つ。〔十七編〕悉達太子、鳩に代つて我が肉を割く。瞿陀彌女は阿難太子を戀うて拒絶される。〔十八編〕悉達太子は、三百日の難行を伽羅々仙人の許で行ひ、名を妙舍利仙と改める。耶輸陀羅女は不義の汚名を受けて拷問にあふ。〔十九編〕後、遂に自殺する。〔二十編〕耆婆大臣の妙藥にて傷は癒え、嘗て摩耶を相して見事的中した豫言者阿私陀仙の妙術で蘇生する。太子は雪山舍利と改名し、雪山で苦行する。〔二十一編〕瞿陀彌女は實家に戻り、繼母に虐待され、須達長者に嫁入りさせられる事を嫌ひ、戀人の阿難太子方に匿はれる。〔二十二編〕達婆太子は、忠臣頗羅墮(はらだ)の首を禍と交換すると言ふ。賓頭盧(びんづる)は摩利支天から貰つた禍てふ獸と父の首級とを交換する。禍が暴れて達婆太子及び惡人等は燒死する。〔二十三編〕頻婆沙羅(びんばしやら)王と韋提希(るだいけ)夫人は世繼の太子の生誕を願ひ、摩利支天が

【構想】第三段目、林丹宅の段は山本土佐掾の正本「天王寺彼岸中日」(天王寺開帳)から暗示を得たものである。卽ち「彼岸中日」の第三段目、豐勝が殺生の戒を槃に攫はれるいふのが、本作で

子として生れかはると聞き、殺害する。〔二十四編〕夫人の産んだのは鬼子の折指太子である。忠臣芙蓉女は太子を深谷に突き落す。それを提婆達多が救ふ。〔二十五編〕悉達太子は十二年の修行で成道正覺を遂げ、釋迦如來本佛師と尊ばれる。〔二十六編〕驕曇彌は眼を患ひ、己が耶輸陀羅女・羅睺羅につれなかりし事を悔い、難陀太子を廢し、羅睺羅を皇太子にする。〔二十七編〕釋迦は出山して鹿野苑で竪立太子を教化し、尼狗陀天子を初め百人の國王を阿羅漢にする。〔二十八編〕世尊は優樓頻螺迦葉の家に宿り、假に遊女となつて如意寶珠を取返さんとする沙迦羅の二女を教化し、又三迦葉を阿羅漢にする。〔二十九編〕目蓮の弟伽陵長者は、佛法に歸依して竹林精舍を建立する。これより先、鹿野女が夢に悉達太子を見て受胎し、分娩した子の善星は放逸である。〔三十編〕富婁那に伴はれて修行に出で、欺いて逃げ去る。摩那耆は世尊の胤を宿したと僞はる。世尊欽婆羅を導き、また大迦葉に阿羅漢果を授ける。〔三十一編〕大迦葉の飼犬の前生は、その實父である。須達長者の下婢末利女は波斯匿王の后に召される。〔三十二編〕淨飯王の宮殿では諸人が世尊の歸城を歡喜して待つ。可難太子は阿難太子と通じてゐる瞿陀彌女を討たんとし、我が妹で阿難の妻の柳華夫人を殺す。〔三十三編〕世尊は鬼子母の子、千人中の末子嬪伽羅を隱して、鬼子母に一念發起させる。〔三十四編〕波愛者耶の町に優陀夷・舍利弗、世尊を迎へる。優陀夷は一子槃特を御弟子に奉る。提婆達多は阿闍世太子と共に、世尊を討たんとして失敗する。〔三十五編〕世尊は夕陽山に於て父王・耶輸陀羅、諸人に對面し給ひ、阿難・可難は御弟子となる。世尊は父母報恩の說法をされる。〔三十六編〕羅睺羅は、ただひとりで說法の座をたづね、父子の對面をなし、如來の御弟子になる。耶輸陀羅女も出家する。〔三十七編〕耶輸陀羅女は善哉比丘妙惠の法名を賜はる。世尊は忉利天に上り摩耶夫人に會ふ。阿闍世太子は、嘗て提婆達多に救はれた折指太子で、王舍城へ歸る。〔三十八編〕魔王法性妙顯と提婆達多とに誑かされ、親の頻婆沙羅王夫婦を怨み、芙蓉女を殺す。提婆達多等は世尊下天の際、これを橋上に燒いたが失敗する。〔三十九編〕夕陽山を精舍となし天正寺を營む。世尊は妙惠を尋ねる。妙惠は羅睺羅を一度世に立てて下されと願ふ。〔四十編〕阿闍世太子は、提婆達多に瞞され、天女と夫婦の盃をする。瞿陀彌女の侍女花子は、舊主の里、執杖と密通し、不具の我が子を、見世物に賣る。〔四十一編〕身代金を執杖に騙取され、怨の一念が執杖を取殺す。世尊は王舍城に招待され、阿闍世太子の謀反にあひ、耆闍窟に避ける。〔四十二編〕執杖の母丹車は善星を養ひ、世尊に渡して禮金を得んとして失敗する。善星は世尊の御弟子となり、阿闍世に內通する。〔四十三編〕提婆達多は四天王を遣はして耆闍窟を攻め、密迹金剛に破られる。阿闍世太子は世尊に歸依する父王を牢に繫ぐ。〔四十四編〕父王を餓死せしめんとしたが、韋提希夫人は肌に食を塗つて行き夫を養ふ。阿闍世太子が母を殺さんとするを月光・耆婆の二臣がとめる。王位に卽いた阿闍世は、伊沙那國の姬妙天夫人を娶る。世尊を害せんとして、却つて妙天が妙顯の魔術による骸骨なることを知り、世尊に歸依する。〔四十五編〕提婆達多は、耶輸陀羅女を奪つたが、女は大力無双で、提婆達多の腕を摑み挫く。妙顯は優陀夷の佩く獅子王の劍の威德で退治される。摩鄧密、阿難に戀する。〔四十六編〕摩鄧密と結婚させられる處を、重勝王菩薩が阿難を救ふ。〔四十七編〕優闐王、世尊の像を赤栴檀で刻む。日本に傳はつた嵯峨の釋迦はこれである。須達長者は十里四方の地に黃金を敷いて祇陀太子の園を購ひ、祇園精舍を建てる。舍利弗六師外道と較術に勝ちて弟子とする。〔四十八編〕提婆達多に內通した善星は、阿鼻地獄に落ちる。耶輸陀羅女と羅睺羅とは、阿難が失つた世尊の鐵鉢の搜索に出て、車匿夫婦に會ふ。〔四十九編〕車匿は鐵鉢を提婆達多から得たが、世尊に味方すると知られて殺される。伜の林丹も舊主の身代りとなる。祇園精舍に五百億劫の重罪を滅する釣鐘の建立を提婆達多と炙匿が妨げる。〔五十編〕鐵鉢は羅睺羅の手から世尊の御手に戻る。世尊は舍衞國の門前で、沙念に前生の借五百金を催促される。〔五十一編〕沙念は甥の舍利弗の勸めで、世尊に從ふ。祇園精舍の鐘供養に炙匿は少女と變じて鐘を奪つて去る。〔五十二編〕龍宮の鐘を借りて鐘樓にかける。〔五十三編〕伽留羅提舍の娘善愛は、波斯匿王の側室で、祇園精舍の破却を賴まれる。槃特は愚を癒すために、香商人の兄摩訶槃陀の許にゐる。〔五十四編〕北天竺惡毒王は、世尊の方便により佛敎を信じ、大林精舍を建てる。〔五十五編〕吝嗇の月蓋長者の下婢利德は、車匿の妻の永樂で、長者を濟度に來た羅睺羅の難を救ふ。長者は娘如是姬の犧牲の身代りに、孝子法名を買ひ、山神に供へる。〔五十六編〕舍衞國の勝鬘姬は践祚王に嫁し、王に佛道を信ぜしめる。阿難は好男子で、蓮華女に懸慕され、遂に濟度する。〔五十七編〕月蓋長者が如是姬の身代りに法名童子を立てるのを神佛が惡み、姬に溫病を患はせる。姬の病が機緣となり、長者は世尊に歸依し萬燈會を行ふ。長者の萬燈は消えたが、我が髻を二朱に賣つて獻じた貧者永樂の一燈は、煌々として滅しない。〔五十八編〕親を樂に過させんと、人身御供に身を賣つた法名童子を母は搜す。炙匿龍王は供へられた法名を邪法に引入れんとし、父の敵と悟られて殺される。世尊の御推擧で法名は毘舍離國王の嗣となる。

【解說】「田舍源氏」の先蹤によつて、「釋迦八相物語」を敷衍し、現代化する趣向である。從つて第三編までは、極めて類似し、「物語」の第四は「倭文庫」の第十一編の初めまでに、第五は「倭文庫」の第十九編の終り迄に敷衍されてゐ、構想上に大きさ、廣さ、深さを增してゐる。各種の潤色を以てし、和漢の材料を取込み、直接各種の經文から得たところが多く見え、「源氏物語」や馬琴の讀本の影響も認められる。增一阿含經、法華經、出曜經、十誦律等は好んで引くところであり、因緣の糸を極めて複雜にし、人物の背後を繫いでゐる。佛敎と外道・善惡の對立を、骨肉の淨飯・斛飯が摩耶・驕曇彌の愛を爭ふところから導き、更に提婆達多・達婆が耶輸陀羅女を奪ふ惡行に及ぼし、戀愛を中心にして佛くさい點をうすめてゐる。修行中の太子と王宮の出來事とを前半に於ては一篇中に共に描かんとし、人物の結末にも苦心が見える。第四十編以後になると、描寫の對象を低下し、筋の上からは重要でない部分をも長々と寫してゐる。讀者に多くの女性を豫想し、對女性的の態度や材料を取込んでゐる。當時の閨帳や世間の出來事



金剛場陀羅尼經（歳次丙戌年）　小川睦之助氏藏

金剛場陀羅尼經

如是我聞一時婆伽婆住在雪山妙色聚落
金莊嚴窟與摩訶比丘僧其數滿足一千人
俱介時世尊著衣持鉢入妙色聚落普遍乞
食還至本處飯食訖結跏趺坐正念不動介
時世尊入名一切法平等相入三昧入三昧
已諸比丘等頂礼佛足悠然不見如來所在
各自相問今婆伽婆消伽陀何處去耶介時

三藏法師玄奘譯　偈

大般若波羅蜜多經（大般若經）卷第二百七十九（和銅五年）　太平寺藏

淨道相智清淨故一切智清淨何以故若一
切智智清淨若道相智清淨若一切智清淨
无二无二分无別无斷故一切智清淨故
一切相智清淨一切相智清淨故一切智清
淨何以故若一切智智清淨若一切相智清
淨若一切智清淨无二无二分无別无斷故

大般若波羅蜜多經卷第二百七十九

自愛經（天平十二年光明皇后御願經）　本山彦一氏藏

戒為清信士者遂以五戒十善為國政者天
祐護國遂興矣諸天龍神王臣黎民无不歡
喜

自愛經一卷

皇后藤原氏光明子奉為
尊考贈正一位太政太臣府君尊妣
贈從一位橘氏太夫人敬寫一切經
論及律莊嚴既了伏願憑斯勝因奉
資冥助永庇菩提之樹長遊般若之
津又願上奉　聖朝恒延福壽下
及寮采共盡忠節又光明子自發擅
言和獠忧倫勤除煩障妙窮諸法早
契菩提乃至傳燈無窮流布天下聞
名持卷獲福消災一切迷方會歸覺
路

天平十二年五月一日記

發起させる。〔三十四編〕波憂者耶の町に優陀夷・舎利弗、世尊を迎へる。優陀夷は一子槃特を御弟子に奉る。提婆達多は阿闍世太子と共に、世尊を討たんとして失敗する。〔三十五編〕世尊は夕陽山に於て父王・輸盧檀、諸人に對面し給ひ、阿難・可樓は御弟子となる。世尊

を殺さんとするを月光・耆婆の二臣がとめる。王位に卽いた阿闍世は、伊沙那國の姫妙天夫人を娶る。世尊を害せんとして、却つて妙天が妙顯の魔術による骸骨なることを知り、世尊に歸依する。〔四十五編〕提婆達多は、耶輸陀羅女を奪つたが、女は大力無双で、提婆達

長者の下婢利德は、車匿の妻の永樂で、長者を濟度に來た羅睺羅の難を救ふ。長者は娘如是姫の犧牲の身代りに、孝子法名を買ひ、山神に供へる。〔五十六編〕舍衞國の勝鬘姫は波稱王に嫁し、王に佛道を信ぜしめる。阿難は好男子で、蓮華女に戀慕され、遂に濟度す

前半に於ては一篇中に共に描かんとし、人物の結末にも苦心が見える。第四十編以後になると、描寫の對象を低下し、筋の上からは重要でない部分をも長々と寫してゐる。讀者に多くの女性を豫想し、對女性的の態度や材料を取込んでゐる。當時の開帳や賑間の出來事

大乘阿毗達摩雜集論第十六卷（天平勝寶四年）　石山寺藏

觀諸大菩薩共結集故遍所集者謂遍攝一
切大乘阿毗達摩經中諸思擇處故所集
者謂由无倒結集方便乃至證得佛菩提故

大乘阿毗達摩雜集論第十六卷

用紙十三

賢愚經（大聖武）　帝室博物館藏

道歡喜合掌白世尊言唯垂矜
愍見賜四願一者諸病比丘給
足湯藥隨病飲食二者看病比
丘亦給其食三者遠來比丘先

紺紙金銀泥華嚴經卷第十（永久五年清衡經）　金剛峯寺藏

大慈大悲心充滿十方界分別諸佛剎佛法及三世
欲具佛功德菩薩法藏海饒益衆生故初發菩提心
欲悉分別知虛空等衆一切群生類諸佛及佛法
皆得一切佛諸道至處力成就不退轉饒
一切衆生中常起大精進速離顛志念修習饒益心

妙法蓮華經分別功德品第十七（保安三年頓寫經）　帝室博物館藏

妙法蓮華經分別功德品第十七
尒時大會聞佛說壽命劫數長遠如是無量阿僧祇衆生得大
勢菩薩摩訶薩阿耨多羅三藐三菩提故遠時六百八十万億那由他恒河沙衆生得

一字寶塔法華經方便品第二　安田善次郎氏藏

大日經卷第三　帝室博物館藏

智智金剛等句
南麼三曼多勃馱南一阿
時金剛手秘密主等諸說金剛
薩埵大悲大衆得未曾有開敷眼瞥看一切
薩婆若而說偈言

に觸れてゐる、演劇方面からの影響も多く、全く狂言本を眞似た部分もある。あらゆるものを攝取し肯定する大乘思想を根幹とし、勸善懲惡を本領とする。繪に異國情調を附與せんとする苦心があるが、世界は全く德川末期で、世尊も羅漢も、市井凡俗の風貌である。【史的地位】釋迦を題材とする作品は「釋迦の本地」（室町時代）、「しやか出生記」（假名草子）、「釋迦

た瓦經や一字一石經（小石一つ毎に梵文の字を一字づつ書いたもの）もある。普通の寫經は、紙に界線を引いて、それに墨書するのであるが、また金銀泥を以て書いたものも少くない。所謂紺紙金泥經の如きはそれである（これは既に奈良朝から見えてゐる）。而して各行の文字は、大抵十七字詰で（支那の六朝經をはじめ、然らざるものもないではない）、一般に楷書である

年始寫の聖武天皇御願經、五月一日經と稱せられる天平十二年五月一日記の光明皇后御願經、天平寶字三年九月二十七日寫經師一萬寶郎書寫經、神護景雲二年五月十三日孝謙天皇御願經・繪因果經・賢愚經（大聖武）等は有名である。これ等は殆ど隋唐經そのまゝの書風のものが多い。當時は又官營の外に、民間の寫經即ち地方經と稱せらるゝものも少くなかつ

冊【編者】樋口道立【刊行】安永五年五月に成つたので當時の刊行と思はれる。京平野屋善兵衛刊【諸本】蕪村曉臺全集（俳諧文庫）・蕪村全集（穎原退藏編）・蕪村の俳諧學校（乾木水編）・中興俳諧名家集（俳書大系）・蕪村新十一部集（河東碧梧桐編）所收本がある。【由來・內容】洛北一乘寺村の金福禪寺は、土人口稱し

に關れてゐる。演劇方面からの影響も多く、全く狂言本を眞似た部分もある。あらゆるものを攝取し肯定する大乘思想を根幹とし、勸善懲惡を本領とする。繪に異國情調を附與せんとする苦心があるが、世界は全く德川末期で、世尊も羅漢も、市井凡俗の風貌である。【史的地位】釋迦を題材とする作品は「釋迦の本地」(室町時代)、「しやか出生記」(假名草子)、「釋迦八相記」「釋迦如來誕生會」等をはじめ、黑本・青本等にも見える。かゝる類書中にて特筆すべきは、「釋迦八相物語」「釋迦八相倭文庫」である。後者は合卷中の大長篇であると共に、釋迦を題材とする作品中の最長篇であるが、入滅相までの完結を見なかつたのが惜しい。「釋迦實錄」(鈴亭谷峨、安政元年刊、讀本)の如きは、この「倭文庫」の流行によつて作られたものである。弘化三年には「倭文庫太子雙六」(應賀作、豐國畫)が出で、安政元年三月に「花見臺大和文庫」(櫻田治助作)は中村座に上演され、その際、槃特の所作「稚美鳥末廣」(十代杵屋六左衞門作曲)は現に行はれてゐる。當時「倭文庫」に因んだ錦繪や玩具等が多く行はれた。【小池】

寫經【名義】佛經を筆寫すること、又その筆寫したる佛經をいふ。而して死者の冥福祈願のために寫したものを願經と云ひ、大部の經文を一日中に寫したものを頓寫經と云ふ。【解說】寫經は古來佛法弘通の必要上、又は追善功德のために行はれ、大は一切經の書寫より、小は心經・阿彌陀經の書寫に至るまで、各種各樣のものがある。用紙は多く麻紙・穀紙・斐紙など上質の紙で、白紙か黃紙が普通であるが、紺紙・紫紙等のこともある。往古、經卷のことを一に染紙と云つたのもそのためである。又時には紙でなく、瓦・石などに書いた瓦經や一字一石經(小石一つ毎に梵文の字を一字づつ書いたもの)もある。普通の寫經は、紙に界線を引いて、それに墨書するのであるが、また金銀泥を以て書いたものも少くない。所謂紺紙金泥經の如きはそれである(これは既に奈良朝から見えてゐる)。而して各行の文字は、大抵十七字詰で(支那の六朝經をはじめ、然らざるものもないではない)、一般に楷書であるが、時に行書・草書の例もある。何れにしても筆蹟巧秀なるを尙び、中には繪畫等で種々の裝飾を施した美術的の裝飾經(別項)の如きもある。さて我が國に經卷の傳來したのは、欽明天皇十三年十月に百濟の聖明王から經論若干卷を獻じたのを初め、度々のことであるが、その初めは朝鮮を經由して來た支那六朝の寫經であつたらしく、その後、遣隋使・遣唐使の派遣以後は隋唐經が多く輸入せられた。而して佛法興隆と共に、これ等外來經だけでは間に合はず、それを本として國內に於て書寫することが行はれ出した。天武紀二年三月の條に、「是月、聚書生、始寫一切經於川原寺」とあるは、我が國寫經に關する記事の初見であり、歲次丙戌年(天武天皇十四年ならん)五月、川內國志貴評(郡)內の知識の所願に成つた「金剛場陁羅尼經」は、現存國內寫經の最古のものである。この寫經の書風は隋唐の風無く、寧ろ六朝風の一種と見られる。次いで文武天皇崩御の際、和銅五年十一月十五日書寫の長屋王御願經がある。大般若經で、所謂和銅經である。奈良朝に入つては佛教全盛と共に寫經も亦極盛期に達した。當時は官立の寫經所を設けて經師(寫經生)・校生・裝潢以下の役人を置き、各々その事業を分擔せしめた。この時代の寫經は比較的澤山に現存するが、中にも天平六年始寫の聖武天皇御願經、五月一日經と稱せられる天平十二年五月一日記の光明皇后御願經、天平寶字三年九月二十七日寫經師一雜寶郎書寫經、神護景雲二年五月十三日孝謙天皇御願經・繪因果經・賢愚經(大聖武)等は有名である。これ等は殆ど隋唐經そのまゝの書風のものが多い。當時は又官營の外に、民間の寫經即ち地方經と稱せらるゝものも少くなかつた。その書風は前者に比して多少拙劣なるを免れぬ。江州石山寺藏の寫經はこれが多い。次いで平安朝に入るや、祈禱修業本位の天台・眞言の兩宗が興つて、學問的の南都佛教は衰へ、佛教が次第に國家的でなくなると共に、寫經事業も衰頹し、漸く前代の遺風を持續するに過ぎなかつたが、藤原時代以後、日本趣味が高調せらるゝに及び、寫經も亦、和歌和文の如く徹底的ではなかつたが、優麗なる和風のものとなつた。殊に裝飾經の發達は著しいものがある。久能經や嚴島の平家經などはこの和樣寫經の代表であらう。次の鎌倉時代は、その初めは前代の風を繼承してゐたが、中頃に至り漸く變調を來して、剛健素朴の風は加はつたが、優美上品の趣は失はれ、爾來寫經としては、質に於ても量に於ても特筆すべき程のものはない。それは武家時代の社會性にも因ることであるが、一方宋版一切經を初め版經が流行し來つたことも見逃し難い原因であらう。ただ玆に附記して置くべきは、この頃よりして細字寫經即ち所謂豆經といふものが目につき出したことである。その小型のものは縱二寸許りのものあり、文字の細きも推して知るべきであるが、多くは願經式のもので、經文は法華經が多い。

寫經社集(しやきやうしやしふ)　俳諧集　半紙本一冊　【編者】穗口道立　【刊行】安永五年五月に成つたので當時の刊行と思はれる。京平野屋善兵衞刊　【諸本】蕪村曉臺全集(俳諧文庫)・蕪村全集(潁原退藏編)・蕪村の俳諧學校(乾木水編)・中興俳諧名家集(俳書大系)・蕪村新十一部集(河東碧梧桐編)所收本がある。【由來・內容】洛北一乘寺村の金福禪寺は、土人口稱して芭蕉庵と呼び、蕉翁の遺蹟と傳へたゐた。而も幾星霜を經てその形見すらも殘らないので、蕪村門の道立(別項)が發起となり、金福寺の住職松宗を初め同志の者を語らつて、一草屋の再興を企て、毎年卯月の初と長月の末、必ずこの寺に會して、翁の高風を仰ぐこととなつた。かくて同志の者が安永五年四月、始めて寫經社を結び、金福寺の殘照亭に會して、道立の「植るかゝる始めは低き田うた哉」を發句とした歌仙一卷を興行した。その歌仙を初め、席上の探題句等を集めて一冊としたのが本書である。僅か數丁の小册であるが、全部蕪村の板下になり、特に卷頭には、「洛東芭蕉菴再興記」と題して、蕪村が詳しくその再興の由來を記した一文が添へてある。これは彼の遺草中最も長文であるのみならず、字句頗る彫琢を加へ、筆力の精勁を示してゐる。なほこの記は、天明元年五月に自筆した眞蹟が、今金福寺に殘つてゐる。字句には殆ど異同がない。また「蕪村文集」(別項)中にも採錄されてある。

【參考】芭蕉菴由來記　金福寺編　【潁原】

釋阿(しやくあ)　「俊成」を見よ。

雀志(じやくし)　俳人　【姓名】飯田銀藏、幼名甚之助。後、齋藤氏を嗣ぐ。【別號】雪中庵　【生歿】嘉永四年八月、江戶日本橋駿河町越後屋呉服店の假營業所に生れ、明治四十一年十

二月二十三日、順天堂病院に歿した。享年五十八【閲歴】父が三井の重役であつた關係から三井銀行(元の三井両替店)に勤め、横濱支店長となつたが、後、職を辭して下谷根岸に閑居し、服部梅年の門に入つて俳諧を學び、五世老鶯巢を繼ぎ、後、師の跡を承けて九世雪中庵を繼いだ。俳諧に關する珍籍古書を蒐集してその保存を一代の事業とし、當時藏書家の名が高かつた。歿後、その藏書は酒竹文庫と安田家へ讓つた。【編著】嵐雪全集 ○註解玄峰集 ○蓼太全集(梅年・宇貫と共編) ○初花集 ○溫故二十四番 ○歌妓二十四時等がある。【伊藤】

若沖(じやくちゆう) 國學者 【姓名】海北千之 【別號】岑柏 【生歿】延寶八年に生れ、寶暦六年(二四一六)歿す。享年七十七 【閲歴】若沖は浪華の町人であつたらしいが、職業は詳かでない。十五六歳の頃から契沖に師事して、生涯を學問に從事したのである。著書は契沖門下では最も多く、精根な又篤實な學者であつた。元祿九年の契沖の萬葉講義を聽講し、その師説を一々筆記した。講義の終つた後に彼が主催で竟宴を開いた。契沖の死後、その「萬葉集師説」を奉じて、契沖への思慕の情を終世渝へなかつた。七十四歳の時には、それを仙院に奉納しようとしたが、果さなかつたらしい。水戸彰考館に藏する若沖藏書目錄によると、多くの藏書を有してゐた事を知るが、それ等は皆大阪の四天王寺に納められた。

【著作】和訓類林七卷四册(漢字に和訓を加へたものを類纂したもので、契沖の「萬葉代匠記」の訓點に主として從つて居り、和訓そのものに獨創の見はない。言はば契沖の訓點研究を類纂したものと言ふべきであるが、和語辭書として注意せられる) ○萬葉集類林十五卷(刊) (圖書寮に寫本がある。契沖全集所收。萬葉辭書であつて、いろは順に語を分類し、更に釋言・釋人・釋宮・釋器・釋天・釋地・釋草・釋蟲・釋雜等に分ち、一々「萬葉」に於ける出所を明記し、古典を引いて解釋を加へてある。契沖の「萬葉代匠記」の語彙解釋を類纂したもので、嵩蹊も「代匠記の意をもて小註を加へたるものなり」と言つてゐる如く、その説に於ては殆ど契沖に據つてゐるのである) ○萬葉作者履歴九册(萬葉歌人を一、帝王并追尊帝。二、太子并薨皇后并夫人、皇子并皇女。三、諸王女王。四、大臣朝臣。五、朝臣眞人。六、朝臣諸氏。七、宿禰。八、連・公・君・首・忌寸・伊美吉。九、臣・造・村主・使主・史・倉人・諸姓。十、諸臣・僧・女・庶人に分つて錄け、その歌のある場所を指摘し、而して「日本書紀」等を材料として傳記の資料を錄げ、それに私見を加へてゐる) ○和訓指掌略一册(「和訓類林」と同じ種類のものであるが、人名等も加へられてゐる) ○萬葉集師説五十三册(寫)(内閣文庫藏。「萬葉集」二十卷全部の註釋であつて、總説枕詞はない。契沖の「萬葉代匠記」初稿本に基づいて、契沖が元祿九年圓珠庵に於て行つた萬葉集講義の説を加へてある。或る意味では初稿本「萬葉代匠記」の一本とも言はれるが、しかし所々異同があり、且つ朱で書入などが加へてある。契沖説を師案としてゐる所があり、又、卷四上の「眞野之浦乃與謝乃繼橋」の所に「後の今案に相聞は男女の間によみかはせるが本にて兄弟姉妹朋友にもわたれば、此いもは妹娚あるは女ともだちへよみてつかはせしならん(此説見牛が聞書にありて幸甚々々)」とあり、似閑(號見生)と若沖とがそれ〴〵契沖の講義を筆記した事が知られる。内閣文庫本には毛詩翁愚谷の書いたはしがきがある。各卷に奥書がある。たとへば卷一下に「享保十一丙午七月十八日始而 同八月二十五日校正書畢」とあり、卷三下の奥書には、「已上享保十二丁未四月上旬校正書之畢」とあるから、若沖がこの時整理淨書したものであらう) ○若沖歌集一册。

【業績】萬葉歌者として殊に「萬葉集類林」「萬葉集師説」は、その最も大きな業績である。もとより若沖は契沖の説を守り、それ以上に創見を出すことをしなかつたので、その方面からは物足りない感があるが、しかし「萬葉集類林」の如き、その組織の上から萬葉集辭書としての新様式を作り出した所に價値がある。

【參考】契沖全集第九・十一卷 ○和歌史の研究 佐佐木信綱 (久松)

釋迢空(しやくてうくう) 歌人 【本名】折口信夫 【閲歴】明治二十年二月十一日、大阪市浪速區鷗町一丁目に生れた。三十八年、天王寺中學卒業。少年の頃より讀書癖があり、三十四年以來「文庫」(別項)の短歌欄に投稿し、服部躬治の撰を經た。三十八年國學院大學部豫科に入學。四十三年に根岸派の短歌會に莅む。ついで大正六年から十二年まで雜誌「アララギ」(別項)の同人として、作歌及び評論を發表し、雜誌「日光」の出づるやその同人となつた。歌集に、「海やまのあひだ」(大正十四年改造社)「春のことぶれ」(昭和五年梓書房)がある。歌人としての外、國學院大學・慶應義塾大學に教鞭を執り、國文學・民俗學に造詣が深く、數多の論文がある。歌集の外に、「口譯萬葉集」「萬葉集辭典」「隱岐本新古今和歌集」「古代研究民俗學篇」「古代研究國文學篇」等その他があり、雜誌「土俗と傳説」「民俗學」等の編輯主任としても活躍してゐる。昭和七年春、文學博士の學位を授けられた。「明治三十五年、中學生の禁欲生活を目的とする琴聲會と言ふに入り、次第に深入りして、卒業の年迄、一人此氣分を守り遂げる。後年の大儒生活は此に基くらしい云々」と、迢空自身の記述にある如く、彼は未だ獨身である。

【歌風】歌風は服部躬治より出でて、後、正岡子規系統に移つたのであるから、同じ新派でも、むしろ萬葉派と看做すべきものである。ただ彼は國文學者であると同時に、民俗學者であるから、歌風も自らその色彩を帶び、人情の機微、人事の複雜を詠ずるを以て得意としてゐる。「昭和職人歌合」の如きは、その特色の一端を示すものであり、又同じ萬葉派でも「古今」「新古今」をも取入れ、複雜な一家の歌調を成してゐる。これ彼が赤彦・千樫・憲吉等以外に、一領域を有してゐる所以である。

【參考】海やまのあひだ附錄(自傳) (齋藤(茂))

石楠(しやくなぎ) 俳句雜誌 【創刊】大正四年三月十五日、亞浪(別項)主宰のもとに、乙字の指導を得て發刊された。【沿革】創刊の標語は「我等は俳句を純正なる我が民族詩として、内的に現實生活に踏み立つ眞生命を希求し、外的に自然の象徴たる季語と十七音の詩形とを肯定す。我等は俳壇の頽陋なる因襲的思想を排斥し、偏狹なる鶯派的觀念を打破し、虚妄なる非俳句的傾向を革正し、疎懶なる遊戲者流を警醒せんとす」といふので、その量に於ては僅かに四六判四倍大六頁八頁の小雜誌に過ぎなかつたが、その鋭利なる論鋒と懸命なる努力とは、當時の俳壇に大なる反響があつた。かくて大正六年一月第三卷に入ると共に菊判に改めて一進展を圖り、句集「炬火」の公刊と相俟つてその共鳴者が次第に增大されて行つたが、大正八年初頭、乙字及びその一派が意合はずして去るに會し、危機に面したけれども、能く力を協せて持續し、以來兩三度の小波瀾もあつたとはいへ、依然發展を續けてゐる。その間、時に同人制を採つたこともあるが、今は全く亞浪を主盟としてその統制のもとにある。その主張も、形式に於ては廣義の十七言を肯定し、内容に於ては中心生命た

る自然感を提唱し、その純正なる制作と論議とによりて俳壇の革正を期す」とされてゐる。誌上亦辯難攻撃も幾んどその跡を絶ち本質的研究に力めてゐるが、批判精神は依然旺盛なるものがある。(石楠派參照) 【志田】

石楠派(しやくなぎは) 俳句流派 【解説】臼田亞浪の門人、及び亞浪の主宰する俳誌「石楠」(別項)に密接な關係を持つ人々をいふ。「石楠」創成つてゐる。開題には、書紀・日本の名稱等の由來、本朝史書の目、日本紀講義の例等が擧げられてゐる。注音には、難字句の音が記され、亂脱には、分注位置の當を失したものが正されてゐる。述義は、難語句の意義を諸書に徵し諸説を引いて記したもので、篇中最も重要なる部分である。祕訓は、讀癖を擧げた一卷、述義十一卷、祕訓七卷、和歌六卷より

經二「藥獄經」「俱舍論」「六時偈」「金剛般若經」「罪業報應經」「大品經」「止觀輔行傳弘決」等の諸經論から句をとりて題とし、一首毎に歌意を述べた散文を附してある。この文體にも見るべきものがある。この百首は當時有名で、このうち、「新古今集」(別項)釋教部に八首、「新勅撰集」(別項)釋教部に二首とられてゐる。後撰集」「續後拾遺集」「風雅集」「新千載集」「新拾遺集」「新後拾遺集」「新續古今集」に入れる歌、計二十九首を載せてゐる。寂然の歌は、技巧を弄せず、自然で靜閑の趣を詠じてゐる。集中の歌に、「行く春のかたみばかりに殘しける花の蔭にてけふは暮さむ」(春)「ひぐらしのなく片山の楢の葉に風うちそよぐ夏の夕暮」(夏)など、自ら友として交はれる西行法師の歌

それ等は皆大阪の四天王寺に納められた。【著作】和訓類林七巻四冊（漢字に和訓を加へたものを類纂したもので、契沖の「萬葉代匠記」の訓點に主として從つて居り、和訓そのものに獨創の見はない。言はば契沖の訓點研究を類纂したものと言ふべきであるが、和語研書として注意せられる。）○萬葉續類林十五卷（刊）（圖書寮に寫本がある。契沖の書いたはしがきがある。各卷に奥書がある。たとへば卷一下に「享保十一丙午七月十八日始而　同八月二十五日校正書畢」とあり、卷三下の奥書には、「已上享保十二丁未四月上旬校正書之畢」とあるから、若冲がこの時整理淨書したものであらう）○若冲歌集一冊。【業績】萬葉學者として殊に「萬葉集類林」「萬葉集訓說」は、その最も大きな業績である。もる自然感を提唱し、その純正なる制作と鑑賞とによりて俳壇の革正を期す」とされてゐる。誌上亦雜誰攻撃も幾んどその跡を絶ち本質的研究に力めてゐるが、批判精神は依然旺盛なるものがある。（石楠派參照）　【志田】

石楠派（しやくなぎは）　俳句流派　【解說】臼田亞浪の門人、及び亞浪の主宰する俳誌「石楠」（別項）に密接な關係を持つ人々をいふ。「石楠」創刊時代は乙字の指導を得てゐた關係上、乙字初め風見明成・吉田冬葉等、その門統に屬する人々も「石楠派」を以て目されてゐたが、乙字去つて後は亞浪を中心とする流派を形成するに至つた。主なる人々には、井上日石・原本神櫻（各別項）・佐野良太・安藤甦浪・福島小蕾・飛鳥田孃無公・倉田行人子・松村亘湫等を擧ぐべく、逝ける吉田兀愚・富田木歩・平栗猪山・釘貫狙公・重田暮笛等、亦この派の錚々たるものであつた。鳥田九萬宇・高木蒼梧・原東民等も準石楠派として數ふべきであらうか。　【志田】

釋日本紀（しやくにほんぎ）　註釋書　二十八卷　【著者】卜部懷賢（兼方）　【成立】書中一條家經を攝政と稱へてゐるが、家經の攝政に任じたのは、文永十一年六月であり、而して前田侯爵家所藏の古寫本には、正安三年の奥書が見えるから、文永十一年より正安三年までの間、卽ち後宇多・伏見の朝の頃と考へられる。【諸本】前田侯爵家所藏の古寫本は、正安三年乃至四年書寫の奥書を持ち、卜部家に傳へた最も信憑すべき本である。刊本には十五册になつてゐる古板本と、國史大系本とがある。　【內容】「日本書紀」（別項）の註釋書であつて、奈良朝より平安朝にかけて、書紀を講義した諸博士の私記と卜部一流の家說とを集大成したものである。開題・注音・亂脫・帝皇系圖各一卷、述義十一卷、秘訓七卷、和歌六卷より成つてゐる。開題には、書紀・日本の名稱等の由來、本朝史書の目、日本紀講義の例等が擧げられてゐる。注音には、難字句の音が記され、亂脫には、分注位置の當を失したものが正されてゐる。述義は、難語句の意義を諸書に徵し諸說を引いて記したもので、篇中最も重要なる部分である。祕訓は、讀癖を擧げたもの、和歌は、書紀中歌謠の意義を解釋したものである。【價値】語句の解釋は、今日より見ては甚だ慊らぬ點が少くない。殊に歌謠に於ては滑稽とすら思はれるものがある。ただ祕訓に示された讀み方の如きは、一概に斥くべきものではなく、一般に書紀を理解するためにも本書によつて昔の書紀研究の狀態を窺ふことは必要であらう。併しながら重大なる本書の價値は、今日亡佚した古書の逸文を頗る多く含むことである。諸國の「風土記」「大倭本記」「上宮記」「天書」等の如き、奈良朝若しくはそれに近き時代の古書を、一部分なりとも窺ふことのできるのは、主としてそれ等の逸文が本書に引用されて傳はつたことに基くのである。　【坂本】

寂然法師集（じやくねんほふしのしふ）　歌集　一卷　【著者】寂然法師（藤原頴業）。丹波守爲忠の子、爲業（寂念）の弟、壹岐守となる。後剃髮して兄寂念と俱に大原山に隱棲した。西行と相唱酬してゐる。【諸本】群書類從卷二六九・續國歌大觀歌集部所收。【內容】春（二十首）・夏（十四首）・秋（十九首、續國歌大觀本二十首）・冬（十五首）・戀（十九首、續國歌大觀本二十首）に部類し、計九十七首（神宮文庫藏寫本による。續國歌大觀本九十九首）を收め、次に「乍入撰集漏家集歌」として、「千載集」「新古今集」「新勅撰集」「續後撰集」「續後拾遺集」「風雅集」「新千載集」「新拾遺集」「新後拾遺集」「新續古今集」に入れる歌、計二十九首を載せてゐる。寂然の歌は、技巧を弄せず、自然で靜閑の趣を詠じてゐる。集中の歌に、「行く春のかたみばかりに殘しける花の蔭にてけふは暮さむ」（春）、「ひぐらしのなく片山の楢の葉に風うちそよぐ夏の夕暮」（夏）など、自ら友として交はれる西行法師の歌と趣を等しうしてゐる。戀部までは一首も詞書を有しないが、雜部にはそれ〴〵詞書があり、西行に贈れる歌一首もその中に含まれてゐる。又、「ある人々法文百首をみて和せられたりければ」と詞書して、「濱千鳥はかなき跡を留めずば涙のかゝる玉もみましや」とあるを見れば、「寂然法門百首」（後出）は、その生前すでに名ありしを知るべく、「無常の心を」に「朝顏の花にやどれる露のよは儚き上になほぞはかなき」と詠めるは、その人生觀をはつきり把握することが出來る。【價値】著者の隱遁の生活から生れたこの歌は、自ら時流と異なり、平明自然の調をなし、西行を中心としての一流風を成してゐる。西行との唱和は、「山家集」（別項）にも多く見えて、ことに西行が高野から、「山深み」の第一句をもつた歌十首を贈つたのに對し、寂然が「大原の里」といふ第五句をもつ歌を十首返したことなどは、最も興趣深いものがある。その中の一首は、「玉葉集」（別項）にも入れられた。著者には別に「法文百首」「唯心房集」（別項）がある。

【法文百首】　一卷（寫）（國文東方佛敎叢書歌頌部所收）春・夏・秋・冬・祝・別・戀・述懷・無常・雜に部類して各十首あり、それ〴〵「摩訶止觀」「阿彌陀經」「法華經」「維摩詰經」「涅槃經」「成唯識論」「法華玄義」「普賢經」「仁王經」「觀無量壽經」「華嚴經」「俱舍論」「六時偈」「金剛般若經」「諸經論」「華嚴經」「大品經」「止觀輔行傳弘決」等の歌口は斜に切つてあり、指孔は六個（前面に五孔、裏面に一孔）あつて、その律は洞簫（別項）に似てゐる。これは雅樂の合奏に用ひられたものらしいが、その用法の詳しい事は不明である。今日行はれてゐる尺八は、明暗流・琴古流・都山流に於て幾分の差違はあるが、大體にその形は同じく、太い竹の根に近い部分を用ひ、筒口は根に近い節があつて、少しく管が太く、且つ肉が厚くなつてゐる。竹管には節が七つあるのが普通で、そのうちの三つは相接近して筒口の方にあり、又歌口の所は上端で節になつてゐる。管の直徑は上端で外徑一寸五六分ある。長さは一尺八寸を基本とし、これを八寸管又は壹越管と呼ぶ。これ一尺八

尺八（しやくはち）　樂器　【名稱】管の長さ一尺八寸を本規とするから、この名がある。竹管・簫管・簫（これは特に三孔の尺八をいふ）等の異稱がある。　【性質】我が國中世に行はれたものと、今日行はれてゐるものとは、その形、大に異なつてゐる。古く行はれたものの例は、奈良の正倉院に保存される尺八類で、これは支那から輸入され、奈良朝に於て行はれたものである。何れも眞直な管であつて、竹製・玉製・石製・象牙製等があり、長さは一尺一二寸から一尺四五寸で、內徑四五分乃至六分位、

寸の管は、筒音に於て壹越の音を出すからである。その他、一尺九寸（九寸管、上無管ともいふ）、二尺（神仙管ともいふ）、二尺一寸（盤渉管ともいふ）、一尺六寸（六寸管、平調管ともいふ）、一尺四寸（四寸管、下無管ともいふ）、一尺三寸（三寸管、双調管ともいふ）などの長さを持つたものも行はれる。又稀に二尺二寸乃至二尺四寸のものも用ひられる。指孔は五つ（前面に四つ、裏に一つ）ある。〔樂曲〕本曲・外曲・新曲等の區別がある。本曲は尺八のみの吹奏を本體とするもので、明暗及び琴古流では虚無僧時代に主として吹奏してゐたもので、尺八の獨奏又は連管（連管といふ）曲である。その中で「眞虚鈴」「無海篠」「虚空鈴慕」等は古傳三曲と稱へ、最もこれを尊重してゐる。今は琴古流

尺八之圖

本曲は三十六曲あるが、その大部分は琴古流の祖黒澤琴古（明和八年歿）の作つたものである。都山流本曲はその宗家中尾都山氏の作曲されたもので、獨奏・二重奏・三重奏等があり、時として、箏・玲琴等を伴奏に使用することもある。いづれも尺八家は本曲を最も重視してゐる。外曲は唄・箏・三味線等と合奏するもので、三曲・長唄・小唄・端唄等に合せるものをいふ。これは幕末から明治維新頃に起り、明治以後に至つて大に盛んになつた。今日では殆ど大部分の箏曲に尺八を合せ、三曲として最も廣く尺八を普及せしめた。新曲は最近に至り新日本音樂の勃興と共に、全く新しい手法に基いて作曲されたもので、獨奏・連奏・管絃合奏等種々あり、中には洋樂の組立に對抗せんとしてゐるものもある。

【沿革】尺八の起原は、西部亞細亞の葦管にあるらしい。それは古代に於て埃及にも入りセビとして知られてゐる。この西部亞細亞の葦管は指孔三個を有し、歌口は斜に切つてあるもので、周の頃支那人に知られてゐて、これを葦篇と呼ばれた。これがバクトリアからカシュミールを經て印度に入つたが、この地方に於て竹管に代へられた。この三孔の竹管は篇として最も古く支那に入り、周の頃既に一部に行はれてゐた。紀元後、印度に於て佛教樂器として行はれるやうになつてから、五孔（前に四孔、裏に一孔）のものとなつた。今日もその古形はアフガニスタンに於て用ひられてゐる。支那に於ては漢の武帝の頃、改造されて六孔となり、又歌口も簫管を摸し、洞簫と稱して行はれた。印度式の尺八は、佛寺に於て主として行はれたが、唐代に於ては益々盛んになり、呂才はこれを改めて六孔となして雅樂の合奏に用ひようとした。この改造型の尺八が、今日我が正倉院に保存されるものである。又古い印度型の尺八は、奈良の東大寺大佛殿前の八角燈籠の扉繪にこれを見られる。我が國に於ては奈良朝の頃、唐の尺八が雅樂尺八として傳へられたが、多く用ひられるに至らない。平安朝の初、叡山の慈覺大師は、唐から尺八で佛樂を奏することを學んで歸つたが、これも世に普及するには至らなかつた。これ等の尺八は古尺に則り、今尺の一尺八寸のものよりは小さく、一尺一二寸乃至一尺四五寸の長さを持つてゐる。然るに鎌倉時代の初、建長年間に覺心（法燈國師）といふ僧が宋に入つて道元禪師に就いて究道してゐたが、同門の弧參から普化宗の尺八を學んで歸つたと稱せられる。普化禪師は唐の高僧であつたが、常に鐸を振つて市に教を説いた。河南の張伯、これを聞いてその德を慕ひ、その鈴鐸の妙音を慕うて、尺八で鈴慕の曲を吹き、これを虚鐸と名づけて普化に用ひたといふ。張伯から十六傳して張參に至つた。法燈國師はこの張參から尺八を學んで、我が國に歸りこれを弘めたといふ。一説には法燈國師歸朝の時、寶伏といふ者、その弟子金先と共に我が國に來たが、共に尺八の妙手で、これを吹きながら諸國を遍歴したとも稱せられる。要するに法燈國師の歸朝と共に、我が國に普化宗尺八が行はれるやうになつた。これ今日の尺八の基を開くものである。法燈國師の門に寄竹（後に虚竹禪師）といふ者があつて、尺八に妙を得、各地を遍歴したが、後に京都白川に虚靈山明暗寺を造つて住み、明暗派の基が茲に開かれた。又金先（斬詮とも書く）も尺八を吹いて諸國を遍歴し、下總國小金に一月寺を造つてこゝに住んだ。その後南北朝合一の頃、南朝の忠臣楠正勝、世を捨てて佛門に歸し號を虚無といふ。普化宗尺八を學び、全國を遍歴し、尺八を吹いて戸々を行脚したので、世にこれを虚無僧と呼ぶに至つたといふ。一説には虚無僧は薦僧の變化したものであるといふが、恐らく虚無僧の名は虚無から出たものと思はれる。武藏國青梅の鈴法寺は、この楠正勝を本尊とするといふ。德川幕府は浪人を保護するために虚無僧を厚く待遇し、普化宗及び虚無僧の特權を定め、尺八をその法器と定めて、他人の濫りにこれを吹奏するを禁じた。その普化宗の寺は全國に百餘りあつたが、下總の一月寺と武藏の鈴法寺とを總本寺とした。然るに明治四年に普化宗が廢せられ、尺八は一般に解放された。因に都山流は明治二十九年、中尾都山によつて大阪に創始されたもので、現今に於ける最大の流派である。

【參考】尺八史考栗原廣太　○尺八通解　藤田鈴朗　○尺八の樂理と實際　吉田晴風・前田佳風　○明暗洞簫竹韻　源雲界　〔田邊〕

笏拍子（しやくびやうし）　樂器　【名稱】笏を二つに割り打つて拍子をとる故、この名がある。拍子又は拍ともいふ。【解説】雅樂器の一で打樂器に屬す。普通に用ひる笏を縦に二つに割つたもの、長さ一尺二寸、上部はこれを二枚合せて幅二寸六分、厚さ三分五厘。下部は二枚合せて幅一寸六分、厚さ二分五厘ある。その材質は、近來は枇杷を主として用ひ、他に櫻・柊（ひいらぎ）等もよく用ひられる。その下部を兩手で持つ。その持方は左手は割口を前とし、圓い方を向とし、右手は割口を左とし、圓い方を右とし、右部の割口を左部の平面に打ち付けるのである。笏拍子は常に歌者の音頭がこれを持つので、音頭のことを一に拍子ともいふ。歌譜では黒圏及び百の字を以てこれを示す。

【沿革】支那の古代に柏板があるが、我が國の笏拍子はその輸入ではなく、神代の昔から木を打合せて拍子をとることがある。唐制に則り笏を用ひるやうになつてから、初は普通の笏二個を打合せてゐたが、後にこれを二つに割つて用ひるやうになつたものである。かく二つに割るやうになつたのは、何時頃か判然しないが、奈良朝には全く存在しなかつたらしく、平安朝初期の樂制改革よりも以後であることは明かである。　〔田邊〕

釋萬葉集（しやくまんえふしふ）　註釋書　五十册　【著者】源光圀　【成立】享保十八年　【名稱】

初め「釋萬葉集」と云ひ、後に「萬葉集纂註」と改め、また「萬葉集新註」と題し、更に「釋萬葉集」に復した。【由來】德川光圀、かねて「萬葉集」の註釋を編まうと云ふ志を持ち、數人に命じたが、いづれも捗らないので、契沖に命じた。かくて初稿本「萬葉代匠記」が出來上つたが、更に改定を命じ、精撰本「萬葉代匠記」（別項）となつた。それから「代匠記」を基として、板垣宗憺等が更に註釋の業にかゝり、十六七卷まで草稿の出來たとき、元祿十一年に宗憺が歿したので、伴五百右衞門暢に命ぜられ、また安藤新介爲章にも託せられた。かくて卷一の註釋並に凡例の二册が出來上つたので、爲章はこれを携へて上京し、淸水谷大納言を經て、仙洞の叡覽に供し、稱美の御詞を賜はつた。然るに光圀薨去の翌年、爲章は精撰本「萬葉代匠記」に私淑すること深く、その說を採用せん事を主張したが、伴暢は光圀の說に從ふべき事を主張したが、總裁衆が爲章の說に贊成したため、爲章獨力で事に當つた。然るに爲章は享保元年に死んだので、十年、暢再びこれに從事する事となつたが、それも十七年に死んだので、最初から書寫の事に當つてゐた藤運右衞門全昌が受けついで、遂に享保十八年八月中旬に全部五十册が完成した。但し原本は水戸彰考館に藏せられ、四十七册から成つてゐる。書入補訂が多く、校訂に携はつた人々の、校閱の年月氏名等が記されてゐるので、その成立の過程を知ることが出來る。卷二十の下の奥には、元祿十三年の契沖の跋文があるが、これは卷一を見た時に記したものである。稿本のうち、總目二册、卷一・二册は淸書本で、訂正が少い。【內容】各卷の初に、權中納言源光圀註とある。歌の本文は草假字で書き下し、行間右傍に原本の眞字を書き添へてゐるのは、「拾穗抄」と同一の體裁である。その次に一字下げて註を記してゐる。卷一下の末には、「古萬葉集」の序は僞作であるのを「扶桑拾葉集」に載せたのは誤りであるといふ論がある。【價値】右の如く、本書は契沖の說に傾倒した安藤爲章が主となつて完成したものであるから、その註は殆ど精撰本「萬葉代匠記」と同一といつてよい。しかし、光圀の說には契沖の說と異るものもあつたから、爲章の如く契沖派の學者でなく、これと反對の伴暢の如きが主となつて本書を完成したとすれば、光圀自己の意見をも多く入れて、「代匠記」と同一のやうな本は作らなかつたであらう。この點から見れば、爲章が主に編纂した事は却つて遺憾である。

【附記】釋萬葉集附錄一卷。「萬葉假名遣」ともいふ。契沖の「倭字正濫抄」（別項）に增減して、いろはに分つて語をあげ、上に漢字、下に假字を記して假名遣を示し、終りに一般にわたる方則注意等を揭ぐ。「釋萬葉集」の附錄としたものであるが、「釋萬葉集」とは別に行はれる。神宮文庫等に寫本を藏す。○釋萬起原一卷。藤全昌が、「釋萬葉集」編纂に關係した諸家の覺書を集めて一卷とし、「釋萬葉集」成立の事情過程を明かならしめたもの。水戸彰考館に藏す。（萬葉代匠記參照）

【參考】萬葉集書目提要木村正辭○校本萬葉集首卷（諸本輯影）　【佐佐木】

芍藥亭長根（しやくやくていながね）　狂歌師　【本名】菅原氏。通稱本阿彌次郎右衞門　【別號】淺黃裏成・潛亭・二代喜三二・三橋亭　【生歿】明和四年生れ、弘化二年（一八四五）二月十日歿す。享年七十九　【法名】圓壽院光悅居士　【葬所】江戸谷中三崎町妙法寺　【閱歷】鑑定家本阿彌光悅七世の孫。天明の初、手柄岡持の門に入つて二代喜三二の號を承け繼ぎ、「大千世界變人藏」その他四五部の黃表紙を著したが、その技倆は師に劣つて評判に上らなかつたので、戲作の筆を絕つて專ら狂歌に力を盡し、後には文政調の一派を唱へ、四方側の眞顏、五側の飯盛が歿して後は、江戶狂歌界の盟主として推されてゐたが、狂歌の衰頹と共に晚年振はず、終に八十歲に近い高齡を以て死去した。【著作】二口〆勘略緣起二册（三橋喜三二畫、同年刊）○大千世界變人藏二册（勝川春泉畫、同年刊）○新吉原聖賢書圖三册（櫻川文橋畫、同二年刊）○聽從淺黃鱈二册（二代喜三二畫、同年刊）○繪本春の若葉三册（同五年刊）○龍宮城百番狂歌合二册（享和二年刊）○狂歌讀方獨案內一册（文化元年刊）○狂歌五手船二册（同）○擬吉原細見狂歌集一册（同年刊）○狂萬載集二册（同三年刊）○滿衣草紙五册（馬書、同三年刊）○國字鵺物語六册（葛飾北齋畫、同五年刊）○白絲册子六册（同上畫、同七年刊）○狂歌名所圖會一册（同十年刊）○狂歌人物誌二册（同十一年刊）○狂歌假名遣一册（同年間刊）○狂歌萬花集一册（同年間刊）○狂歌見ぬ世の友二册（同年間刊）○名數狂歌集一册（同年間刊）○狂歌劇場百首一册（天保元年刊）○三才雪百首一册（同年刊）○水之面集一册（同二年刊）○狂歌戀百首一花街百首一册（同三年刊）○狂歌戀百首一年刊）○芍藥亭文集二册（同五年刊）○三才戀百首一册（同六年刊）○狂歌秋の寢覺一册（刊）○新狂歌艷四册（同八年刊）○興歌六々集一册（同十一年刊）○狂歌一字題百首一册（同刊）○菅原連五百題集三册（天保年間刊）○狂歌二字題百首一册（天保年間刊）○狂歌隣接集二册（同上）○朗詠類集二册（同上）　【野崎】

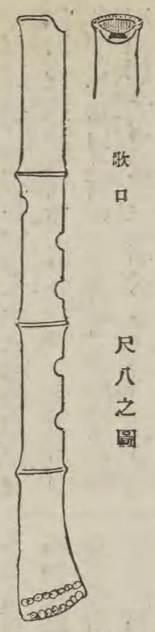
借用證文（しやくようしようもん）「借券」を見よ。

寂蓮法師集（じやくれんほつしし）　歌集　一卷　【著者】藤原定長（法名寂蓮）。俊海の子、幼にして叔父俊成に養はれ、中務少輔に任ぜられたが、俊成に實子定家の生れるに及び、出家して寂蓮と稱した建仁二年（一二〇二）七月二十日歿す。【別名】寂蓮家集　【解說】數種の本がある。群書類從卷二六九所收本は首に「五首、左大臣家會」あり、「將軍」の前書ある歌に終る。「和歌二百九十五首」と附記してあるが、今は二百七十二首存するものである。又首に「谷の水峯の嵐ももろともに云々」の歌ある百首と、撰集に入りて家集になき歌四十首とを收めた本。又寬文七年長谷川市郎兵衞開板のもので、首に常德院殿本（春十三首、夏九首、秋十五首、冬九首、戀十首、雜三十一首に部類し、終りに、「右一册以常德院殿本文明年中書寫之本重書之者也。文龜三年大呂下旬日」と奧書あるもの）、次に撰集にのみ入れる歌七十三首、次に「寂蓮家集」と題して、五首和歌より「將軍」の歌に至るものの三部を合せた本がある。類從本は、この第三の本の末尾に相當する。類從本は部立なく、殿法印（慈圓）・家隆・定家・季經・師光・經房・實定・西行・爲業入道等との贈答をのせ、中にも比叡山無動寺なる慈圓に贈れる十首、及びその返歌の如き、「拾玉集」（別項）にも見えて興がある。歌は纖細巧緻をきはめ、巧みな言葉の組立が多い。常德院殿本の歌は、やゝ靜かな調のもの多く、體言止などは多く見えない。

都うつりの比人の月哥よみけるに

世をてらす雲井をしたふ古鄕にさびしかれともす

寸の管は、筒音に於て壹越の音を出すからである。その他、一尺九寸（九寸管、上無管ともいふ）、二尺（神仙管ともいふ）、二尺一寸（盤渉管ともいふ）、一尺六寸（六寸管、平調管ともいふ）、一尺四寸（四寸管、下無管ともいふ）、一尺三寸（三寸管、双調管ともいふ）などの長さを持つたものも行はれる。又稀に二尺二寸乃至二尺四寸のものも用ひられる。指孔は五つ（前面に四つ、裏に一つ）ある。〔樂曲〕本曲・外曲・新曲等の區別がある。本曲は尺八のみの吹奏を本體とするもので、明暗及び琴古流では虚無僧時代に主として吹奏してゐたもので、尺八の獨奏又は連奏（連管といふ）曲である。その中で「眞虚鈴」「無海篇」「虚空鈴慕」等は古傳三曲と稱へ、最もこれを尊重してゐる。今は琴古流本曲は三十六曲あるが、その大部分は琴古流の祖黒澤琴古（明和八年歿）の作つたものである。都山流本曲はその宗家中尾都山氏の作曲されたもので、獨奏・二重奏・三重奏等があり、時として、箏・玲琴等を伴奏に使用することもある。いづれも尺八家は本曲を最も重視してゐる。外曲は唄・箏・三味線等と合奏するもので、三曲・長唄・小唄・端唄等に合せるものをいふ。これは幕末から明治維新頃に起り、明治以後に至つて大に盛んになつた。今日では殆ど大部分の箏曲に尺八を合せ、三曲として最も廣く尺八を普及せしめた。新曲は最近に至り新日本音樂の勃興と共に、全く新しい手法に基いて作曲されたもので、獨奏・連奏・管絃合奏等種々あり、中には洋樂の組立に對抗せんとしてゐるものもある。


吹口　尺八之圖

【沿革】尺八の起原は、西部亞細亞の葦管にあるらしい。それは古代に於て埃及にも入りセビとして知られてゐる。この西部亞細亞の葦管は指孔三個を有し、歌口は斜に切つてあるもので、周の頃支那人に知られてゐて、これを葦篇（やくや）と呼ばれた。これがバクトリアからカシュミールを經て印度に入つたが、この地方に於て竹管に代へられた。この三孔の竹管は篇（やく）として最も古く支那に入り、周の頃既に一部に行はれてゐた。紀元後、印度に於て佛教樂器として行はれるやうになつてから、五孔（前に四孔、裏に一孔）のものとなつた。今日もその古形はアフガニスタンに於て用ひられてゐる。支那に於ては漢の武帝の頃、改造されて六孔となり、又歌口も簫管を摸し、洞簫と稱して行はれた。印度式の尺八は、佛寺に於て主として行はれたが、唐代に於ては益々盛んになり、呂才はこれを改めて六孔となして雅樂の合奏に用ひようとした。この改造型の尺八が、今日我が正倉院に保存されるものである。又古い印度型の尺八は、奈良の東大寺大佛殿前の八角燈籠の扉繪にこれを見られる。我が國に於ては奈良朝の頃、唐の尺八が雅樂尺八として傳へられたが、多く用ひられるに至らない。平安朝の初、叡山の慈覺大師は、唐から尺八で佛樂を奏することを學んで歸つたが、これも世に普及するには至らなかつた。これ等の尺八は古尺に則り、今尺の一尺八寸のものよりは小さく、一尺一二寸乃至一尺四五寸の長さを持つてゐる。然るに鎌倉時代の初、建長年間に覺心（法燈國師）といふ僧が宋に入つて道元禪師に就いて究道してゐたが、同門の張參から普化宗の尺八を學んで歸つたと稱せられる。普化禪師は唐の高僧であつたが、常に鐸を振つて市に教を説いた。河南の張伯、これを聞いてその徳を慕ひ、その鈴鐸の妙音を慕うて、尺八で鈴慕の曲を吹き、これを虚鐸と名づけて普化に用ひたといふ。張伯から十六傳して張參に至つた。法燈國師はこの張參から尺八を學んで、我が國に歸りこれを弘めたといふ。一説には法燈國師歸朝の時、寶伏といふ者、その弟子金先と共に我が國に來たが、共に尺八の妙手で、これを吹きながら諸國を遍歴したとも稱せられる。要するに法燈國師の歸朝と共に、我が國に普化宗尺八が行はれるやうになつた。これ今日の尺八の基を開くものである。法燈國師の門に寄竹（後に虚竹禪師）といふ者があつて、尺八に妙を得、各地を遍歴したが、後に京都白川に虚靈山明暗寺を造つて住み、明暗派の基が茲に開かれた。又金先（靳詮とも書く）も尺八を吹いて諸國を遍歴し、下總國小金に一月寺を造つてこゝに住んだ。その後南北朝合一の頃、南朝の忠臣楠正勝、世を捨てて佛門に歸し號を虚無といふ。普化宗尺八を學び、全國を遍歴し、尺八を吹いて戸々を行脚したので、世にこれを虚無僧と呼ぶに至つたといふ。一説には虚無僧は薦僧の變化したものであるといふが、恐らく虚無僧の名は虚無から出たものと思はれる。武藏國青梅の鈴法寺は、この楠正勝を本尊とするといふ。徳川幕府は浪人を保護するために虚無僧を厚く待遇し、普化宗及び虚無僧の特權を定め、尺八をその法器と定めて、他人の濫りにこれを吹奏するを禁じた。その普化宗の寺は全國に百餘りあつたが、下總の一月寺と武藏の鈴法寺とを總本寺とした。然るに明治四年に普化宗が廢せられ、尺八は一般に解放された。因に都山流は明治二十九年、中尾都山によつて大阪に創始されたもので、現今に於ける最大の流派である。

【參考】尺八史考栗原廣太　○尺八通解　藤田鈴朗　○尺八の樂理と實際　吉田晴風・前田佳風　○明暗洞簫竹韻　源雲界　〔田邊〕

笏拍子（しやくびやうし）　樂器　【名稱】笏を二つに割り打つて拍子をとる故、この名がある。拍子又は拍ともいふ。【解説】雅樂器の一で打樂器に屬す。普通に用ひる笏を縦に二つに割つたもの、長さ一尺二寸、上部はこれを二枚合せて幅二寸六分、厚さ三分五厘。下部は二枚合せて幅一寸六分、厚さ二分五厘ある。その材質は、近來は枇杷を主として用ひ、他に櫻・柊（ひいらぎ）等もよく用ひられる。その下部を兩手で持つ。その持方は左手は割口を前とし、圓い方を向とし、右手は割口を左とし、圓い方を右とし、右部の割口を左部の平面に打ち付けるのである。笏拍子は常に歌者の音頭がこれを持つので、音頭のことを一に拍子ともいふ。歌譜では黒圈及び百の字を以てこれを示す。

【沿革】支那の古代に柏板があるが、我が國の笏拍子はその輸入ではなく、神代の昔から木を打合せて拍子をとることがある。唐制に則り笏を用ひるやうになつてから、初は普通の笏二個を打合せてゐたが、後にこれを二つに割つて用ひるやうになつたものである。かく二つに割るやうになつたのは、何時頃か判然しないが、奈良朝には全く存在しなかつたらしく、平安朝初期の樂制改革よりも以後であることは明かである。〔田邊〕

釋萬葉集（しやくまんえふしふ）　註釋書　五十册　【撰者】源光圀　【成立】享保十八年　【名稱】

初め「釋萬葉集」と云ひ、後に「萬葉集集註」と改め、また「萬葉集新註」と題し、更に「釋萬葉集」に復した。【由來】徳川光圀、かねて「萬葉集」の註釋を編まうと云ふ志を持ち、數人に命じたが、いづれも捗らないので、契沖に命じた。かくて初稿本「萬葉代匠記」が出來上つたが、更に改定を命じ、精撰本「萬葉代匠記」（別項）となつた。それから「代匠記」を基として、板垣宗憺等が更に註釋の業にかゝり、十六七年に普化宗が廢せられ、尺八は一般に解放された。因に都山流は明治二十九年、中尾都山によつて大阪に創始されたもので、現今に於ける最大の流派である。

【參考】尺八史考栗原廣太　○尺八通解　藤田鈴朗　○尺八の樂理と實際　吉田晴風・前田佳風　○明暗洞簫竹韻　源雲界　〔田邊〕

笏拍子（しやくびやうし）　樂器　【名稱】笏を二つに割り打つて拍子をとる故、この名がある。拍子又は拍ともいふ。【解説】雅樂器の一で打樂器に屬す。普通に用ひる笏を縦に二つに割つたもの、長さ一尺二寸、上部はこれを二枚合せて幅二寸六分、厚さ三分五厘。下部は二枚合せて幅一寸六分、厚さ二分五厘ある。その材質は、近來は枇杷を主として用ひ、他に櫻・柊（ひいらぎ）等もよく用ひられる。その下部を兩手で持つ。その持方は左手は割口を前とし、圓い方を向とし、右手は割口を左とし、圓い方を右とし、右部の割口を左部の平面に打ち付けるのである。笏拍子は常に歌者の音頭がこれを持つので、音頭のことを一に拍子ともいふ。歌譜では黒圈及び百の字を以てこれを示す。

【沿革】支那の古代に柏板があるが、我が國の笏拍子はその輸入ではなく、神代の昔から木を打合せて拍子をとることがある。唐制に則り笏を用ひるやうになつてから、初は普通の笏二個を打合せてゐたが、後にこれを二つに割つて用ひるやうになつたものである。かく二つに割るやうになつたのは、何時頃か判然しないが、奈良朝には全く存在しなかつたらしく、平安朝初期の樂制改革よりも以後であることは明かである。〔田邊〕

釋萬葉集（しやくまんえふしふ）　註釋書　五十册　【撰者】源光圀　【成立】享保十八年　【名稱】

享年七十九　【法名】圓壽院光圀居士　【墓所】江戸谷中三崎町妙法寺　【閲歴】鑑定家本阿彌光悦七世の孫。天明の初、手柄岡持の門に入つて二代喜三二の號を承け繼ぎ、「大千世界變人藏」その他四五部の黄表紙を著したが、その技倆は師に劣つて評判に上らなかつたので、戯作の筆を絶つて專ら狂歌に力を盡し、後には文政調の一派を唱へ、四方側の眞顔、五側の寂蓮と稱した建仁二年（一八六二）七月二十日

二字題百首一册（天保年間刊）○狂歌廣陵集二册（同上）○朗詠類集二册（同上）　〔野崎〕

借用證文（しやくようしやうもん）　「借券」を見よ。

寂蓮法師集（じやくれんほつしのしふ）　歌集　一卷　【著者】藤原定長（法名寂蓮）。俗俊海の子、幼にして叔父俊成に養はれ、中務少輔に任ぜられたが、俊成に實子定家の生れるに及び、出家して寂蓮と稱した。

借字で書き下し、行間右傍に原本の眞字を書き添へてゐるのは、「拾穗抄」と同一の體裁である。その次に一字下げて註を記してゐる。卷一下の末には、「古萬葉集」の序は僞作であるのを「扶桑拾葉集」に載せたのは誤りであるといふ論がある。【價値】右の如く、本書は契沖の説に傾倒した安藤爲章が主となつて完成したものであるから、その註は殆ど精撰本「萬葉代匠記」と同一といつてよい。しかし、光圀